
教授とシャンバラの時計

謳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教授とシャンバラの時計

【Nコード】

N5701Q

【作者名】

謳

【あらすじ】

変わり者と名高い歴史研究家のエイン・アンダーソン教授と、メイドで助手のヴィヴィアン・トーマスの、奇妙で切ない恋のおはなし。イギリス、フランス、スコットランドを舞台に、脱出ゲーム風味な話に、歴史の勉強、哲学から量子力学まで入り混じって、正直大学も出ていない、総て独学な私には荷の重いネタてんこ盛りでお届け。のんびんだらりん更新です

序章（前書き）

注

この小説は、国内から一步も出たことのない筆者によって書かれております。

そのため、ネットで入手出来る情報を整理し、組み立て、盛り込んでいる関係で、参考サイトと表現や文面が似る可能性があります。極力、自力表現方法を模索し、加工した上で書かせていただいておりますが、無償小説という事で、ご理解をいただければ幸いです。ご了承ください。

主に、Wikipediaが参考サイトとなっております。

歴史年号、地名表記などは特に、WikipediaとYahooマップに由来します。

序章

シャンバラ

チベットに伝わる伝説上の秘密の仏教王国。
中央アジアのどこかにあると言われる。

元はインドのヒンドゥー教のプラーナ文献やタントラ仏教の『時輪
タントラ』に登場する理想郷の名。

ヒンドゥー教では、ヴィシュヌ神のアヴァターラであるカルキの治
める国をシャンバラと呼んだ。

一七五五年。

政治思想家のモンテスキューが死に、スコットランドのエディン
バラ市内でも、その話題をちらほら耳にする。

つい四十年ほど前にイングランドとの合併によって揺れたスコッ
トランドも、今や誰が死んだ、誰が結婚したという程度のゴシップ
を話題に出来るほど、落ち着きを取り戻している。

街の名に因むエディンバラ公の名は、二十九年前に王太子ジョー
ジ二世の長男フレデリックに授けられたが、そのフレデリックも最
近は体調が芳しくないと街の噂で聞く。

そんな街の喧騒を尻目に、世界地図を片手に、神話を読む。

こんな生活を始めて、どのくらい経っただろう。

歴史学者で大学教授のエイン・アンダーソンは、山積みにした資

料で埋まった自室の床に座り込み、書物に読み耽っていた。

部屋は机とベッド以外足の踏み場もないほど本で埋め尽くされ、机上ももう少しで本で埋まるという状況にあった。

ベッドは眠れないと困るため、物は置かないよう心掛けている。

屋敷には他にも部屋はあるが、他の部屋に書籍を取りに行く時間が惜しいので、全てを自室に入れ、積んだ。

三十も半ばだと言うのに独り身で、その上一旦読書を始めると、病的なまでに没頭する。

この辺で一息、と息吐くはいいが、読書を始めてから三日三晩経っているなんてことも珍しくない。

この癖が祟って、メイドを雇っても長くは続かず辞めて行ってしまう。

だが自分独りでは絶対に、読書中に餓死などという奇妙な結末を迎えるに決まっている。

だからメイドは必要だった。

そんな事を考えている傍から、一昨日の晩、何人目かのメイドが辞めて行った。

教授仲間に電報を打つと、一日で代わりのメイドを用立ててくれた。

そのメイドが、今日来るらしい。

が、約束の時間を三十分ほど過ぎたが、一向に屋敷の扉が叩かれる気配はない。

否な噂でも広まっっていて、『エイン・アンダーソンの家では働くな』などと言われているのかも知れない、とエインがほくそ笑んだ時、扉がトントン、と二度ほど鳴った。

「はいはい」

よっこらしよと立ち上がり、部屋を出、扉の前でオールバックにまとめた髪をひと撫でし、ずれた眼鏡を直して、玄関を開ける。

と、目の前に書類がひらひらとしていた。

執事給仕派遣 ライトディーン商会 紹介状

そう書かれた書類の向こうで、顔を半分だけ出し、エインを見つめる女性がいた。

「プロフェッサー教授Aのお屋敷はこちらでしょうか？」

抑揚のない、しかしはつきりとした声で、女性が言った。

「プロフェッサー教授Aとは、エインのあだ名だ。

教授仲間の誰かがつけたらしく、いつの間にかこう呼ばれていた。

エインもアンダーソンもAで始まる事から、命名されたそうだ。

「新しいメイドさんかな？」

エインがにやりと笑うと、女性はこくりと一つ頷いた。

「サンアッチ教授のご紹介で参りました。

ヴィヴィアン・トーマスと申します。」

ヴィヴィアンと名乗った女性は、そこでやっと書類を下に下ろした。

顔を露わにしたヴィヴィアンは、エインを真っ直ぐ見据えた大きな目が印象的な、品の良い顔立ちをした女性だった。

髪を二つに結び、さらに編み込んで輪にし、ベージュ色のリボンでまとめていた。そのリボンと同じものが、濃いグリーンのハイネツクドレスの首元にも巻かれている。

歳はエインよりずっと若いのだろうか。

無表情な顔立ちとは対照的に、頬が健康的に赤らんでいる。

暫し見惚れていると、ヴィヴィアンが口を開いた。

「プロフェッサー教授。

中に入ってもよろしいですか？」

「あ、ああ、ごめんよ。」

取り敢えず、キミの部屋へ案内しよう。」

エインはヴィヴィアンが足元に置いていた大きなボストンバッグを持ち上げた。

ヴィヴィアンが少し慌てる。が、表情は無表情のままだった。

「プロフェ……」

「いいよ。メイドと言ってもね、力仕事とか任せるつもりないの。美味しい食事と、美味しい紅茶と、ボクが本に没頭して餓死しそうなときに、肩を叩いてくれれば、それでいいのさ。」

エインはおどけながら言うのと、二階への階段を上がって行った。

ヴィヴィアンに、屋敷の中でも一番見晴らしの良い、二階の部屋を宛がう。

部屋に一步入ったヴィヴィアンは、相変わらず無表情ながらも、多少動揺した顔をし、エインを見上げた。

ヴィヴィアンの視線に、言わんとする事を察したエインは、ヴィヴィアンに一つ頷いて、にこりと笑った。

「ボクは下の方が都合が良くてね。」

ただ、この部屋が空き部屋なのは勿体無いし……。

遠慮なく使ってくれ。」

そう言って、ヴィヴィアンの荷物をベッドの上に置いた。

「有難うございます。」

ヴィヴィアンは礼を言って、窓辺に歩み寄り、外を眺める。

エインの屋敷はエディンバラの郊外の高台に建ち、緑に囲まれた穏やかな風景に包まれている。

それでいて市街地からもそれほど遠くはなく、夜には街の灯りが一望出来る、大変に眺めのよい屋敷として有名だった。

時折、金に物を言わせて屋敷と敷地を買い取りたいと申し出る資産家が屋敷を訪れるが、エインはこの場所を手放す気はなく、エインの仕事柄の所為でこり押しする事も出来ず、資産家は項垂れて帰

って行くのが落ちだった。

この屋敷は、エインがエディンバラへ越す事にした際、ヴィヴィアンを斡旋したサンアッチという教授仲間に紹介された物件で、当時は誰の買い手も付かない、只も同然で買い叩かれていた廃屋敷だった。

しかしエインが住み始めてから、途端に辺りの樹木が整備され、あつという間に絶景ポイントとなり、高騰した、というのが成り行きである。

一連の流れを、紹介したサンアッチも見る目が無かったと悔しがり、多忙の中でも顔を合わせることがあれば、エインにちくちくと恨み節を叩いては、エインにやりと笑い返されている。

「夏場は日当たりが良すぎて、暑いくらいなんだけどね。そういう時は、リビングを使ってくれればいいから。」

この屋敷では、好きなように振舞ってくれて構わないよ。」
エインはそう言って、部屋を出て行った。

残されたヴィヴィアンが、エインの後を追うように部屋を駆け出ると、エインは階段を下りていく途中だった。

うん、と腕を上げ、伸びをしながら、ゆつくりと階段を下りていくエインの背中を、ヴィヴィアンは静かに見つめた。

教授。

私は後何度、あなたのその背中を見送る事になるのでしょうか…。

プロフェッサー 1

荷物は少ない。

普段着るドレスと、めかし用のドレスセット、前掛けと、ブラシと、髪や体を洗うソープ、数枚の下着と、主の癖をメモするための小さな手帳、思い出の本。

ドレスの皺を丁寧に伸ばし、クローゼットに仕舞う。

前掛けを着け、ブラシとソープ、本はベッド脇の棚に置いた。

手帳は枕の下に隠し、下着はバッグの中に残しておいた。クローゼットには、拭き掃除をしてからでないと、仕舞う気になれなかった。

部屋の中が少し埃っぽいので、ヴィヴィアンは窓を開けた。

高台にあるので、心地よい風が沢山入ってくる。

思いっきり吸い込むと、緑の匂いが体中を駆け巡る。

ヴィヴィアンは、何度か深呼吸をしながら部屋の換気をしたあと、窓を閉め、部屋を出た。

階段を下りながら、辺りを見回す。

外観よりこじんまりとした屋敷だ。

エイン・アンダーソンは、知る者ぞ知る歴史学者で、エディンバラでもそれなりに有名だった。

若くして歴史調査のため世界中を回っては、手に入れた資料を自宅に持ち帰り、或いは現地で綿密な調査をし、興味深い研究書を発表する。

エインの唱える説には否定論者も少なくないが、概ね肯定的、好意的に学会でも受け入れられていると聞く。

歴史の中でも文明や神話を専門とする学者で、研究書に負けず劣らず、彼自身も興味深いと言われている。もちろん、好意的な意味で、だ。

だから、学会での地位もほとんど拍子に上がり、収入もそれなり

にあるはずなのだが、それにしてもこの屋敷は小さかった。

「食事の時間は、キミの好きでいいから」

今後の仕事内容などの確認に、エインの部屋を訪れたヴィヴィアンに、エインはにこりと笑って答えた。

エインは床に胡坐を掻いて座り、何冊か本を開きつ放しにして自分を囲うようにして並べていた。

それだけでは足りないのか、さらに新しく作ったと思われる本の山が、エインの脇に聳え立つ。

「三食お摂りになりますか？」

ヴィヴィアンが問う。

無表情なのは、癖のようだった。

「うーん、そうだね。」

ボクは朝早いけど、夜も遅いし、それで三食食べられれば最高かなあ。」

エインが答えると、ヴィヴィアンが頷いた。

「畏まりました。」

手短に答え、ヴィヴィアンが退室しようとした時、エインが呼び止めた。「ああ、ヴィヴィ。」

呼ばれ、ヴィヴィアンが振り向く。

「はい」

「今日はいいよ。」

それより、これからフランスへ向かわなければならぬので、キミも支度をしてくれないか」

手にしていた本を、ポン、と閉じ、エインが「よっこいしょ」と言いながら立ち上がる。

「私も、ですか？」

「うん。」

一緒にフランスに行こう。

美味しいワインが飲めるよ」

にこつと笑って、エインが散らかった机の上から、手紙を手に取り、ひらひらとさせた。

「ちよつとお呼ばれしててね。

是非キミにも来て欲しいんだ。」

机に凭れながら、エインがヴィヴィアンを見つめ、微笑んだ。

ヴィヴィアンはエインと見つめ合い、小さく肩で溜め息を吐く。屋敷に着いて早々、フランスへ行く事になるとは…。

荷物を解くのではなかった。

「畏まりました。

出発は、何時でしょうか？」

「うんとね…」

エインがスラックスのポケットから、懐中時計を取り出し、蓋を開けた。

ヒップ・ハンガータイプのスラックスのポケットは、何が入っているのか、こんもりと膨れ上がっている。

時計の針は午後の二時を指していた。

「実は、今から一〇分後くらいに、迎えの馬車が来ることになっている。

支度はそれまでに頼むよ。

ああ、着替えとかはあまり気にしないでいいからね。

向こうで買えばいい。」

パチンと時計の蓋を閉め、エインが言った。

「…はい…」

ヴィヴィアンは、呆れながら返事をして再度頷き、部屋を出た。自室に向かい、ボストンバッグに必要なものを詰める。

着替えの心配はないというので、出かけ用のドレスは置いておく事にした。

そして早々に部屋を出、玄関へ向かうと、エインも荷造りを終え

て出てきたところだった。

「お、流石、早いね。」

エインがにこりと笑う。

改めて笑う、と言うより、元々笑い顔なのだ。

にこにこと愛想のよい顔に、小さな丸眼鏡が一層コケティッシュだ。

「荷解きしていませんでしたから……」

ヴィヴィアンが誤魔化すと、エインがうんうん、と頷いた。

「取り敢えず、出て置こう。」

そう言つて、エインが玄関を出た。

ヴィヴィアンも続く。

エインが扉の鍵をかけながら、

「この造りの家じゃ、鍵なんかかけても意味なさそうだよねえ」と言つた。

ヴィヴィアンは返事をせず、辺りを見回す。

着いた時もあったが、何と辺鄙な場所である事か。

見回りの警官でもない限り、空き巣の絶好のターゲットだ。

「でもね、ボクの仕事柄のおかげで、この辺、不定期に見回りが来てくれることになっててね。」

有り難い事だねえ」

他人事のように言うエインを、ヴィヴィアンが怪訝そうに見た。

エインは鍵をかけ終え、足元に置いた鞆に腰掛けた。

エインの鞆は高級な牛革張りの四角いトランクで、革の焼け具合にも、気を遣われている様子が窺えた。

かなり革が焼けているので、相当使い込んでいるのだろう。

しかしその分手入れを施しているのか、革の傷みは見受けられない。

「あとで、ボクの仕事の説明しよう。」

エインは、「船は暇だからね。」と付け加えた。

「はい」とヴィヴィアンが答えると、エインはヴィヴィアンを眩し

そうに見上げた。

暫し、見つめ合う。

ヴィヴィアンの瞳は、深いブラウンで、見つめるだけで吸い込まれそうだと、エインは思った。

エインの瞳は、透明度の高いグリーンで、穢れを知らぬ、人知れぬ湖の湖面のようだと、ヴィヴィアンは思った。

だが、お互いその向こうにある思惑には気付く事はなく、エインが視線を外したのを期に、ヴィヴィアンも目を逸らせた。

不意に、ヴィヴィアンの背中で、馬の声が出た。

ガシャガシャと車輪の音が聞こえ、振り返ると、緩やかな上り坂を登ってくる、一台のクレープが見えた。

「プロフェッサー・アンダーソン！」

時間通りでさ！」

大声で言いながら、運転手が手を振った。

ずいぶん愛想のよい運転手のようだ。

ヴィヴィアンが眉を顰めていると、エインも大声で答えた。

「ヘンリーさん！ さすが！」

どうやら、運転手はヘンリーというらしい。

この辺りは野犬が少ないのか、馬車に護衛犬はいなかった。

近くまで来たところで、またヘンリーが大声で言った。

「おやあ！」

また新しいメイドさんかい！」

何だか見世物のように言われ、ヴィヴィアンが小さく眉間に皺を寄せた。それを見たエインが、あははと笑う。

「この子は大事な子だからねえ。」

あんまり怒らせないでね」

言われたヘンリーが、ヴィヴィアンに向かって、キャップをくいと持ち上げて挨拶をした。

「悪い悪くしたかい？ すまないね。」

見ると、ヘンリーはずいぶんと年老いた運転手で、深く刻まれた

顔の皺が、余計に笑顔を愛嬌あるものに見せていた。持ち上げたキヤップから覗いた頭は禿げ上がって、巻き髪の白髪がそこはかとなく可愛らしかった。

人が悪い訳ではなさそうで、ヴィヴィアンは「いいえ。お構いなく」と言っ て表情を元の無表情に戻した。

プロフェッサー 2

クーペに揺られ、一路リースの港へ向かう。リース港から南下し、ロンドン港で休憩を挟み、目先目的地はドーバー海峡を渡った先、フランスのカレー港だ。

道中も本を手放さない、隣に座るエインを、ヴィヴィアンは興味深げに見つめた。

ヴィヴィアンの視線に気付いたのか、エインが本から目を離さず、口を開いた。

「ボクの事は、どこまで聞いてるかな？」

そう言つて、ぺらりとページを捲る。

目を合わせる気はないようだ。

「プロフェッサー・サンアッチからは、歴史学者で、エディンバラ市内の教育機関を回る、客員教授とお聞きしております。

歴史学における論文は、他の学者たちの追隨を許さず、独創的で魅力的な文体は読み手を惹き付け、離さない。

『いつそ、物書きにでもなればいいのに』と。」

ヴィヴィアンが言つと、エインがやつと本から目を離し、大笑いをした。

「いつぞや、自身もサンアッチに同じ事を言われたのだ。

「どのような研究を？」

ヴィヴィアンが訊ねる。

エインは笑い足りないのか、むふふと含み笑いをしながら、「うん」と言つた。

「“先読み”とか、かなあ……」

意味深に言つ。

「“先読み”？」

「うん。まあちょっと違うか。

例えばさ、この間のスコットランドとイギリスの合併ね。

あのととき、この後どういう事が起こると、混乱になるだろう、と
いうのを予測したりね。

今起こっている自然現象は、あと何年くらいでこうなる、とかね。

先だけじゃなく、今こういうことがあったということは、きっと
何年前にはこれはこういう意味があつたんだろう、とかね。」

エインが眼鏡を外し、ハンカチで拭いた。

度はそれほどきつくないのか、レンズは厚くもなく、歪みも少な
かった。

「歴史の観察者” っていう感じだね」

「観察” …。」

「うん、” 観察”」

言いながら、「” 観察” というか…」と、自身で修正を始める。

「” 監察”、のほうに近いかも知れないな。」

エインは小さな声で呟いて、眼鏡をかけた。

その訂正にどんな意味があるのか、ヴィヴィアンにはよく解らな
いのか、怪訝な顔をする。

そんなヴィヴィアンを横目に見て、エインは再度含み笑いをした。

「時折、風変わりなこのボクの論文を見て、歴史がそう動かないよ
うに軌道を変えようとしてくれる偉い人がいてね。

そういう人たちからしたら、ボクは” 監察”、つまり” 監督” や
” 演出” なんじゃないか、と。

まあそんな感じ。」

笑いながらもどうでもいい事のように言い、エインは閉じた本をま
たパラパラと捲った。

「歴史を動かしているつもりは、ボクにはない。

ただ、これだけはこう動いてはならないだろう、みたいな事象は
存在する。

それを、気付いているかいらないか解らない、見も知らぬ人に、ち

よつと訴えたりしてみる。

「そんな仕事だよ。」

「評論家みたいな仕事でもあるね」と付け加えて、エインはまた本に見入った。

だが、数ページ読み進めたところで、また本を閉じてしまった。

「でも本当の仕事は、学者でも教授でもないんだけどね」

「？」

見つめ続けるヴィヴィアンを視界の隅に置きながら、エインは馬車の窓に頬杖をついた。

窓の外では、風景が滑るように流れていく。

「本当の仕事は、これから行く、フランスでの仕事。」

そう言って、手ぶらな左手でポケットを探り、手紙を取り出した。

ヴィヴィアンに手渡す。

「読み給え。」

言われて、ヴィヴィアンは丁寧に手紙の封を開けた。

既に封蝋自体は接がれていて、容易く封筒は開いた。

中には、三枚のリーフが折り畳まれていて、開くと清楚な文面が現れた。

「親愛なる、エイン様……」

随分と御無沙汰しております。

御変わり御座いませんか？

教授の楽しいお噂は、海を隔てたフランス、ボルドーの郊外にも伝わって来ております。

数年、御挨拶を怠けている間に、今年初め、父が亡くなりました。

母も既に亡くなり、屋敷には私と、召使が数名居るのみとなつてしまいましたため、屋敷の整理を致しておりました処、不可解な内容の遺言状が見付かりまして、今回このような御報せを差し上げま

した。

相続に関しては、既に弁護士と見届け人の証明する遺言状が有り
ました、別段問題では御座いませんが、その状には、父からエイン
様へ宛てたものも同封されておりましたので、ご連絡申し上げまし
た次第です。

是非、何事かフランスへお越しになる折に、屋敷へもお立ち寄り
くださいませ。

「…エイン様にお会い出来る日を、心待ちにしております。

アン・ベルトワーズ。」

読み終わり、ヴィヴィアンが「…ベルトワーズ…」と繰り返した。

「心当たりが？」

エインが訊ねる。

「はい。

サンアッチ教授のご友人で、手紙の通り今年の初めに亡くなった
方の中に、確かベルトワーズ伯爵という方が…」

ヴィヴィアンが答えると、エインは一つ頷いて、ヴィヴィアンを
見た。

「当たり前。

アンは、ベルトワーズ伯爵の一人娘で、御歳二三歳。

ベルトワーズ伯爵は享年六〇歳。今年の初めに、患っていた心臓
の病が悪化して、他界された。

ボクもロンドンでそれを耳にはしていたけれど、なかなかフラン
スへ足を運ぶ機会がなくてね…。」

そう言って、エインが窓の外を眺めた。

横顔は、若干の憂いを帯びている。

「ボクの恩師の一人だね。

生前、まだ教授なんて肩書きを貰う前の話だが、大変に貴重な書
籍ばかりを集めた館をお持ちだね。

突然お邪魔して、懇願して、数日滞在して、読ませてもらった事があつたんだ。

見知らぬ他人だというのに、大層可愛がってくれてね……」

エインはそこで言葉を切った。

耽る物思いの深さはヴィヴィアンの知るところではないが、恐らく、氏への思い入れは深いものだったと想像出来る。

「今のボクがあるのも、氏のお蔭と言って、大袈裟じゃないんだ」
そう締めくくって、エインは頬杖を解いた。

手に持っていた本を無造作に荷物の上に投げ付け、ヴィヴィアンから手紙を取る。

「不可解な遺言状とありましたね……」

ヴィヴィアンが訊ねると、エインの表情が少し明るくなった。

「氏は、昔からなぞかけがお好きでね。

きつと、変な遺言状なんだろう……」

エインはそう答えると、今度は手紙を本の上に投げ置き、頬杖について窓の外に見入ってしまった。

リースの港に着いた頃には、すっかり日が暮れていた。ここから一晩かけて、一旦船でロンドンへ向かう。

港には一艘のガレオン船が停泊していた。

深い茶の二スが美しく輝く、大きな船だが、吃水の浅いこのガレオン船は、速度も速く、積載量も多いので商船として人気が高いが、同時に転覆し易い危険も孕む。

ガレオン船の向かいには、その四分の一ほどの大きさのキャラツク船も停泊しており、安全性の高さならこちらのほうが勝っているのだが、敢えてこの船を取ったのには、エインなりの拘りがあつた。

男の独り旅ならキャラツク船で一晩明かすことも構わないのだが、

ヴィヴィアンがいることで、そうも行かなくなった。女性がいる以上、きちんとした船室を取りたかったのだ。

船員見習いの子供に荷物を渡し、甲板へ上がる。

船の甲板には、折々の乗客がおり、見送りの家族や友人に手を振っていた。

エインとヴィヴィアンは、人ごみを縫って客室へと向かう船員見習いの子供に続き、船内へ入った。

子供が、一つのドアの前で止まる。

「サー。こちらがお部屋です。」

「ありがとうございます。」

そう言って、予約していた部屋のドアを開ける。

子供が先に中に入り、荷物を部屋の隅に置いた。

「では、ごゆっくり」

と言って、出て行こうとした子供の手を、エインが握って引き止めた。

「この船では、チップは違反だったつけ。」

ごく稀に、チップを乗船違反とする船がある。

切欠となったのは、とある富豪が一隻の旅客船に乗船した折、クルーの一人に法外なチップを渡した事で、他のクルーがその客ばかりに愛想を振り撒き、サービスが偏り問題になった事だった。

この船も違反と聞いていたのだが、

「降りるまで頼むよ。」

そう言って、エインは子供の手のひらに、僅かな枚数の紙幣を乗せた。

困惑して見上げる子供に、エインが人差し指を口にやり、一つウインクをする。

子供は、ぱつと表情を和らげ、深く一礼して部屋を出て行った。

「未だにこの行為が、よく解らなくてね……」

ドアの向こうで、子供の足音が聞こえなくなってから、エインが呟いた。

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインは固く狭い寝台に横になり、天井を仰いだ。

「恵んでいる訳じゃないんだ。」

ほんの短時間でも、仕事を依頼する、という気持ちなんだよね。でも、恵んでいるようにしか見えない。

ボク自身は、そこはかたなく厭な気分なのに、彼にとっては、とても喜ばしい事なんだ。」

「格差の所為ですか？」

ヴィヴィアンが訊ねる。

「違うね。」

もっところ、本質的なものだと思う…。」

溜め息混じりにエインが言う。

そう古くない嗜みではあるものの、チップについては最早常識の範疇にまで風習として息衝いてしまっていて、今更疑問に思う事自体が珍しい。

「ボクは偽善者なのかもね。」

さらりと言って、横目でヴィヴィアンを見た。

ヴィヴィアンは、どう答えを返したのか考えあぐねて、眉間に皺を寄せた。

「ボクは少なくとも、金に困る生活はしていない。」

確固たる職業にも就いているし、社会的地位も得た。

さらに上の方々からは可愛がつて貰い、鼻屑もしてもらえる。

チップをやる事で厭な気分になるのは、ボクがその事に胡坐を掻いている証拠なんじゃないか、と思うときもあるんだよね。」

頭の下で組んだ両手の指を、もぞもぞと遊ばせて、エインはもう一度溜め息を吐いた。

「ま、大抵は、渡すときは何も考えてないんだけどね…」

特別に格差を意識した思考でもなければ、己を過信した故の疑問でもない、しかし答えの出ない疑問を、エインは山ほど抱えているのかもしれないと、ヴィヴィアンは思った。

なまじ他人より頭の回転が速く、多智だからこそ、持ち得る悩みなのだろう。

ヴィヴィアンは、エインの向かいにある寝台に越し掛け、丸い小さな窓から外を見た。

灯台の明かりが、深い闇と化した海の上を、踊るように回る。

風が強いのか、時折船が大きく揺れた。

出港が近いようで、部屋の外ががやがやと騒がしくなっている。

ヴィヴィアンはドアを一度見やり、再び窓に目を向けた。

その仕草が、そわそわと落ち着かない様子に見えたのか、エインが薄く目を開けてヴィヴィアンを見た。

「寝給え。横になるのが苦であれば、座ったままでもいいから。一晩は意外と長いよ。」

「はい」とヴィヴィアンは頷き、何の銜もなく寝台に横になり、シーツを被った。

が、不意に上半身だけむくりと上げ、窓際にある燭台の蠟燭を見つめた。

「消していいよ。」

聞かれるより早く、エインが答えた。

ヴィヴィアンは「はい」と返し、蠟燭の火を消した。

再び横になり、ヴィヴィアンは、小さく息を吐いた。

決して寝心地の良くない寝台で、どこまで熟睡が出来るものだろうか。

しかし、ロンドンについた後も、まだこの手の寝台のお世話にはなる。さらにカレーに着いてからは、ボルドーまで馬車に揺られなければならぬ。

長い道程だ。

億劫な訳ではないが、決して心ときめく旅でもない。だから眠れるときに眠っておかないと、いざと言うとき、何の役にも立たなくなってしまう。

ヴィヴィアンはもう一度息を吐いて、目を閉じた。

襲ってこない眠気を、自ら呼び寄せようと、意識を散乱させる。暗闇の中で瞼を閉じ、さらに作った闇に、色とりどりの塵が舞った。

目が疲れているのであろうか。

長く使っていないかった部屋に舞う埃に、朝陽が反射して降り注いでいるように、その塵はいつまでも舞い続ける。

「ヴィヴィ」

突然声をかけられ、ヴィヴィはぱちりと目を開けた。

「はい」

ヴィヴィアンが返事をする、エインがくすくすと笑った。

「やっぱり眠れないか」

「そうですね。気が昂ぶっている訳ではないのですが…」

「この寝台の所為だな」

エインが面白そうに言った。

「済まないね。」

屋敷でゆっくり休む暇を与えてやれなくて。」

「お気になさいませんように。」

そう答えた後、ヴィヴィアンは小さな声で、さらに続けた。

「解っておりますから。」

この言葉が聞こえたのか否か、エインは「そうだね。」と答え、あつという間に寝息を立ててしまった。

ヴィヴィアンは、好くもこの寝台で眠れるものだと感心し、暗闇で声なく、独り笑った。

プロフェッサー 3

「ヴィヴィ。」

すれ違い様、声をかけられた。

誰かと振り返れば、同期のショーンだった。

「決まったんだって、『出発日』？」

本当にいいのかい？

行けば、『帰れなくなってしまう』のに…。」

そう言つて、昇ったばかりの朝日を背負うヴィヴィを見ながら、

ショーンは目を細めた。

溢れんばかりの白い光の中で、ヴィヴィアンは何にも動じない無表情で頷いた。

「ええ。」

ショーンは、記録係だったわね？」

ヴィヴィアンが言つと、ショーンが申し訳なさそうに頷いた。

「君より、損も苦労も危険もないポジションだよ。」

「良かったじゃない。」

結婚したばかりで二度と帰って来られない任務なんて、哀し過ぎるわ。」

抑揚のない、しかし決して感情がない訳ではない口調で、ヴィヴィアンがゆつくりと言つた。

ショーンは、先月結婚したばかりだった。

妻となったのはショーンの幼馴染の女性で、幼少の頃から変わらぬ愛を貫き、先月、ショーンの施設研修明けと同時に、夫婦となった。

「既婚者は、自動的に『監視役』リストから外される事になっていくからね…。」

ショーンが申し訳なさそうに言い、下を向いた。

当然と言う顔をして、ヴィヴィアンはもう一度頷いた。

自分が就いた任務には、候補者リストと言うものがあって、そこに名を連ねるのは、任務遂行能力が足りると判断された者のうち、独身、介護義務のある家族を持たぬ者、扶養者を持たぬ者である。

候補初期段階でリストアップされていても、結婚、或いは止むを得ず任務に就けない状況に陥った者は、自動的に、無機質に候補から外される。

「当然だわ。」

それに……」

ヴィヴィアンは表情を変えずに言った。

「あの候補者の中なら、例えばあなたが残っていたとしても、私が選ばれていたでしょうから。」

犠牲にするものがない者の中で、さらに求められるのは、任務遂行能力である。

今度の候補者として上がった者の中では、ヴィヴィアンのその能力の高さはずば抜けていた。

誰が残り、誰が抜けていようが、ヴィヴィアンに決まっていたようなものだったのだ。

「君は優秀だからね……」

「そんな事ないわ。」

シヨーンの言葉を、ヴィヴィアンはぴしゃりと遮った。

「何も捨てるものがないだけよ。」

吐き捨てるヴィヴィアンを、シヨーンは少し哀れんだ目で見つめた。

目の前の同僚はいつでもそうなのだ。

幼い頃、両親が事故で死に、親戚や兄弟がいなかったヴィヴィアンは、軍管轄下に置かれた養護施設に引き取られた。

そこでは、基礎教養を始め、将来的に軍部に席を置ける者、イコイル軍人として必要な、在りとあらゆる知識と技術を身に付けさせられる。

何故軍管轄施設に引き取られたかと言えば、それは偶然に過ぎな

い事で、ヴィヴィアンの出身地が、軍関連地だった事、ただ一つだった。

シヨーンはまるで正反対の生い立ちで、軍官僚だった両親に十分な愛情を注がれて育ち、使命感の元に、自ら軍部に身を置いた。

その先でヴィヴィアンとシヨーンは出会った。

ヴィヴィアンは、何故か笑顔を見せなかった。

笑顔ばかりではない。

涙、悔しさ、哀しさ…。

全ての感情をどこかに置き忘れてしまったかのように、眉一つ動かさず、その無表情を徹底していた。

しかし、心は澄み、優しく、豊富な知識とチャームिंगな顔立ちのお蔭か、彼女が孤立する事はなく、常に誰かが傍にいた。だから、哀しいのだ。

もう二度と『会えなくなってしまう』事が。

「ヴィヴィ…」

シヨーンが呼ぶと、ヴィヴィが片手を上げた。

「イトダ博士に呼ばれているの。」

「ごめんなさい。」

そう言ってくるりと踵を返し、行ってしまった。

シヨーンは、ヴィヴィアンの背中に、ほんの少しの心細さを見た気がした。

これ以上話してしまえば、きっと未練が残ってしまうのだろう。

拒否出来ない任務だ。

だから、決まってしまったが最期、どうする事も出来ない。

軍人としてのプライドであろう。

覚悟の元で、平静を装っているのだ。

凛々しくもあり、哀しくもあり、そして、頼もしくもあった。

シヨーンがヴィヴィアンを施設で見たのは、これが最期になる。

プロフェッサー 4

ゆらりと大きな揺れで、ヴィヴィアンは目を醒ました。

小さな窓から入り込む月明かりが、部屋の中を仄かに照らしている。

もう一度、ゆらりと大きく揺れた。

波が高いのか。時化てはいないようだが、風が強いのかも知れない。

ヴィヴィアンは上体を起こし、部屋の中を見回した。

隣の寝台では、エインが静かに寝息を立てて寝ている。

ヴィヴィアンは、音を立てないようにブーツに足を入れ、素早く編み上げ紐を結ぶと、すっと立ち上がった。

そしてもう一度エインの顔を覗き、寝ている事を確認して、ドア横に吊るした鍵を手にも、部屋を出た。

鍵をして、甲板へと階段を昇る。

その足音に、船員が何人かぎよつとしながら振り向いたが、ヴィヴィアンの姿を確認し、にこりと愛想のいい笑顔を寄越した。

「揺れが気になりますかい？」

若い船員に混じって、一人、随分歳を取った船員がいた。

その船員が、ヴィヴィアンに声をかける。

「いえ。」

風はそんなにないんですね。」

海を見ながら、ヴィヴィアンが言った。

「この辺りは、海底がでこぼこしててなア、風が弱くてもこんなに波が高くなっちゃうんですさ。」

普段からこんなだから、風が強い日なんざ、大変でさ。」

「でも、この辺で事故が起きるって話は聞きませんね。」

「波の質を理解してる船乗りア、風の強い日は、沖のほうを迂回して進みますからねえ。」

言いながら、船員が指先で海をぐるつとなぞった。

迂回、と聞いて振り向くと、街灯りがはっきりと解るほど、陸の近くだった。

「アンタア、先生の弟子かい？」

「はい？」

一度聞き直して、直ぐに質問の意味に気づく。

「いえ。弟子ではありません。」

メイドとして、昨日から屋敷に就いています。」

ヴィヴィアンが答えると、船員は、メイドさんかい、と言って頷いた。

「あの先生ア、何度か船で会った事があつてな。

まあなんだ、色んな事に詳しくてなあ。

この辺の海の事も、俺らより知ってる事もあるんだ。

大したお人だなア」

そう言つて、船員がにこりと笑った。

ヴィヴィアンは笑うでもなく、ただ小さく頷いた。

「研究熱心な方ですから……」

ぼつりと呟き、海面を覗く。

まだまだ、目的地までは長い。

それまであと何度、この波に揺られ、この言葉を聞くことになるのか。

あと何度、あの寝顔を覗き込み、そつと部屋を抜け出せばいいのか。

今度こそ、今度こそと思い、繰り返し繰り返し”生きて”来た。

それでも、繰り返さなくても済む方法は、まだ見当たらない。

海風で冷えたのか武者震いを起こしたので、ヴィヴィアンは部屋に戻る事にした。

往きには気付かなかった足音が、還りに妙に気になった。

足音を立てないよう、そつと歩こうとすると、自然に爪先立ちになった。

甲板から船腹への階段を下り、壁に手を付きながら廊下に行く。ついさつき出たばかりの部屋のドアの前に立ち、ゆっくりとノブを捻ると、予想より大きな音を立ててドアが開いた。

そつと首を入れ、部屋の中を覗く。と、ヴィヴィアンはぎょつとした。

寝ていると思っていたエインが、起きてベッドに座って、扉から恐る恐る顔を覗かせるヴィヴィアンに、にやりと笑いかけていた。

「驚いたかい？」

「はい……」

問われて体勢を直し、部屋に入ったヴィヴィアンは、答えながら「この展開は初めてだったもので……」と言い出しそうになった口を、はつとして抑えた。

エインはおどおどとするヴィヴィアンにくふふと笑い、続けた。

「甲板のオジサン、いい人だろう？」

「はい。」

「お知り合いなのですか？」

「うん。何度か船で一緒になってね。」

腕の良い航海士だよ。」

航海士だったのか、とヴィヴィアンは小さく頷いた。

エインはヴィヴィアンの反応に満足気に頷いて、窓の外に目をやった。

ヴィヴィアンがさつき見たときより、月が東へ傾いていた。そんなに長い事甲板にいたのだろうか。

「ヴィヴィ」

ぼうつと眺めていると、エインが呼んだ。

「はい。」とヴィヴィアンが返事をする、と、エインはちらりとヴィヴィアンを見て、再び窓の外を見た。

「フランスに着くまでは、特に何も無いから。安心して休みなさい。」

道中、ただひたすら疲れる旅だ。

着いたら、直に膨大な文字と戦わなければならないだろうしね。
しっかり休んでくれ。」

最後に、「君だけが頼りだから」と付け加えて、エインはヴィヴィアンに歩み寄った。

ヴィヴィアンより頭部一つ分背の高いエインは、ヴィヴィアンを見下ろしながらにこりと笑った。

「はい。教授」

素直に返事をする、ヴィヴィアンはベッドへ横になった。

エインはまた満足気に頷いて、ベッドに腰を下ろし、ヴィヴィアンが寝付くまで、じっと彼女を眺めた。

やがて観念したように眠りに着いた、難儀で風変わりな自分について来ようとしてくれる頼もしい助手を、エインは愛おしそうに目を細め、見つめた。

プロフェッサー 5

あの人はどこ…。

確かこの庭を横切って…。

恐ろしいほどに花の咲き乱れるこの庭を横切って…。

茂みの向こうに、湖が…。

湖が見える…。

その湖の畔に…。

深い樹木に囲まれた、小さな湖の畔に…。

足が縛れる。

でも走らなければ。

手遅れに、手遅れにならないうちに…。

間に合わなければ。

間に合わなければ、また…。

ザクザクと芝生を踏み潰す足音に紛れて、ドンと音がする。

一回…。

ドン。

二回…。

無事で、無事でいてくれ。

茂みを潜る。

細い枝が肌を引っかく。

痛い…。

ああ、でも、あの人はもつと…。

手で掻き分けた茂みの先が拓けた。

湖が見える。

この湖の、右の畔…。

ああ…。

また…。

また、間に合わなかった…。

駆け寄り、横たわる躰を抱き起こす。

小さな、白い顔が苦痛に歪んでいる。

しかしもう、息はない…。

ああ…。

これで何回目だ…。

何回目だ…。

あと何度…。

あと何度、この躰を抱き起こせばいい…。

プロフェッサー 6

すう…と、何の突っかかりもなく瞼が開いた。

目の周りの塵を取りながら、眼鏡を探し、かける。

隣のベッドを見る。

ヴィヴィアンは、まだ静かに寝息を立てて寝ている。

窓の外を見ると、漸く、東の空が明るくなって来た頃だ。

エインは上体を起こし、出したシャツをボトムに仕舞いながら、手早くブーツに足を入れた。

紐を結び、すっと立ち上がると、もう一度、ヴィヴィアンを見る。

素直な寝顔だ。無表情の普段とは印象の全く違う寝顔に、自然と笑みが毀れる。

エインはふうと一つ息を吐いて、ドア横の鍵を手に、部屋を出た。

静かに錠をかけ、甲板へ上がる階段を昇る。

階段と甲板を隔てる扉を開けると、ぶわっと冷たい風が舞い込んだ。

目を細めて風をやり過ぎし、甲板へ出ると、「先生、早いね」と声をかけられた。

振り向くと、老航海士がにこりと笑って手を振っていた。

エインは手を振り返しながら、「寒いね」と言った。

「雲が晴れないんだよ。」

上空じゃもっと強い風が吹いてるよ。」

そう言っ、航海士が笑った。

見上げると、雲が勢いよく東へ流れていた。航海士の言うとおり、かなり強い風が吹いているようだ。

「天気悪くなるかな？」

エインが問うと、航海士は空を仰いで、「あー」と唸った。

「西風が吹いてるからなあ。」

西の方にや、ちよいと濃い雲もあるようだし、風も湿気ってる。

一雨あると思うよ。」

言われて風に意識を向けると、少し、海の匂いとは違う、鼻腔に纏わりつくような匂いがした。

雨に濡れた土のような、埃っぽい匂いだ。

「雨か…。困るなあ…」

「もうすぐロンドンだ、先生。」

荷の量にも寄るが、出航までそんなに時間はかからないだろうよ。

雨になる前に、カレーに着くと思うよ。」

少し調子よく言う航海士に、エインは「それは助かるよ。」と笑った。

すると突如強い風が通り抜け、張り巡らせた帆をばたばたと靡かせた。

「おっと。」

何かあったのか、航海士が磁石を取り出し、見るなり慌てて「じやあ、先生。」と片手を挙げて走って行ってしまった。

エインは遅れて、「ああ、また。」と手を振り返して、いつの間にか陽の昇った空を再度見上げた後、部屋へ戻った。

鍵を回し、ドアを開けると、ヴィヴィアンがベッドに座ってこちらを見ていた。

「おはようございます。」

先程見た寝顔と打って変わって、昨日の通りの無表情のヴィヴィアンが、抑揚なく挨拶をする。

そのギャップが面白くて、エインはくすりと笑いながら「おはよう」と答え、ヴィヴィアンと向かい合うように、自分のベッドに腰を下ろした。

「夜半に、雨になるかも知れないな。」

航海士に聞いた事を、伝える。

「道、大丈夫でしょうか？」

カレーには午後早い時間に着く。そのあとボルドー郊外のベルトワーズ伯爵邸までの舗装されていない野道を、馬車で移動する事になる。

「まあ、大丈夫だろう。」

エインは「土砂降りになる前に着けるだろう」と、どこから沸くのか自信たっぷりに言う。

「なら良いのですが……。」

思うところがあるのか、ヴィヴィアンが煮え切らない返事をする。

あらゆるものを毅然と真っ直ぐ見つめる瞳が、少し揺れながら、窓の外へ向けられた。

「ヴィヴィ？」

エインが小さく首を傾げ、ヴィヴィアンを呼ぶ。

「はい。」

呼ばれて、視線を戻さずヴィヴィアンは返事をする。

「心配は要らないよ。」

無事に着けるから。」

道中、心配する事は何もない。エインが言い切った。

ヴィヴィアンが眉を顰めて、エインを見る。

見せないのは、笑顔だけか。

そう思い、怪訝な顔をするヴィヴィアンを見ながら、エインはにっこりと笑った。

暫く他愛もない話をしていると、甲板からカンカンと鐘の音が聞こえた。

どうやら、ロンドン港に着いたらしい。

テムズ川には港ではなく、数箇所ドックがあり、各々目的地に近いドックへ船を泊める。到着したのは、ロンドンよりテムズ川河口方面少し手前にある、ロザーハイズという地域に作られた巨大ドック「ハウランド・グレート・ドック」だ。

予定より数時間早い到着だった。

「夜のうちに風があつたからかな。」

いい方向に風が吹いてたんだなあ」

エインが窓の外を眺めながら呟き、ヴィヴィアンを見た。

「港を出るまで、一時間以上は時間があると思う。」

少し降りるかい？」

「教授はどうなさりたいですか？」

「うん、ボクはちよつと降りて歩きたいね。」

付き合ってくれるかい？」

エインがわざとらしく腰に両手を当て、軽く仰け反った。

「お供します。」

ヴィヴィアンが堅苦しく言い、ベッドから腰を上げた。

鍵を取り、部屋を出て甲板へ向かうと、荷揚げの指示をしている船長と出くわした。

「ああ、教授。おはようございます」

航海士と同様顔見知りのようで、気さくに挨拶をしてきた船長に、エインも片手を挙げて応えた。

「おはようございます、船長。」

出航まで、時間はありますか？」

問うと、船長は胸ポケットから懐中時計を取り出し、蓋を開けた。短針が七を少し回っていた。

「あー…。」

そうですね。予定より二時間ほど早く着いてますので…」

細かく残り時間を告げようと思ったのか、計算に戸惑った船長は言葉を濁した。が、諦めたのか、「出航予定時刻は九時ですから、お出かけでしたら、それまでにお戻り下さい。」と言った。

エインは苦笑しながら、「一時間半ほどで戻ります。」と言い、船を降りる為、船員と話し始めた。

ヴィヴィアンは一時エインから離れ、港へと降りる階段付近で待つ事にした。

ぼんやりと行き交う人や荷物を眺めていると、昨夜部屋へ案内してくれた船員の少年が見えた。

少年もヴィヴィアンに気付き、人懐こい笑顔で手を振って来たので、ヴィヴィアンも手を振り返した。

「昨日の少年だね。」

突然エインの声がして、ヴィヴィアンが一瞬驚く。

「はい」

「優秀な子だ。」

懸命に船仕事をする少年を見ながら、エインは感慨深げに呟き、「さあ、食事でもしよう」と、ドックへ下りて行った。

ヴィヴィアンが慌てて追う。

ドックには大小様々な船が停泊し、早朝にも拘らず倉庫脇には露店が並び、既に大勢の人々が行き交い、活気付いていた。

ロンドンを出、翌々日にはエインの屋敷に辿り着いた。そこからトンボ返しをして、ロンドンへ舞い戻ったヴィヴィアンは、然して珍しくもない光景をきよきよと見回し、その様子を眺めた。

「すぐに戻って来てしまったね。」

ヴィヴィアンの様子を面白そうに眺めながら、エインが言った。

「少し、不思議な気分です。」

「済まないね。」と言いながら、エインがとある露店を指差した。

「あつた、あつた。」

露店に近付き、店主に何か言う。

露店の周りには小さなテーブルと対の椅子が、何組か並んでいる。

カフェのようなものだろうか。

一言二言言い終えたエインに、店主が笑顔で一組のテーブルを指差した。

「座ろう。」

ヴィヴィアンに向き直り、エインが言う。

店主の指差したテーブルに歩み寄ると、エインはヴィヴィアンに

椅子を引いた。

ヴィヴィアンが座ると、エインも向かいの椅子に腰掛け、頬杖を突いた。

「こちらに船で着たときは、大抵この店で朝食を摂るようにしていいね。」

店主とも顔馴染なんだ。」

ちらりと横目で店主を見ると、店主は果物の皮を手早く剥いていた。

既に手元にはサンドイッチが用意されていて、店主の脇にある台の上では、紅茶が蒸されていた。

「食器を洗う場所がないので、いつもカップを総て使ったところで店を閉めてしまうんだ。」

だから、少し遅いと食事が出来なくてね。」

エインがそう言っただけで、エインは黙った。

ヴィヴィアンもつられて見回すと、いつの間にか他のすべてのテーブルにも客が座っていた。

「ね。椅子の数、イコール、カップの数。」

今日はこれで店仕舞いだよ。」

楽しそうに言いながら、エインが笑った。

「長くロンドンにおりますが、港には来ないので、知りませんでした。」

ヴィヴィアンが言った。

「うん。船を使う人間しか知らないかも知れないな。」

「店主は普段何を？」

「あの店主は、普段は宝石店を営んでいるんだよ。」

ロザーハイズ・ストリートに店を構えている。」

ロザーハイズには行った事あるかい？」

「いえ……」ヴィヴィアンが首を振った。

ロンドンからテムズ川河口方面へは、足を運んだことがなかった。

あの辺りは一部スラム化が激しく、治安の悪さが懸念されていて、近付き難かったのだ。

「そうか、この辺は場所に依っては治安が悪いからな…。」

一人納得して、話を続ける。

「あの店主の宝石店のある一角は、大通り沿いという事もあった、それほど治安も悪くなくてね。商業地帯としても開発の進んでいるこの地域に土地だの倉庫だのを持つてる商人が、その辺りで仕事の合間の余暇を過ごしたりするんだ。

普段は、それで生計を立ててる。」

やや深いところまで説明をして、エインが背中を伸ばした。

「とはいえ、ボクも怖いから、この辺はウロウロしないんだけどね。」

くすりと笑って、エインが再び店主を見たのと同時に、店主がサンドイッチの乗った皿と熱いティカップを持って、二人のテーブルへと歩き出した。

皿には、先ほど剥いていた果物も瑞々しく朝日に照らされながら並んでいて、食欲をそそった。

皿がテーブルに並ぶと、「さあ、食べてすぐに船に戻ろう」と、

エインは素早く即時に取り掛かる。

ヴィヴィアンもサンドイッチを小さな口で頬張りながら、思いの他減っていた腹に、ゆっくり食べ物を流し込んだ。

プロフェッサー 7

食事を終えて船に戻ると、先程の少年が出迎えてくれた。

「お帰りなさい。」

「ありがとう、ただいま。」

エインはにこりと笑いながら答え、「キミ、名前は？」と訊ねる。

「カルヴィン・マコーリーです。」

カルヴィンと名乗る少年が応えると、エインはうんと頷いて、「カレーまでよろしく頼むよ、カル。」と言った。

その後、所用に呼ばれたカルヴィンと別れ、エインとヴィヴィアンは甲板の上に備え付けられたベンチに腰を下ろした。

部屋に戻ってもやる事がないし、どうせ話すなら外の方が心地が良い。

何より今朝は空気がいつもより綺麗に感じ、天気も悪くなかった。

「そういえば、ボクの仕事の説明をする約束だったね。」

約束という程でもないが、確かに昨日、そんな話をした。

「何から話したのか……」と、エインが顎を撫でながら言った。エインの顎は、髭痕の薄い、実に綺麗な顎だった。

「ボクは表立った仕事柄、色々な書物を目にする。」

まだ記憶が間に合うくらい最近の書物から、それこそ神が生まれた頃の大昔のものまで、実に幅広い。

だが、研究職は本職じゃない。

研究職で得た知識を使って行う仕事は、ボクの本職、とボク自身は思っている。」

エインは胸元のポケットから、昨日馬車の中でヴィヴィアンに見せた、アン・ベルトワーズからの手紙を取り出した。

「ボクのところには、頻繁に、このような手紙が届く。」

何か調べ物をしないと解決しない、しかも安易に調べる事の出来ない内容であつたり、特別な書物でないとそのヒントを得られないような、そんな状況が発生した時が、このボクの出番であり、ボクの本職でもある。」

エインが、手紙を太陽に透かした。

「不可解な遺言状。しかも、このボク宛と思われるもの。」
大体察しは付くのであろう。

横顔が、企み事でもしているような、悪戯な笑顔だった。

「ベルトワーズ氏は、ボクの本職に深い理解を示してくれる人だったから、大事に出来ないような何かを、ボクにこっそり打ち明けたいんだろう。」

謎を解きに来い。

死後出題された謎には、一体何が隠されているのだろうか。

ヴィヴィアンが手紙を眺めていると、エインがそれを差し出した。

ヴィヴィアンは再びその手紙を手にとると、丁寧に封を開いて中の手紙を取り出す。

手紙は、馬車で見た時よりも、よれている気がした。

何度かエインが読み返したのかも知れない。

「アンはボクの妻になるかも知れなかった女性だね。」

唐突にエインが言う。

流石に動揺したヴィヴィアンが、視線をエインに向けた。

「丁寧に断りをしたんだが……。」

エインは暢気にいい、ずるりと座る姿勢を崩して、うん、と伸びをした。

会うのは躊躇われるのか。

ヴィヴィアンはエインの様子から、そう悟った。

空を見上げると、空の色はいつの間にか、早朝の白から、深い青に変わっていた。

今朝方、空を覆っていた雲も、風の所為か散り散りになって、流

れている。

そろそろ出港ではないかと思つた瞬間に、カルヴィンが走つて来て「サー、そろそろ出港です。お忘れ物はありませんか？」と訊ねて来た。

エインが伸びたまま「ないよ」と笑顔で答えると、カルはにっこり笑つて走つて行つた。

「良い子だ。」

猫背気味にベンチに座り直したエインが、カルヴィンの後姿に目を細めて呟いた。

「そうですね。」と、ヴィヴィアンも答える。

「不思議な事に……。」

エインが何か言いかけた瞬間、カンカンカンとけたたましい音が鳴り響いた。

「出港しまーす！」

音に続いて、船員の大声が響いた。その声に、まだドッグをのそのそと歩いていた乗客が、小走りを始めるのが見えた。

「お、出港か。」

エインが、ドッグを見下ろしながら言った。

ヴィヴィアンは、面白げに小走りの乗客を見下ろすエインの横顔を、怪訝な顔で見つめた。

先程何を言いかけたのか、至極気になった。

そんなヴィヴィアンの内心を知つてか知らずか、エインは腰を上げた。

「さて、潮風は肌に悪い。部屋に戻つて、少し休もう。」

徐に手を差し出すエインを見上げながら、ヴィヴィアンは手紙を差し出した。返せと言う意味かと思つたのだが、そうではなかったようで、エインは苦笑しながら首を振つた。その仕草に意味を理解したヴィヴィアンは、手を握つて良いものか躊躇つたが、エインが即座にヴィヴィアンの手を取り引つ張り上げたので、ヴィヴィアンはきょとんとしたまま立ち上がる事となった。

「夕方までにはカレーに着くよ。」

そこからは一晩中馬車に揺られなければならない。

覚悟しておくれ。」

申し訳なさそうに眉をハの字に下げながら、エインが言った。

「存じております。」

ヴィヴィアンはいつもの表情に戻し、静かに答えた。

「有難う。」

そぐわぬ礼を言って、エインがまだ握っていたヴィヴィアンの手をさらに強く握る。

が、ぱっと手を離すと、エインはくりりと回って船腹への階段に向かつて歩き出した。

「行こう。」

「はい。」

一つ返事をして、ヴィヴィアンも後に続く。

ボルドーのベルトワーズ伯爵邸に着くのは、数日後になる。

それまでに消耗する体力は、並ではないだろう。

昼でも夜でもいいから、寝ておく方がいいかも知れない。

ヴィヴィアンはそう思い、極力思考も巡らせない事に決めた。

ドーバー海峡を渡るのに、それほど時間はかからなかった。

その間、エインはウトウトとしながら本を捲り、ヴィヴィアンはじつとその様子を眺めていた。

時折、視線に落ち着かないのかエインがヴィヴィアンに声をかけ、軽く話をする程度の会話はあったが、概ね無言のまま、時間を過ごした。

やがて、カンカンという音とともに、「カレー、到着！」と言う大きな声が聞こえた。

部屋に持ち込んだ荷物を調べていると、ドアがノックされた。

「サー、もうすぐカレーに到着です。」

カルヴィンの声だった。

「やあ、カル。入っていいよ。」

エインが声をかけると、カルヴィンが恭しくドアを開けた。

「荷物をお運びします。」

につこり笑って言うカルに、エインも笑って返す。

「ありがとう。頼むよ。」

「はい。」

そう言い、カルヴィンが整え終えた荷物のうち、エインの大きな皮鞆に手を伸ばした。

すると、「ああ」といい、エインが止めた。

「ヴィヴィアンのボストンバッグを持ってくれないか。これはキミには大きいだろうしね。」

「はい。」

カルヴィンは素直に従い、ヴィヴィアンのボストンバッグを持ち上げ、先頭に立って部屋を出た。

「時間通りの到着だけど、天候が不安だから、すぐ出航するのかな？」

エインが聞いた。

「そのようです。夜には少し降るだろうって、船長が言っていました。」

「そうだね。風がないから、それほど大きな波は立たないだろうが……。」

重いのか、エインが鞆を持ち直しながら「心配だね」と続けた。

「はい。」

答えるカルヴィンの声も、少し沈んだ。

「まあ、この船の船員は、殆ど知っているけど、皆優秀だから、大丈夫だよ。」

エインが笑いながら言うと、カルヴィンが振り返った。

「有難うございます。サー。」

会話も終わり、甲板に出ると、すぐに船は港に横付けされた。

船を降りる階段を降り、カルヴィンがヴィヴィアンにバッグを手渡す。

「ありがとう。」

ヴィヴィアンがお礼を言うと、カルヴィンはにっこりと笑って「またお会いしましょう。」と挨拶をして走り去ろうとしたが、またもエインに腕を掴まれ止められた。

「カル。」

エインがカルヴィンを呼び、しゃがみ込む。

「誰が見ているか解らないから、チップは渡せないが、代わりに……」

言いながら、きよろきよろと辺りを見回す。

「また、ボクらを港で見付けたら、頼むよ。」

エインが言うと、カルヴィンが大きな笑顔を見せた。

「はいっ！」

そして今度は勢いよく深々と頭を下げ、船へ走って行くカルヴィンの背中を、エインはふふ、と笑って見送った。

「さて、ボクらも急ごう。足は手配してあるから。」

「はい。」

ヴィヴィアンが答え、バッグを持ち上げようと屈むと、一瞬早くエインがヴィヴィアンのバッグを持ち上げてしまった。

プロフェッサー
「教授……」

「いいよ、いいよ。」

少し慌てるヴィヴィアンを尻目に、エインはすたすたと歩いて行ってしまう。

エインは背丈こそ高いが横幅はなく、か細い訳ではないが筋肉があるとも思えない典型的な痩せ型の体型をしている。その体で、皮靴とボストンバッグでは、幾らなんでも重い筈だったが、意外とあっさり持ち、足取りも軽い。

一足遅れたヴィヴィアンが、早足でエインに着いて行くと、エイ

ンが顎で一台の馬車を指した。

「あれだよ。おい。」

エインが声をかけると、馬車の陰から品の良さそうな中年男性が出て来て、エインに向かって一礼した。

そしてさらにもう一人、逆側からも青年が出て来て、同じように一礼をする。

「お待ちしておりました。プロフェッサー・アンダーソン。」

「お迎え、有り難い限りです。アンはお元気ですか？」

この二人はベルトワーズ家の使用人のようだ。

「はい。お体の具合も大分よくなりまして。」

中年男性が答える。

「それは良かった。トンプスンさんもウィリアムズさんもお元気そうで、何よりですよ。」

エインが続けると、二人の使用人は深々と頭を下げた。

「恐れ入ります。」

そう言い、エインは後ろに着く、ヴィヴィアンを見る。

「ボクの新しい助手。ヴィヴィアン・トーマスです。お世話になります。」

エインが紹介すると、使用人たちはまた頭を下げた。そして中年男性が手を胸に当て、「わたくしがトンプスン」、そして青年を手で示し、「こちらがウィリアムズです。」と言った。

「屋敷まで、ご案内させていただきます。」

「お世話になります。トーマスです。」

「トーマス様。」

トンプスンが一度繰り返し、覚えましたという意思表示をし、「ささ、本日は天候が芳しくありません。屋敷へ急ぎましょう。」

そう言って、出発を急かした。

荷物を二人に預け、クーペに乗り込む。

「ベルトワーズ家の人たちは皆よい人たちだから、安心していいよ。」

いつ手にしたのか、何冊かの本を脇に抱えて座りながら、エインが言った。

「はい。」

ヴィヴィアンも返事をして、しかし本が気になる。もしか、と思っ

た。

「教授？」

「教授の荷物の中身、まさか本だけでは……？」

ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインが大笑いした。

「さすがにその心配はないよ、大丈夫。ただ暇潰しがないと死んでしまっただ。着くまでかかるからね。キミも読むかい？」

エインがヴィヴィアンに一冊、本を差し出す。

ヴィヴィアンは、確かにそうかと納得しつつ、本を受け取った。

書名は『シャングリ・ラ』。

「伝説の都の本ですか。」

「うん。面白いよ。」

そう言われ、ヴィヴィアンが本をぱらぱらと捲る。すると、一枚の紙切れがひらりと落ちた。

その紙切れを、大層慌てたエインが即座に拾い上げる。

「ごめんごめん。塵が……」

言いつつも、丁寧にポケットに仕舞いこんだ。

塵ではないのだろうか、触れてもいけない事であろう。

ヴィヴィアンは無言で、本に目を戻した。

ところどころ、ペンで線や矢印、『？』とメモが書かれていた。

大抵は、『シャングリ・ラ』や『東の大陸』などという、場所を示す単語に印がついていたが、最後のページまでめぐり終わったところで、ヴィヴィアンの手が止まった。

そこには、何か書いたらしい上から、それを隠すようにして、ぐちゃぐちゃと線で塗り潰してあった。

微かに『V』という頭文字が読み取れる程度で、あとは解らなか

った。

一連のペンの跡に、ヴィヴィアンはエインの秘密を見てしまったような罪悪感を覚えた。胸が激しく鳴っている。震える手でなんとか静かに本を閉じると、「私には難しいようです」とだけ言って、エインに返した。

エインは、メモの事などすっかり忘れているのか、「そうか」とだけ言って本を受け取り、そのまま読書に没頭してしまった。

ヴィヴィアンはその横顔を見つめながら、胸の鼓動が聴こえてしまわないようにと、祈った。

初めて見る、あの本の、あの落書き。
どちらの方向へ、分岐したのか…。

プロフェッサー 8

カレーは古代ローマの時代から、ブリテン諸島と諸ヨーロッパの大都市を結ぶ中継点として栄えて来た街だ。

カレーのみならず、カレー周辺の都市は港湾都市として造船や貿易によって栄え、賑わっている。カレーはその中心とも言える街で、大きな船の往来も一層多い。

町はレンガ造りの美しい建物が並び、道も舗装され馬車の揺れも少ないので評判は高い。

「フランスは初めてかい？」

エインはカレーの街を眺めながら、ヴィヴィアンに訊ねた。

「はい。イギリスから出る事はありませんでしたので……」

「そうか。フランスのワインはイギリスのワインより美味しいんだ。これは個人票だけでもね。」

本当は、ボルドーまで船を使ったほうが早かったんだが、どうしても、シャンティイー城を見たくてね。

とても美しい城だよ。一目でも見ておくといい。」

エインが上機嫌に語った。

「シャンティイー城は、モンモランシー家やブルボン＝コンデ家らが増築改築した城で、特にプチシャトーと呼ばれる一角は本当に美しい建築物だよ。」

森と水に囲まれた様子は、スコットランドの建築物には中々ない雰囲気だね。

スコットランドやイギリスの建築物も美しいとは思うが、ボクはこのシャンティイーがとても好きだね。

パリからそう遠くはないし、ここに寄った後、パリを経由してボルドーに行くと、船での移動距離と大して変わらないから、ボルドーに行くときは寄ると決めているんだ。」

山間谷間の道だが、馬車で移動出来ない地形じゃないので、と付

け加えて、エインは人差し指を立てた。

「それに、これから行くベルトワーズ邸が、このシャンティイ城を模して作られた建物だから、予習がてら、ね。」

なるほど、とヴィヴィアンが頷いた。

「ベルトワーズ伯爵は、旅好きなお人でね。東も北も南も行っちゃうような人だから、若い頃はあまり家には居付かなかったらしいんだけど。」

ボクが出会った頃には既に旅行から引退して、若い頃に集めた書物の整理を趣味に過ごされていたよ。」

「いつ頃、お知り合いに？」

「うん、五年以上前になるかな。」

フランスの地理には詳しいかな？」

「いいえ。」

でも、シャンゼリゼ通りは存じております。」

「そう。正しくそのシャンゼリゼ通りの歴史を調べていてね。メインテーマではなかったんだが…、知っているかな、シャンゼリゼ通りの名の由来を。」

「確か、ギリシャ神話から採られた、とか…。」

「そうそう。」

ギリシャ神話に記されている”有徳の人々のための死後の世界『エリュシオン』”を語源としているので、その理由が知りたくてね。当時の文献が残っていないか、フランスまで探しに来たんだ。

そこで、とある古書商人に、伯爵ならお持ちじゃないかと教えられて、ボルドーの邸まで押しかけたのが切欠。

時折ボクの講演を聞きに来てくれたりしていたらしくて、ボクの事をご存知だね。

快く部屋を貸してくれて、好きなだけ滞在してよいからと、許可を下さったんだよ。」

「研究については…？」

「未だ研究中。」

そう言つて、エインが笑つた。

「中々、目的の”場所”まで辿り着かないんだ。色々な方面から遠回りを強いられる研究でね。

まあ、そんな事は横に置いて、それ以降、二度ほど邸にお邪魔しているんだけど。

随分良くして下さつたので、死んでも感謝し足りないよ…。」

最後はほんの少し切なそうに、締め括つた。

そのまま窓の外に向いてしまったエインの横顔を見、ヴィヴィアンは『シャングリ・ラ』のメモを思い出し、なるほど、未だ研究中のものなのかと納得する。

「雲が濃くなつて来たな…。」

エインが独り言を言つた。「そろそろ降るかもな。」

ヴィヴィアンも、自分の横にある小窓から外を眺める。

街の隙間から空を臨むと、確かに先程よりも、雲が厚くなつてい
るようだった。

「大雨にはならないだろうけど…。」

そう言いながら、エインがクーペの前方にある、運転手と会話するため
に備えられた小窓を開けた。

「トンプスンさん、どうかな？」

「そうですね…」と通じている様子で、トンプスンが答える。

「そう激しくはならないでしょうけれど、夕方を過ぎた頃に少し降
るかも知れません。」

その頃には、アミアンに差し掛かるでしょうから、そこで雨脚の
様子を見てもよろしいかと。」

トンプスンが慎重に言つた。

「わかつた。アミアンで宿を取ろう。馬にも無理をさせては行けな
いからね。」

「申し訳ございません。」

「謝る事はありませんよ。トンプスンさんとウィリアムズさんも蜻
蛉還りの道だからお疲れでしょう。」

ボルドーまでゆっくり向かいましょう。」

「畏まりました。」

トンプスの返事を待って、エインは小窓を締めた。

「夜にアミアンまでは行けそうだ。」

宿を取って、早朝にアミアン大聖堂を覗こう。勿論、観た事ないだろう？」

「はい。」

ヴィヴィアンが頷くと、エインは何故か満足げに溜め息を吐いた。

夕方を過ぎ、一層空が暗くなった。

それを認識すると間もなく、雨もぱらついた。

馬車は、トンプスンとウィリアムズの二人によって、慎重に走り、アミアンを目指していた。

カレーの街を抜けた後は、ずっと田園風景が広がっていた。

「この辺は、ピカルディー地域圏と言って、さらにアミアン周辺の地域を除く、ランやボーヴェと言ったコミュニンを中心とした地域は、ヴァロワと呼ばれる。」

今から八〇〇年ほど前に西フランク王国が断絶して、パリ伯ユーグ・カペーを始めとするカペー朝によって成立したのが今のフランス王国と言われているが、その四〇〇年弱後にカペー朝シャルル四世が没した後、王座を継いだのがこの辺りを収めていたヴァロワ伯。今から四三〇年前の事だね。

そこから約二五〇年間のフランス王朝を、ヴァロワ朝と呼ぶんだ。

その前のカペー朝時代に建築されたのが、アミアンにある大聖堂だ。

正式名称を『アミアンのノートルダム大聖堂』と言って、『アミアンにおける我らが貴婦人（聖母マリア）の大聖堂』という意味ら

しい。

莊厳、優雅なゴシック形式の建築物で、非常に美しい。

ボクがシャンティイーの次に好きな建物なんだ。」

ペらペらと本を捲りながら、エインが喋った。

ヴィヴィアンは、ただ黙って聞いていた。

「アミアン自体は、カペー王朝時代の名残の残る、繊細華麗な建築物の並ぶ街だね。

ボクは見ているだけで楽しいが、派手な特産品がある街ではないので、建築物に興味がないと、つまらないかも知れないな。」

エインはそう続けて、ぽんと本を閉じた。

「最近、イギリスとフランスの間にちょっとした亀裂が生じていてね。

あまり大っぴらに行き来出来ないんだが、貿易だけは盛んだから、それに便乗して海を渡るしかないのが、辛いところだね。」

「まあ、すぐに納まるけどね。」と小さく呟いて、エインが窓の外を見た。次いで、ポケットに手を入れ、懐中時計を取り出す。

「大分いい時間だね。

そろそろアミアンの明かりくらいは見えると思うんだが……。」

そう言いながら、ヴィヴィアンを手招きする。

こちらの窓を覗け、という事だと理解したヴィヴィアンは、エインに少し近付いて座り直し、エインの肩越しに窓の外を見やる。

田畑の中に点在する酪農設備と、切り拓いたときに残ったのか残したのか、不可思議に深い小さな森が交互に流れる風景の向こうで、ぼんやりと白い光が見えた。

「ほほう、こんなところから見えるんだね。

見えるかな？ あれがアミアンの街の灯りだよ。」

すっかり夕闇と強めの雨雲に包まれた世界の中に、ぽつかりと浮かび上がるように光る街灯りは、とても幻想的だった。

街、とまだ判別出来る訳ではないが、この辺りで迷ったならば、間違いないあの光を目指して歩いて行くだろうと思う。

「トンプスンさん、もうすぐだね？」

エインが少し大きな声を出すと、トンプスンも同じ程の声で応えた。

「はい。お見えになりますか、アミアンの灯りが？」

「うん、見える。」

「あと、小一時間というところですよ。もう少々ご辛抱を。」

この先、道も少し悪くなりますので…。」

トンプスンがそう言い終わるなり、馬車がかたりと揺れた。

「この辺りの道は、この辺の住民が時々均してくれるんだけど、土質が柔らかいので、雨に弱くてね。」

この感じだと、ここは結構長く降ってたんだろうね。」

エインが楽しそうに言った。どうやら、馬車の揺れを楽しんでいるようだ。

ヴィヴィアンは、窓を覗き込むのをやめて体勢を元に戻し、揺れに備えて座席の縁を強く持った。

「雨のアミアンも美しいんだよ…。」

相変わらず外を眺めながら、エインが呟いた。

それ以降は無言で、到着を待った。

馬車の揺れも慣れてしまつと大した事はなく、窓からアミアンの街を認められる程になった頃、興味本位で窓から道を見下ろしてみると、轍の跡が予想以上に深くて驚いた。

しかし、再び顔を上げた頃には、馬車の揺れも治まった。

馬車の速度も幾らか緩やかになり、すぐにゴシック形式の建物の谷間が見えた。

道は舗装され、馬車の往来が多い故か、道幅もうんと広がった。

気付けば道を走る馬車も増え、店の軒先で雨乞いをする人々が目に入った。

「大分、強くなって来ましたね。」

そう言つてエインを振り返ると、エインは窓辺に頬杖をついて、街並みを楽しんでいた。

プロフェッサー

「教授。」

トンプスンが呼びかけた。

「ん？」

「宿はどこを？」

「ああ、そうか。」

この道を、大聖堂の二区画前辺りまで行くと、少し大きめの宿があるんだ。

看板が下がってるからすぐ解ると思う。

そこ、空いてると思うよ。」

妙な勘が働くのか、実際その通りで、道すがらの宿も混んでいる様子だったというのに、この宿は大聖堂に近いという立地にありながら、宿泊客は僅かだった。

だからエインが、

「部屋、ボクとヴィヴィで別けても大丈夫なくらい空いてると思うけど、どうする？」

と聞きながら店主の顔を見ても、店主はにこにこ笑いながら一つ頷くだけで、相部屋を強いては来なかった。

「私は…、どちらでも…。」

後で振り返れば、別の部屋でと頼むのが一般的だったのだろうが、ヴィヴィアンが呟くなり、「じゃあ、二部屋。こちらの男性二人とボクら二人」と、エインがさっさと伝えたと、上客と思われたのか三階の大きな部屋を宛がわれ、大袈裟な鍵が二本手渡された。

その鍵を一本、トンプスンに渡すと、エインが自分の皮靴とヴィヴィアンのバッグに手を伸ばした。

「ああ、教授、お運びします。」

トンプスンとウィリアムズが慌てると、「ああ、いいいいよ」と、エインがにやにやしながら言った。

「お屋敷の外では、気楽にして欲しいよ。」

そう言って、エインは階段を上がって行ってしまった。

プロフェッサー 9

三階へ上ると、階段を中心に廊下が左右へ伸びており、右手が大聖堂へ続く大通りを臨む部屋、左手が路地に面した部屋になっていた。

トンプスンとウィリアムズがどうしても路地側の部屋がいいと言ったので、エインとヴィヴィアンが大聖堂側の部屋を使う事になった。

部屋には手入れの行き届いた、実に使い心地の良さそうな調度品が並び、客を出迎えた。

既に蝋燭と、オイルランプ、暖炉に火が入られ、部屋は明るかった。雨のせいで少し肌寒かったので、暖炉の火は有り難かった。

「良い部屋だね。」

そう言って、エインがソファの脇にカバンを置いた。

そして真っ直ぐ窓に向かい、少しだけ窓を開ける。

「来て御覧。」

エインがヴィヴィアンを手招きした。

ヴィヴィアンが歩み寄ると、エインは窓の脇に少しだけ身を避けて、窓の外を指さした。

「あれが、アミアンのノートルダム大聖堂。」

エインの指先の向こうに、雨模様の夜の中、沢山のランプとガス灯の灯りが溢れる大きな聖堂が見えた。

南北に二本の塔を持ち、遠目にも解る正面のポルタイユを抱くその姿は圧巻だった。

「この分だと、早朝までは降るな。」

朝、雨上がりの大聖堂は、それだけで一つの作品のようだよ。

ノートルダム大聖堂はアミアンだけでなく、フランスやベルギー、ハプスブルグ家領の南ネーデルランドなどの各地に沢山あって、大抵は一一〇〇年から一二〇〇年後半までには完成している。どれも

古い聖堂ばかりで、このアミアン大聖堂も一二六六年に完成したと言われている。

アミアンに限って特徴的な事を上げるなら、一二〇二年から一二〇四年までの間行われた、当時のローマ教皇インノケンティウス三世の率いる第四十字軍が、コンスタンティノポリス攻略時に齎したと言われる洗礼者ヨハネの首があると言われている。

このヨハネの母は、イエスの母マリアの親戚とも言われているけど、まあそんな古い事は、よく解らないけどね。

外観のみならず、堂内也非常に洗礼された造りになっている。

一二六〇年頃に建物が焼けてね、建築様式に関する資料は焼失してしまった。

でも、資料なんてなくなつて、あの建物が残っているだけで、十分だね。」

一頻り語り尽くして、エインは大聖堂を眺めた。

ヴィヴィアンも、エインに倣って大聖堂を眺める。

確かに、闇の中にあってもその荘厳さをちつとも失わない、実に美しい建物だと思った。

「歴史なんて書き留めたって、そのうち消えてなくなってしまうんだから……。」

暫し見惚れたあと、エインはそう呟いて、ベッドに身を投げ、いつ手にしたのか本を読み始めてしまった。

ヴィヴィアンは横目でそれを見た後、静かに窓を閉め、夜風で冷えてしまった体を温めに、暖炉の前のソファに腰かけた。

エインに解らないように、ふう、と小さく溜息を吐く。それと同じに、エインがぺらりと本を捲った。

「疲れたかい？」

エインが聞いた。

「いえ。」

ヴィヴィアンが短く答える。

「そう。」

そう言って、エインはまた本を捲った。

そこで、ドアがトントン、と二度ノックされた。

ヴィヴィアンがすぐに腰を上げて、ドアを開けると、店主がにっこり笑って立っていた。

「お夕食はどうなさいますか？　すぐにご用意出来ますが。」

「ああ、そうか。」

エインががばつと起き上った。

「食事の事を何も心配していなかった。

すぐ用意して下さい。」

エインが笑って頼むと、店主は軽く会釈をして引き上げて行った。
「ヴィヴィ。」

あの二人に、食事の支度をお願いしたから、一階に集まろうと伝えてくれ。」

「はい。」

エインに言われ、ヴィヴィアンも部屋から出て行った。が、すぐに戻って来た。

「解りました、との事です。」

ヴィヴィアンが報告すると、エインがうんうんと頷いた。

「よしよし。じゃあ先に一階に下りていよう。」

応接スペースがあつたね。」

エインは言いながらベッドを下り、すたすたと部屋を出た。ヴィヴィアンも続く。

軽快に階段を下り、店主のいたカウンター脇にある応接スペースのソファに、ずぼつと腰を掛けると、程無くして店主と、トンプスンとウィリアムズが同時に現れた。

「お食事の用意が出来ました。」

店主が言つと、エインが勢いよく立ち上がつて、「食事にしよう」と言いながら店主に続いてダイニングルームへと入って行った。

用意されたのは豪華とは言い難い食事ではあつたが、急な宿泊で、昼も食事をしていなかった状況としては、食えるだけ有り難かつた。

「お気遣い、感謝します。」

と、エインが、ワインを注いで回る店主に言った。

「いえいえ。」

今日は今朝からこんな空模様ですから、宿泊客も巡礼者も少なく
て、大した支度もしておりませんでした。

このような質素な食事で申し訳ございません。」

にこやかながらも詫びる店主に、エインは笑った。

「さ、頂こう。」

エインの合図で食事が始まった。

食事中は、各々空腹を満たすため、無言で食事を口に運んだ。時
折、天気や道の具合が気になる男三人が言葉を交わすが、特に盛り
上がる話題でもなく、すぐに終わってしまう。

食べる事に集中していたのと、食事の量もそれほど多くなかった
せいもあり、食事はすぐに終わった。

長旅の疲れもあるからと、馬の様子を見て早めに寝ると言ったト
ンプスンとウィリアムズとダイニングルームで別れ、エインとヴィ
ヴィアンは自室に戻った。

「ヴィヴィ。」

早めに寝るといい。明日は早いし、それからはずっと馬車だから
ね。」

エインに言われ、ヴィヴィアンも「はい」と素直に従う。

そしてブーツを脱いでベッドに横になると、あっという間に眠り
に堕ちた。

顔には出さないが、相当疲れていたのだろう。ヴィヴィアンの様
子に、エインが小さく笑った。

ヴィヴィアンが寝息を立て始めたのを見届けて、エインは一人、
大きく鼻から息を吐いた。

そして、ベッドの上に胡坐を掻いたまま、窓の外を見る。

「明日は、ちょっと忙しいぞ……。」

独りごとを言い、また溜息を吐くと、眼鏡を外して、髪を掻き上

げた。

突然眠りから醒めて、目を開けると、エインが窓辺で、日の出前の朝靄に溶けかかるアミアンの大聖堂を眺めているのが見えた。

もそもぞと起き上ると、エインが振り返った。

「おはよう。もう少しゆっくりするかい？」

エインは既に身支度を終えているようで、小奇麗な身なりをしていた。

「いえ。支度します。」

「うん。」

ヴィヴィアンが言うと、エインは「下で待ってるから」と言っ、部屋を出た。

ヴィヴィアンはエインを見送ってからそっとベッドから出、少し皺の寄ったドレスを丁寧に伸ばした。

少しはめかし込みたかったが、エインもシャツを変えたただけの出で立ちだったので、拘らない事にした。

髪を整え、部屋に用意された水差しから陶器の大きな器に水を入れ、顔を丁寧に洗ったあと、脇に添えられた顔拭き用の柔らかな布で顔の水を拭き取り、少し曇った鏡で顔を覗き込む。

いつもと変わらない顔色だ。疲れはみえない。

そんなによく寝たのだろうかと思いつつ、ヴィヴィアンは部屋を出た。

一階へ降りると、エインは応接スペースで鼻歌を歌っていた。

エインは、ヴィヴィアンの足音を聞くなり、すっと立ち上がった、「さ。さっそく行こう。」

と言うが早いか外へ出て行ってしまったので、ヴィヴィアンは速足で追いかけた。

昨夜エインが言った通り、ついさっきまで雨は降っていたらしく、

地面が濡れていたが、水はけがいいのか、水溜りはなかった。

雨に洗われたせいで空気は澄み、やや寒い。

朝早いせいか、人気はなく、しんと静まり返っている中、エインとヴィヴィアンの足音だけが聞こえる。

靄のアミアンは、昨夜の印象とは打って変わり、穏やかで厳かな雰囲気の街だった。

ヴィヴィアンがきよろきよろと街を見まわしていると、エインが振り返りもせずに話した。

「この街は、織物産業が盛んで、特産品でこそないが、質の良い織物が手に入るので、海外からの貿易商も出入りも多い。

部屋の顔拭きを使ったかい？」

「はい。薄手なのに、柔らかな布でした。イギリスではあまり見かけません。」

「うん。」

ああいった、織物といっても細い糸を使って紡ぐ薄手の布の生産にかけては、周辺の地域より少しだけ技術力が高くてね。

街の四分の一が、織物産業にかかわっている。」

言いながら、エインが歩みを止めた。

小さく溜息を吐いて、背筋を伸ばす。

街に目を向けていたヴィヴィアンが、エインの少し後ろで立ち止まって、エインの視線をなぞると、目の前に大聖堂が聳え立っていた。

宿のある二区画目から見ても相当に大きな建物だと思ったが、やはり間近で見ると迫力は段違いだった。

高々と造られたファサードには、聖書の”最期の晩餐”のポルタイユが施され、さらにその周りに聖人たちのポルタイユが並ぶ様は、イエスを守護しているようにも見える。

圧倒され見上げていると、不意に扉が開いた。

「おはようございます。ご参拝でございますか？」

老僧が扉から顔を出し、エインとヴィヴィアンに微笑みかけてい

た。

「はい。よろしいですか？」

「もちろん。」

そう言つて、老僧が扉を開けた。

エインが扉の中へ入つて行く。ヴィヴィアンもエインに続いて入った。

堂内はほんの少しのガス灯が灯るだけだったが、高い天井付近にある採光用の高窓や、サンクチュアリのあるシュヴェに添えつけられたステンドグラスから外界の光が毀れ、思ったほど暗くはなかった。

床には正鉤十字が無数に描かれ、柱や壁のレリーフに負けず芸術的だった。

どこへ行つてしまつたのか、老僧の姿は既になく、目の前のエインは満足げに、身廊のヴォールトを見上げている。

「ここの身廊はフランス内の聖堂の中では最も高い。」

ここまで天井が高いと、建物の中という感覚には程遠いな。」

空ほどに高い身廊の天井を見上げ、エインの話に耳を傾ける。

しかしヴィヴィアンは、エインの声に混じつて、何かこつりという物音を聞いた。

「……」

エインの話の腰を折るのも憚られ、ヴィヴィアンは無言で物音の根源を探した。

物音は広く静かな堂内のあちこちの壁にぶつかつて反響し、四方八方から聞こえる。

説教台は基より、礼拝堂にすら人がいないこの堂内で、何かが一定のリズムで物音を立てている。

エインは聞こえないのか、ずっとゴシック様式の解説をしているが、やがて、それと解るほどはつきり、こつりという物音が響いた。ヴィヴィアンがその方向を察するや否や、何か黒い影がエイン目掛けて降つて来た。

ヴィヴィアンがエインの前に即座に立ち、左腕を構え影を食い止める。

ヴィヴィアンの俊敏な動きにやや遅れ、ドレスが大きく揺れた。影が体に纏う黒い大きな布も、飛び降りる動きと食い止められた反動で、靡いた。

影とヴィヴィアンの視線が混じる。

ヴィヴィアンは影を睨み、影もヴィヴィアンを睨んでいた。

しかし、次の一瞬で影はヴィヴィアンを踏み台に側廊へと飛び跳ね、ファサードへと走って行ってしまった。

ヴィヴィアンが追おうとすると、

「ヴィヴィ。」

と、エインが止めた。

「いいよ。放っておきなさい。」

エインの発言に、ヴィヴィアンが驚く。

「しかし…。」

「いいよ。有り難う。ヴィヴィのおかげで助かった。

今日はもう襲って来ないよ。」

エインが悠長に言うので、ヴィヴィアンが眉を顰めた。

「どういつ…事でしようか…?」

ヴィヴィアンが訊ねるが、

「うん? まあ、そのうち解るよ。」

とエインは一言言っ、かつかつと足音を立てて内陣へ歩いて行ってしまった。

残されたヴィヴィアンは、ファサードを振り返る。

何もなかったかのように堂内は静まり返り、扉もきちんと閉められていた。

一体、何者…?

扉を睨みつけるヴィヴィアンを、後ろでエインが呼んだ。

「ヴィヴィ。」

おいで。ガイドをしてあげよう。」

楽しそつな声に呼ばれ、ヴィヴィアンは仕方なく溜息を吐いて、
エインに駆け寄った。

ぺらぺらと、アミアンの大聖堂に関するエインの解説は留まるどころを知らなかった。

建築様式に始まり、フランス、カトリック派の歴史、建築家、彫刻家の生い立ちからその生涯まで。

ヴィヴィアンは黙って聞いていたが、正直少しウンザリもしていたし、よくもここまで止め処なく言葉を紡ぎ出す事が出来る、と感心もしていた。が、それもいい加減飽きてくる。

そこへ、天の助けとも言うべき、トンプスンがやって来た。

「やあ、おはよう。」

悠長にエインが言うつと、トンプスンは頭を下げた。

「おはようございます、プロフェッサー教授。」

お取り込み中申し訳ないのですが、空が急に曇って参りましたので…。」

そう言つて、トンプスンが申し訳なさそうに眉を顰めた。

「おや、やっぱり降ってきそう？」

「はい。」

シャンティイーに着く頃には、随分な土砂振りになっているかも知れません。

西の空が真つ暗ですから…。

本日中にパリまで行きませんと、明後日の朝にボルドーまで辿り着けません。

お嬢様も心配なさいますでしょうし、そろそろ…。」

「そうだね。」

アンを心配させてはいけないな。

急いで出発しましょう。」

エインが腰に手をあて言つと、トンプスンが再度頭を下げた。今朝の道のりを逆に辿り、宿へ向かう。

店先では、店主が一行の帰りを待っていた。

既に馬車は用意され、荷物も運びだされていた。脇にはウィリアムズの姿もある。

「ご出発ですか。」

「はい。」

お世話になりました。」

挨拶しながら、エインがスラックスのポケットから紙を取り出し、店主に渡した。

店主はその紙を見るなり、目を大きく見開いて首を振った。

反応を見るに、約束手形のようなだった。書かれている金額は、店主の予想を遥かに超えるものだったのだろう。

「いけません、教授。」

このような……。」

言いながら慌てて紙を返そうとする店主を、エインが制した。

「店主。」

受け取ってもらわないと、僕の名が廃ります。」

「……。」

にこにこ笑いながらそう言われ、店主は返す言葉が見付からな
いらしく、少し俯き、そのまま深く頭を下げた。

そんな店主に、エインが手を差し出した。

店主も、姿勢を正して手を握り返す。

「また寄らせて頂きますよ。」

「いつでもお待ちしております、教授。」

そう言い、挨拶を済ませた二人が手を離れたところで、エインが
ヴィヴィアンに振り向いた。

「さあ、いこうか、ヴィヴィ。」

馬車の扉前に立ち、ヴィヴィアンに手を差し出す。エインの手を
借りて馬車に乗り込むと、次いでエインも乗り込み、扉を閉めた。
そして小窓を開け、店主に手を振ると、馬車はそそくさと走り始
めた。

再び馬車に揺られ、目指すはパリだ。

「雨になるなら、シャンティイーには寄れないな…。」

申し訳ないね、ヴィヴィ。」

謝るエインの方が残念そうで、ヴィヴィアンは一瞬面白そうにその様子を眺め、そして首を振った。

「教授と一緒に、また来る機会もあるかと。」

表情一つ変えず、気を遣うヴィヴィアンに、エインがふと満足そうに笑った。

「そうと決まれば、パリまで直行しよう。」

シャンティイーへ寄らなければ、道も少し変わるからね。」

そう言って、前方の小窓を開ける。

「トンプスンさん、今日はシャンティイーへは寄らず、パリへ直行して下さい。」

エインの言葉に、トンプスンが振り返った。

「畏まりました。」

昨日の雨で、まだ若干道がぬかるんでおりますから、助かります。

「

エインは、トンプスンに一つ頷いて、小窓を閉めると、さつさと本を開いてしまった。

そこから暫くは、馬車の車輪の音を聞きながら、各自無言で馬車に揺られた。

ヴィヴィアンは、時折小窓を開け、空や風景を眺めた。

風景はどことなくスコットランドに似ているのに、風の匂いが全く違う。

厳密な感覚ではなく、至極曖昧なものなのに、風の匂いの印象が、五感の総てに影響しているような気になる。

馬車の音すら違って聞こえるのは、果たして土が違うからなのか。思いながらも、口は噤んだまま、時間だけが経っていく。

無言でいる事は苦にならない。

エインも、一度本に没頭してしまえば、周りに何もないくらいに

内に籠ってしまふ。

しかし、硬い椅子に長時間腰掛け、小刻みに馬車に揺られるのは、少々躰に堪える。ヴィヴィアンは、馬車の揺れに合わせて、小さく節々を伸ばしたり、折り曲げたりして時間を過ごし、その合間に小窓を覗くという事を繰り返した。

幾度となく窓の外の空を眺めるが、一向に雲は晴れず、どんよりと曇っていた。

「降らないね。」

退屈していると思われたのか、エインに話しかけられた。

「降りませんね。」

雲は大分、重そうなのですが。」

「シャンティイーは、もうそろそろの分かれ道を左なんだが…。」
言いながら、エインが懐中時計を取り出した。

エインの傍らから時計を除くと、時間は思いの外経っていて、正午をすっかり過ぎていた。

その割りに、外は暗い。やはり雲のせいなのか。

「やっぱり道が悪いなあ。」

エインがそう言っていると、馬車が大きく揺れた。

「この辺りも、カレーからアミアンまでの道に似て、水を溜め込んでるんだよ。」

森が近いし、水捌けは良さそうなんだけどね。

この分だと、シャンティイー付近はまだぐちゃぐちゃだろうな。」

シャンティイーへ行けない事が、余程名残惜しいのだろう。未だ言っている。

「でも、シャンティイーへの分かれ道を過ぎれば、パリまではすぐだよ。」

この分だと夕方には着きそうだね。」

エインはそう言つてにこりと笑い、懐中時計を仕舞った。

程なくして道は左右に別れ、馬車はパリへの右の道を進む。そして、エインの言うとおり、日暮れ前にパリに着いた。

シャンティイーを含むモンモランシーの森を抜けると、パリ郊外が見えた。

郊外故、ところどころに未だ田畑の面影の残る風景ながら、緑と石造りの建物が豪華な雰囲気醸す、成熟された印象の街だ。

「綺麗な街ですね。」

ヴィヴィアンが言うと、「でしょ？」とエインが言った。

「このまま真っ直ぐ行くと、パリ中心街。」

パリはセーヌ川を中心線に、こちらとあちらで円形状に広がって出来上がっている。

郊外にはヴェルサイユ宮殿もあるが、あの辺りは警備が厳しくて近付けないのが勿体無いね。

街自体は極めて平和なんだが、国民と政府との関係がよくないんだ。最近、少し暴動も増えて来たしね。

パリで長居はしたくないので、パリを抜けて、少し行ったところにあるコミュニケーションの宿で休もうと思う。」

そう言って、エインが前方の小窓を開けた。

「トンプスンさん、オルレアンのメルヴェイユさんの宿はご存知ですか？」

エインに問われて、トンプスンが振り返った。

「はい。存じ上げております。」

「そこで今夜は休みましょう。」

あの辺りは自警団がしっかりしているから安全だし、パリよりは静かだ。」

「畏まりました。」

そう言って頷くトンプスンが鞭を一振りすると、鞭の音で馬が頭を上げ、歩速を上げた。

「このペースで行けば、明後日の夕方には、ボルドーに着くだろう。オルレアンは、紀元前五二年にローマ帝国によって一度滅ばされたんだが、その後ローマ皇帝のアウレリアヌスによって再建されて、その名が付けられたんだよ。」

その後、フランスが北アメリカを植民地にして、中心地にルイ十五世の摂政だったオルレアン公フィリップ二世に因んで、ヌーヴェル・オルレアンなんて街を作ったりしているが。

白い壁の、背の高い建物と、濃紺の屋根の街が綺麗な街だよ。

サント＝クロワ・ドルレアン大聖堂という大きな聖堂もあるが、天気も好くないし、アミアンの時のように寄れるかは解らないな。見てみるかい？」

ぺらぺらと喋った後、エインがヴィヴィアンを見た。

「どちらでも構いませんが、せつかくの機会ですから、時間があれば是非。」

問うてはいるが、本音は『観に行こう』だと悟ったヴィヴィアンがこのように返すと、エインは満足げに頷いて、「時間があるといねえ」と言いながら、椅子に深々と座り直した。

パリに入って馬車の速度を少しは落としたものの、抜けた後は再びスピードを上げ、何とか日が変わらないうちにオルレアンに入ることが出来た。オルレアンに入る直前に豪雨に見舞われたが、ものの数分で止んでしまう、一時的なものだった。

エインの言うメルヴェイユの宿は、オルレアンの中心から少しだけ離れた場所にあり、街の喧騒を感じない静かな宿だという事だった。

実際宿に着いて辺りを見回すが、木々の間に家が並び、遠くに街の灯りが煌々と輝いているのが見えるだけの、何もない場所だった。夜中の訪問だというのに、店主のメルヴェイユは快く一行を迎え入れ、温かい紅茶まで用意してくれた。

紅茶には、疲労によいと言って、ボルドー産のワインをジャム代わりに入れてあった。

「メルヴェイユさんの宿は、パリを訪れるたびにお邪魔するんだよ。この紅茶は美味しいよ。使っているワインも絞って日の浅いものだから、アルコール度もそんなに高くないし、糖度は砂糖代わりになる。」

甘くて温かいから、疲れている体にはとてもよい。
ぐっすり眠れますよ。」

エインが言うと、トンプスンがウィリアムズを見てにこにここと笑った。

「ローランは知らないだろうが、旦那様は生前、こちらによくお邪魔していたんだよ。」

お屋敷に教授がいらした時も、オルレアンに立ち寄った際、こちらのお世話になったという話を聞いて、『メルヴェイユが宿泊を許したなら、問題ない。』と仰って、それで教授に部屋を。」

「そうなんですか。」

「そうなんだ。」

ウィリアムズが言うと、エインが頷いた。

「ウィリアムズさんがまだ、あの屋敷に来る前の話だけだね。」

すると、メルヴェイユが無言のまま奥のキッチンへ向かい、すぐに戻って来た。手には、真っ白な丸い砂糖菓子が盛られた小皿が乗っている。

「ベルトワーズの旦那様は、これがひどくお気に入りでした。

みなさんもいかがですか？

今からでは夜食もご用意出来ませんが、甘いものは疲れを癒し、脳の働きを活性化させると言いますから。」

そう言って、砂糖菓子の皿を一行の囲むテーブルの上に置いた。

「ボクもこれ好きなの。」

そう言って、エインが一つ摘んだ。余りに美味しそうに食べるので、トンプスンとウィリアムズも、そそられて手を出す。若干体に疲れを感じていたヴィヴィアンも、最後に砂糖菓子を摘んだ。

口に入れると、じんわりと溶けて、粒も残らずなくなった。

後味は軽く、仄かにミントのような香りが鼻を伝って行った。

各々心地好く味わっている中で、ヴィヴィアンはただ一人、その味に古い記憶を思い出し、メルヴェイユを見た。

メルヴェイユはにこにこ笑っていたが、ヴィヴィアンと視線が合うと、周りに解らないように口に指先を当てた。

ヴィヴィアンが思い出している事を悟り、『言うな』という意味表示だったが、それを理解するなり、ヴィヴィアンは焦った。

そんなやり取りに気付きもしない男三人は、紅茶のせいか、疲れのせいか、うとうととし始めたようだった。

苦笑するメルヴェイユに案内され、各自部屋へと散る。

今回は基本個人部屋の宿であった事もあり、エインとヴィヴィアンは別の部屋になった。

エディンバラのエインの屋敷から出て、そういえば独りになる事はなかったように思う。

オイルランプの灯る部屋は、馬車よりは広いが、エインに宛がわれた部屋よりは狭い。

滞在数分という状況だったのに、エインの屋敷が恋しくなった。そして、ずっと一緒だからか、独りになって、エインも恋しくなった。

読書に耽つていない間の、あのお喋りにはウンザリもするが、ないとないで耳が寂しい。

ベッドに横になると、壁の向こうからコトリという音が聞こえた。隣はエインだ。何かしているのだろうか。

耳を澄ますために、目を閉じる。

窓の外からは雨音がする。弱い、まだ降っているのだろう。

ふと、先程の砂糖菓子味が蘇った。

あの味。あの味が、ここにある訳がない…。

それに、店主のあの仕草は、何を意味すると言っのか…。

「あの人…。

何を知っているというの…。」

呟いて、目を開けたとき、ドアの向こうで廊下を歩く足音が聞こえた。

ヴィヴィアンは起き上がって、足音を消してドアに歩み寄った。

ドアに耳を当てると、エインの声が聞こえた。

「…大丈夫だよ。心配ないから。」

「エイン。あの人は心配だ。

よくない。」

もう一つ声がした。声は、メルヴェイユのようだ。

「エディットも心配性だなあ。大丈夫だよ。

彼女は心配ない。」

「エイン…。

あの人はよくない。あの人は軍の…。」

メルヴェイユが言いかけて、止めた。遠くから、ドアが開く音が聞こえたためだ。

次いで、とても小さく、

「どうなさいましたか、教授……？」
と、トンプスの声がした。

トンプスの部屋は廊下の突き当たりで、エインとヴィヴィアンの部屋からは随分離れていた。声が小さいのも、距離のせいだろう。
「ああ、済まない、トンプスさん。煩かったかい？」

お疲れのところ、ごめんなさい。

こちらは大丈夫ですよ。」

「そうですか。ならばよいのですが。

それでは、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

「おやすみなさいませ。」

エインとメルヴェイユの声に見送られ、トンプスがドアを閉めたようだった。

「……エイン。」

トンプスのドアが閉まった後、暫く無言になり、しかしメルヴェイユが繰り返した。

「大丈夫だよ。ちゃんと解ってる。心配ない。」

声を殺しながらも、おどける様子を含ませて、エインが答えた。

メルヴェイユは諦めたようで、「解ったよ」と言うと、階段を下りて行ったようだった。

エインは暫く佇んでいるようだったが、やがて小さく溜め息を吐いて、部屋へと戻って行った。

そして、壁の向こうからベッドに勢いよく倒れ込む音がし、すぐに静かになった。

「……。」

身動きせず、息をも殺していたヴィヴィアンは、重たい溜め息を吐いてドアから離れ、ベッドに腰掛けた。

「何を……知っているの……。」

呟いて、沈黙をする。鎮まり返る部屋に、雨音が響く。

いつの間にか、雨は強くなっていた。

トントンという、ドアを叩く音で目が醒めた。

「ヴィヴィアン、起きてるかい？」

ドアの向こうで、エインの声が聞こえた。

「はい。」

起き掛けのしゃがれた声で答え、目元だけ整え、ドアを開けると、エインが立っていた。

「申し訳ないね。」

昨日遅かったのでゆっくりさせてあげたいんだが、雨が止まない
ので、早めに出発したいんだ。」

「解りました。」

眉を下げて言うエインに頷いて、ヴィヴィアンが答えると、エインも頷き返して「下にいるから」と階段を下りていった。

雨に濡れて、大して体も拭かぬまま眠り込んでしまった昨夜だったが、体調は特に変わりなかった。

念のためと、少し気持ちが悪かったので、洗顔用の布を濡らし、首から胸回りにかけてを手早く拭いた。

一頻りの身支度を済ませ、足早に階段を下ると、店主とエインが手形のやり取りをしていた。

「済まないね、ヴィヴィ。」

「いえ。」

そう答え、店主を見る。

昨夜の事が気にかかり、店主の様子を伺うが、出会った時と変わらぬ様子でヴィヴィアンににこりと笑った。

「またお待ちしております。」

「……お世話になりました。」

妙な緊張感を覚えて、ヴィヴィアンは慎重に返事をした。カバン

を持つ手が、じんわりと汗ばんだ。

そんなヴィヴィアンの様子を悟ったのか、エインが「早くしよう」と声をかけ、馬車へ向かった。早く立ち去りたかったヴィヴィアンも、エインに続く。

外は霧雨が降っていた。風が吹くと、雨粒が体に纏わり付く。

「また来ます。メルヴェイユさん。」

馬車に乗り込み、小窓から手を振り、エインが言うつ、メルヴェイユが無言で頷いた。

手短な挨拶を終え、一向は早々にオルレアンを出発した。ゆつくりと街を見る事が出来ないため、小窓を開けて外を臨む。暫く走ると、オルレアンの街を二分するロワール川を渡る直前に、左手遠方に大きな建物が見えた。

「あれがオルレアン大聖堂だよ。」

サント＝クロワ・ドルレアン大聖堂。オルレアンの聖十字架大聖堂という。

一五〇年ほど前に、一度壊れてしまったのを再建したんだ。

ジョーン・オブ・アークは知っているかな？」

ヴィヴィアンの後ろから小窓を眺めていたエインが、問うた。

「イングランドで”魔女”と異端視されているジャンヌ・ダルクの事ですな？」

「うん。」

一四二九年に、ここオルレアンを、当時占領していたイングランド軍から解放し、長らく不在だったフランス国王の座に、シャルル七世を即位させるためフランスに貢献したんだ。

だがその半年後、未だイングランド支配下にあったパリ奪還を主張した事でブルゴーニュ軍に捕らえられてしまう。

その時、イングランド軍からの街開放という恩恵を受けたこの市民たちが、身代金を支払っているが、結局イングランド軍に身柄を預けられ、そのまま異端審問裁判にかけられてしまう。

シャルル七世即位のきっかけとなった聖女カトリーヌやマルグリ

ツト、大天使ミカエルの声が聞こえたという主張や、男装を好んでいた事が理由だが、実際は、オルレアンやその周域を奪還されたブルゴーニュ公やイングランド軍の腹いせと、用無し故に処理に困ったシャルル七世の差し金に因るものだったんだらうと、僕は思っているけど。

実際、オルレアンから保釈のために支払われた身代金は、シャルル七世に没収されているしね。彼女は、宮廷内では用無しと疎まれていたらしい。

彼女は、判決直前に自らを異端と認め、カトリックへ改宗を誓ったが、その後すぐに監禁されていた塔内で、禁じられた男装をして、結局火刑になった。

それでもオルレアンの人々は、彼女を讃え、大聖堂までの道は、ジャンヌ・ダルク通りと名付けられた。」

エインが話し終えたとき、目の前に、今の道に垂直に交わる大きな通りが広がった。

「この道ですね。」

ヴィヴィアンはそう言っ、道の向こうの大聖堂を見つめる。

遠く離れていてなお、道の先の大聖堂は大きく高く聳える。

主要施設は石造りやレンガ造りではあるが、主立って木造りの民家の並ぶ街並みの中では、大聖堂はジャンヌ・ダルク同様、少々異端に見えた。

「そう。」

彼女は、フランス軍やオルレアンのように、関わりを持った事のある都市の民衆には人気が高いが、フランス全土でみるとそんなに知られた存在ではない。

逆に、イングランドでは未だに、彼女は”魔女”であり、”異端”であり、嫌われ者だね。」

ヴィヴィアンの後ろから大聖堂を覗いていたエインが、少し溜め息を吐いた。

「まあそんな事があつた以降は、元々古代から盛んだった商業を中

心に、この街は復興を遂げて発展の一途を辿っている。

昨夜は雨も降っていたし、暗かったので見えなかっただろうけど、この周りの農業も、ルイー一世のお蔭で活性化した。特に料理の香料や衣類染めに使う染料サフランの栽培が盛んで、この街の発展に大いに貢献している。

さらに、これから渡るジョルジュ橋は、通行料が必要だね。この金も、この街の貴重な収入源だ。

日を追う毎にどんどん潤う。街並みの印象とは対照的に、この街は非常に裕福なんだよ。

ロワール渓谷のほうには、この辺りを旅する富裕層のための施設や住居も充実している。

オルレアン大学という、今から五〇〇年も前からある大学があるんだけど、ここに通う生徒も富裕層の子供が多い。

歴代の生徒の中には、後にフランス国王に即位する者までいる。

貧富の差は然程もないが、裕福な中にいて尚生い立ちの格差が障害になるケースもある、厄介な状況だけだね。」

エインが話を一区切りすると、川の中洲前で馬車が止まった。

道は棒によって一時的に塞がれ、何やら人が寄って来た。それを見たエインが馬車を降りる。

そして、ヴィヴィアンには聞き慣れない言葉で話し始め、暫くして、エインがポケットに手を入れ、硬貨を幾らか渡した。

どうやら、先程のエインの話に出てきた、橋の通行料を支払ったようだった。

戻ってきたエインが馬車に乗り込むと、道を塞いだ棒が取り払われ、先へ行く事を許された。

ジョルジュ橋の架かるロワール川はとても大きく、中州から橋の端まで走るにも、十数分を要した。

小窓から振り返ると、川と街の挟間には高い防壁が建てられていた。

「大きいから、川が氾濫するんだ。」

そのための堤防だよ。戦争中は、防御壁としても使えたが。」

エインの解説に、ヴィヴィアンが頷いた。

「さて、橋を渡ると街を抜けるにそう時間はかからない。

ここからは外を見ても田園風景。山も谷も徐々に少なくなつて、道も平坦になる。若干下るけどね。」

言いながら、エインは前方の小窓を明け、トンプスンを呼んだ。

「ロワール川に沿つてトゥールを目指してください。

早く出たけれど、雨もあるし、川沿いだから何があるか解らない。夕方を過ぎた頃にトゥールに着ければ予定通りかな。

そんな感じをお願いします。」

「畏まりました。

この辺りは道の整備もきちんとしてあるので、大丈夫だと思ひますよ。」

「それはよかった。お願いします。」

そう言つてトンプスンに道を任せ、エインは椅子に座り直して、さつさと読書を始めてしまった。

ヴィヴィアンはそんなエインに、小さく溜め息を吐いた。

日に日に会話も少なくなる。語る事も少ないし、街の周辺以外では変わったものもない。

これならまだ、船旅の方が退屈は凌げただろうと思う。

だが、同時に船旅でなくて良かったとも思う。

エインの色々な顔を見た。

仕える者として、主の特性や嗜好を知るのは早い方がいい。

船旅では、今までに立ち寄った先で見聞きしたような話は聞けなかった事だろう。当然、エインに対しても知らぬままになつてしまつていただろう。

横目でちらりとエインを見ると、エインは周りに何もなければのよ
うに、夢中で本の文字を追っている。

何度も何度も読み返したように、角が折れ曲がり、よれよれになつてしまつた本だ。

手にした時、既に古かったか、エイン自身がそこまでののか解らないが、本を持つ手は丁寧に添えられ、本に対する愛情も感じるし、拘りも感じる。

ヴィヴィアンは、胸いっぱい息を吸うと、ゆっくりと吐き出して、エインに声をかけた。

「眠っていてもいいでしょうか？」

「いいよ。」

ヴィヴィアンの問いに、エインは即答した。

「朝早かったからね。済まなかったね。」

エインはそう言い、一瞬だけ本から目を離してヴィヴィアンを見、そしてまたすぐに本に没頭したので、ヴィヴィアンは構わず、馬車の側面に凭れて目を閉じた。

そしてすぐに、眠りに落ちた。

カタカタと小刻みな振動で目が醒めた。

目を開けると、あらゆるものが真っ赤に染まっている。

驚いて目を開けると、声をかけられた。

「やあ、お目覚めかい？」

振り向くと、ヴィヴィアンに、にこにこ笑うエインがいた。

ヴィヴィアンは改めて辺りを見回す。

真っ赤な風景などなく、揺れる薄暗いクーペの、見慣れた内部が見えるだけだ。

だが、脇の小窓を覗くと、夕日によって真っ赤に染め上げられた田園風景が広がっていた。

いつの間にか雨雲は晴れ上がり、雲の欠片も残っていない空は、端を黒くしながらオレンジ色に燃えていた。

そこで初めて、夕方まで眠り込んでしまったのだと気付いた。

それほど疲れているという自覚はなかったが、夢も見ずに眠っていたと言う事は、思いの外に疲れていたのだろう。

「すみません、長々と…」

ヴィヴィアンが詫びると、エインは一層にこにことした。

「いいよ。まだ眠ければ寝てもいいけど、夜眠れないかも知れない。

もうトゥールを過ぎて、ポワティエまであと一息というところだが、ポワティエで止まらず、そのままボルドーまで走ってしまおうかと思ってる。

夜は見えるものがないから、つまらないかも知れないし、我慢して起きていて、夜また眠るのを勧めするけど。」

「…そうですね。」

暫く起きている事にします。」

「うん。」

ヴィヴィアンの言葉にエインは頷いて、手に持っていた本を閉じ

た。もう何冊目なのだろう。もしかすると、鞆の中は本しか入っていないのかも知れない。

「読書、好きなのですね。」

「うん。」

サンアツチ教授から聞いてなかったかい？」

「お聞きしてはおりましたが、それ以上でしたので…。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがくすくすと笑った。そして、少し開けた小窓から外を見、頬杖を突いた。外側に開く小窓でも、中途半端な開き方では、ヴィヴィアンのいる場所から外を見る事が出来ない。細い隙間からは、ただ何とも判らぬ物が次々流れる景色が見える。

「知らない事があると、不安だね…。」

何でも知りたい。

知らない…。」

そう言いかけて、エインは口を閉ざしてしまった。視線は遠い風景を見つめ、少しも動かなかった。

「…？」

ヴィヴィアンが続きを待つて黙っていると、エインは自嘲気味にふと笑い、そして「ごめん」と呟いた。

「助けない人がいる。」

助けない…ではないな。生かしたい。死なせたくない人がいる。

その人を生かすために、死なせないために、必要な事を探している。」

その言葉に、ヴィヴィアンの鼓動が少しだけ早くなった。

次いで体の末端の血の気が引き、冷たくなってしまった。

ぎゅっと手を握ると、拳が震えた。

何に緊張したのか判らなかった。

だが、ヴィヴィアンは今、緊張している。

口元さえ震えているのが判り、それを悟られぬよう、ゆっくりと声を出す。しかし気をつけても、声は震えてしまった。

「…どのような…」

言葉すら、途中で途切れてしまう。

そんなヴィヴィアンに一瞬驚いて振り向いたエインは、尚表情だけは平静を保とうとするヴィヴィアンに、優しく笑って頷いた。

「僕がこの世で一番愛している人。」

その無邪気な言葉と笑顔を受け、ヴィヴィアンの中に、複雑な想いが溢れた。そして直後、大きな動揺で胸がいっぱいになった。

しかし、こんなに感情が震えているというのに、今度は先程とは一転して、表情が動かなかった。

戸惑い、言葉すら出ないので、エインをじっと見つめる風になった。

当のエインは、ヴィヴィアンの気など気付かぬのだろう、微笑んだまま、ヴィヴィアンを見つめていた。

「似合わないと思うかい？」

「…いえ…」

訊ねられ、応える声を、締め付けられる喉元から無理矢理出した。

「ご病気が、何かなのですか…？」

「うん？」

いや、病気…というのかな…。

ちよつと、複雑な事情があつてね…。」

そつといい、エインがヴィヴィアンから視線を外した。

あつという間に太陽が沈み、馬車の中はすっかり暗い。

その暗がりの中で、エインの横顔は少し切なそうに見えた。

「方法が、見当たらないんだ…。」

そう言っただけ、エインは無言になった。

ヴィヴィアンはエインの横顔を、ただじっと見つめた。動揺はなかなか治まらず、しかし妙に思考は冷静だった。

出発の時、暇潰しにと手渡された本が脳裏を過ぎる。

シャングリ・ラだったか。

思い出し、一瞬後、ヴィヴィアンは目を見開いた。

何故、エインがあのある本を持っているのだ…？

そんな、そんな筈はなかった。動揺が、さらに増した。

エインがそんな物を持っている筈がないのだ。あつてはならない。
何故なら…。

ヴィヴィアンは冷静に動いていた思考が、動揺によってバラバラに散らばって行くのを感じた。

必死に繋ぎとめ、理論を組み立てようとするが、ままならない。

内心を悟られぬよう、ヴィヴィアンは表情を固め、下唇を噛んだ。

教授…。

あなたも、何かご存知なのですか…？

恋する太陽と月 1

夜中にポワティエを超え、何度か馬を休ませた以外は、ほぼ不休でアングレームとコニヤックの中間地点を通る道をひた走る。

馬を休ませるたび、各人も凝り固まった体を解すため、馬車から降りた。

ヴィヴィアンも流石に疲労し、やや気も回らなくなっていた。が、エインやトンプスン、ウィンストンに関しては特別気を遣う必要もなく、何よりこの馬車旅では、メイドとしての仕事も少ない。

ポワティエからボルドーまでは元から勾配の少ない地域ではあるが、馬の足のため、なるべく起伏も少なく、土質の柔らかい、若しくは草の茂る平坦な道を選んで進む。だが、この辺りは古くから田畑の多い地域で、土も緑も豊かで柔らかいので、殆ど予定のコースを外れる事無く、進む事が出来た。

とは言えど、やはり道程は遠く長く、未だボルドー近郊のコミュニケーションすら見えぬ辺りだと言うのに、すっかり夜を迎えてしまった。

「この辺りの風景は、夕方が一番綺麗なんだけどね。ベルトワーズ邸の辺りと似ているから、そこでゆっくり見るといい。」

因みに、畑の多くは葡萄畑だが、ソーセージに使うハーブの栽培も盛んだよ。

ボルドーを越えた先、大西洋の内海アルカションで獲れる牡蠣もなかなか旨い。

ボルドーの街から海側は風が強いから、農園より酪農地帯という感じになっている。」

真つ暗な風景の解説を、形式とばかりに簡素にまとめてエインが簡単に話した。

オルレアンを出て以降は、ヴィヴィアンが寝てしまっていたり、エインも本に没頭してしまっていた事もあり、エインの解説を聞く

のも久しぶりな気がする。

「ベルトワーズ伯爵のお屋敷は、ボルドー市内を越えた先なのですか？」

「いや。」

ボルドー市手前の森を右側へ、ガロンヌ川に沿うように少し行っただころだね。

残念ながら海は見えないが、お屋敷の川辺の庭は美しいよ。

ああ、そうだ。ボルドーと言えばカヌレだね。

アンのカヌレは、焼き菓子の名人以上と言っても過言ではないくらいに素晴らしい。きっと美味しいカヌレを用意してくれている事だろう。」

エインはそう言って、にこにこ笑った。

ヴィヴィアンはその様子に、あの一言を思い出し、また指先が冷たくなるのを感じた。

嫉妬とも、憂いとも違う、何か底知れぬ不安のようなものが、胸の中を蠢くのを感じる。しかし、この感情がなんと表現されるのか、ヴィヴィアンには判らなかった。

一方、押し黙ったままのヴィヴィアンを、エインは疲れが溜まっているのだと誤解をして、苦笑した。

「到着まで、あと数時間。」

疲れていたら、休んでいいよ。夜中のうちには着くが、大分明け方に近くなっているだろうから。」

「はい……」

申し訳ありません……。」

「謝る必要はない。寧ろ、謝らなければならないのはボクの方だ。急な長旅をさせてしまって、申し訳なかったね。」

「いえ……」

詫びるエインに、ヴィヴィアンが訂正をしようとする、前方の小窓が叩かれた。

「教授。」

トンプスンだった。

「はいはい。」

気楽に返事をして、エインが小窓を開ける。

「どうかしましたか？」

「はい、そろそろボルドー手前の森が見える頃ですので、お知らせを。」

「おや、もうそんなところまで来ていたのか。
有難う。」

そう言い、エインがヴィヴィアンを振り返って、指で小窓を指した。

ヴィヴィアンが指示通り小窓を開け、前方を見ると、暗がりの中に一層闇に沈む区域があった。だがその向こうには、ぼんやりと光が浮かぶ。ボルドーの街の灯りだろう。

「あれがボルドー手前の森だね。森と言っても小さなコミュニンは沢山あるが。」

ボルドーの説明をしよう。

ボルドーはケルト系ガリア人によって、今から二〇〇〇年近くも前に創設された街だ。

場所柄、創設された当初から活発に船の往来する港町で、ローマに占領された事を期に、貿易、交易の中心地ともなった。

古来からワイン生産が盛んで、土も豊かだから、ゴート人やバイキングなど、異国人の侵略をよく受けた場所だが、先のヴァロワ朝フランス王国とランカスター朝イングランド王国の戦いでイングランドが破れ、フランスに奪還された。

しかし、イングランド支配下で自治などある程度を享受していたこの街は、それ以降から八十年ほど前まで、フランスに反逆していた。今でもちらほらと、フランス自体を嫌っている人もいるが、逆にイングランドに親しみを持っているのです、市民とは付き合い易いと思うよ。

街を二分するガロンヌ川は流れが速く幅も広いので、渡るには苦

劣するんだ。ベルトワーズ邸は、川のこちら側なので渡らないが。

街と言っても、田畑の多いところだが、それでもパリに匹敵する程の大きな街だから、夜でも灯りが見える。よい道しるべだ。」

ヴィヴィアンの後ろから窓を覗きこんで、エインが言った。

「モンタンドルを過ぎたところか。」

森を曲がったら馬の速度も少し落とすだろうから、ここからだ、伯爵邸までは六時間と言ったところかな。」

エインが、言いながら座り直した。そして少しだけだらしく姿勢を崩して、「ボクは寝るけど」と言って笑ったので、ヴィヴィアンもそれに倣う事にした。

「私も、休みます。」

「そうしなさい。」

エインはもう一度ヴィヴィアンに微笑んで、前方の小窓を開けトンプスンに後を託すと、早々眠ってしまった。

ヴィヴィアンは、エインの寝の早さに呆れつつ、小窓の外を再度眺めた。暫し夜風に当たりながら、考え事をする。

先程の気持ちはすっかり消え、しかし仄かに残っている不安の残骸のようなものが、相変わらず指先の血の気を引かせていた。

何かに脅えているようだ、と思った。何に脅えているのだろうか。

思いを廻らすが、心当たりなどある筈もなかった。

夜風に当たると、思考のみならず、心まで冷めていく様だった。

海が近いからだろうか、心持ち、風は冷たい。そして土と樹木の匂いに混じって、微かに、船上で嗅いだ潮の香りもする。

指先を擦る。先程より、若干血が通ったようだ。

そう思うと、急に心が穏やかになった。

ヴィヴィアンは小窓を閉め、目を閉じて椅子に凭れた。これまで苦痛にすら感じていた馬車の揺れも、眠るには心地好いと気付く。

視界を遮り、暗闇に沈み、カタコトと小走りする馬車の揺れと馬の足音に耳を傾けると、どんどん思考が研ぎ澄まされていく。まるで、脳に記憶されている情報が、次々繋がり、全ての事を理解出来

て行くような感覚だ。そして、回路が構築されていく毎に、心の底から光が溢れ、道が出来ていく。

そうか。と、ヴィヴィアンは目を開けた。

ゆっくり、隣のエインを見る。すやすやと、歳にそぐわぬ無垢な寝顔で、規則正しい寝息を立てるエインは、何者であるかなど関係なく、護るべきものと思う。

ヴィヴィアンは静かに、エインに頷き、小さく溜め息を吐いて、再び小窓を開けた。

先程より、ボルドーの街の灯りは、はっきり感じられる。着々と、目的地に近付いている。

職務を果たそう。そのために、ここにいる。

決意をして暫し、無心で外を眺める。

やがて、大きな影であった森を森と認識出来る位置まで来たとき、馬車が右へと曲がった。

左に森を臨み、すっかり隠れてしまったボルドーの街の方角の空を見上げる。

よくよく見ると、空は濃紺で、丸い月が浮かんでいる。若干欠けているが、もうすぐ満ちる月だった。

月の脇には小さく強い光を放つ星が散る。

ロンドンにいる時より、ずっと星が綺麗に見えた。

空気が澄んでいるのと、辺りが暗いせいではあるうが、今のヴィヴィアンには、違う理由のように思える。

暫くは、この星空の下で過ごせる。

そう思うと、無表情の下で、心が躍った。

大分、月が東へ傾き、空が薄白んだ頃、隣で眠っていたエインが目を覚ました。

エインは体いっぱい伸びをしながら、ヴィヴィアンを見た。

「おはよう。」

もうベルトワーズ家の敷地だね。

屋敷もそろそろ見えるよ。」

そう言いながら小窓を開け、外を見るなり、ヴィヴィアンを手招きした。

エインに近付き、ヴィヴィアンも小窓を覗くと、ゆっくりとカーブする道の向こうにポプラの並木が見えた。その並木のさらに向こうに、暗闇の中、さらに翳る建物が見えた。

西側に大きな背の高いシャトーが聳え、東側には細く背も低いプチシャトーを並べた母屋という姿の屋敷だ。

「あれが、ベルトワーズ邸。」

グランシャトーで見えないけれど、シャトーの裏手に少し太いプチシャトーが建っていて、そこが書庫になっている。ボクが使わせて貰っていたところだよ。」

指を指しながら、エインが説明した。その後ろで、ヴィヴィアンがじっと屋敷を見つめている。

「シャンティイーを模して作られた、と仰いましたね。」

「うん。」

シャンティイーも、建物の方角は違うけれど、あの形にそっくりだよ。

もう少し大きいけれどね。」

そこまで聞いて、ヴィヴィアンが座り直した。

エインも小窓を閉め、前方の小窓を開けてトンプスンとウィリアムズを呼ぶ。

「長旅、お疲れ様でした。」

言われて、トンプスンとウィリアムズは振り返り、申し訳なさそうに首を振った。

「教授も、お疲れ様でございました。」

もう少し早く到着出来れば、お休みになる時間もありましたでしょうに、申し訳ありません。」

「いやいや。」

寄り道を頼んだのはボクだから、気にしないで下さい。

暫く滞在するので、数日間、引き続きよろしく。」

「承知致しました。御用があれば何なりと。」

会話の最中も、馬車は屋敷へ走り、一息ついてヴィヴィアンが小窓を開けた頃には、遠目に見えたポプラ並木を潜っているところだった。

そろそろ花の咲く季節なので、葉もしっかりと付いているのが、暗闇でもよくわかる。姿も冬の時のそれと違って、若干ボリュームがある。

辺りを見回すと、広大な敷地に小さな森がいくつかと、葡萄畑と思しき畑の他、藁を積み上げて整備中の区画に、厩舎やサイロ、大きな納屋と言った建物が点々と建っている。

「ここは、かなり広いよ。数日探検しても、回り切れないくらいだ。小さな湖のある森もあるから、息抜きに回ろう。」

エインがにつこりと笑うので、ヴィヴィアンは素直に頷いた。

やがて、馬車の速度が落ち、止まった。

馬車の外で、トンプスンとウィリアムズが下りる音がし、次いで、エイン側の扉が開いた。

「到着致しました。」

恭しく降車を促す二人に、エインは一つ頷いて馬車を降りると、ヴィヴィアンに手を差し出した。

差し出された手のひらに片手を乗せ、ヴィヴィアンはドレスを少したくし上げて、クーペの脇に添えられた足場に慎重に足を置く。暗く段差が少しだけ怖かったので、足が土を感じた瞬間に、ヴィヴィアンは勢いよく降りた。

そんなヴィヴィアンを、エインは手を引いて馬車から離れた。ヴィヴィアンの後ろでは馬車の荷台からウィリアムズがエインとヴィヴィアンのカバンを取り出した。

「お運びします。」

そう言いながら歩き出したウィリアムズの向こうで、屋敷の灯りが灯った。灯りはエントランスと三階の一部に灯っている。恐らく出迎えのためと、三階の灯りはエインとヴィヴィアンの寝室になる部屋だろう。

屋敷からウィリアムズに視線を戻すと、不意にエントランスの扉が開いた。

大きな三つ又の蝋燭立てを片手に持った執事と思しき男性に続き、女性の姿が見えた。肩に大袈裟なほどに大きなストールを巻き、白くシンプルなレース使いの寝着を身に付けた女性は、エインを見るなり、エインに向かって走り出した。

「お嬢様！」

声を殺しながらも叫び嗜める執事にも構わず、”お嬢様”と呼ばれた女性は、エインに駆け寄り腕を掴んだ。

「エイン！ お待ちしておりましたのよ！」

「おはよう、アン。遅くなつて、申し訳ありません。」

興奮する女性を、エインが”アン”と呼んだ。

アン・ベルトワーズ。ベルトワーズ伯爵の一人娘で、エインに手紙を出した本人だった。

「アン、夜風は体に悪いですよ。」

エインが言うと、執事も頷いた。

「お嬢様、お体に障ります。」

言われて、アンが俯いた。が、すぐにエインの後ろのヴィヴィアンに気付く。

「……どなたですか？」

声には一つの嫌味もなく、純粹に、誰かと問うていた。

「アン。また昼にでもゆつくり紹介しますが、彼女はヴィヴィアン。ボクの助手です。」

「助手の方ですの。」

アン・ベルトワーズです。よろしくお願いいたします。」

ストールに隠した手を、アンが差し出した。その手は暗闇の中で、

白々と光るほどに白く、細い。

ヴィヴィアンは、恐る恐る握手した。

「冷えますわね。中へ入りましょうか。」

お部屋の用意は出来ておりますのよ。

夜明けまでまだ少し時間はありますから、休んでくださいな。」

アンはそう言って微笑むと、さつさと屋敷に入ってしまった。

残されたエインとヴィヴィアンを、執事が誘導する。中に入った頃には、既にアンの姿は見えなかった。

特に不快という顔をしていた訳ではないが、執事がヴィヴィアンに言った。

「申し訳ありません。」

お嬢様はお体が弱く、睡眠不足も体調に影響いたします故、早々に自室へ失礼させていただきます。」

「お氣遣いなく。大変ですね。」

ヴィヴィアンが言くと、執事もアンと同じように微笑んだ。

「ここところは、アンダーソン教授がお見えになるので、元気にしておられたのですが、昨日から咳をなさるようになりました。」

呼ばれたエインは、苦笑した。

「無理をしたのでしょうか。暫くはお邪魔しますから、慌てずとも良かったのに。」

「そうですね。」

ああ、ウィンストン。そこにある箱を持てますか？」

エントランスを過ぎ、屋敷の中央にある大階段を昇ったところで執事に言われ、屋敷に入ってからエインとヴィヴィアンの後ろを歩いていたウィンストンが、執事の指差す箱を持ち上げた。カバンは付き添いのメイドたちが持っている。

そのまま三階へ上がると、左右に同じ長さだけ、廊下が伸びていた。窓と扉が向かい合って並ぶ廊下の幅は、人三人分と言ったところか。部屋は、屋敷の南側に並んでいる。

右手の廊下の突き当たりになる、プチシャトーの一室が、アンの

自室だという。東側の、日当たりと眺めの良い部屋だと、エインが言った。

エインとヴィヴィアンは、東側のエリアにある一室を、それぞれ宛がわれた。

客人と言えど、メイドであるには変わらず、ヴィヴィアンは従者たちと同じ部屋にして欲しいと頼んだが、それはエインによって拒絶された。執事も同様に、首を横に振った。

エインの部屋とヴィヴィアンの部屋は隣同士で、執事曰く、部屋の中で二部屋は繋がっているという事だった。

荷物を持つメイドを連れ、部屋に入る。

南向きの部屋には、天井まである大きな窓があり、そこからテラスへ出る事が出来た。執事の言うとおり、窓の脇には、隣のエインの部屋に通じていると思われる扉があり、申し訳程度に窓のカーテンで隠されていた。

予想以上に広い部屋を与えられてしまい、少々途方に暮れていたヴィヴィアンに、メイドが声をかけた。

「お荷物は、こちらに置かせて頂きます。」

言いながら、メイドがクローゼットの前にカバンを置いた。

「有難うございます。」

ヴィヴィアンが礼を言うと、メイドは深々と頭を下げた。

「御用の折は、執事のクリープスカ、私たちにお声がけ下さい。」そして、メイドは出て行った。

独りになったヴィヴィアンは、窓に歩み寄ると、錠を外してそつと窓を開けた。ふわりと冷たい風が吹き込む。

目の前には穏やかな田園風景が広がり、どこことなくエインの屋敷から見た風景に似ていた。

「風邪をひくよ。」

突然声をかけられた。振り向くと、エインがテラスに出ていた。「海に近いから、風もイングランドとは違う。」

それに夜明け前の風は、考えているよりずっと体を冷やしてしま

うものだよ。」

「はい。」

従おうと窓を閉めかけて、ヴィヴィアンはエインを見、

「教授は、お休みにならないのですか？」

と言った。エインは「うん？　ボク？」と驚いた後、悪戯っぽく笑って、

「ボクは、ヴィヴィが寝たのを確認したら寝る。」

と答えた。

それを聞いたヴィヴィアンは、何故かとても恥ずかしくなって、無表情を作ったまま一礼し、窓を閉めた。

そしてカーテンを閉めると、闇の中で寝着に着替え、ベッドに横になった。

道中、ベッドで休む事はあったが、そのどれとも違うこの屋敷のベッドは、ヴィヴィアンの睡魔をすぐに呼び起こしてくれた。

久しぶりに、心地の良い夢が見られそうだった。

恋する太陽と月 2

カーテンの隙間から差し込む朝陽が、じんわりとヴィヴィアンの瞼を照らし、自然な目覚めを促してくれた。

目を開けると疲れも眠気もなく、しかし目覚めのまどろみに身を沈めながら、ヴィヴィアンは寝返りを打った。

良質なベッドのお蔭か、短時間で十分深い睡眠を摂る事が出来たようだった。

「ふう……」

ヴィヴィアンは小さく溜め息を吐いて仰向けになると、思い切り伸びをした。

縮まった躰が伸びていく。

体のバネが戻ったところで、ヴィヴィアンは勢いをつけて起き上がり、部屋の中を見回した。

広い広い客室だ。大きなクローゼットに、大きなベッド、ベッドの向かいにはドレッサーと洗面台があり、大きな水差しが置いてあった。近付いて覗くと綺麗な水が並々と汲んである。エインの部屋と繋がるドアは、ドレッサーのある壁の端に、ひっそりと佇んでいる。

廊下へのドアの真正面には一面に窓が広がり、朝陽の射し具合からして、窓は真東を向いている筈だ。

非常によい部屋だ。

窓に歩み寄り、カーテンを開ける。夜では気付かなかったが、重く大きなビロードのカーテンは三重になっていて、日の光を完全に遮断していた。

ヴィヴィアンはカーテンを少しだけ開けたまま、水差しの水を洗面台に入れ、顔を洗った。そして傍らに置いてある拭き取り用の布で水気を拭き取る。布は、アミアンの宿にあったものと同じように、薄手なのに柔らかく、使い心地が良かった。

次いで結った髪を一度解き、丁寧に脂を拭き取った後、再び丁寧に結い直す。最後に布を軽く水に濡らし、汗を掻いた箇所を拭き取った。

今夜には風呂を使わせて貰えそうだが、それまで不快な思いを我慢する必要もない。

身支度を終え、ヴィヴィアンはカーテンを開け放った。窓の外にはどこまでも田園が広がり、地平線からそれほど離れてはいない陽は、小さな森の影を長く伸ばして田畑に映していた。

風景に見惚れ、暫くぼんやり眺めていると、隣の部屋の窓が開いた。

「おはよう。」

振り向くと、エインが腰に手を当てて立っていた。

「よい景色でしょ？」

自慢げに言う。

「はい。」

教授のお屋敷からの風景も、素晴らしかったですが。」

「うん。でも、スケールが違うからね、比較にならない。」

ボクんちの景色も素晴らしいが、こちらの景色も素晴らしい。」

エインがそう言くと、少し強い風が吹いた。仄かに潮の香りがする。

「風が潮を含んでいるから、当たりすぎると体がベトつく。注意しなさい。」

「はい。」

エインに忠告され、ヴィヴィアンが頷く。

「さて、もう九時になる。」

そろそろ下に行っても良い頃かな。一緒に来るかい？」

エインはどうやら、部屋を出るタイミングを見計らっていたようだ。九時という時間であれば、屋敷も朝の支度を終えて落ち着いている頃だろう。

「ご一緒します。」

ヴィヴィアンが再度頷くと、エインは「よし」と言って部屋に入
った。

ヴィヴィアンも部屋に戻り、窓を閉めると、廊下へ出た。同時に、
エインも出て来た。

「さあ、行こう。次いでだから、ちよつと外に出よう。」

そう言つて、階段へ歩き出したエインに着いて、ヴィヴィアンも
歩き出す。

廊下は長く、広い。部屋へ案内されたときには暗闇に溶けて見え
なかった廊下の端は、日中でもやはりはつきりとは見えないくらい
に遠い。

つい数時間前に歩いた階段は、屋敷の真ん中を走っていて、天井
には大きなシャンデリアが吊り下げられている。そのシャンデリア
を釣るワイヤーを中点にした円形の天井の周りを、ステンドグラス
を施した天窓が囲い、色とりどりの光を階段や周辺の壁へ注いでい
る。中には、壁に飾られた絵画と光が、まるでこの状態が完成であ
るかのように、見事に重なり合っているものもある。その絵画はキャ
ンバスいっぱいには花びらの舞う花畑の風景画で、ステンドグラスの
緑色の光は、まるで蔦や葉のように花々と重なっていた。

足元の赤い絨毯には、金と銀で優雅な植物の刺繍がされ、踏むの
が惜しいくらいだった。

「お目覚めですか。おはようございます。」

声がして振り向くと、一階の階段前で、エインとヴィヴィアンを
見上げにこりと笑う執事の姿が見えた。

「おはようございます、クリーブスさん。」

勝手にうるうるさせて貰ってます。」

エインが言くと、クリーブスは一層笑った。

「もうすぐ朝食のご用意をいたしますので、あまり遠くへお出にな
りませんように。」

「ご用事が済みましたら、大広間まで起こし下さい。」
「はい。ちよつと、ぶらりとしてきますよ。」

「いつてらっしゃいませ。」

深々と頭を下げるクリーブスに見送られ、メイドが開けてくれたエントランスから外に出る。

正面には、闇の中潜ったポプラ並木の小道が通り、屋敷前の広場との境目には背の高いゲートが聳え立つ。ゲートには大きな可愛らしいカウベルが下がり、時折、風を取り込み「ぼう」という太い唸り声を上げている。そのゲートに連なり、屋敷の周りを背の低い真っ白な柵が囲っていた。

エインが、ゲートの真下に立ち、ヴィヴィアンを手招きした。

ヴィヴィアンが駆け寄ると、エインは屋敷を正面に向き、腰に手を当てた。

「階段の天井に、大きなステンドグラスがあっただろう？」

「はい。」

「屋敷の中からだど、少し解り辛いんだけど、あの屋根、実は背の低い円錐形になっている。」

ちょうど、階段の一段目の真ん中を中心にしたシャトーになっていて、その真上の天井が、円錐屋根になっている。

円錐は八面になっていて、ステンドグラスは、屋根に沿って八枚シャトーの壁にも八枚、絵画が飾られている。

ある特定の日の特定の時刻、快晴であれば、その陽の光を受けた特定のステンドグラスは、各々決まった絵画と重なり、一つの作品を作り上げる。

今の季節は、グリーンステンドグラスなんだ。ちょうど階段を下っている頃の時間が、その完成形が見られる時間だったんだよ。」

エインに言われ、ヴィヴィアンが頷いて「気になって、見ておりました。」と答えると、エインが満足そうに笑った。

「さすが、ボクの助手だね。」

あんな風に、何かと何かを組み合わせる、という方法で、単体でも完成形に見えるけれど、組み合わせる事で真の完成形を作り上げる、そんな細工を施したものが、この屋敷には山程ある。

退屈したら、屋敷を探索するといい。ただ、絵画とステンドグラスのように、時間や日付が決められているものもあるから、そういうものは残念ながら、この滞在中では見られないけどね。」

そして言い終えるなり、エインは笑顔をふつと仕舞いこんで「それから……」と言い、屋敷から西側へ伸びる小道を指差した。道の向こうには、小さな森が見える。

「いいかい、ヴィヴィアン。」

あの道は、絶対独りでは歩かない事。

特に、あの道の先にある小さな森へは、絶対に近付かない事。」

怪訝に思い、指先からエインへ視線を移すと、エインは真っ直ぐヴィヴィアンを見ていた。表情は硬く、陰しく、微かに哀しそうだった。

「約束してくれ。」

念を押すように言われ、ヴィヴィアンは戸惑いつつも何も聞かずに頷いたが、それを見ても尚、エインは不安げに森へと目をやり、暫く動かなくなってしまった。

「……教授？」

心配になってヴィヴィアンが声をかけると、エインは「うん」と返事だけして、目を閉じて深呼吸をした。それからやっとヴィヴィアンを見て、微笑んだ。

「お腹空いたね。」

言葉と表情とは裏腹に、声には若干の不安を含み、エインはヴィヴィアンの返事も聞かぬまま、屋敷へと歩いて行ってしまった。ヴィヴィアンが慌てて追いかけると、今度はすっかり先程の様子など伺えぬほど普段どおりににこりと笑いながら、エインが振り返った。「食事が済んだら、君を紹介しなければね。」

そして再び見た前方には、クリープスが二人を迎えるべく、立っていた。

クリープスに案内された大広間は、煌びやかな装飾のあしらわれた調度品を所狭しと並べた、優雅な部屋だった。東側の大シャトーの一階にあり、東から南に掛けて大きな窓が並び、西側の壁には沢山の絵画が飾られている。

広さはヴィヴィアンやエインに宛がわれた客室の数倍はあるだろうが、部屋はさりげなく二分され、入って手前には大きな丸いダイニングテーブルの一式が、奥にはソファセットが置かれていた。

故ベルトワーズ伯爵の意向により、貴族などが愛用する長いダイニングテーブルではなく、より賑やかに食事の出来るこの大きな丸いテーブルを用意したのだと言う。

各テーブルの淵には細かな装飾が施されていたが、料理や食器、飾られた花花を邪魔しないよう配慮されたデザインである事は明確で、調度品などに明るくないヴィヴィアンにも、伯爵の人柄を捉える事は十分可能だった。

そのテーブルに並べられた料理は、まさしく今出来たばかりと湯気を立て、エインとヴィヴィアンを出迎えていた。

ヴィヴィアンは、クリープスとエインに窓の脇の席を薦められた。頷くと、エインが椅子を引いてくれた。腰を掛けると、その隣、窓を真正面に見る席にエインが座り、クリープスが料理を取り分け始めた。

料理は、道中、食事も簡単で質素なものが多かった事を見越し、胃が驚かないよう、野菜を中心とした軽いものが多いようだった。

「今は最低限の使用人しかおりませんもので、大した御持て成しも出来ません。」

「ご容赦ください。」

そう言いながら、クリープスが細く短くスライスしたラディッシュをこんもりと乗せた皿をヴィヴィアンの前に置いた。

食材に施された作業はどれも丁寧で、詫びられるようなものではない。

「葡萄の香りがしますね。」

ヴィヴィアンがラディッシュに少し鼻を近づけ、言った。
クリーブスがにこりと笑う。

「お解りになりますか。」

屋敷の畑で取れたラディッシュを、絞り立ての葡萄果汁で数日間
浸けこんだものです。

今からお掛けするソースにも、葡萄果汁を混ぜ込んであります。
ラディッシュの下にはじゃが芋と豆のポタージュがございます。
ラディッシュと葡萄のソースと、総て混ぜて召し上がってください。

「

頂こう。」

クリーブスの説明を受け、エインがスプーンを手にし、食事が始
まった。

頃合いを見ながら適度に出される料理は、どれも気兼ねなく口に
運べ、胃に流れるものばかりだった。

朝から出された肉ですら柔らかく叩き崩され、葡萄果汁で甘く香
りづけをし、少量のバルサミコ酢で仕上げたすっきりとした料理で、
軽々平らげる事が出来た。

眠気はないが睡眠不足ではある体に対して、きちんと食事が出来
ると言うのは、有り難い事だった。

一通り平らげ、腹も満たされたところで、傍らのグラスに紫色の
液体が注がれた。

「ワインではございません。」

料理にも使用した葡萄果汁に、リンゴと、オレンジやレモンなど
の柑橘類の果物を浸けこんだ飲み物です。」

言いながら、クリーブスがエインを見、悪戯気味に笑った。

「教授が申されますには、朝から飲酒は脳に宜しくないそうです。」
言われたエインも笑い返す。

「そうですよ。朝はジュースに限るね。」

二人の会話を聞きながら、ヴィヴィアンは一口、ジュースを口に

含んだ。甘酸っぱい柑橘類の風味と、葡萄の渋みが面白い味だった。
「いかがですか？」

不思議そうにグラスを眺めるヴィヴィアンに、クリープスが笑った。

「素敵ですね。」

「有り難うございます。」

ヴィヴィアンの性格を見抜いているのだろう。無表情にして簡潔な感想に、クリープスは満面の笑みを浮かべた。

「さあ、あちらのソファへお移りください。」

昨夜、とてもよい洋梨が手に入りましたので、シェフがフルーツケーキを焼いたのです。

食後のデザートとしてお運びしましょう。

お嬢様も、じきにいらっしゃいますので。」

そう言つて、クリープスが一度奥へと消えた。

エインとヴィヴィアンがソファセットへ移ると、最小限の音を立てながらメイドが食器類を片付け始める。

きびきびと動くその様子に、ヴィヴィアンは少し、後ろめたくなつた。元来、自分の位置づけは、彼女らと一緒にだ。

「気にする事はない。」

横目でメイドを見るヴィヴィアンに、エインが微笑んだ。

「君には、ボクを手伝うと言う仕事がある。」

彼女らと君は、似て非なる者。ここでの君の役割は、彼女らと同じではないよ。」

「…はい。」

エインに言われて返事をして、ヴィヴィアンは窓の外へ目をやった。朝陽は相変わらずさんと部屋へ注がれ、少し肌寒い部屋をほんのりと温めている。

「おはようございます。お二人。」

いつの間にかメイドも引き、暫し無言になった二人だけの空間に、アンの声が響いた。

振り向くと、薄いピンクのドレスに身を包んだアンが、朗らかに笑っていた。後ろには、ワゴンを押すクリーブスを従えている。ワゴンには、ティーポットとティーソーサーを乗せた大きな銀のプレートと、先ほど言っていたフルーツケーキを乗せた大皿が並んでいる。

アンの姿を見るなり、エインが立ち上がって、アンに歩み寄った。ヴィヴィアンも、エインに倣って立ち上がり、しかし歩み寄りはずらずに振り向くだけにした。

「おはよう、アン。」

エインがアンの手を取り、部屋の一番奥にあるソファへ誘導した。そして、ヴィヴィアンに振り向き、

「改めてご紹介をしなければ。」

と言った。

ヴィヴィアンも頷き、アンへ挨拶をする。

「ヴィヴィアン・トーマスと申します。」

他に言う事もなく、名乗るだけにすると、エインが補足した。

「ヴィヴィは、ボクのところに来たその日に、スコットランドを出る羽目になったんですよ。」

「まあ、それは大変でしたのね。」

「ごゆっくりなさっていただくさいな。」

わたくしはこんな体ですので、あまりお目にはかかれなくても知れませんが、屋敷の中は自由にお使いくださいね。

困った事があれば、そのクリーブスをお探し下さい。

ああ、教授でも大丈夫ですわね。」

言いながら、アンがエインを上目遣いに見た。

エインが苦笑する。

「アンは、生まれつき胸の病気を患っていてね、外に出るのもままならない。」

時々、部屋へ行って、話し相手になっただけでいてくれ。」

エインが言うと、「お待ちしてますわ、ヴィヴィ。」とアンが笑

った。

胸の病が。

目の前のアンは、昨夜の青白さより若干の生氣はある肌色ではあるけれど、昨夜と同様に華奢で、触ると折れてしまいそうなガラス細工のようだった。昨夜と違って結い上げた髪も、美しいブラウンではあるものの、どこかに病の気を感じる艶が見てとれるのは、思い込みによるものだろうか。

ヴィヴィアンより若い歳にして、ピンク色のドレスが似つかわしくないのも、同様なのだろうか。無理をして明るいい色を着た。そんな印象だった。

頬はふっくらとして愛らしいのに、赤みがない。目もくりくりと大きいのに、見つめられると目を背けたくなる。

ヴィヴィアンは、「はい」とだけ返事をして、アンに解らないように、唇を噛んだ。

「お二人とも、お座りになって。」

シェフがフルーツケーキを焼いてくれたそうすわ。」

アンが、ヴィヴィアンの後ろにいたクリープスを見て、着席を促した。

クリープスはいつの間にか、フルーツケーキを切り終え、紅茶も注ぎ終えていた。

「洋梨の焼き菓子でございます。」

昨夜手に入りました洋梨と、屋敷の畑で採れた葡萄とオレンジを日干ししたもの、近くの森で採れる木苺を入れて焼き上げております。

ラム酒の代わりに、ワインを使用しております。」

「若干強めですが、問題ないでしょう。」と付け加えて、エインをちらりと見る。

「お嬢様が昨夜、カヌレを焼きましたので、添えさせていただきますました。」

クリープスの言うとおり、彩色豊かなケーキの隣に、蜜蝋の照り

が残る小さなカヌレが乗っている。昨日だったか、エインが言っていた、”アンのカヌレ”とはまさにこれの事だろう。

配られた皿の菓子に、アンとエインがフォークを刺すのを待ってから、ヴィヴィアンもカヌレをフォークで切り分け、口に入れた。なるほど、確かに焼き菓子職人も顔負けをするほどの味である。フルツケーキもクリープスがわざわざ洋梨と付けるだけあって、洋梨の味を存分に出した素晴らしい味だった。

少し雑談をしながら、菓子を食す。料理を一通り平らげているのに、まだ口に運べるほど、デザートの意味も良かった。

甘いものを食べた事で満たされたのか、ようやく腹もいっぱいになり、そのタイミングを待っていたのか、エインが突然切り出した。「さて、アン。

早速、本題に入りましょう。」

アンもそのために顔を出したようで、エインに言われるなり、即座に一つの封筒を取り出した。

「これが父より預かったものです。」

アンが封筒を渡すと、エインは、受け取った封筒を丁寧に開けた。中にはきちんと折り目をつけて三つ折にされた数枚の手紙と、もう一つ、封筒が入っていた。中の封筒はきっちり封蝋がしてあり、開けられていない事を物語っていた。封筒の表には、エイン・アンダーソンへと認められたベルトワーズ伯爵のものと思われる直筆が見えた。

「手紙は、私宛のものです。」

封筒は、教授宛のものようすわ。」

アンが言つと、エインが手紙を開こうとして、手を止めた。

「読んでも？」

「どうぞ。」

アンの返答を聞くなり、エインは手紙を開き、読み始めた。あつという間に二枚目、三枚目と読み進め、そして手紙を折り畳んで仕舞うと、アンにそれを返した。

次いで、エイン宛と言う封筒を手にし、封蝋を弾くようにして封を開けた。

中にはアン宛の手紙と同じように、きちんと折り目をつけて三つ折に疊んだ手紙が数枚、収められていた。

エインは折り目の山を丁寧に崩しながら手紙を広げ、今度はじっくりと読み始めた。手紙を捲る指先にまで神経を遣っているかのように、動作もゆっくりとしている。

ヴィヴィアンは、エインの表情をじつと見た。出会ってからここまでの道中、常に動いていた口は、今はきつく結ばれている。伏目がちの目許からは、抱く憂いが滲み出、しかしそこはかとなく、懐かしさに浸っているようにも見える。

大層な時間を使って手紙を読み終えた後、エインは手紙を一度折り畳み、なにやら封筒を裏表に引つ繰り返して見たあと、ヴィヴィアンに読むよう仕草をしながら手渡した。

ヴィヴィアンは指示通り、手紙を受け取り、丁寧に開き、熟読をした。

手紙の内容は、何の変哲もない、内容だった。

死去する随分前から心臓の病を感じていた事、今の医療では助かる見込みはないという行で始まり、エインへの感謝と、尊敬を込めた言葉の数々と、遺す娘アンの身を案じ、彼女を託す文章が綴られていた。

ヴィヴィアンは、読み終えた手紙を丁寧に折り畳み、封筒へ仕舞う。

と、手元できちんと持っていた筈の封筒がずれた。ヴィヴィアンが驚いて封筒を裏返してみると、受け取った時には気付かなかったが、手紙を三つ折にしたのと同じ大きさの、一枚のメモが重なっていた。

メモには、不可思議な文が記されていた。

こんにちわ 娘さん

こんにちは　だんなさま
ぼくを愛してるってほんと？
ほんとなのかい？

あら　違いますのよ

感違いなさってますよ

でもこちらへどうぞ　まあいいけど

さようなら娘さん　またね

何かの詩だろうか。

何を表しているのだろうか？

「……？」

微かに眉間に皺を寄せ、ヴィヴィアンがエインを見ると、エインは何かを含むように笑っていた。

どうやら、エインに宛てられたアンの手紙にあった『不可思議な遺書』とは、このメモを指す様だ。

「アン。

有難う。手紙は受け取りました。

ところで、この不可思議を説明するために、『図書館』をお借りしたいのですが、よろしいですか？」

エインが言うと、アンはにっこりと笑った。

「あの『図書館』の書物は教授のものですのよ。
お好きに使ってくださいな。」

アンの言葉に、エインが笑った。

「何を言うかと思えば。

あの書物は、父君の大事な遺品ですよ。

とは言え、少しお借りしなければなりません。そのためにボクもここへやって来ましたし。

自由に使わせてもらいますよ。」

言うなり、残っていた紅茶を啜り、エインが立ち上がった。

すると、クリーブスが歩み寄って、エインに何かを差し出した。

「鍵でございます。」

もう随分締め切りにしておりますので、埃が積もっているかも知れません。

掃除が必要でしたら、お申し付けください。」

「有難う。」

そう言いながら、鍵を受け取ったエインは、ヴィヴィアンに目配せをして、「では」と言って大広間を出て行った。

恋する太陽と月 3（前書き）

詩原文、フランス語表記内には、PC機種依存文字があるかも知れません。

恋する太陽と月 3

慌てて追いかけて来たヴィヴィアンから手紙を受け取って、エインはメモだけを残し、尻のポケットにしまった。

そして歩きながら、メモを眺める。

半歩下がってエインを追うヴィヴィアンが、要領を得ないという表情で自分を見ている事に気付き、エインが振り向いた。

「これね、ドイツとフランスの詩なの。」

「？」

「ドイツとフランスは、長く、いがみ合っては歩み寄るという歴史を繰り返して来た国だね。」

この原文は、こうなんだ。」

そう言いながら、エインは手紙を入れたのとは別の尻のポケットから、一枚のメモを取り出し、ヴィヴィアンに手渡した。

Bonjour, ma cousine !

Bonjour, mon cousin germain !

On m'a dit que vous m'aimiez .

Ce n'est pas la v?rit? !

Je n'm'en soucie gu?re . . .

Je n'm'en soucie gu?re . . .

Passer par-ici . . . Et moi pa

r-1? . . .

Aur-voir ma cousine, on s're

verra !

「CousineとCousinは、親しい男女が互いに呼びかけるときによく使われるフランス単語。

男女が言葉を掛け合いながら、歩み寄り、また遠ざかる。

その詩は、永遠にループする。」

「これが、アンの手紙にあった『不可思議な遺書』なのですか？」

ヴィヴィアンが訊ねると、エインが笑った。

「そう。」

それが何を意味するかは、『図書館』に行けば解る。」

「何故、『図書館』に？」

ヴィヴィアンがさらに訊ねると、エインが立ち止まった。

大広間からエントランスを抜け、大広間の大シャトーを横目に歩いて来た。

目の前には、エインが昨夜馬車の中で教えてくれた、大シャトーの裏手にあると言っていたもう一本のシャトーが聳え立っている。

八角形の塔は屋敷の二階くらいの高さで、少し背の高い円錐の尖がり屋根が空を貫かんとばかりに付いている。

入り口は観音開きのオーク木の大きな扉で、三段ほど階段を昇る。エインはその階段を昇り、クリーブスから渡された鍵を差し込んだ。手入れがされているのか、使っていないと言っていた割りに、鍵はすんなりと開いた。

重いのか、エインが肩を添えて扉を押し開けると、ギイと小さな音を立てて扉が開いた。

扉の隙間から、暗闇と、少しインクの香りが漂ってきた。

徐々に開いていく扉の隙間からは、しかし中の様子を伺う事は出来ない。

やがて、扉を完全に開け放ち、エインが一步中へ入った。

扉の前は、階段の踊場のようになっていて、装飾の施されたオーク木の手摺りを境に、先は闇に覆われている。脇に階段があるので、『図書館』自体は地下になっているのだろう。

「何故、『図書館』か？」

エインがヴィヴィアンを振り返った。

そして、腰に手を当て、扉から少量の光を取り入れ、暗闇の薄ま

った『図書館』を眺める。

「その手紙が、ボク宛だからだよ。

ボクと伯爵は、『図書館』によって出会い、『図書館』によって交流を育んで来た。」

言いながら、エインは手摺りを掴み、地下の『図書館』を見下ろした。ヴィヴィアンも、隣に並んで見下ろす。

『図書館』は随分と下まで掘り下げた地下になっていて、薄暗闇の中見える限り、三十台近い大型の本棚が並べられていた。並べ方には規則性があるのかないのか、あるものは斜めに、あるものは扉と並行に、あるものは直角に並んでいる。

壁際にも棚が立てられているが、こちらは三台ほどを縦に積み重ね、壁に備え付けたストッパーのようなもので固定してあった。

「まず灯りを付けよう。」

そう言つて、エインが扉の脇にあったオイルランプに火を点けた。ぼうとした灯りが、闇をもう少しだけ払拭した。

「扉を閉めてくれ。」

本が傷むといけないから。」

エインは言いながら、階段を下りていった。ヴィヴィアンは言われたとおり扉を閉め、ゆつくりとエインの後を追う。

一つ踊り場を経て、辿り着いた地下から、先程までいた入り口の足場を見上げると、随分高い位置に見えた。

次いで周りを見回す。入り口の足場の下にも本棚があった。置ける限り本棚を置いたようにさえ思える。

本棚には、分厚い辞典ほどのものから、薄く小さなものまで、大小様々の書物が並べられ、置き切れなかったのか本棚の上にも積み重ねられている。ふと足元を見ると、床にまで積み重ねられている書籍さえある。『さて。』

まずは、このメモの謎を解き明かさなければ。

手伝つておくれ、ヴィヴィ。」

エインはそう言つて、本棚の脇や壁際にあるオイルランプに灯を

灯して行った。

火事を気にしたが、オイルランプの下には水淹れが置いてあり、エインはランプに灯を灯すと同時に、水淹れにも水を汲んで行っていた。

ランプの置き場所は計算されているようで、全てに火を灯すと、

『図書館』は影も気にならないほど明るくなった。

明るくなって気付いたが、『図書館』には本棚のみならず、様々なオブジェが所狭しと並んでいた。

大きな地球儀のようなものから、女神のような木彫りの像、槍を持つ細身の枝のようなもので、種類は多種多様だ。

床には真っ白なタイルが張り巡らされ、ところどころに溝が走っている。

「ちよつと根気のいる作業だね。」

このメモのヒントが、この書物のどこかに隠されている筈なんだ。

「

エインがヴィヴィアンに振り返って、シャツの腕を捲くった。

つまり、一冊ずつ開けて中を確認せよ、という事のようなだった。

ヴィヴィアンが理解したと言う表情を見ると、エインは一つ頷いて、

「済まないね。キミのペースで頼むよ。」

と言うなり、さっさと奥の本棚へ歩き出し、端から書物を五冊ほど抜いた。そして、床に座り込み、読み始めた。

なるほどと思ったヴィヴィアンは、エインが選んだ本棚の二つ左隣にある本棚へ歩み寄り、一番上の段の左端の書物を抜いた。

ここはフランスだと言うのに、書物の表紙には英語が書かれていた。隣の書物も見ってみるが、やはり英語だった。隣の本棚の書物も、やはり英語だ。

どうやら、この『図書館』にある書物は全て、英語で書かれていると見ていいようだ。

ヴィヴィアンは、鼻から短く息を吐き出して、辺りを見回した。

と、壁際の本棚用か、オーク木で出来た脚立を見付けたので、それを本棚の前に移動させ、登った。一番上の段に座ると、本棚の最上段の書物を取るのにちょうど好かったので、ヴィヴィアンはこれを椅子代わりに、書物を読む事にした。

とは言え、手当たり次第に読んで行くのでは、ヒントに辿り着いても見過してしまいかねない。

ヴィヴィアンが本棚越しにエインを覗くと、こちらを見ていたエインと目が合った。ヴィヴィアンは一瞬、どきりとする。

「無作為に書物を選んでも、時間がかかるばかりだと思ったね？ キミはやっぱり優秀だな。

この『図書館』の本棚は、向いている方角によって、収納されている書物が分けられている。

例えば、東を背にしている本棚には、お伽噺や創作物語の書物が収められている。南を背にしている本棚には、歴史研究に関する書物。

そして、このシャトーの入り口は真南から東に向かって四五度傾いている。」

意味ありげな説明をして、エインが口の端を上げた。

ヴィヴィアンは辺りを見回す。全ての本棚が、きっちり東西南北を向いている訳ではない。

だとしたら、その一見半端な向きすら、何か意味があるのだろうか。

脚立を降りて、壁際の本棚を見上げる。

積み上げた本棚すら、意味があるのだろうか。

そう思うと、自分が覚悟している以上に、途方もない作業であると認識出来た。

ふう、と溜め息が毀れる。

そして諦めて、再び作業へ戻った。

どのくらいページを捲っただろうか。

何も見付からない書物をただ捲るだけの作業は、心が折れるにはならないまでも、徐々に杜撰になってくる。

日の光が入らないせいで、どのくらい時間が経過したのかも、把握出来ない。

下を向きっぱなしの首が凝り始めた。ヴィヴィアンは背筋を伸ばし、首を回す。

エインを見ると、取り出した書物を仕舞いもせずに、黙々と読み進めている。ヴィヴィアンと違うのは、何かを探してページを捲るのではなく、書物そのものを読んでいる事だった。その割りに、目を通し終え横に積み上げた書物の山は、ヴィヴィアンよりも高い。これだけの作業、一つでも見落とせば、厄介な事になる。

何か、他にヒントはないものか。

そう考えていると、『図書館』の扉が開いて、クリーブスが入ってきた。

「お疲れ様でございます。」

クリーブスが声をかけると、エインが立ち上がった。

「やあ。相も変わらず素晴らしい蔵書量で、早くも音を上げておりますよ。」

そう言ってエインが笑うと、クリーブスが

「実はそろそろ昼食のお時間ですので、お呼びに上がりました。」と言った。

「おや、もうそんな時間だったのか。」

エインが驚いてポケットに入れた懐中時計を取り出した。

「本当だ。よい時間ですね。」

ヴィヴィ、休もう。」

「はい。」

二人の会話を聞いて、クリーブスが扉を開け放った。

書物に日の光は良い物ではないが、風は通さねば腐ってしまう。

微妙な調整をするための行為であらう。クリープスは、二人が『図書館』から出るなり、素早く扉を閉めた。

「参りましょう。」

お嬢様も、今日はご気分が良いので、同席いたします。

もうお席に着いておられますよ。」

エインとヴィヴィアンを先導しながら、クリープスが言った。

「そうですか。」

余り無理をしてはいけませんが、無理をしないための無理も良くないですからね。

それに、食事は大勢の方が楽しい。」

そう言いながら、通りがけた大シャトーの大広間を覗くと、奥のソファに腰掛けたアンが、レース編みをしていた手を止めて、手を振って来た。

その手は、エインにのみ振られているようで、ヴィヴィアンは気付かない振りをして、畑の方へと目を向けた。

空はすっかり青々と染まって、太陽はちょうど真上に昇っている。空の青は濃く、雲一つないが、遠くの方で雨雲がくすぶっているのが見えた。

畑と、小道と、小さな森と、遠くに見える低い山と丘、集落以外に、何も見えない景色は広大すぎて、解放されすぎてしまわないかと、ヴィヴィアンは少し不安になった。

「ヴィヴィ？」

不意に呼ばれ、振り向くと、エインがエントランスの前で立ち止まって、ヴィヴィアンを見ていた。いつの間にか、ヴィヴィアンの足は止まっていて、ずっと景色を眺めていたようだ。その様子を、エインは心配したのだろう。

無言のまま、振り向くだけで動きもしないヴィヴィアンに、エインが歩み寄った。

「景色に飲まれないように注意しなさい。」

ここは余りに広すぎて、ボクもたまに『行き過ぎて』しまう。だ

から、ここは好きだけど、苦手な場所でもあつてね…。

早く仕事を終えて、スコットランドに帰ろう。」

エインがそう言つて、笑つた。そして、すぐに踵を返す。

お戻りになって、よいのですか…？

ヴィヴィアンは、エントランスへ歩いて行くエインの背中に問いかけた。

アンの傍にいる事を望まれているのではないのか。
ふと、馬車の中で聞いた言葉を思い出す。

『アンはボクの妻になるかも知れなかった女性でね。』

『生かしたい。死なせたくない人がいる。
その人を生かすために、死なせないために、必要な事を探している。』

『ボクがこの世で一番愛している人。』

断片的にしか情報を手に出来ていない。エインの事を知らなければ、守れないかも知れない。

だが、根堀葉堀聞く事は躊躇われる。

もどかしさを拭いたくて、ヴィヴィアンはエインに走り寄つた。

エントランスを抜け、大広間へ戻ると、今度はアンがエインに走り寄つた。ヴィヴィアンは反射的に、エインから身を離す。

「おかえりなさい。教授、ヴィヴィ。」

すぐ食事の用意をさせますわ。」

そう言つて、アンがエインの腕を取り、クリープスを呼び付けた。呼ばれたクリープスは、一礼をして奥へと消えて行つた。

「朝はどの席にお着きになりましたの？」

きつと、ヴィヴィはその席ですね？」

アンはエインの腕を引きながらヴィヴィアンを見、今朝ヴィヴィ

アンが座っていた席とは違う席を指差した。今朝と同様にエインの隣ではあるが、反対隣だった。言動から察するに、今朝ヴィヴィアンが座った席は、アンの特等席なのだろう。

何となしにこのやり取りで、アンの性格を見た様な気がして、ヴィヴィアンは心の底に黒いものが溜まるのを感じた。

「教授はいつもの席ですわよ。
わたくしも。」

ヴィヴィ、朝食はいかがでした？ お口に合いました？」

席に着くなり、アンに訊ねられ、ヴィヴィアンは一瞬たじろぎつつも、冷静に答えた。

「はい。」

とても素晴らしいお食事を頂きました。
有難うございます。」

アンはヴィヴィアンの返事に満足したのか、にこりと笑った。
今朝より少しだけ、血色が良くなっていた。

「良かったですね。」

スコットランドの方は、時々こちらのお料理の味が合わないようなのです。

ワインの違いのせいですかしら？

教授は好き嫌いが無いので、困りませんけど。」

そう言って、アンはエインを見て笑った。

当たり障りのない世間話や、アンの身の上話、積もり積もっている様子の亡きベルトワーズ伯爵の思い出話をしながらの昼食は、案外あっという間に終わってしまった。

料理は相変わらず軽めに仕上げられていたが、朝に比べると若干量が増えていた。それでも平らげる事が出来たのは、腹が減っているからというより、シェフの気遣いのお蔭と言う方が相応しそうだっただ。

アンと別れ、エインとヴィヴィアンは再び『図書館』へと戻った。午前中と変わらない作業を再開する。

そして、何も発見出来ず、時間だけが過ぎてゆく。

ややぼうつとして来た頭に空気を入れるべく、ヴィヴィアンは深呼吸をした。

本棚の三分の一まで読み進めたが、手元にある結果はその事実だけだ。

もう一度、今度は小さく息を吐いて、読み終えた本を横に積む。初めの内はいちいち戻していた本も、いつの間にか横に積み上げるようになってしまった。

「息抜きをして来ていいよ。」

エインが、本棚の影からヴィヴィアンに声をかけた。

「しかし……」

ヴィヴィアンが言い淀むと、エインはひょいと顔を出して苦笑した。

「じゃあ、一緒に休憩しよう。」

一緒に、と言われると断り辛く、それならばとヴィヴィアンは頷いた。

立ち上がり、少しスカートを叩いていると、オイルランプを持ってエインが歩み寄って来た。

ヴィヴィアンが顔を上げると、エインは一つ頷いて、入り口へと歩いて行く。エインの後を追いつながら、改めて本棚を見回す。

本当に、多種多様な書物が並び置かれている。

「蔵書は、ベルトワーズ伯爵がお集めになられたのですか？」

ヴィヴィアンが問うと、エインが振り向きもせず答えた。

「うん、大体はね。」

あとは物好きな友人からの贈り物だったり、元々屋敷にあったものだったり。

屋敷の中にも書物はあるけど、あまり貴重ではないものになる。」
言いながら、階段を昇り、エインが入り口の扉を開けた。

外へ出ると、空の色は少し薄まっていて、西の方は早くもピンク色に変わっていた。

エインは『図書館』のシャトーを北側に周り込むように歩いて行った。

ついて行くと、シャトーに隠れて見えなかった景色が広がる。

屋敷を囲う白い柵の向こうには、正面と同じように田畑が広がり小さな森が点在している。どこを見ても田畑と森と、遠く低い山々だ。

「寂しいところだと思わないか？」

エインが柵に手について、言った。

ヴィヴィアンは隣に並んで、もう一度ぐるりと辺りを見回す。

確かに、同じものしか見えないという意味では、寂しいかもしれない。ヴィヴィアンが無言でいると、エインは小さく鼻で笑って、続けた。

「ここへ初めて来た時、伯爵はボクの事を知っていると行って、こう続けたんだ。」

『いずれこの書物は君のものになる。』

そういう決まりなんだ。」と。

「決まり？」

「そう、決まりらしいんだ。」

そのうち、アンとの婚姻の話が持ち上がった。

乗り気ではないボクに、伯爵はまた『これを決まりだと思って、受け入れた方がいい』と言った。

それ以来、この場所は、素晴らしいと思う反面、寂しく嫌な場所だとも思う。

来るのはいいが、すぐ帰りたい。

でも……。」

エインが肩を竦めた。

「帰るには、秘密を解かなければ。」

「必ず、解かなければならないのですね？」

「うん。」

ヴィヴィアンの問いに、短く答え切るエインを、ヴィヴィアンが見据えた。

「それも決まりですか？」

ヴィヴィアンを、エインが真っ直ぐ見詰める。

そして、暫し無言になったあと、微笑んだ。

「決まりから逃れる為に必要なものを、手に入れる為、だよ。」

その答えに、ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインは一層優しく微笑んで、徐々にピンク色からオレンジ色に染まって行く西の空を眺め、溜息を吐いた。

「決まりに従ったら、ボクは何度も、この空を眺めなければならなくなるからね……。」

ヴィヴィアンがこの言葉の、真の意味を理解するのは、ずっと後の事になるが、今この瞬間はただ、アンの婚姻を拒否した事、ここに暮らす事への抵抗を意味するのだと、理解した。

休憩を挟んで『図書館』へ戻って、しかしすぐにクリーブスが、夕食だと迎えに来た。

今日の作業はこれで終わり、明日続きをやる事にし、オイルランブの炎を消して、エインとヴィヴィアンは『図書館』を後にした。この辺りは野犬もいなければ、盗賊といった輩もないが、念のために鍵を掛ける。

久しぶりに外気を吸い込んだ『図書館』は、一晩という短い時間だが、また眠りに就く。

大広間に戻ると、アンが出迎えた。

「お疲れでしょう。すぐお食事にしましょうね。」

アンの言葉を合図に、クリープスとメイドたちが夕食を運び込み、三人の前に並べてゆく。

「だいぶお腹も食べ物に慣れて来ましたでしょう？」

今日はボルドーで牛の品評会がありましたの。うちの雌牛も何頭か出したんですけど、その序でに、従者がとてもよい仔羊を仕入れましたのよ。」

アンの説明に合わせるように、メイドがエインとヴィヴィアンの目の前に、メインディッシュを並べた。メインディッシュは仔羊のローストだ。

朝食にも出たラディッシュとスライスオニオン、何種類かのハーブが飾り付けられ、盛られている。

脇にはコンソメスープと柔らかく焼いたミルクパン、グリーンリーフなどの葉野菜を盛りつけたサラダに、赤ワインが並ぶ。

「さあ、召し上がってくださいな。」

ヴィヴィアンを見てにこやかに言うアンの頬は、昼よりさらに赤みを帯びていた。

かなり体調がよいのか、それとも既にワインでも口にしたのか。気にはなったが、エインが「頂こう。」と食事を始めたので、ヴィヴィアンも食事を始めた。

昼とは違い、黙々と食事をする。

ナイフやフォークが皿を擦る音を聞きながら、野菜や肉を口に運ぶ。最初はぎこちないが、すぐに慣れて、味を楽しむようになった。

仔羊の肉は、アンが言うつおり、とても柔らかく、臭みもなく、旨かった。

「ヴィヴィは、フランスは初めてですの？」

アンに問われ、ヴィヴィアンが小さな口をナフキンで拭く。

「はい。イギリスから出た事ありません。」

「まあ！ ではこちらへの旅はかなりの冒険でしたのね。」

今日はお疲れ？ お疲れでなければ、私の部屋にいらっしゃいません？

少しお話がしてみたいのです。」

そう言いながら、アンがエインをちらりと見た。視線の合ったエインが、首を傾げると、アンが悪戯気味に「出来れば、女性同士で。」と言った。

エインが肩を竦める。

「どうぞ、お構いなく。」

ボクは部屋で読書をする事にします。」

「そうして下さいな。」

ね、ヴィヴィアン、いらっしゃるわね？」

ヴィヴィアンを覗き込むアンの瞳は、キラキラと輝いていた。純真無垢で、罪悪感など何もない。そんな瞳だ。

ヴィヴィアンは居心地の悪さを覚えながらも、「是非。」と答えて頷いた。

そのヴィヴィアンの反応に満足したのか、再び無言になったアンが食事を再開した。ヴィヴィアンも途中まで切り進めた肉に、再びナイフを入れ、口へ運ぶ。

しかし、先ほどまで旨いと思っていた肉が、突然不味くなった。だが残す訳にも行かず、ヴィヴィアンは無理矢理口に運んだ。時折エインを見ると、エインの食事のスピードも落ちていた。エインを見つめるヴィヴィアンの視線に気づいたエインが、ヴィヴィアンにそつと苦笑する。

「ヴィヴィ。体調が悪いなら、無理をしない方がいい。」

シェフの方には申し訳ないけれど、無理に食べて明日に障るよりいいからね。」

エインの言葉に、アンが顔を上げた。

「無理をする必要はないですわよ、ヴィヴィ。」

「すみません。とても素敵なお料理なのですけど…。」

俯くヴィヴィアンに、アンが微笑んだ。

「気にする必要はありませんのよ。シェフも承知の上ですわ。

お口に合わなかった訳ではない事で、十分ですよ。」

ヴィヴィアンは、一気に罪悪感で胸が一杯になった。

目の前の真っ白なアンと、自分が抱く感情の処理に手間取っていた。

エインはそれを察知しているようで、ヴィヴィアンをじっと見つめている。

ヴィヴィアンは何とか気丈に振舞おうと、手にしていたナイフとフォークをゆっくり下ろしたが、手が震えて皿を鳴らしてしまった。それを見たエインが、立ち上がった。

「ヴィヴィ。来なさい。」

アン、よいですね？」

その口調はどちらにも有無を言わせぬ強い口調で、アンも思わず驚いて無言で頷くしかなかった。

エインに誘導され、ヴィヴィアンは部屋に戻った。

ヴィヴィアンがベッドに座り込むと、エインは後ろ手にドアを閉め、ついでに鍵も掛けた。

「ヴィヴィ。」

名だけ呼んで、見上げるヴィヴィアンを直視する。そして、ヴィヴィアンが溜息を吐きながら俯いた。

「申し訳ありません、教授…。」

急に、落ち着かなくなってしまうて…。」

アンを理由に、とは言えず、そこで言葉を切ったヴィヴィアンに、エインが笑った。

「アンは、子供過ぎるんだ。ボクでも時折怖くなる。」

「…。」

言い返せず、ヴィヴィアンは無言になった。

未だ震える指先を、自分で握っては擦る。そういえば、馬車でもこんな事をした。

「申し訳ありません…。」

謝罪の言葉しか出ないヴィヴィアンの隣に、エインが座って、

「明日には終わるさ。」

早くスコットランドに帰ろう。」

と言うと、すぐに立ち上がって静かに部屋を出て行った。

残されたヴィヴィアンは、唇をぎゅっと噛み、そのままベッドに倒れ込んだ。

恋する太陽と月 5

瞼が突然開いた。

辺りは薄暗闇に染まり、見慣れない天井が見えた。

驚いて起き上がり、辺りを見回す。

ベルトワーズ伯爵邸の、自分に宛がわれた部屋だ。

エインが部屋を出てからベッドに倒れ込み、いつの間にか、寝てしまっていたようだ。

時計がないので時間が解らないが、外はまだ若干の明るさを保っている事から、それほど夜も更けていないようだ。

ヴィヴィアンはベッドから折り、部屋のオイルランプを点けた。

ドレッサーを覗き込み、自分の顔を見る。

不意に、夕食の時を思い出し、ヴィヴィアンは鏡から勢い良く身を離れた。

自身でも信じ難い。

あれほどまでに、動揺した事がなかった。

思い出すと、恥ずかしくなった。顔が火照ってしまったので、ヴィヴィアンは窓に歩み寄り、カーテンを思い切り開けた。すると、ドアがノックされた。

ヴィヴィアンは深呼吸をして、「はい」と答えた。

「アンです。」

そう言っつて、アンがドアを開けた。

「教授は、こちらにはいらっしやらないのね。やっぱり『図書館』かしら……。」

何か事情を知っているかと訊ねるアンの視線に、ヴィヴィアンは首を傾げて答えた。

すると、「まあ、いいですね。」と言っつて、アンがにこりと笑った。

「ヴィヴィ。私の部屋にいらっしやいませんか？」

お話ししよう。」

言われて、夕食の時の感情が溢れた。

しかし、ヴィヴィアンはそれを胸元でぐっと押さえ込むと、アンに解らない様に肩に力を入れ、頷いた。

「はい。」

「よかった。参りましょ。」

「さあ。」と言ってドアを開け放ち、アンは東側のシャトーにある自室へと歩いて行った。

ヴィヴィアンも後に続く。隣のエインの部屋を過ぎ、さらに部屋を三つほど過ぎた先の廊下は行き止まりになっていて、他の部屋とは違う、両開きの大きな扉があった。

脇にはメイドが一人立っていて、アンの姿を確認するなり、扉を静かに開けた。

「お入りになつて。」

アンに促され、ヴィヴィアンはアンの部屋に入った。

八角形の部屋は北、東、南の方向に大きな窓があり、西側の壁には、今潜った扉ともう一つ、両開きの扉が並んでいる。

「そちらは衣装部屋ですよ。」と、アンが言った。

「お好きな椅子にお座りになつて。」

お茶をお淹れしますわ。」

扉の前で部屋を見回すヴィヴィアンに、アンはそう言つて、部屋の中央にあるソファセットを指差した。そして、くると回って窓の脇に置かれたティーポットから、湯気の立つ紅茶をカップに注ぎ出した。

言われたとおりに、ヴィヴィアンがソファに腰を下ろすと、アンがその前にティーソーサーを置く。そして、自身の前にも置き、ヴィヴィアンの向かいのソファにどさりと座った。

「ご迷惑じゃありませんでした？」

「え？」

突然の問いに、ヴィヴィアンが一瞬驚く。

「ヴィヴィは表情があまり変わりませんもの。」

お呼びした事、怒ってませんか？」

「いえ。全く。」

ヴィヴィアンが短く答えると、アンはぱつと笑顔を作って、深く頷いた。

「良かったですわ。」

私、このような体ですから、外出も満足に出来ません。ボルドーの街まで行ったのも、もう何年前になるか…。

お勉強も、家庭教師にお願いしていましたし、ご覧の通り屋敷の周りに家はありません。

小さな頃は、それでも屋敷の従者の子供が時折出入りして相手をしてくれましたけど、みな結婚したり戦争で亡くなったり…。

今は、話し相手がみな私より年上で、毎日顔を合わせる者ばかりですよ。

不満という事ではありませんけど、知らない方とお話するのは、これからの人生、あと何度ある事か。」

妙な罪悪感を抱くのは、この身の上が理由なのではないかと、ヴィヴィアンはほのかに思った。対面にいる自分やエインは、好きなときに好きな事をし、好きな場所へ行ける自由さがある。位置関係と同じように、真正面で対照的なのだ。

同情する訳ではないが、言葉にすれば、同情になってしまう。

「胸の病と、お聞きしました。」

「ええ。」

生まれつき。赤ん坊の頃は、二十歳まで生きられるかどうかと言われたそうですわ。

でも、何の奇跡か、余分に生きておりますのよ。

そのお蔭で教授にもお会い出来ましたけど。

私と教授のお話はお聞きになりました？」

「はい。」

ヴィヴィアンは、膝の上で重ねている両手を握り締めた。

「教授はお受けして下さいませんが、父は教授と初めてお会いした日に、私にこう言いましたの。」

『アン、彼との婚姻は、決まりごとなんだよ。』って。」

また、決まり、だ。

「…決まり、ですか。」

「ええ。」

何が何やら解りませんわね。決まりと言われてしまうと、『運命』と解釈いたしますけど。」

どちらにしても、教授はお受けして下さいませんが。」

そう言つて、アンが愉快そうに笑つた。

「決まりは、守られなければならないと思つていますわ、私。」

この言葉に、ヴィヴィアンはどきりとした。

笑顔は実に純粹で、美しいのに、言葉の端々に棘があるように思う。

それが純真さから来る、何にも包まれていない感情を含むからなのか、意図してのものなのかまでは、ヴィヴィアンには解らない。

どうにも答えようがなくヴィヴィアンが黙っていると、アンはぱつと話題を変え、次々に色々なものを取り出しては、見せたり語ってくれたりした。ヴィヴィアンは生い立ちなどを聞かれた。

「生まれてすぐに両親が亡くなりましたので、孤児院に引き取られて育ちました。」

そう説明するなり、アンは困惑した表情を浮かべ、話題を切り替えてくれたので、それ以上聞かれずに済んだ。

その後も取り留めのない話は続き、意外なほどあつという間に、時間は過ぎた。

そして話は、クリープスが扉をノックしたのを合図に、終わった。

「お嬢様、そろそろお休みになりませんと。」

「まあ、もうそんな時間ですか？」

残念ですわ、ヴィヴィ。」

アンが立ち上がつて、ヴィヴィアンの隣に座り、手を握つてきた。

「ゆつくりお休みにならなければ。」

明日またお話出来ます。」

ヴィヴィアンが言うと、アンはにこりと笑って「そうですね」と言い、クリーブスを見た。

「ヴィヴィをお部屋にお送りしてね。」

「承知致しました。」

クリーブスが頭を下げ、ヴィヴィアンが立ち上がった。

「では、ヴィヴィ、また明日。」

「おやすみなさいませ。」

廊下に出て振り返り、アンに挨拶をすると、クリーブスについて部屋へと戻る。

「教授はずつとお部屋でしょうか？」

先程お声をおかけしたのですが、お出にならなかったものですか
ら。

てつきりお嬢様のお部屋にいらっしゃるのかと。」

「部屋で読書をする、と先程は……。」

確か夕食の時、そんな事を言っていた。

「左様でございますか。」

きつとお疲れで、すでにお休みなのでしょうね。」

会話を終えた頃、ヴィヴィアンの部屋の目の前で、クリーブスが何やら思いついたようで、「そうでした」と言いながらヴィヴィアンを振り返った。

「まだ、お風呂を使われておりませんか？」

そういえば、風呂の事など忘れていた。

「はい。」

「ご案内しましょう。」

そう言つて、クリーブスが階段へと向かった。

浴場は屋敷の一階の、大広間と反対端にあった。正面からでは見えなかったし、裏手の『図書館』のシャトーへ回った際も意識して見なかったので気付かなかったが、屋敷の東端から一本、北へ向か

って細い通路があり、その先に浴場がある。

浴場に着くと、二人のメイドが立っており、ヴィヴィアンを見て一礼をした。

「ご自由にお使いください。」

今お召しになっているドレスはクリーニングも出来ます。ご所望であれば、そのメイドにお申し付けください。」

「有難うございます。」

自分もメイドなのだがと内心思いつつ、ヴィヴィアンはクリープスに例を言って、浴場へ入った。

中は広々としているが、いっばいに湯気が立ち込め、ほんのり薔薇の香りがした。

フランスは洗顔や入浴をしないと聞いていたが、郊外の大きな屋敷には浴場を備え付けているところも多く、特にスコットランドやイギリスの影響を大きく受けたボルドー周辺では、風呂を好む者も多いと風の噂で聞いていた。

期待していたが、その通りの風呂で、ヴィヴィアンは無表情ながら満足だった。

ドレスを脱ぎ、裏表に返しながら汚れ具合を見る。雨の中でも着ていたせいか、裾が大分汚れていたので、クリーニングを頼む事にした。

扉越しに、外のメイドに声をかけると、ドレスはそのままそこへ置き、代わりに入り口脇に掛かっている白い部屋着を着るようになった。朝には、ヴィヴィアンのドレスは乾いているので、部屋まで持ってきてくれるそうだった。

「わかりました。」

と返事をして、ヴィヴィアンはドレスを丁寧に畳んで床に置き、もう一枚の扉で仕切られた風呂場へと入った。

風呂場の中は、薔薇の香りが少し強めに香っていた。

嫌いではないが、少し強いと感じる。

浴槽の脇には垢すりの布と、水受けがあり、さらに美しい丸い形

の白い固形物があつた。ヴィヴィアンは固形物を手に取り眺めた。どうやら、石鹼のようだ。少し水をつけてこすると、泡立った。

ヴィヴィアンは垢すりの布を一度綺麗に濯ぎ、石鹼を擦って泡をこんもりと立て、体を擦り始めた。

一通り体を擦り、一度湯で流すと、妙に体が軽くなったような気分になった。

もう一度湯を体につけ、浴槽へ足を入れる。

むんと薔薇の香りが立ち、少し咽た。

湯は丁度いい温度で、ヴィヴィアンはゆっくりと湯に体を沈めた。ここまできちんと風呂に入れるとは思わなかったので、思わず溜め息が漏れる。

湯気に覆われた天井を見上げ、もう一つ溜め息を吐く。

そして、アンとエインの言葉を反芻する。

『決まり』。

決まりとはなんだ？

エインはこれから逃れたいという。

自分にも、この決まりが何かあるのだろうか。

そう思い、過去を何度も思い出す。

本当に長い事、戦ってきた気がする。

ここで終わりにしたい。

終わりにする『決まり』事があるなら、手に入れたい。

ヴィヴィアンは、湯を片手で掬った。さらさらと流れ落ちる湯は、今まで過ごして来た膨大な量の時間のように入れた。

沢山の時間が流れてしまった。

この時間が、無駄にならなければいい…。

恋する太陽と月 6

あの湖は、どの湖だっただろうか…。

もう何度も何度も見てきた場所なのに、いつ、何を理由にして訪れた場所なのか、思い出せない。

エインは床に座り込んで、手にしている書物の最後のページを捲って、溜め息を吐いた。

「…あれは…どこだっただろう…。」

大事な事なのに、思い出せない。

否、”元々記憶にないから”かも知れない。

西の森だと言う強い記憶は残っているが、見た限り、あの森は少し小さい気がした。

夕食の最中、様子のおかしくなったヴィヴィアンを部屋に送った後、自身も食事などする気にならず、そのまま『図書館』へ来てしまった。

エインにとって書物に囲まれ、静かに文字の世界に沈み込んで仕舞う事は、現実から逃れる唯一の方法だったし、同時に現実を思い知らされる方法でもあったが、総じて居心地の良さを感じる場所である事は明確な事でもあった。

しかし、その居心地のよい場所を与えてくれた恩人であるベルトワーズは、一体何を思っただのようなメモを遺したのだろう。

尻のポケットから、遺書とともに納められていたメモを取り出す。そして、反対の尻のポケットからも、同じサイズのメモを取り出す。こちらには、遺書のメモのフランス原文が書かれている。

謎を解かなければ、スコットランドに帰れない。

『決まり』から、逃れられない。

逃れられなければ、また繰り返し返さなければならぬ。

また、失わなければならぬ…。

「前は、どこだったっけ…。」

本を閉じて、傍らに投げ置きながら、エインは本棚にぐったりと凭れ掛かって、天井を仰いだ。

目を閉じると、体がふわりと軽くなった。
疲れている。

早く、終わりにしたい…。

ふと目が醒めた。

ぼんやりする頭を振り、辺りを見回す。『図書館』の中だ。
どうやら眠ってしまったようだ。

懐中時計を取り出し、時間を確認すると、九時を指していた。
九時…。眠ってから、数時間というところか。

そこまで眠り込んでいた訳ではなさそうだ。

「よいしょ」と声を出して立ち上がり、尻の埃を落とすと、外気を吸おうと外へ出ることにした。

が、『図書館』の扉を開けて驚いた。

燦燦と太陽の陽が注いでいる。

眠り込んでいないなど、とんでもない事だった。すっかり一眠りしてしまっただのではないか。

「…。」

呆然としながらも溜め息を吐くと、屋敷の陰からヴィヴィアンがやって来た。

ヴィヴィアンは、エインの姿を見るなり、少し目を見開き、すぐに何もなかったかのような無表情に戻って歩み寄って来た。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「お早いですね。」

「うん。」

そう言って、エインは腰に手を当て、仁王立ちになり、

「夜通しここにいた。」
と言った。

「…クリーブスさんが、心配しておりました。
部屋に声をかけても、お返事がない、と。」

「そうか、あとで謝っておこう。」

「食事は済んだかい？」

「はい。お戻りになりますか？」

大広間は片付けてしまったが、戻れば何かしら用意はしてくれる
だろう。

しかし、エインは首を振った。

「ううん、ボクは食事は要らない。」

「じゃあ、続けようか。」

「はい。」

ヴィヴィアンを連れて、『図書館』へ戻る。

「ヴィヴィは、昨日の本棚がまだ終わってなかったね。」

「はい。続きからやります。本も出しっぱなしですから…。」

昨日、ヴィヴィアンが調べていた本棚の床には、綺麗に積まれた
書物の山が出来ていた。それも、積んだまま戻せば、元あったよう
に並ぶように積まれている。

本棚を見ると、半分ほど、空いていた。

「あと半分か。今日で、この棚は終わるという事だね。」

「そのつもりです。」

ヴィヴィアンの返事に、エインは頷いて、「じゃあ」と言って立
ち去った。

ヴィヴィアンは目印となる次の書物を抜き、今床にある書物を棚
へ戻す作業を始めた。分厚い書物が多いため、四冊ほどを持って脚
立を登り、右端から順に戻す。

何往復かその動作を繰り返し、一頻り戻し終わったら、再び抜き
取った書物を手に脚立に座り、ページを捲る。

黙々と書物を取り替えてはページを捲ってゆく。

その間、一度クリーブスが様子を見にやって来た。

昼食の時間が近付いた事を伝えるためだったが、エインはそこで軽食を運んでくれるよう頼んだ。

「何か、手軽に食べられるものがいいです。」

「畏まりました。何か、ご用意いたしましょう。」

「お願いします。」

クリーブスは快く引き受けて、屋敷へ戻って行った。

何も聞かれなかったが、ヴィヴィアンにとっても都合は良かった。昨日の動揺は今朝も若干あり、出来れば籠って作業をしていたかった。

礼を言おうか迷ったが、何も言わずエインが書物に視線を戻したので、ヴィヴィアンも何も言わず作業を続けた。

やがて、クリーブスが大きなバスケットを持ってやって来た。

「夕方頃、取りに伺います。」

「お手数をおかけします。」

短くやり取りをした後、クリーブスはバスケットをエインに渡し、去って行った。余計な気遣いなどをしないクリーブスも、ヴィヴィアンには有り難い人間だ。

「お腹空いたかい？」

クリーブスを見送っていたヴィヴィアンに、エインが訊ねた。

「いえ、まだ……。」

「じゃあ、もう少ししてからにしよう。」

言いながら、エインは床に積んだ書物を棚へ片付け始めた。

どうやら、本棚一つ終わったようだ。手早く本を仕舞い終え、ヴィヴィアンの隣の本棚の書物を取り出した。そして床に座り、楽しそうにページを捲る。

素直に書物の内容に目を通すならば、ヴィヴィアンがページ捲る間に、エインは四ページ捲っていた。読み進める速度が速い上、内容の把握もしているようだった。

脚立の上からその様子を眺めながら、ヴィヴィアンは改めて、エ

インの本好きを悟る。

三冊読み進めたところで、空腹に気付いたヴィヴィアンは、同時にインのページを捲る音が聞こえない事に気付いた。

ちらりと横目で見ると、インは本棚に凭れ掛かり、眠っていた。脚立を降り、しゃがんでインの寝顔を見て、ヴィヴィアンは呆れた。が、夜通し『図書館』にいたと聞いたので、徹夜で読書をしたのだらうと思ひ込み、仕方がないとも思えた。

『図書館』の中は陽が入らない分、少しひんやりとしている。その上、床に座っていれば冷えもするかも知れない。きよるきよると見回すと、クリーブスが持つて来たバスケットの上に、ひざ掛けが置いてあった。

クリーブスの気遣いだらう。

ヴィヴィアンは足音を殺してバスケットに近付き、ひざ掛けを取ると、そつとインにかけた。

そして、改めて寝顔を見る。

眼鏡を外し、手はその眼鏡を持ったまま床にだらりと落ちている。少し傾いた体勢が、眠りの深さを表しているようだった。

ふ、と笑いが毀れた。

なんと無防備な寝顔をするのだらう。

ヴィヴィアンは小さく溜め息を吐いて、脚立の上へ戻った。座って本を開くと、インがごそごそと動いたので、ヴィヴィアンはさつさと無表情に戻った。

起きたインはひざ掛けに気付き、ヴィヴィアンを目だけで見上げて、笑った。

ヴィヴィアンは、知らぬ顔をしている。

インが傾いていた体勢に戻すと、そこでヴィヴィアンが、
「風邪をひきますよ。」

と言った。声もぶっきら棒で、素っ気無い。

照れ隠しなのか、その様子がおかしくて、エインはくすくす笑いながら答えた。

「有難う。」

恋する太陽と月 7

エインの昼寝が終わったところで、二人でバスケットの中身を平らげた。

固焼きのブレッドにチーズとソーセージというシンプルな中身であつたが、手が汚れない事、片手で食事が出来る事を考えると、クリーブスとシェフに頭の下がる思いだつた。

食事を終え、それぞれ定位置に戻る。エインは少し気になる書物があつたようで、別の本棚へ行つてしまった。そして書物を手にするなり、いつも通り床に座り込んだ。

ヴィヴィアンのほうは、もう脚立のいらぬ段まで読み進めてしまったので、今度は身を屈めて次の本を手にとつた。

体を起こすと、風も立っていないのに、オイルランプの炎が揺れた。

その時、本棚の一部に妙な影が出来た。

「？」

ヴィヴィアンが顔を近づけると、本棚の左隅に『X』と文字が掘つてあつた。

右端も見えてみると、『X I』と掘つてある。

もしかやと思い、エインに声をかける。

「教授。」

棚に、文字が彫つてあります。」

それを聞いたエインが、にやりと笑つた。

「なるほど。」

立ち上がつて、凭れ掛かつていた本棚を見回す。

「お、あつた。」

『I I I』か。多分、ヴィヴィの棚には『X』と『X I』じゃないかな？」

振り向いて笑うエインを、ヴィヴィが睨んだ。

「ご存知だったのですか？」

知っていてもつたいぶっていたか？

「ヴィヴィ。キミの本棚の左右の棚を見てご覧。恐らく文字は彫つてあるが、一つだけのはずだ。」

ちなみに、ボクの棚の両隣には、左隣の本棚の右端に『ⅠⅠ』、右隣の本棚の左端に『ⅠⅤ』と彫つてある。」

言われて見てみると、確かに両隣の本棚には中央に一つずつしか文字が彫つていなかった。左は『Ⅹ』、右は『ⅩⅠⅠ』だ。

「時計だね。これは知らなかったな…。」

エインが呟いた。

「数字は全部で十二だろう。」

東が『ⅠⅠⅠ』か。」

言いながら、エインが二つ隣の本棚に歩み寄り、上から書物をなぞっていく。そして「…あった。」と言って、一冊の書物を取り出した。

ヴィヴィアンが近付くと、エインはヴィヴィアンに書物の表紙を見せながら言った。

「『カインとアベル』。」

見せられたヴィヴィアンは、怪訝な顔をする。

「この東の棚は、植物に関する書物が収められている。その中で、それに当て嵌まらない書物は、これだけ。」

恐らくこれが正解だろう。

さて…。」

そう言つて、エインが書物をパラパラと捲る。

「『カインとアベル』は、旧約聖書『創世記』の第四章に登場する兄弟で、カインが弟のアベルを殺した後、エデンの園の東にあるノドへ逃げた物語だったね…。」

ページを捲る手を止める事無く、エインが話し始めた。

「『人間が吐いた最初の嘘』を吐いたカインは、神から『カインが耕作を行っても作物は収穫出来なくなる』事を伝えられ、呪いをか

けられる。

だが同時に、人を殺し、嘘を吐いた自分は殺されるのではないかと恐れたカインに、『彼を殺す者には七倍の復讐がある』と伝え、救いもしている。」

話しながらページを捲る指が、止まった。

見ると、捲るページがなくなっていた。だが、エインはその指先をじっと見つめている。

「やっぱり最後か。その辺は安直だね。」

鼻で笑いながら、エインが言った。

そして、開いている書物の最後尾のページをヴィヴィアンに見せる。

ヴィヴィアンを見ると、そこには直筆で、何やら書いてあった。

『equinox e printanier』。

「『春分点』、ね。」

エインは顎を一撫でし、にやりと笑うと、尻のポケットからメモを取り出した。そして、再度にやりと笑うと、うんうんと頷いて、ヴィヴィアンを見た。

「春分点は、別名を『白羊宮の原点』という。これは十二星座の『おひつじ座』を意味する。紀元前二世紀に、黄道十二宮が整備された時、『おひつじ座』に春分点があったからというのが理由なんだが、春分点自体は天球上では二五八〇〇年周期で西へ移動している。キリスト教では、イエス・キリストが生まれた時、春分点が『うお座』にあった。だから、キリスト教では『うお座』は神聖な星座とされている。ちなみに、今も春分点は『うお座』にあるんだよ。

春分は、一般的には昼と夜の時間が均等である日とされているけど、実際は違う。一日の間にも太陽の黄経は変わるため、春分がその日のいつかにより昼夜の長さに差が出てしまう。キリスト教を始め、国際的とまで言っていないほどに、今は春分が三月二十一日と定められているが、実際には、昼と夜の長さの差が最も小さくなるのは、この四日程度前になる、というのは豆知識。」

一息に喋って、エインが書物を閉じた。

「これがルールだろう。」

解り易く東西南北で行こうか。次は、『V I』の南だね。歴史研究に関する書物、以外のものがアタリだ。ヴィヴィは『I X』へ行つて、探してみてくれ。西の本棚は人類や文明、文化に関する書物を収めてあるから、それ以外のものだね。」

そう言つて、エインは先程までいた本棚へ歩き、本を指でなぞり始めた。ヴィヴィアンも言われたとおりにする。

中央に『I X』と彫られた本棚の前に立ち、左上から書物を見てゆく。

『エジプトに見る発展の秘密』、『歩き始めた人類』、『東の国々』…。上段、中段、その下、となぞり、一番下の段の中央で、ヴィヴィアンのなぞる指が止まった。

『ブッシュマンウサギの生態』。

これが…。

ヴィヴィアンは書物を抜き取り、ぱらぱらとページを捲る。そして、やはり最後のページに、メモはあった。

『Le soleil』。

そして、『La lune』。

「ありました。」

ヴィヴィアンが声をかけると、エインも「こっちもあったよ」と答えた。

「南には『Lumière d'espace dans la fenetre』とあった。

西には、『Le soleil』と『La lune』…。」

癖なのか、エインがまた、顎を撫でた。

「『Le soleil』。これは、太陽という意味のフランス語だけど、太陽は、フランスでは男性冠詞の『Le』を使う。つまり、『だんなさま』は太陽なんだろう。」

このルールで行くと、『娘さん』は『La lune』、月だね。

問題は『Lumière d'espace dans la fenêtre』の、『窓の隙間の光』か…。」

「まだ、北を見ていませんね。」

「そうだね。」

そう言つて、北に位置する『XII』の本棚へ近付き、ずっと書物を取り出すと、手馴れた手つきでページを捲り、やはり一番最後のページで止まった。

「あつた。」

エインはそう言つて、次いでくすくすと笑つた。

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインが書物を仕舞いながら、面白そうにヴィヴィアンを見た。

「『Je vous aime』。」

「？」

ヴィヴィアンがなおも首を傾げると、エインはヴィヴィアンに歩み寄りながら肩を竦めた。そしてヴィヴィアンの真正面に立ち、顔を近づけると、徐に「愛してる」と言つた。

一瞬、ヴィヴィアンが目を見開いた。が、すぐに表情を戻す。

その様子を、エインは面白いものを見るように眺め笑つた後、

「これは、ヒントではなく、答えかな。」

と言つて、懐中時計を見た後、西の『IX』の本棚へ行き、上から下までを目でなぞつて、「あ、そうか」と独りごとを言つた後、近くにあつた脚立に登つて、二段目に重ねられた本棚から素早く一冊の書物を取り出した。背表紙には、『Je vous aime』と書かれていた。

すると、本棚の後ろから一筋、光が挿した。

「おおっと…。」

ヴィヴィアンが近付いて覗くと、抜いた本の裏にだけ、隙間が開いていた。よく見ると、長細い窓だった。

「『窓の隙間の光』…。」

「なるほど。」

エインがにやりと笑ってオイルランプに近付くと、つまみを捻って火を消した。別のランプも消して行く。次々消して、最後のランプの火が消えたとき、窓からの光は、何かを指す光の筋になった。光は『図書館』の真向かいにあるオブジェの銀の部分に反射し、斜め下向きに折れ曲がった後、反対側の壁際に、そのオブジェと真正面に向かい合って立つ同じ形のオブジェの銀の部分に当たり、さらに折れ曲がっていた。

「めんどくさい事、考えたなあ…」。

まさか、この日のために用意したわけじゃないだろうな、コレ…？」

ぼそぼそと呟きながら、エインが筋を追った。

何度か銀色の何かで折れ曲がった光の筋は、『IX』の棚の目の前に、平行に並ぶ本棚のとある本を指していた。

近付いてみると、その書物にも『Je vous aime』と書いてある。

「と言う事は。」

ヴィヴィアンの手元を覗き込んだエインが、その書物のあった本棚と背合わせに並んでいる反対側の本棚を見た。そして、ヴィヴィアンが抜いた書物があった場所とぴったり一致する場所から、一冊抜き取る。

「これも『Je vous aime』。どうやら、『Je vous aime』は全部抜くようだな…」。

…が。」

エインがぐるりと振り返る。そこには、ルールに基くなら同じように並行に並んでいるはずの本棚が、不思議な角度に斜めになって置いてあった。隙間を少し開けて、隣の本棚は、それとは別の角度をつけて斜めになっている。

そして、光の筋は、その本棚の脇に当たって、途切れていた。

念のために調べるが、光が差したいものは、それではない事は明白だった。

「つくづくめんどくさい。」

そう言って、エインが苦笑した。

「どういう事ですか？」

ヴィヴィアンが訊ねると、エインは首だけで振り向いて、腰に手を当てた。

「光の筋は、『Je vous aime.』を辿っていくようだ。そして意地の悪い事に、『Je vous aime.』という本は他にもあるという事。今抜いた二冊の『Je vous aime.』には、どちらにも近くに『Je vous aime.』という本が複数あった。恐らく探せば、あの窓も、もう幾つかあるだろうと思う。」

光は、その先で今みたいに障害物に当たってはいけないから、光が何にも当たらず真っ直ぐ射すべき物に当たる瞬間を見つけないければならない。そして、光の向きは、日や時間帯によって大きく異なる。

その正解を示すものが、このメモ、という事。」

エインは尻のポケットからメモを取り出し、ひらひらとさせた。

「本の場所が入れ替わるという危険は……。」

「勿論あるね。」

その場合、この遺書もメモも、意味を為さない。

ここは、伯爵が亡くなつて以降、完全に立ち入りが禁止されていた。元よりここには古い書物しかないし、金目のものはないのは有名だったから、変な賊が荒らす事もない。

掃除は不要となれば、クリーブスさんを始めとして、他の従者が入ることもなかっただろう。

でも、それでも誰かが入るときは入るし、誰かが偶然に、重要な書物の位置を変える事だつて有り得ない事じゃない。その時は、ボクへ渡すべき物、ボクが探すべき物は諦めるように、という意味もあるだろうと思うよ。

『奇跡的にこの状態が維持されていた場合のみ有効な遺書』、と

いう事だね。」

一息序でに、エインが溜め息を吐いた。

「変わり者だよ。」

そしてボクの運命を試している。

『奇跡』が起きなければ、ボクに『決まり』に従うようにという意味があるだろうと思うよ。」

「意地の悪い人だ…。」と言って、エインが困ったような顔で微笑んだ。

ヒントを見付けた事で、『図書館』に竊る必要性は低くなった。エインの提案で、部屋に戻る事になった。

『図書館』を出る際、エインはヴィヴィアンにバスケットを持つよう言い、自身は書物を何冊か抜き、持ち出した。

外はもうすぐ夕暮れという頃合で、強いオレンジ色の太陽が、世界を照らしていた。

屋敷に戻ると、エントランスの花瓶の手入れをしていたクリープスに、バスケットを渡す。

「夕食はいつも通りでよろしいでしょうか？」

お嬢様はお部屋でお取りになる予定ですが、教授とトーマス様のお食事は大広間にご用意いたします。」

クリープスが言うと、エインがにっこりと笑った。

「お願いします。」

「アンは熱ですか？」

「はい。」

喉も痛むとおっしゃっていますので、風邪をひかれたかも知れませんが…。」

今、ウィンストンが街へ医者呼びに向かっています。」

部屋でゆっくりがよいでしょうね。

診察が終わったら、二人で顔を出しますよ。」

「お氣遣い有難うございます。」

是非、お部屋をお尋ねください。

お支度が済みましたら、大広間でお待ちください。」

そう言つて、クリーブスは脇にいたメイドに花瓶の手入れを託し、奥へ消えた。エインとヴィヴィアンも階段を昇り、各自自室へ戻つた。

ヴィヴィアンは整えられたベッドに倒れ込み、寝転がつたま窓を眺めた。

空は左から右へ徐々に闇が迫り、強い西日がカーテンと窓の影を長く伸ばして床に写している。

ふうと溜め息を吐くと、ドアが二度叩かれた。

「はい。」

返事をするが、何も言つて来ない。

ヴィヴィアンは起き上がり、ドアを開けた。目の前に、エインが立つて、笑っていた。

「食事に行こう。」

「はい。」

エインはヴィヴィアンの返事を聞いて、すぐに階段へと歩いて行った。

ヴィヴィアンも慌ててドアを閉め、エインを追う。

「食事が終わったら、そのまま大広間でさっきの続きをやろう。」

そう言つエインの手には、先程『図書館』から持つて来た書物があった。

大広間の前で立っていたクリーブスが、エインとヴィヴィアンの足音を聞くなり振り向いて、扉を開けてくれた。

礼を言い大広間に入ると、既に食事は並べられており、つい先ほどバスケットの中身を平らげた胃袋に空間を開けるほどの芳しい香りと、見事な湯気を立てていた。

さすがに量はどれも少量で、簡単に口に出来る物ばかりだった。

「わがままばかりで、申し訳ありません。」

エインが苦笑しながら言うと、クリーブスが笑った。

「お気になさいませんように。」

「ありがとう。」

ヴィヴィアンの椅子をひきながら、エインはもう一度苦笑して、奥のソファを指さした。

「食事が終わったら、奥のソファを使いたいのですが。」

「ご自由にお使いください。食後にお茶をご用意いたしましょう。」

「お願いします。」

そう言つて席に着き、「頂こう。」とスープに手を付けた。

続いてヴィヴィアンも食事を始め、クリーブスは一旦奥へと去つて行った。

スープは初日に出たじゃがいものポタージュで、今夜のものにはカリカリに焼いたクルトンが塗ってあった。

他には、細かく刻まれてゼリーで美しく固められた野菜に、薄ピンク色の味の濃いソースをかけた物と、少し厚めに切ったローストビーフが数枚、軽くソテーした洋梨とオレンジが並んでいた。

「クリーブスさんは、昔から人の腹具合を鋭く計る人だね。」

エインがローストビーフを切りながら、話し始めた。

「こちらがお腹が空いていないつもりでいても、次の食事までの間にどのくらい空腹になるかを予想して、適量の料理を用意してくれるんだ。そして好きな時に食べると言つて渡してくれる。」

仕方がないのでその時食べるんだけど、そのあと次の食事までは空腹を感じず、食事時にちゃんと空腹になる。

「凄い人だよ。」

「でも、教授が読書を始めたら、三日は飲まず食わずになるのでは？」

しかも、風の噂では、お声をかけても聞く耳を持たないと。」

ヴィヴィアンが意地悪に訊ねると、エインがナイフの手を止めて笑った。

「そんな事もあったな。それだと、さすがに三日分は無理だな。外にいる時は意識をするが、屋敷に一步入ると生活する事に無精になる。」

ボクの命は、ヴィヴィにかかっている。」

エインが肉からフォークを外し、軽くヴィヴィアンを指した。

「心得ております。」

クリーブスさんにも、学びませんと。」

「頼むよ。」

お気楽に言うエインを、ヴィヴィアンが上目遣いに見た。

エインは楽しそうに肉を切っている。

そういえば、屋敷に来てからを除いて、こんな風に二人だけで食事をしたのは、ロンドン港以来だ。という事は、出会ってそろそろ一週間になってしまう。

時間が経つのは、早い。

恋する太陽と月 8（前書き）

月齢、日の出時間などは、計算サイトを使わせていただいております。

恋する太陽と月 8

食事を済ませ、ソファへ移ると、クリーブスがメイドを連れて大広間へ戻ってきた。

クリーブスはメイドに片付けを指示すると、ソファへ紅茶とデザートを運んで来た。

「ガトーシヨコラはお嫌いですか？」

「大好きです。」

クリーブスの問い掛けにエインが即答すると、クリーブスは「存じております」と苦笑して、ヴィヴィアンを見た。

「…好きです。」

ガトーシヨコラは好物だった。だから、何となくそう答えるのが恥ずかしく、控え目に返事をしたが、クリーブスは見通したようで、満足げに一つ頷くと、エインより大きめにカットしたものをヴィヴィアンの皿に置いた。

その序でに、エインがテーブルの上に置いた書籍の山をちらりと見、

「ご利用がありがとうございました、お呼び下さい。」

とエインに言った。

「有難う。」

ああ、そうだ。アンの診察が終わったら、教えて下さい。」

「かしこまりました。」

クリーブスは一礼をして、大広間を後にした。

「さて。」

片付けのメイドもいなくなったあと、エインはソファの上に胡坐を掻いて座った。

「やろうか。」

そう言って、尻のポケットからメモを取り出す。

そして、ソファの近くにあった書類棚からインクと羽ペン、厚手

の紙を取り出すとさらさらと書き出してゆく。

「『娘さん』は、月。

『だんなさま』は太陽……」

太陽は月に訊ねる。『ぼくを愛してるってほんと?』

その問いに、月は首を振る。『感違いなさってますよ』

だが月は『こちらへどうぞ』と太陽を招き、しかし太陽は『さようなら娘さん』と去ってしまう。

「娘さんがもったいぶって、だんなさまを勘違いさせてしまう。でも本当は、勘違いさせている訳ではなくて、それが本心なんだ。でも素直ではない。」

だから、『まあいいけど』と言って、だんなさまに近くに来るように言うが、だんなさまも素直じゃないから、『さようなら』と去って行ってしまう……。

という歌なんだけど、歌本来の意味と、伯爵が持たせた意味は違うんだろう。

思うに、月と太陽の位置を歌っているのだと思う。この歌を解けば、正確な『窓の隙間の光』を導き出せる。」

「月と太陽の位置……?」
「そう。」

太陽も月も、日ごと時間ごとにいる場所が変わる。それも、刻々と。

月と太陽が、歌の通りの位置関係にある時に、正解の窓から差し込む『窓の隙間の光』が、正解の『愛してる。』を指すんだろう。」

エインが頬杖を突いた。

「ヴィヴィは、どう思う?」

問われて、ヴィヴィアンはメモを見つめた。

時々自身を無感情と思うヴィヴィアンは、詩的な表現は苦手だ。

「月と太陽が、見つめ合う時。満月でしょうか。」

太陽が東から昇った時に、月が西側へ沈む日……。」

困惑気味に、ヴィヴィアンが呟いた。

「見つめられたら、勘違いするもんなあ、男は。」

エインが笑った。ヴィヴィアンは、尚も困惑気味に、首を傾げた。
「でもそれだと、太陽が『さようなら』というのは、おかしいですね…。」

ヴィヴィアンがそう言うと、エインはにっこりと笑った。
「そう。」

太陽は立ち去らなければならないんだ。」

「では、逆でしょうか…。」

月が東から昇り、太陽が西へ沈む日…。

西へ消えようとしている太陽に、月が東へ戻るように言っているのでしょうか。でも、太陽は東へ向かう訳に行きませんから、『さようなら』と…。」

言っていて、妙な気分だ。

「太陽が東へ戻るのは簡単だ。次の朝を待てばいい。」

ちなみに、余談だが、月の出と日没は、いつも同じ感覚で行われている訳ではない。

日没は日々一分から三分の間隔ですれる程度だが、月の出は日々四〇分から一時間単位ですれる。昨日と今日で、月の位置はまるで違うんだ。そして、月の出がない日もある。厳密に言つと一日が始まった時には既に月は出ていて、その日は月は沈むだけ、という日が存在する。だが、絶対に月の沈まない日はない。

関係ないだろうけどね。」

「…。」

「まあ、『さようなら』と言っている以上、日の入り直前の話だと思っ。」

だから、月の位置が重要だな。

そして、月は太陽を招いている。

男は見つめられるのにも弱いけど…。」

エインが言葉を切つてヴィヴィアンを見た。

「傍に寄られるのにも弱い。」

「近くにいる、という事ですか。」

「そう。」

そう言いながら、エインは紙に絵を描き始めた。

横棒を引き、上に家が建った。さらに家の脇には木が立ち、星が空に散った。その空に、丸を二つ加える。

「娘さんは、素っ気無い。」

ちらりと太陽を向いているように、もったいぶるように、太陽の光を少しだけ反射する……」

なんとも言えぬ柔らかな笑みを浮かべながら、エインが片方の丸の内側に円弧を何本も足し始めた。

「太陽が出ている時に、月が出て来て、一日を過ごす。月の廻りの方が早いから、太陽が沈む前に、月が太陽に近づく。もう少しこちらにくれば、隣合える距離。でも、太陽は一足先に、去ってしまう。」

片方の丸が、細い細い三日月になった。

「新月直前の月、ですか……？」

「多分。月齢で言うと、〇・五から八といったところかな。」

この形の月で、且つ、日没と月没が近い日を探せばいい、と思う。」

エインが、ペン先を紙に丁寧に擦ってインクを落とした。

「少し冷えるな……」

大丈夫かい？」

「はい。」

問われて、頷いたものの、若干指先が冷えていた。肌寒くはあるが、堪えられない訳ではないので気にしなかったのが正直なところだ。

「この時期のフランスは、朝晩はまだまだ冷え込むんだ。室内で暖炉を焚いていても、暑いと思わないほどにね。」

温かい紅茶を用意してもらおう。」

そう言って、エインは立ち上がってクリープス呼びつけた。

「お呼びですか。」

「紅茶を入れ直してもらえますか。」

あと、ヴィヴィに何かひざ掛けを。」

「承知致しました。すぐご用意いたします。」

頭を下げてクリーブスが去った後、エインは振り向き様、窓の外を眺めた。ヴィヴィアンも釣られて見ると、ガラスに小さな水滴が付いていた。

「雨か。」

フランスはとにかく雨が多い。天気予報なんて当てにならない。

急に暑くなったり急に寒くなったり、急に雨が降ったり。」

言いながら、エインがヴィヴィアンを見て肩を小さく竦めた。

「ウィンストンさんが、お医者様を迎えに行っていましたね。」

道は大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫だろう。もうそろそろ着くと思うよ。」

そう言ったタイミングで、クリーブスが温かい紅茶とチョコレート菓子を少し持って来た。左腕の肘には、ひざ掛けがかけてある。

クリーブスは紅茶を一度テーブルに置くと、ヴィヴィアンにひざ掛けを見せて、「冷えは女性の敵です。」と言いながら手渡した。

「有難うございます。」

「他にお入用のものはございますか？」

暖炉に火を入れましょうか？」

「そこまで寒くないよ。大丈夫。」

「畏まりました。」

そして、紅茶を注いで、去って行った。

「さて、仕事をしようか。」

エインがパン、と手を叩いた。

エインが『図書館』から持ち出した書物は、太陽や月の出没時間

や位置を詳細に記したカレンダーのようなものだった。

予めこれを持ち出したという事は、エインは『図書館』でのヒントを見た時点で、大凡答えを見出していた事になる。それなのに解枳を求めたのかと、ヴィヴィアンは少し不機嫌になりつつも、渡された書物を開き、今日に近い『日没と月没が近い日』を探してページを捲った。

書物には一ページに一日、日の出と日の入り、月の出と月の入り時間が書かれ、方角と月齢が図で掲載されている。

エインが先程、月齢が〇・五から八と言っていたので、ヴィヴィアンは月齢を注視し、ページを捲った。

一七五五年四月二日、月齢二〇・五。

一七五五年四月三日、月齢二一・五。

一七五五年四月四日、月齢二二・五。

…。

一七五五年四月十一日、月齢二九・五。

一七五五年四月十二日、月齢〇・八。

… あった。

「ありました。」

ヴィヴィアンが声をかけると、エインがにこりと笑ってヴィヴィアンを見た。

「四月十二日です。月齢は、〇・八。」

「日出時間、六時二五分。月出時間、六時五八分。日没時間、一九時四一分。月没時間、二〇時三四分。」

前日は、月が太陽を追い越して先に沈んでしまっし、翌日は月齢が好くない。」

書物も見ずに、エインがすらすらと言った。

「ご存知だったのですか？ 答え。」

苛立ちを隠せず、ヴィヴィアンがついムツとして聞くと、エインはヴィヴィアンの内心を悟って、

「ごめんごめん。月齢までは覚えてなかったんだ。」

日の出や月没時間は、大体把握をしていたんだけどね。」

と言いつつをした。が、すぐに表情を戻して顎を撫でながら、

「十二日。明々後日か……。」

と呟いた。するとそこへ、クリープスがやって来た。

「教授。お嬢様の診察が終わりました。」

「おや。いつの間に。」

エインは大袈裟に驚いて、胡坐を掻いていた脚を解いた。

「お手隙でしたら、是非お嬢様にお声掛け下さいますと……。」

テーブルの上の書物を見たクリープスが、恐縮して低頭姿勢で言う、エインは一瞬ヴィヴィアンを見て、そして頷いた。

「そのつもりです。すぐに向かいますよ。」

「有難うございます。」

クリープスが頭を下げると、エインがヴィヴィアンを見て言った。

「少し休憩をしよう。」

「はい。」

ヴィヴィアンが頷くと、エインは立ち上がって、足早に大広間を出て行った。エインの背中を見送ったクリープスが、ヴィヴィアンを見る。

ヴィヴィアンはヴィヴィアンで、行くべきか、行かぬべきか判らず、腰を上げられないまま、クリープスと見つめ合った。

クリープスは、ヴィヴィアンの戸惑いを察して、にこりと笑った。

「お嬢様がお待ちです。」

「お邪魔では……?」

無表情でも気弱な心境を声で悟ったクリープスが、ゆっくりと首を振った。

「行って差し上げて下さい。」

クリープスの言葉に、ヴィヴィアンが重い腰を上げた。そして、すれ違いざまクリープスに会釈をして、アンの部屋へ向かった。

ヴィヴィアンを見送ったクリープスは、一人、ヴィヴィアンの背中を見つめ、苦笑した。

恋する太陽と月 9

『運命は、変えられない。』

誰の言葉だっただろうか。恐らく無名の、哲学者の言葉だったに違いない。

無名には無名の理由がある。この旅を始めてからすぐに、そう思ったものだ。

病弱の”姫君”の元へ向かう足取りは、重い。

何度、この廊下を歩いただろう。何度、あの塔へ入っただろう。品の良い素振りには得意なのに、結局自分の思うがまま運命を動かそうとするあの手付きを見る度、胸が締め付けられる思いをし、そしてその都度、哀しい思いをする。

もう終わらせたい。

何度願っただろう。これで終わりにしたい、と。

何度も何度も、繰り返し願った事だ。

『運命は、変えられない。』

変えてはならぬものだとか教え込まれ、忠実に従って来た。

しかし、心に嘘は吐けなかった。だから、意のままに旅をする決意をした。

どうあっても、『そうならない』運命を見つけてみせる。

中央階段を上がって、長い長い廊下を行くと、突き当りでエインがこちらを見て立っていた。

待っていたのだろうか。

表情を変えぬまま、首だけを傾げると、エインはにこりと笑って、アンの部屋の扉を叩いた。

「どうぞ。」

扉の中から声がして、次いで扉が開いた。中にはメイドが一名、いるだけだった。

「お嬢様は、奥にいらっしゃいます。」

そう言つて部屋の中へ招かれ、そのままベッドルームへ通された。ベッドルームは、アンの部屋の奥の螺旋階段を上がつた先にある、シャトーの屋根上にある。

オイルランプが二つだけひっそり灯るベッドルームは踏み込む事に躊躇する程に暗く、その奥にどんと置かれた天蓋付きの大きなベッドは、不釣り合いなほどに煌びやかで奇妙なものに見えた。

「アン。」

エインが声をかけると、ベッドに入つて沢山のピローに凭れ横になつていたアンが「来て下さいましたのね。」と返事をした。カーテンで顔が見えないが、声はいつも通りだった。

「ヴィヴィも来てますの？」

「おります。」

「お顔を見せて頂戴。」

エインではなくヴィヴィアンの顔を真つ先に見たいという言葉に、やや居心地の悪さを感じつつも、ヴィヴィアンはアンのベッドへ歩み寄つた。

「ヴィヴィアンです。」

声をかけながらカーテンを退けると、暗がりで微笑むアンが、ヴィヴィアンに向かつて手を差し出していた。

その様子に、ヴィヴィアンは一瞬、どきりとする。

「…アン…。」

「ヴィヴィ、手を取つて下さいな。」

差し出した手を握れというアンに、ヴィヴィアンはそこはかとなく恐怖を感じた。何故かは解らない。暗いせいで、アンの手が青白く見えたからかも知れない。

ヴィヴィアンが恐る恐る手を握ると、アンがにこりと笑つた。

「ご加減は、いかがですか…？」

「大丈夫、有難う。少し風邪をひいたようですのよ。ヴィヴィアン。」

「そう言っ、アンはヴィヴィアンをぐいと引き寄せ、顔を近づけて呟いた。」

「運命には、逆らえませんかよ…。」

ヴィヴィアンははっとして、アンの顔を見た。アンの顔は思っていた以上に近くにあつて、香水なのか、薔薇の香りがふわりと鼻を掠めた。ランプの明かりがヴィヴィアンによつて遮られ、光の当たらない中で、きらりと光るアンの瞳が怖かった。

「……。」

突然の事に頭が真つ白になり、身動きが取れないヴィヴィアンの手を、アンがぎゅっと握り締め、すぐに離れた。

束縛が解かれたように、ヴィヴィアンの体も動くようになり、ヴィヴィアンはよろよるとアンから後退りをして離れた。

エインを見ると、彼は悲しそうな顔で闇の中に立っていたが、ヴィヴィアンの様子を見、すぐに部屋から出るよういつけた。

ヴィヴィアンは躊躇いもなく、逃げるように部屋を出た。アンには、挨拶もしなかった。

ヴィヴィアンが去った後、エインがベッドに近付くと、アンが微笑んだ。

「どうかしまして？」

問うアンは、まるで死人のように白い顔をしていた。時折思う。

既に、死んでいるのではないだろうか、と…。

「ヴィヴィに、何を？」

エインはにこやかに、穏やかに問うた。しかし、心の底では、黒いものが蠢いている。

何を、した？

「『運命は変えられない。』と、教えて差し上げました。」

アンもにこやかに、穏やかに答えた。

「アン…。」

「父の言いつけを、護つて下さるのでしょう、教授？ 私はそう聞いておりますのよ。」

「アン……。」

「教授。教授の居場所は、ここですよ。フランスですよ。スコットランドではありませんの。ボルドーですよ。エディンバラではありませんの……！」

この屋敷ですよ！」

穏やかには装いだっただのか、アンの言葉が徐々に強くなって行った。尚も言葉を発しようと、アンが息を吸い込んだのを見て、エインがアンを睨んだ。

アンにこのような顔を向けるのは、出会って初めてだった。

エインの視線に、アンの表情が強張った。

「アン。」

何度、この話をしたでしょうね？

何度も、しましたね……。

私の気持ちは変わりません。

私の居場所はここではありません。

私の居場所は……。」

自分の居場所は……。元より、どこにもない。

「ここではないんですよ。」

エインの視線が、言葉とともにアンを射抜いた。アンは強張った表情のまま、所在無沙汰になっていた手を、膝の上で握り締めた。

「三日後、伯爵の遺言の謎が解けます。」

そうしたら、すぐにスコットランドに帰る予定です。

あと三日、お世話になりますよ、アン。」

エインがゆっくりと言うと、アンは俯いて、こくりと小さく頷いた。

「クリープスにも、お伝えになって下さいな……。」

「解りました。」

そう言っ、エインが踵を返すと、アンが呼び止めた。

「教授。」

呼ばれて、エインは肩越しにアンに振り返った。

「……。」

「……。」

何を言おうとしたか、アンがエインの表情を見て、口を噤んでしまった。

暫し沈黙が訪れ、居た堪れない空気が二人を包む。

やがて、エインが背筋を伸ばして呟いた。

「運命は、変わるんですよ……。」

『運命は、変えられない。』

誰の言葉だっただろうか。恐らく無名の、哲学者の言葉だったに違いない。

無名には無名の理由がある。この旅を始めてからすぐに、そう思ったものだ。

病弱の”姫君”の城を出、月明かりの照らす廊下で、手のひらを見つめる。

まだ、姫君の手に握られているような感覚が残っている。

冷たく、骨ばって、か細い手……。

何も手に入られない、富だけに溢れた彼女の言葉に、何度喉元が熱くなっただろうか。

生まれた時から何もなかった自分の胸に、彼女の言葉は深く突き刺さる。

何度も何度も突き刺さった。

そろそろ、傷も癒えなくなってきた。

もう、終わらせたい……。

翌日、アンは朝から伏せっていて、部屋から出て来なかった。クリーブスの話では、熱が下がらず咳も酷いらしいが、風邪が悪化しただけだと先に医者から処方された薬を飲み、眠り続けているという事だった。

天気は快晴で、薄い煙たい青空が、遮蔽物のない農園地域を覆っていた。

エインは朝食後すぐにヴィヴィアンに暇を出し『図書館』に籠ってしまったので、ヴィヴィアンは独り屋敷の辺りを散歩に出かけた。昨夜の雨もすっかり乾いた小路を、当てもなくうろつく。

空気は澄んでいて、時折風に乗って森の匂いが漂って来た。その中に、甘い匂いを感じた。

どこかに花畑でもあるのだろうか。農園が集まる場所だから、あっても可笑しくはない。

ベルトワーズ邸に着いてからというものの、本の臭いしか嗅いでいなかったから、花の香りでも吸い込みたい気分だったので、ヴィヴィアンは香りを追って彷徨った。

よい散歩と言う程にあちこちにある森を入ったり、川を眺めたりして花を探したが、どうにも花畑には辿り着けない。風は北から吹いていたので、ヴィヴィアンは屋敷の北側の森を探索する事にした。北側にある、屋敷に一番近い森は他の森より少し大きく、川に面しているようだった。その上、何やら森の木々の上からは、青い屋根らしきものが見える。誰か住んでいるのかと、ヴィヴィアンは歩みを速めた。

小路は真っ直ぐ森へ伸びている。近付くにつれ、森の木々の間を縫うようにベルトワーズ邸の周りにあるような囲いが立てられているのが見えた。森に入る際にはアーチを潜る様になっていて、その先へ行くと、手入れをしていないのか木々と茂みが行く手を阻んで

いた。それを無理矢理抜けると、突然森が拓け、花の咲き乱れる小さな庭が姿を現した。がさらに茂みに覆われた道は続き、そこを抜けると池ほどに小さな湖が現れた。

湖は透明度の高い水が風で小さく波打ち、日の光を受けてきらきらと輝いていた。湖の向こう、木々の間にちらりちらりと花畑が見えたので、奥へと進むと、今度は大きなロッジのような建物が現れた。

白い壁に、大きな窓、緑と花花の咲く大きな庭とレンガで造られた人工の川に囲まれ、川には小さな可愛らしい橋がかかっている。

橋を渡り、庭へ入る。

建物の向こうには木がないらしく、ヴィヴィアンはやや興奮気味に建物の奥へと進んで行った。

見た事のない植物と花の生い茂る庭を横切り、橋のかかっている川を飛んで渡り、植木が隠しかけた細い細い隙間を抜けると、ぱっと視界が開け、強い風が舞った。

一瞬目を閉じ、ゆっくりと開けると、ヴィヴィアンは目を見開いた。

目の前には少し幅の広い草地が延々と左右に伸び、その向こうには大きなガロンヌ川と、先に海が広がっていた。崖になっているようで、近付かなくても高い崖だと解るほどに、手前の川が下の方に感じられた。

こんなに海に近いとは、解らなかった。屋敷の方は、こちらより少し下がっているのだろうか。

ドレスを大きく揺らす風には、少しも潮気を感じず、さらさらと頬を撫でて行く。

何故だろう、ヴィヴィアンは不思議なほどにこの場所が気に入った。

少なくとも、まだ三日はボルドーにいる。明日もここへ来よう、などと珍しく心が躍る。

空を見上げると、屋敷を出た頃より少し陽が高くなっていた。

エインが心配しやしないか。否、エインは時間も忘れて読書に耽っているに違いない。ならば、困るのはクリーブスか。

色々考え、ヴィヴィアンは一時屋敷へ戻る事にした。時間があれば、また来ればいい。

そう思い、踵を返し、植木の間へ入り込んだ時だった。腕に何か冷たい感覚が走った。葉にでも触れたかと思い、何事もなかったかのように庭を抜け、元来た小路を戻る。そして屋敷のアーチを潜った時、『図書館』から出て来たエインがヴィヴィアンを見て険しい顔をした。エインは速足でヴィヴィアンに近付くと、腕を力いっぱいつかんでヴィヴィアンを引き寄せた。

「どこへ行っていた？ 何をしていた？」

初めて見るエインの表情に、ヴィヴィアンは大いに戸惑い、森の中の建物や庭の事など旨く説明出来ず、口籠った。何をそんなに怒っているのかと眉を顰めると、エインはヴィヴィアンが何も気付いていないと理解した。

そして、握っていた腕をヴィヴィアンの目の前にぐいと上げる。

自分の腕を見たヴィヴィアンは、今日二度目、目を見開いた。

肘の横辺りに細く切られた痕があり、傷口はぱっくりと割れ、血が出ていた。出血は酷く、何故気付かなかったのかと、自分自身で驚いた。

余りの状態にヴィヴィアンが言葉を失っていると、エインがヴィヴィアンの手を曳き、屋敷に入るなりクリーブスの名を叫んだ。

様子がおかしいのを感じ取ったクリーブスが慌ててエントランスへ駆けつけると、未だかつて見た事のない形相のエインと、腕を血まみれにして啞然としているヴィヴィアンがいて、彼も大層驚いたが、すぐに二人を大広間へと誘導し、傷の手当てに取りかかった。

出血は酷いが傷は浅く、ヴィヴィアンは事なきを得た。しかし、エインは怒りが収まらないのか、今日はこれから一時も屋敷から出てはならないとヴィヴィアンに指示し、食事をそそくさと済ませて自室に籠ってしまった。

エインの様子に、無表情ながらもすっかり怯えてしまったヴィヴィアンは、言い付けに従い、まだ半日もあると言っのに自室に入って鍵をかけた。

ベッドに横になり、包帯を撒かれた腕を見る。

本当に、何故気付かなかったのだろうか…。一体いつ、切れてしまったのだろうか。植木の間を通った時か？　そう言えば、何か冷たい感覚があった気がする。

しかし、葉によってこの様な傷を負うか？　何か刃物でもあったのだろうか。何故、調べようと言う気が回らなかったのか…。

いつもの自分なら有り得ない状況に、ヴィヴィアンはまだ啞然としていた。

幼い頃、両親が事故で死に、親戚や兄弟がいなかったヴィヴィアンは、軍管轄下に置かれた養護施設に引き取られた。

そこで、基礎教養を始め、将来的に軍部に席を置ける者、イコール軍人として必要な、在りとあらゆる知識と技術を身に付けさせられた。

そんな生い立ちであるから、この傷は有るまじき失態による傷である。

何故、気付かなかった…？

ヴィヴィアンは、怪我をしていない腕を目の上に被せ、目を閉じた。

視界を暗くすると、どつと疲れが押し寄せた。

風に吹かれたせいかわ、ショックによるものか。

思考の巡りも俛ならぬまま、ヴィヴィアンは眠りに落ちた。

あの人はどこ…。

確かこの庭を横切って…。

恐ろしいほどに花の咲き乱れるこの庭を横切って…。

茂みの向こうに、湖が…。

湖が見える…。

その湖の畔に…。

深い樹木に囲まれた、小さな湖の畔に…。

足が縛れる。

でも走らなければ。

手遅れに、手遅れにならないうちに…。

間に合わなければ。

間に合わなければ、また…。

ザクザクと芝生を踏み潰す足音に紛れて、ドンと音がする。

一回…。

ドン。

二回……。

無事で、無事でいてくれ。

茂みを潜る。

細い枝が肌を引っかく。

痛い…。

ああ、でも、あの人はもつと…。

手で掻き分けた茂みの先が拓けた。

湖が見える。

この湖の、右の畔…。

ああ…。

また…。

また、間に合わなかった…。

駆け寄り、横たわる軀を抱き起こす。

小さな、白い顔が苦痛に歪んでいる。

しかしもう、息はない…。

ああ…。

これで何度目だ…。

何度目だ…。

あと何度…。

あと何度、この軀を抱き起こせばいい…。

耳元で、ごうという轟音が聞こえ、驚いて目を醒ます。

眼球だけを動かして部屋を見回す。

カーテンの隙間から光が差し込み、窓の外からは小鳥の囀りが聞こえる。

屋敷の中はしんと鎮まり返っていて、物音が聞こえない。

ゆっくりと起き上がると、肘辺りにちくりと痛みが走った。目をやると、捲り上げられた袖の下から、白い包帯が覗いている。

ベッドから降り、のそのそと窓に歩み寄る。カーテンを開けると、東の空が明るくなっていた。

寝てしまったのか。それも日が変わるほど長時間。

窓に手を触れると、ひんやりと冷たい。そこでやっと、部屋も冷え切っている事に気付いた。

何もかもが麻痺している気分だ。

ふうと溜め息を吐く。

こんな感覚は、”初めて”だ。

何か、”変わった”のだろうか。

”今まで”になかった、方向へ進んだのだろうか。

”先”が見えなくなった。

この道は、”どこへ”続くのか…。

不意に、ドアが叩かれた。

「はい。」としゃがれた声で返事をする。昨日の風で、喉をやられたのだろうか。

ヴィヴィアンの返事を受けてドアがゆっくり開き、中を窺い見るように、エインが隙間から部屋を覗いた。顔には、いつもの微笑みが浮かぶ。

「…教授…。」

「おはよ。」

おはようと言われ、改めて今が朝である事を確認する。

「…おはようございます…。あの…。」

「ん？」

部屋に入り、後ろ手にドアを締めるエインに向かって、ヴィヴィアンが俯いて何か言いかけた。だが、そのまま何を言ったらいいか解らなくなって、黙り込んでしまった。

「傷は？」

エインに問われて、ヴィヴィアンは首だけを振って応えた。

「何があつた…？」

昨日も聞かれた事だ。だが、やはり答えようとすると、言葉が旨くまとまらない。

「…。」

「答えたくない？」

ヴィヴィアンが首を振る。

「答えられない？」

今度は首を縦に振る。

「解つた。聞かない事にする。」

エインの言葉に、ヴィヴィアンが驚いて顔を上げた。

「無理には聞かない。」

まとまったら話なさい。

ただし、危険な事はしない事。」

「いいね？」と釘を刺すエインは、相変わらず優しく微笑んでいた。ヴィヴィアンはこくりと深く頷いて、エインを見据えた。

言いたいのだ。でも、何も言葉にならない。

昨日見た森の庭も、花や橋の事も、海の事も。その時怪我をしたのだという事も、何もかも話したいのだ。なのに、単語ばかりが浮かんでは消え、文章にならなかった。

でも恐らく、エインはヴィヴィアンの内心に気付いているのだっ

た。

ふと、罪悪感が込み上げる。この屋敷に来てから、自分の様子がおかしい事に自身で気付いていた筈だし、それを包み隠すべく様々な訓練を経てエインの元を訪れた筈なのに、何一つ満足に行えていない。

ただ”居る”だけになってしまっている。

それでは、”居る”意味がない。

ヴィヴィアンが唇を噛んだ。だが皮肉にも、こう言う時に限って、自分の表情筋は動かない。

そんな内心すら気付いているエインは、仕方なさそうにヴィヴィアンに苦笑すると、ドレッサーの椅子を持ち上げヴィヴィアンの目の前に置いた。そしてベッド脇にあった椅子をその横に置くと、かたまるそつに座って片脚を上げ、膝を抱いた。

膝に顎を乗せ、重い頭を支えると、窓の外を見つめる。

まだまだ陽は登って来ないが、空には太陽より一足先に昇った月が、白く細く輝いていた。

「ボクも孤児だね。」

とある施設に保護されて、幼少期を過ごした。」

エインが、突如身の上話を始めた。そんなエインを呆然と見つめながらも、ヴィヴィアンはエインが運んだ椅子にゆっくりと腰を下ろす。

「友達は沢山いたし、愛情も満足に注がれていたのに、表情を操る能力がなくて。」

成長して知識を身に付けて行くにつれ、それが自分の内部にある心の闇のせいだと気付いた。

ボクは自分自身に誇りを持てなくて、いつも何かに脅えていた。でも何に脅えているのかボク自身には解らないし、ボクの周りの人たちも、ボクがそんな闇を抱えているなんて思っていなかった。

どうすればいいのか頭で考えても解る訳がない。そこで、ボクは啓き直る事にした。

好きな事をして、自分がしたい事だけをして。勿論他人を敬ったり、尊ぶ事を蔑ろにはしなかったけど、それ以外なら何でもやった。善い事も悪い事も。

ある時、二度とその施設に帰れないと言う仕事を与えられた。棄てるものはなかったのに、ボクはそこから離れたくないと思っていた。

その時、ボクは何に脅えていたのかを知ったんだ。

ボクには、抛り所がなかった。」

「抛り所…。」

繰り返すヴィヴィアンを、エインが見て笑った。

「ボクには護りたいものがなかった。」

護りたいもの…。

「それは意図的に作れるものではなかったし、かと言って必ず見付かるかも解らない、不安定なものだった。

だから、それを作り出す事が出来るか解らないボクは、ボク自身の自信のなさに脅えていた。

確固たる何かが足りなかったんだ。

だから、ボクは仕事を請けることにした。

護りたいものを探せる自分を探しに。」

窓を向いたエインの横顔が、ふと黄昏た。視線は窓の外の、ずっとずっと遠くを見つめているようで、心はここにはない。しかし、不思議とヴィヴィアンは、エインの心と隣合わせにいる気がした。

部屋は相変わらず寒いのに、いつしか寒さの事など忘れ、二人の間に不思議な空気が満ちて行く。

「仕事は、勿論好きな事だったんだ。ずっとやりたい事だったし、これが叶えばどんなに光栄かと思っていた事だった。

施設を離れるのに多少の勇氣は要ったけど、ボクはそれ以来、ずっとその仕事をしている。

否…。」

エインが自らの言葉を否定した。そして、不思議な一言を呟く。

「もうその仕事は、終わったかも知れないけどな…。」

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインが膝の上に頬杖を突いた。
「ずっと旅をして来た。」

当てもない旅。呼ばれては出向き、見付けては調べ…。

そのうち、見付けたんだ。

”護^{彼女}りたいもの”を。」

エインが目を細めた。

「彼女に出会って、初めてボクは自分の心と表情をイコールにする事が出来た。」

彼女が生きてさえ居てくれれば、それだけで十分だった。そのためなら、命なんて要らないと思った。」

そう言うエインの手元が、きらりと光った。昇り始めた太陽の光を受けて、何かが光ったのだ。

注視すると、エインの左手の薬指に細い銀のリングを見付けた。

それはエインの指に食い込んで、手に同化してしまっている様に見えた。

しかし、指輪を見ても、ヴィヴィアンの心は何故か凪いだまま、穏やかだった。いつぞやの様に動揺もしなかった。

エインが、立ち上がった。

「誰にも話した事がない話。」

口に指を当てて”内緒”と言うエインを見上げて、ヴィヴィアンはゆっくり頷いた。

エインはヴィヴィアンにつこりと笑うと、「またあとで。」と言って部屋を出て行った。

ヴィヴィアンはエインの背中を見送って、昇る太陽に振り向く。

ヴィヴィアンは太陽に向かって一つ頷くと、腰を上げて体が千切れるほど目いっぱい体を伸ばした。

護りたいもの。

何があっても揺らがないのは、それが正解である証だ。

エインが出た後、部屋にいても退屈だと大広間を目指しているとエントランスでクリーブスと出くわした。

「おはようございます、トーマス様。」

お怪我はいかがですか？ 包帯を替えましょう。大分緩んでしまっていますから。」

「有難うございます。お願いします。」

ヴィヴィアンが言うと、クリーブスは大広間で待つよう言い、小走りで奥へ消えた。

大広間に入ると、奥のソファセットのテーブルに紅茶のカップが一つ、ぽつんと置かれていた。恐らく、エインに用意されたものだろう。だが、エインの姿はない。

しかし、窓の外に人影が見えたので覗き込むと、エインが西の方を向いて立っていた。

「トーマス様。」

クリーブスが包帯を持ってやって来た。

クリーブスはヴィヴィアンをソファに座るよういい、ヴィヴィアンの脇に膝をついてしゃがむと、解け掛けた包帯をゆっくりと腕から解いて行く。

包帯の下の薄いガーゼは赤茶に汚れていた。ガーゼを剥がすと、まだケロイドにもなっていない傷口が露わになる。

「痛みますか？」

「いえ。大丈夫です。」

言葉を交わしながらも、クリーブスは手際よくガーゼを換え、新しい包帯を巻き直す。傷口には、クリーム色の軟膏を塗ってくれた。ヴィヴィアンは、ふと気になって、クリーブスにあの建物について訪ねた。

「北の方の森に、綺麗な庭のある建物を見付けました。」
ヴィヴィアンが言うと、クリーブスは包帯を巻く手を止め、ゆっ

くりヴィヴィアンを見上げた。暫し視線を交わし、クリーブスは小さく笑いながら、再び手を動かす。

「あの建物は、亡きご主人様が、”海の見える家”と呼んでおられました。」

ご主人様の御祖父が若い頃に所望されて建てられた建物で、潮に強い植物を庭に埋め、人工の川に水を浄化しながら流せるよう特殊なポンプを設置したそうです。

体の弱かった奥様のために建てられた建物だとか。」

「湖がありました。」

「あの湖も、人造湖なのですよ。庭の小川の水は湖と庭を循環しております。」

「そうなんですか。」

「もう長い事手入れをしておりますでしたので、道もないようなものになってしまっているのでは……。」

クリーブスが寂しそうな顔で笑った。確かに、道には草が生い茂り、通るのに不便を感じた。

「あそこに出入りする方はもういないのですか？」

ヴィヴィアンが訊ねると、包帯を巻き終えたクリーブスがずっと立ち上がって、にこりと笑った。

「はい。教授も森へは立ち入りませんから、ご存じないのではないかと。」

「そうなんです。綺麗なお庭なのに。」

ヴィヴィアンが俯くと、クリーブスがふふと笑った。

明日にはこの屋敷を去れる。

そう思うと、エインは胸が軽くなる思いだった。

このまま何もなければいい。

ヴィヴィアンの傷も、ただ不注意で出来た傷であればいい。

視線を感じて振り返ると、大広間の窓からヴィヴィアンがこちらを見ていた。影になって見難いが、腕の包帯が綺麗になっていた。巻き直してもらったのか。

エインは一步一步踏みしめながら窓に近付くと、ヴィヴィアンと真正面に向かい合った。硝子越しに見るヴィヴィアンは、硝子の歪みのせいで異空間にいるような不思議なぼやけ方をしていて、しかし、とても美しかった。

スコットランドに帰ったら、少しはゆっくり出来るだろうか。

エインはふと、ヴィヴィアンを手招きした。

ヴィヴィアンは一瞬きよんとしたが、すぐに踵を返して大広間を出て行った。

暫くして、コツコツという足音が聞こえ、ヴィヴィアンが駆け足で現れた。

無表情なのに、走っているせいで頬だけがほんのり赤くなっているその様子が、なんとも愛らしく思える。

ヴィヴィアンはエインの目の前まで走り寄って、ちょうどよい距離を開けて止まった。その測ったようなちょうどよさも、エインには心地好い。

実は、然して用はなかった。ただ、窓越しでは物足りなかったのだ。

エインは少し考えて、この辺りの事を説明し始めた。

エインが突然何かしらの説明をし出すのにも慣れてしまったヴィヴィアンは、何の疑問も持たずにエインの話を聞く。忙しくあちこちを指差すエインの指先を見つめながら、時折、質問をする。

話が反れたり、元に戻ったり、妙なトリビアが出て来たり、耳を掠めるお互いの声を体全体で取り込みながら、この時の心地好さに身を委ねる。

これがずっと続けばいいのに。

どこかで必ず、途切れてしまう…。

ふらふらしているうち、結局『図書館』に籠る事になり、エインはシャトーに入るなり本に夢中になってしまいうし、ヴィヴィアンはやる事がなかったので、エインに倣って読書をする事にした。本を扱い慣れてしまったからか、読書も耽つてしまつと時が経つのを忘れる。

夕方だとクリーブスが呼びに来るまで、二人は黙々と読書をしていた。

驚くべき事に、エインは『図書館』の書物の殆どに目を通してしまつていて、残るは入り口付近の本棚数台のみ、という事だった。

「元々読んじやった本だからね。」

そうは言うが、それでも一冊一冊丁寧に読んでいるようであつたし、時折声を殺した笑い声が聞こえたから、やはり隅々まで目を通していているのだろう。

野菜中心の夕食を済ませ、ヴィヴィアンが大好物だからと言って食後のデザートにガトーショコラを用意され、紅茶を飲みながら食事の余韻に浸っていると、また窓を雨が叩き出した。

「明日の朝は晴れるといいんだけどね……。」
そうだ。

明日ついに、あの詩の秘密が解ける。

翌朝。

待ち合わせを六時頃と決めていたエインとヴィヴィアンは、示し合わせたかのように同時に起床し、同時に部屋を出た。

廊下で出くわすと、エインが声を殺して腹を抱えて笑った。

「行こう。」

エインが小さな小さな声で言った。

屋敷の者はもう既に何人が起きて仕事をしているようで、時折何かしらの小さな音が聞こえた。

エントランスを出、空を見上げると、東の方に少し雲がかかって
いた。

「まずいな…。」

今日は方位角七七度の方角に太陽が昇る。真東よりも少し北側
なんだ。」

東の空、やや北側にも薄雲が伸びていた。日の出の妨げにならな
ければいいが。

しかし、一方で雲は結構な速度で南へ向かって動いてもいた。

「あの速さだと、それなりに強い風が吹いてるだろう。ぎりぎり、
雲が散ってくればいいんだけど。」

取り敢えずは『図書館』に行こう。」

そう言って、エインは『図書館』へ向かった。扉を開ける時、「
あ、鍵掛けんの忘れてたよ。」などと呟いたが、そんな事などどう
でもいいかのように扉を開け、脇にあったオイルランプに火を灯し
た。

『図書館』は相変わらず真っ暗で、ランプ一つでは殆ど役に立た
ない。それでも、何度も入った場所だ、足の運び方などは体が覚え
ていた。

エインは階段を下り、右手へ曲がった。そして東の『III』の

棚を通り過ぎ、隣の『ⅠⅠ』の棚の前で止まった。

近くにあつた脚立を登り、二段目に重ねた本棚の二段目から一冊、書物を抜き取る。窓があるようで、後ろからほんのりとした光が溢れた。エインは脚立を下りて、ヴィヴィアンに書物を手渡した。

『Je vous aime.』

『愛している』という意味のフランス語を刻んだ書物は、この『図書館』に何冊もあつた。その中で、一番最初に光を取り込む正解の窓があるのが、北東を背に立っている『ⅠⅠ』の本棚にあつた、この書物なのだった。

「さて、一先ず後は、光が差すのを待つだけ……。」

「ごそごそとスラックスのポケットから懐中時計を取り出すと、」
「あと十分か。」と呟いた。

ヴィヴィアンは、数日前この『図書館』で見た単語を順繰りに思い出していた。

『春分点』。『太陽』。『月』。『窓の隙間の光』。

そういえば、一つ何も使用していない事に今更気付いた。

「教授？」

「ん？」

「『春分点』というヒントは、どこで使うのですか？」

「ああ、あれはね、この”後”なんだ。」

「後？」

「そう。軽いひっかけだね。」

エインはそう言つて、脚立に座つた。

「この時点での『春分点』を組み込んでしまうと、真つ先に狂うのは実施日になる。そうすると、少なく見積もってもその先数力月は、今日みたいな日は訪れない。」

それに……。」

エインがヴィヴィアンに手を差し出した。本を寄越せと言う事だろう。ヴィヴィアンは渡されていた書物をエインに返した。

エインはそれをパラパラと捲りながら、

「あの『春分点』に関しては、きちんとしたタイミングが必要なこの段階では余りに曖昧すぎる。」

と言って、ヴィヴィアンにやりと笑うと、開いていた書物をヴィヴィアンに見せた。

そのページには、”おめでとう、エイン！ ベルトワーズより”というメモと、ある一文にだけ線が引いてあった。よくよく見ると英文なので読んでみると、『彼女に告げようにも、今考えた言葉はきちんとしたタイミングが必要なこの段階では余りに曖昧すぎた。』と書いてある。しかも、ページの隅に書かれた章のタイトルには『春分点』とあるではないか。

ヴィヴィアンが眉を顰めると、エインは少々嘲笑気味に鼻で笑って、

「意地悪いだろ？ 伯爵はなるべくボクに秘密を解かせたくないんだ。」

と言って、ぽんと音を立てて書物を閉じた。

「そろそろだな。猶予は五分も無いから、先に説明してしまうね。」

光は恐らく、先ずこの真正面にある変な枝が持つてゐる槍の先に当たって反射する筈だ。あの槍の先は光の角度から三十度北に向いている。しかも斜め上に傾斜までついている。だから次に光が差すのは、あれだ。」

と言って、エインが北北東の方角の天井付近を指さした。そこには、天井から吊るされた、これまた妙な形のオブジェがあった。少し光っているの、恐らく銀か何かで出来ているのだろう。

「昨日、ボクが磨いておいたの。埃被つててね……。」

ケロリとエインが言い、説明を続ける。

「その後なんだが、どうやらこのあいだ予想したみたいに『Je vous aime.』を順々に辿って行く訳では、ないようなんだ。あれはボクの早合点だった、と思う。」

そう言って、エインはヴィヴィアンに脚立に登るよう言った。そうは言うがエイン自体は動く素振りも見せないの、仕方なくエイ

ンが座ったままの脚立を登ると、エインは腰を上げてヴィヴィアンと視線の高さを揃え、ある本棚を指さした。

そこには、棚上に積まれた書物に隠れて、手鏡ほどの大きさの鏡が置かれていた。鏡には脚が付いていて、上下に首を振れるようになっていた。鏡は少し下を向いている。

「あの鏡に反射した光は、本棚スレスレに北西へ向かう。そして北西の女神像の胸元に当たった光は、本棚の僅かな隙間を縫って、直進する。」

『図書館』に來た初日にしか意識をして見なかった女神像の胸元には、クリスタルが埋め込まれていた。そのクリスタルは微妙な角度で削られていた。まるでこの謎のために作られたかのように、女神は月を天高く掲げている。

「行こうか。」

エインが脚立を下り、光の終点と思われる場所へ向かって歩き出した。

北西の真正面。それはすなわち、南東にある入口の真下だ。

ヴィヴィアンも後を追うために脚立を一步下った。

その時、ずっと光が顔を掠めた。

振り向くと、細い細い光が、エインが抜いた書籍の隙間から差し込んでいた。

日の出だ。

光はエインが今し方説明したばかりの順を正確に辿り、折り曲がりながらも決して交差する事無く、エインがたどり着いた南東の本棚の、一冊の書籍にぶつかった。

急いでヴィヴィアンが向かうと、エインが光の指す書籍を抜き取る。そして、近くにあるランプに灯りを灯すと、書籍を照らした。

『月と太陽の物語 ペガスス・著』…。

「これはね、ベルトワース伯爵が『ペガスス』というペンネームで書いた、最期の絵本だよ。」

言いながらエインが書籍を抜き取ると、近くでかちりと音がした。

「ふむ…。」

エインは鼻を鳴らしながら顎を撫でた。そして突然、抜いた書籍の間を覗き込んで、妙な表情を浮かべた。

「動くのかな？」

呟きながら本棚を押すと、見た目の重さよりずっとスムーズに本棚が奥へ引っ込んだので、エインは本棚の足元にしゃがみ込んだ。ランプを翳すと、細い溝があり、本棚には車輪が付いていた。溝はさらに、左に折れ曲がっている。

「まだ動きそうですね。」

ヴィヴィアンが言うのと、「うん。」と返事をして、エインが本棚を左へ動かす。

すると、本棚の奥に空間が現れた。

そこには、薄っぺらく叩きのばした鉄のような素材で出来た、無数の穴の開いた球体があった。球体の下は若干大きめの穴が開き、その下にはランプが置いてある。球体自体は四本の脚が付いていて、床にしっかりと固定されている。

エインは手にしていたランプを遠ざけると、球体の下のランプを点けた。ランプの灯りは球体の穴から溢れ、壁、天井、本棚…、そこかしこに光の点を映した。その様子は、宛らプラネタリウムのようだった。

エインはランプを灯した後、動作を一切止めてしまった。床に胡坐を掻いて座り、頬杖を突いて呆つとしている。まさか、これで終わりではあるまいかとヴィヴィアンが思っていると、エインがヴィヴィアンを手招きした。

並んで座る様という仕草のようだったので、ヴィヴィアンはエインの隣に座った。

「『春分点』。」

春分点とは、南から北へ通る黄道と天の赤道が交わる点を言い、黄道座標の原点で、これは地球の歳差によって西向きに移動する。地球の軸と言うのは少し斜めに傾いていて、すり鉢状を描くように

回転している。これを歳差運動と言って、地軸が地球の公転面に垂直な方向にある、黄道北極と黄道南極と言う点を中心に円を描いているように見える。この円上に於いて、地球の地軸と天球が交わる点が天の北極とか天の南極と言われていて、この天の北極に向かって窄んで行く延長線を持つている星座がある。

それが、伯爵のペンネームでもあるペガスス座。

このペガスス座には、ギリシャ神話で面白い喻えがあつてね。

ペガスス座は α 星マルカブ、 β 星シエアト、 γ 星アルゲニブ、アンドロメダ座の α 星アルフェラツツという四つの星によるやや上辺が窄まった台形のような四辺形をしているんだけど、ギリシャ神話ではこの四辺形を神が天から地上を覗き込む窓と、そして、この四辺形の内部にある星を、窓を覗く神の目と呼んだ。

ちなみに、このペガススの南にはうお座がある。うお座は二匹の魚を紐で繋いだ形をしていて、西側の魚の胴体を象るアステリズムを、イギリスでは『サークレット』と呼んでたりする。

このあいだも話したけれど、今、春分点があるのもうお座だが、正確に言うと、ペガスス座とうお座のもう少し下にある。

関係ない話になるが、うお座はギリシャ神話にある、アフロディテとエロスがテュポンから逃げる時に魚になったという話が元になっているとされているが、実は古来メソポタミア文明に由来する星座で、ギリシャ神話では明確には語られていない。

メソポタミアは旧約聖書と深く関わる土地という指摘もあつて、エデンの園はメソポタミアの都市を、バベルの塔はジググラトを、ノアの洪水は、多くの川で囲われたメソポタミアの土地で頻繁に起こっていた、川の氾濫による洪水を元にした逸話だと言う説もある。だから伯爵は、このヒントを『カインとアベル』に書いたんだろ。うね。そしてカインは嘔吐きだから、日のタイミングを『春分点』を含めて考えると見当違いの結果が出てしまう、と。

話し終わるなり、エインは「さて。」と言って、両腕を後ろに突いて天井を見上げた。

「この光の星の中に、ペガサス座がある筈だ。

さつきも言ったように、ペガサス座は少し歪んだ四辺形のアステリズムを持っている。」

『図書館』中に映し出された星星は、ランプの炎が揺れるたびに瞬き、『図書館』をあつという間に宇宙にしまった。

細かな点から溢れる星は、一見無秩序に見えて、きちんと正しい位置あつた。

まるで高山で夜空を見上げるが如く、二人は無言で星空を見上げる。

やがて、ヴィヴィアンが何かに気付いた。

「教授。」

エインを呼び、階段横にある本棚を指す。

「あれでは……。」

ヴィヴィアンが指した本棚の脇には、隣の本棚との間に少し隙間が開いていて、後ろの壁が見えている。そこに、大きな星が四つ映っていた。四つの星の下には、本棚が邪魔をして映る場所が微妙にずれて判り難いが、歪な円を描く星が映っている。その下、ちょうど本棚で隠すように、オイルランプが置いてあつた。エインもヴィヴィアンもこのランプには気付かず、今まで火を一度も入れた事がない。

「間違いなさそうだね。」

エインはそう言って立ち上がると、ランプに近付いた。よく見ると、ランプの内側に細い細い紐のような物が通されていて、その紐は何かにつ張られているようにピンと張っている。辿ってみると、丁度、ペガサスの四辺形の辺りの壁に埋め込まれていた。エインが引っ張ってみたが、紐は抜けなかった。

「今、春分点はちょうどこの辺りの位置にある。」

言いながら、エインがランプに火を入れると、ランプの炎が紐を焼き切った。

二分された下の紐はだらりと落ちていき、上の紐を辿って炎が登

っていく。

そして、炎が壁に触れたとき、壁が青白い強烈な光を放った。

「！」

慌てて視界を覆うが間に合わず、暫し目が眩んだ。

目を覆う時、何か鋭いものに引つ掛け、エインは右の肘辺りを傷めた。

焼き付きの残る視界で光った辺りを見ると、壁には煙を立てながら網を張るように埋め込まれた、黒く細い何かがあった。エインは黒い何かを剥がし、指先ですり潰した。それはさらさらともざらざらとも似付かぬ感触を指先に残し、粉々になって床に崩れていった。「マグネシウム…違うな、アルミニウムかな。マグネシウムでいいのか。」

何やら呟いて、エインが発光と発熱によってボロボロになった壁を、少し強引に崩した。発光した部分だけが周りの壁とは違う素材で封をされていたようで、壁は簡単に崩れた。

そして、網の向こうに片手を入れて精一杯なほどに小さな穴が現れた。

エインが穴に手を入れると、手のひらに何かが触れた。

掴んで引き摺り出すと、それは封筒だった。

「手紙…ですね。」

ヴィヴィアンが言ってエインを見ると、エインの顔には普段から浮かべっぱなしの笑顔がなく、鋭い目つきで手紙を見つめていた。

エインは暫く手紙を凝視した後、それを尻のポケットに仕舞い、階段へ歩いて行った。

「行こう。この手紙が、あの詩の答えだ。」

屋敷に戻るなり、エインは自室に籠ってしまった。

手紙を読んでいるのだろうが、ヴィヴィアンにはエインの態度が

気になった。

例えるなら、目当てのものが出て来なかった時のような、不満げな態度というような。

昼を迎え、大広間に行くと、食事を運んで来たクリープスが言った。

「教授は召し上がらないようですので。お嬢様もお休みですから、お独りのお食事になってしまいますが、ごゆっくり。」

ヴィヴィアンの椅子を引き、手際よく食事を並べ、クリープスは足早に大広間を去った。残されたヴィヴィアンは、胸の内に燦る疑問を食事とともに飲み込み、ソファに音を立てて座ると、背に凭れて目を閉じた。

気分が晴れないので、散歩をする事にする。

そうだ、思い出した。

北の森に行こう。

そう思い立って屋敷を出ると、真っ直ぐに北の森に向かった。

花が咲き乱れ、小川がせせらぐあの庭へ行けば、気分も晴れるかも知れない。

小路はいつも通り小石がごろごろとしていて歩き難い。

森までは歩いて十分くらいだ。

時間はたっぷりあるので、ゆっくり歩く事にした。

時々空を見上げると、薄霧雲のかかった少しぼやけた青空が広がっている。

風には少し潮が混じっていて、初夏が近いからか、少し生温い。

この道を歩くのは、何度目だっけ。ふと思い記憶を辿るが、どれがどの記憶か不明瞭で、すぐ止めた。

歩いた過去の記憶はみな、”間に合わなかった記憶”だ。

記憶から消し去りたい”過去”だ。

気が重くなり、慌てて頭を振ると、再び青空を見上げ、小さく溜め息を吐いた。

夢を見て、目を醒ました。

悪い夢だ。何度も見る、悪い夢。

何度も何度も、あの人の倒れた軀を抱き起こす夢。

夢…？

夢ではない、あれは、”過去”だ。

そしてその”過去”に脅える自分が、自身に見せている悪夢だ。

繰り返したくない。もう二度と。

そう思って、何度、泣き崩れた事だろう。

部屋の空気が重く、廊下に出ると、執事のクリープスと出くわした。

「北の森に向かうのを見ましたが。」

と言われ、心臓が物凄い速さで鼓動を打つ。

駄目だ、行っではいけない。

屋敷を駆け出し、森へ向かう。

あの森へ行っではいけない。

また、また間に合わなくなってしまう。

もう二度と、泣くのは嫌だ。

深々と生い茂る雑草と芝生を踏み潰して、植木の隙間を抜けると、湖が見える。

相変わらず美しい湖だ。

長い間手入れをしていないというのに、何度見ても美しい湖畔だ。

湖の畔にかかる小さな栈橋にしゃがんで、湖を覗く。

風が吹き、音がした。

ザザ…。

草を擦る音が聞こえた。

ザザザ…。

誰かが歩いているのか、風の音なのか。

そんな事は、どうでもいいか。

立ち上がり、振り返ると、視界に黒い人影が映った。

驚いて目を見張る間もなく、影は真っ直ぐに突進してくる。

脇に光が見え、寸でのところで避けると、素早く踵を返した影が光を目に向けて突き出して来た。

それも仰け反って避けると、反動で振り上げた右腕が影の腕に当たった。肘のあたりが、痛んだ。

光がカシヤリと音を立てて落ちた。

ボトン…。

少し重たい水の音がした。光が落ちたのだろうか。

確かめる余裕などなく、影との間を空けるため、一度背を向けた、その時。

走らなければ。

手遅れに、手遅れにならないうちに…。

間に合わなければ。

間に合わなければ、また…。

森に入り、ザクザクと芝生を踏み潰す足音に紛れて、ドンと音がした。

これは、銃の音だ。

ドン。

二回…。

無事で、無事でいてくれ。

茂みを潜る。

細い枝が肌を引っかく。

痛い…。

茂みを抜けると小さな庭に出る。

確かこの庭を横切って…。

恐ろしいほどに花の咲き乱れるこの庭を横切って…。

茂みの向こうに、湖が…。

湖が見える…。

その湖の畔に…。

深い樹木に囲まれた、小さな湖の畔に…。

足が縛れる。

でも走らなければ。

再び茂みを潜る。

右の肘が痛い。

夢中で手で掻き分けた茂みの先が、拓けた。

やっとの思いで茂みを掻き分け這い出た先には、何度も何度も見たあの湖があった。

その湖の畔の草に紛れて、深緑色の何かが風に揺れた。

「…ヴィヴィ…！」

エインは駆け寄ると、そこにはヴィヴィアンが苦痛に顔を歪め、倒れていた。見れば右脇腹に、少し血が滲んでいる。

「ヴィヴィー…！」

またか…、また間に合わなかったのか…！

そう思い、首筋に指を添えると、微かにだが脈打つ感覚を捕らえた。

生きている…。

エインは唇を噛み千切りかねないほどに強く噛み、ヴィヴィアンの軀を抱き起こすと、湖の先にある屋敷へ向かって歩き出した。

屋敷に鍵はかかっている。

手入れをしていないとは言いが、クリープスが密かにたまにやって来ては、埃を払っているのを知っている。

エインは一階の奥にあるゲストルームを開け、置いてある大きなベッドにヴィヴィアンを寝かせた。

そして後先も考えず血の滲む脇腹付近のドレスの布を引き千切ると、傷の様子を確かめる。

出血量にそぐわず、傷は若干深いが擦り傷のようで、命に別状はないと思えた。

エインはぐったりとベッドに座り込み、眼鏡を無造作に外して項垂れた。

不意に武者震いをする。ぐっしりと汗を掻いたシャツが体に纏わりついて、熱を奪って行っていた。

今になってこめかみを伝う汗を袖で拭い、ゆっくりとヴィヴィアンを振り返る。

痛みの余り気絶したのだろう。銃の音がしたから、恐らく傷は弾が擦れて出来たのだろう。

エインはヴィヴィアンの頬に手を伸ばし、しかし手のひらを見ると汚れていたので、手を引いた。

そして老人のように立ち上がると、クリーブスを呼ぶため、ベルトワーズ邸へ向かった。

邸に着くと、偶然にもアンの診察に訪れていた医者と、それを見送るクリーブスがいた。

「クリーブス！」

名を呼びながら走って来るエインの様子に只ならぬ状況を察したクリーブスは、医者に着いて来てくれるよう頼んだ。

医者も雰囲気は感じ取ったようで、一つ頷いて走って来るエインを見た。

事情を話し、森へ向かう。

クリーブスはメイドに所用と言付けをしなければならぬと言つて、後から向かうと言った。

道中、状況だけを説明し、早足で森の屋敷へ向かう。

茂みを抜け、湖を通り過ぎ、庭に出る。

いつの間にか若干の赤みを帯びて来た空の色を受けてか、花々の色は少し薄く見えた。

鍵の開いた扉を開け、ゲストルームのドアを開ける。

医者はそこに横たわるヴィヴィアンに駆け寄ると、脈と体温を測り始めた。

「安定していますね。」

一言だけ言つて、いそいそと診療カバンを開けた。

「これから服を脱がさねばなりません。お部屋の外へ。」

エインは頷いて、部屋を出た。

この建物はゲストルームと大広間、主用の大きなダブルベッドを置いた部屋が二つと、シングルベッドを置いた小さな部屋が三つほどある。それ以外はキッチンであったり、荷物部屋である。

身の置き場所を悩んだ末、エインは大広間にいる事にした。

そこへ、クリーブスがやって来た。クリーブスは後ろにメイドを二人ほど従えていた。

「ゲストルームに寝かせています。」

クリーブスに言つと、彼は頷いてメイドに医者の手伝いをするよう言つた。メイドは直ちに向かい、クリーブスはキッチンへ向かつた。

それを見送り、大広間に入ると、一寸も痛んでいない大きな目のソファに崩れるように座つた。

眼鏡を外し、脇のテーブルに置く。崩れるように肘掛に凭れて、視界を手で覆う。

長く重い溜め息を吐くと、全身の力が抜けた。

安堵と、自責と……。そして久しぶりに走つたせい、か、気力の総てが抜け落ちてしまった。

「お使いください。」

突然、目の前でクリーブスの声がした。

気だるく見上げると、クリーブスが湯気の立つ布をエインに差し

出していた。

「…ありがとう。」

のそのそと起き上がり、布を手にとった。じんわりと温かい布の熱が、手のひらを伝って体全体に広がる。

「ゲストルームにありますので、何かありましたら。」

そう言つて、クリーブスは立ち去った。

早々にいなくなつてくれた事に、エインは感謝した。今は誰とも口を利きたくなかった。

汗と埃でべたべたになった顔を、布で拭いた。顔から布を離すと、ひんやりと冷たい風が顔を包む。

布が少し汚れたので、折り畳み直して、今度は手のひらと腕を軽く拭き、布はテーブルの上に投げ置いた。

再びソファの肘掛に凭れると、尻のポケットで、くしゃくしゃと紙の音がした。

そういえば、今朝見付けた手紙を、ポケットに入れ放しにしていたのだった。

エインはポケットから手紙を取り出した。

癢だつたので、封も切らずにポケットに捻じ込んだ手紙は、しわしわになっていた。

裏を返すと、薄く小さな封蝋がしてあった。丁寧に外して封を開け、便箋を取り出すと、エインは封筒をテーブルに投げ、ソファのもう片方の肘掛に膝をかけるようにして横に座り、読み始めた。

手紙は、予想より遙かに長く綴られ、”期待はずれだったものの割りに興味深い内容であつたために、クリーブスが声をかけるまで夢中になつて読んでしまっていた。

「お目を悪くнаさいますよ。」

クリーブスは言いながら、蠟燭を立てた蜀台をテーブルに置いた。

すっかり夜になり、室内は真つ暗闇だった。

手紙はあと数行残すところまで読み進めていたが、一先ず読むをやめた。

「生憎、ランプのオイルを失念しておりまして……。」

申し訳なさそうに言つて、クリーブスが謝った。

「いえ。すみません、ご迷惑をおかけして。」

エインは姿勢を正した。

「ご無事で何よりでした。」

当たり前的事だが、クリーブスは自分の事など二の次三の次なので、そんな事より、とも言つかのように言つた。

「クリーブスさん、相談が。」

「はい。お召し物の事でございますね？」

見上げるエインににこりと笑つて、クリーブスが言つた。

「ご心配は不要にございますよ、教授。」

トーマス様は細い方ですが、流石にお嬢様のお召し物は難しいでしょうから、奥様がお召しになられていたドレスを何着か持つてまいました。

着て帰られても問題ない物と言われておりますので、ご自由にお使いください。」

「有難うございます……。」

つくづく手回しの良いクリーブスに頭が上がらない思いだった。

「今夜はどうなさいますか？ お屋敷へお戻りになりますか？」

私は、今晚はこちらにおります。メイドも一人泊まる予定でありますので、トーマス様の身の回りのご心配はございませんが……。」

「それでもご心配でしょう。」と言つクリーブスに、エインが苦笑した。

朝、手紙を見つけてからここまでで、やっと今日初めて笑つた気がする。

「教授がお泊りになる準備もしておりますので、お好きになさつて下さい。」

食事はもうそろそろ、従者が屋敷から運んで来る頃ですよ。」
クリーブスはそう言って、「ちよつとゲストルームを見て参ります」と去って行った。

一人になって、一本だけ立つ蠟燭の炎を眺める。
そして、再び手紙を手にし、最後の数行を読む。

運命は変えてはならない。

運命は委ねるものだ、エイン。

だが私は、君の心も十分理解している。

この手紙が、君の心の傷を少しでも癒せる事を、祈っている。

アルネスト・ベルトワーズ

読み終わり、改めてぐつたりとする。

手紙は、”期待はずれだったもの”ではあったが、それを半分ほど満たしてくれる内容でもあった。

暗闇の中、仄かな灯りを瞼に焼き付けて、そつと目を閉じる。

こんな夜を迎えるのは、初めてだ。

ふと思い、はつとする。

希望は、叶えられ掛けているかも知れない。

『運命は、変えられない。』

誰の言葉だっただろうか。恐らく無名の、哲学者の言葉だったに違いない。

無名には無名の理由がある。この旅を始めてからすぐに、そう思ったものだ。

だが同時に、今までずつと失敗をして来た。

『運命は、変えられない。』

確かにそうかも知れない。否、今までだってそう思わなかった事はない。

だが、抗う余地があるのなら、取り戻したいものもある。

思い出してしまった恐怖。絶望。悲しみ。孤独…。

長い事、答えを探して来た。これがどうしても変わらぬ答えなら、受け入れなければならない。

だが、それもこれが最期だ。

どういう結論が待っているにも、受け入れなければならない。

そして、旅も終えなければならない…。

屋敷からメイドが運んで来た、少し冷めてしまった食事が、大広間のテーブルに並んだ。

ヴィヴィアンはまだ目を醒まさず、クリーブスは医者屋敷へ送ると出て行ってしまい、仕方なく独りで食事をする。

屋敷の備えが偶然足りておらず、ランプ用のオイルが工面出来なかったと言つて、クリーブスは蠟燭をもう一本足してくれたが、それでも夜の闇には勝てず、暗い中での食事になった。

こちらの屋敷を出る前に、医者が傷の様子だけ教えてくれた。出血の度合いほど傷は深くなく、多少の火傷が見られるから、割と近い距離で銃によって撃たれた事は明確だろうが、擦れただけなので心配はしなくてよい、という事だった。

胸を撫で下ろすとともに、どっと疲れが出た。

だから食事も、色々な事が重なって疲れている体を考えて作ってくれたのだと言う事はよくわかるメニューであったが、あまり積極的に胃には入っていかず、のそのそと食ひ、なんとか食事を終えた。そして、消化不良でも起こしたようにぐったりとソファに凭れ、手紙をもう一度読み返す。

全く、嫌味な人だと思う。

この手紙一通、ぺらりと渡せないものだっただろうか、と。

思いながら、苦笑する。

まあ、いいか、と……

思い耽りながら、また読み返す。そんなに特別素晴らしい事は書かれていない。だが、何度も読み返さずにはおれない。

ぺらぺらと手紙を捲っていると、蠟燭の炎が揺れた。

蠟燭の向こうの闇の中に、水色のレースのドレスが現れた。

着心地が悪いのか、着慣れないから落ち着かないのか、指先をもぞもぞ動かしながら、もう一步近付いた人影は、ヴィヴィアンだっ

た。

「申し訳ありません、教授……」

暗闇でいつもより陰影が強く付いた顔には、苦痛に歪む表情が浮かぶ。

傷の痛みもあるだろうが、それ以上に、申し訳ないという気持ちでいっぱいなのだろう。

詫びる必要など、ないのに。

「うん。」

「大丈夫かい」とか「謝る事はないよ」とか、そんな在り来たりな言葉は、相応しくないと思った。

「……。」

これ以上、この件については何も話す事は、少なくとも今のエインにはなかった。が、ヴィヴィアンは何か言いあぐねているように俯いて、言葉を搜しているようだった。

「……ヴィヴィ。」

エインが呼ぶと、ヴィヴィアンは顔を強張らせてエインを見た。

怒られると思ったのかも知れない。

その様子を見て、エインが笑った。

「生きててくれて、嬉しいよ。」

エインが言うと、ヴィヴィアンは拳を固く握って、俯いてしまった。

にこやかに、優しくに言うエインの言葉に、ヴィヴィアンは闇の中で必死に込み上げて来る何かを堪えていた。拳を握ると、指先がじんと痺る。

様子を悟ったエインが、立ち上がってヴィヴィアンに近付いた。

やはり蠟燭の灯りだけでは、満足にお互いの表情を窺う事は出来ない。エインはヴィヴィアンと正面に向いて立つと、ふと微笑んだ。

「明日の昼頃に、屋敷を出発しよう。」

帰りは、ボルドーから船を使う事にするよ。

それから、帰りにちよつとロンドンに寄ろう。」

優しく笑うエインと、暫し視線を交わらせる。指先の痺れも和らいで、不思議と心鎮まる。

さっきだって、決して負の感覚によるものではない。悔しさでも情けなさでもなかった。”護る”ためにいるのに、役に立っていない悔しさは当然ある。不注意ではないとは言え、不甲斐無さの結果だ。

だが、本当の事など知らないエインは、何も聞かず、全てを飲み込んで流してくれる。

そんなエインに甘えていると言えばそうかも知れない。それでは”護る”には不十分だという事も承知している。

それでも、心は鎮まってしまう。

何故かは自分でも良く解らない。

喩えようにも、旨く喩える言葉を持ち合わせていない。しかし、敢えて自分が知っている感情で喩えるなら、一番近いのは、”幸せ

”だった。

「うん…。」

ひっそりと内心浸るヴィヴィアンを見ながら、エインが呟いた。

「温かい紅茶でも出してあげたいところだが、生憎勝手がわからない。

クリープスさんが戻るまで…。」

エインが少し申し訳なさそうに言々と、ヴィヴィアンの後ろの闇の中から「お目覚めですか。」と声がした。

驚いて、二人揃って振り向くと、クリープスがにっこり笑って立っていた。穏やかな笑顔だが、闇の中では少々不気味だ。

「…ご迷惑を、おかけしました…。」

まだ若干驚きつつも、ヴィヴィアンが頭を下げると、クリープスはテーブルに歩み寄り、オイルランプをとんと置きながら言った。

「とんでもございません。大したお怪我ではなくて安心いたしました。

教授が血色を変えて屋敷へ走って来た時は、流石の私も驚きまし

たよ。」

そう言って笑うと、ランプに火を入れた。

「古いランプが一つだけ納屋にございましたので、持って参りました。」

そしてエインに向き直り、

「明日出発でございましたね？」

と聞いた。

エインは「はい。出来れば」と頷きながら、俯き気味に訊ね返す。

「アンの具合はどうですか？」

「あまり良くありません。」

クリーブスが首を振った。

「どうやら、風邪をこじらせてしまっているようで。」

お医者様のお話では、寝ていればじき良くなると言う事でしたが、教授やトーマス様のお帰りも近いのでお気を落とされておりました、少し消極的になられていて、心配をしております…。」

エインは少し困惑したようで、「そうですか…。」と声のトーンを落とした。

元々体が弱いから、少しでも体調を崩せば大事にもなるだろう。

エインとヴィヴィアンという久々の来客を迎え気も浮ついた状況で、でも体が儘ならないというのはどれほどの苦痛だろうかと思う。

ヴィヴィアンは、昨夜のアンの寝室での出来事を思い出した。

あの時は、アンの全身から溢れる憎悪のようなものに、恐怖や驚きなどとは比べ物にならない何か得体の知れない不安を感じ、アンとは顔を合わせたかと思っただった。

しかし同時に、境遇を知れば知るほど、蔑ろにする事への罪悪感は大きくなる。

エインは、アンとの婚姻を拒みこそすれ、アンの傍にいる事それ自体は拒む気はないように見える。

それが、アンが感情を断ち切る事を阻んでいるのではないかと思える。

一歩退いた闇の中でエインとクリープスのやり取りを眺めてそんな事を考えていたヴィヴィアンを、クリープスが見た。

目を細めてゆったりとした微笑みを浮かべながら、ヴィヴィアンの足元から頭上までを見たクリープスは、うんうんと頷きながら、「よくお似合いですよ。亡き奥様を思い出されます。」

でも少し大きかったでしょうか。」

ヴィヴィアンの着ている水色のドレスは、クリープスがエインに言ったようにベルトワーズ伯爵の妻マリエレンのものだったが、ヴィヴィアンには少し大きいようだった。

袖はブカブカとするほど余裕があり、身頃もコルセットで胴体を締め上げて細く見せ着るドレスなのに、コルセットを着けていないヴィヴィアンには、全くきつくはない。

が、そのような事は関係なく…。

「すみません、お借りしてしまって…。」

「いえいえ。」

お嬢様は奥様のお召し物はお使いになりませんし、ずっと部屋に眠ったままになっておりました。

そのドレスは奥様がお屋敷に嫁いで来られた十五年目の日に、旦那様が高名な縫製師を招き寄せて作らせた特注品でございます。

レースもパリ市内から特別に取り寄せたものですから、とても良いもの。それを美しく着て頂けるのは、私ども従者にとっても嬉しい事でございますよ。

今、トーマス様のお召し物は修繕をしております。明日の出発までには直りますが、そのドレスでお帰りになるのでも構いません。」

「でも…。」

クリープスの言葉に、ヴィヴィアンが少し声を大きくした。そう言ったものを、安易に受け取る訳に行かないだろうと思った。

「これは、アンのお母様の大事な形見でしょうから、置いて行きます。」

色々と有難うございます。」

「そうですか。畏まりました。」

恐縮するヴィヴィアンに、クリーブスはさらに微笑んで、思い出したように「ああ」と言った。

「そろそろお休みになられた方がよい時間ではございませんか？

まだ起きていらっしやるようなら、紅茶をお淹れいたしますが。」

「紅茶を頂こうかな。ボクはまだ起きているし。ヴィヴィはどうする？」

エインに訊ねられ、ヴィヴィアンは少し考えて、一つ頷いた。

気絶とは言え、今まで寝ていたので余り眠くなかった。

「じゃあ、二人分、お願いします。」

「畏まりました。」

クリーブスは一礼すると、早々に奥へと消えた。

改めて二人となった大広間は、ランプによる灯りが灯った事で、

心持ち広くなった。

喻え難い空白のようなものを感じ、どのソファに座ったらいいか、迷う。

突っ立ったままのヴィヴィアンに、エインが一つのソファを指さした。それはエインが座っていたソファと窓辺で向かい合うもので、どうやら、元から庭を二人で臨むために置かれているようだった。

ソファに腰かけ、夜の庭を見る。

木々と花花は闇に紛れ、窓から微かに漏れる灯りに、存在だけを浮かばせる。

ふと、脇腹が気になった。傷が塞がり始めたのか、痛痒い感じが不快だった。長らく感じていない痛みだ。

ヴィヴィアンの様子を見て、向かいに座ったエインが訊ねた。

「無理をしない方がいいからね。」

「はい。有り難うございます。」

紅茶を頂いて、少ししたら、休ませていただきます。」

「うん。」

エインは笑って、庭を見た。ヴィヴィアンも、庭に視線を戻す。暫し二人で、無言で庭を眺める。目が慣れて来たのか、月明かりも加わって、庭の様子が少し鮮明に見えはじめる。

そこへクリーブスが戻って来た。

「これで、キッチンの火は落とさせて頂きます。

二杯ほどは、お召し上がりになれますよ。」

手にしていた紅茶のセットを乗せたプレートを一旦テーブルに置き、紅茶をカップに注いで、ソファの近くに小さな台を持って来ると、カップをそこへ置く。

「私は一度屋敷へ戻ります。また戻っては参りますが何時頃になるかは判りませんので、お急ぎの御用があれば今のうちに。」

クリーブスが言うと、エインがヴィヴィアンを見た。ヴィヴィアンが小さく首を振ると、エインはクリーブスを見上げ、「大丈夫ですよ。」と言った。

「畏まりました。

それでは、お休みなさいませ。」

「お休み。」

「お休みなさい。」

二人に見送られ、クリーブスは出て行った。二人は、庭を横切る彼の後ろ姿を見えなくなるまで見つめた後、紅茶を啜ってまた無言になった。

エインは脚を組んで、肘掛けに頬杖を突いてだらけた。

「『図書館』で見つけた手紙はね……。」

ヴィヴィアンが黙ってエインに視線を移す。エインは庭を見つめたまま続けた。表情には、ほんのり微笑みが浮かぶ。

「ボクが欲しかったものではなかったんだ。

数日掛けて頭を使って、その結果が望んでいなかった物だったというのは、中々堪えるが。

いつだって、氏はそうだったと、見つけた手紙を読みながら思ったよ。

氏はボクが何を知っているか、常に問いを寄越して来た。ボクがそれに答えると、次、次とどんどん問いかけて来る。

そして、最後に言うんだ。

『エイン。キミの悪い癖は”諦める”と言う事を知らない事だ』
って。

仕方がない、と悟る事で見えてくる幸福があるんだそうだと。

ボクもそれは承知しているけど、氏曰く、それは”つもり”なだけなんだそうだよ。

手に入れる事の出来ない、儼然しない現実がある事を悟るべきだと、ボクにいつも言っていた。

そんな氏を、ボクは時折、疎ましくも思っていた。

アンとの婚姻を『決まり』と言った時も。あの『遺書』も。

人としては、ボクは氏以上に尊敬する人はいないし、頼りにしている人もいない。本当に大切な人だが、その反面、決してマイナス面の感情を持たなかった訳ではない。

だから、”見返してやりたいんだ”。

『運命は変わるんだ』とね…。」

言い終わったエインの顔からは、いつの間にか微笑みは消え、少し翳になった瞳が月明かりを反射して鋭く光っていた。

選んだ言葉よりもう少しだけ、ベルトワーズへの”反抗心”は強いのかも知れないと、ヴィヴィアンは思った。

だが、ヴィヴィアン自身としては、エインに同意しない訳に行かない事情がある。

自身も、『決まり』からの開放を求めているからだ。

「私も…。」

小さな声で呟くヴィヴィアンに、エインが振り向いた。

「私も、そう思っています。」

それを願ってここまで来た。そうだと信じてここまで来た。

エインを真っ直ぐ見つめるヴィヴィアンに、「有り難う。」とエインが笑った。

護るべき者を見つけ、その人を護るための、護り続けるための『決まり』に反した道を探り続けて来た。

その旅が今度こそ終わりであればいいと、願いながら。

今度こそ、終わって欲しい…。

恋する太陽と月 14

翌朝。

昨夜は他愛もない事を少し話し込んで、そのまま眠った。

朝起きると、ベッドの脇に修繕された深緑色のドレスが掛けられていて、ヴィヴィアンはいつも通りそれを着る。

丁寧に修繕してくれたようで、破れた痕や血は残っておらず、新品のようだった。

起きる時間が早かったのか、大広間に出ても誰もいなかった。

エインはまだ寝ているのだろうか。そう思いながらテーブルを見ると、紅茶のカップは綺麗に片付けられていた。クリーブスが戻ってから片付けたのだろう。そして、カップの代わりに、一冊の書物が置いてあった。

手に取ると、『月と太陽の物語』と書かれていた。

昨日『図書館』で見つけた、ベルトワーズが書き記した書籍だと言っていたか。

ヴィヴィアンはソファに腰かけ、丁寧にページを捲った。

中には、文字とともに繊細な絵が描かれていた。

月と太陽の物語

太陽に照らされる事でしか輝く事が出来ない月は、自らを哀れみました。

おのれの力で美しく輝きたいと願う月。
でも輝けません。

やがて月は、自らを卑しい存在と思い始めます。
光を乞うだけの存在であると。

月は恥ずかしくなって、その姿を徐々に隠してしまいました。
ついに太陽の光が当たらなくなり、月の姿も消えてしまったあ
る日。

太陽が眩きました。

ああ、あなたの姿を見るのが、私の最高の喜びなのに。
私が照らす事で、あなたが美しく輝くなら、私は幾らでも光り
輝くの。

例えば対の別れとなる、この身の滅ぶほどの光が必要になっても
あなたが輝くなら、私も輝くの。

月は太陽の言葉に、また姿を見せ始めます。

本当ですか？

私のために輝いているのですか？
ならば、あなたの光で輝けるように、この身を晒しましょう。

月と太陽は暫し、見つめ合い、想い合うのです。

しかしまた、月は自らを蔑むのです。
ああ、私は何故、自ら輝けないのか。
私は何故、あなたを照らせないのか…と。

それでも太陽は月を照らしたいと、何度も何度も想いを伝える
のです。

あなたの姿が見たいのだ、と。

「旦那様の著書でございますね。」

読み終わるタイミングを見計らってか、ちょうどよい頃合にクリーブスが声をかけてきた。

「素敵な御本ですね…。」

ヴィヴィアンが言うと、クリーブスはにこりと笑って「ありがとうございます」と言った。

「胸を悪くされてからはずっとご趣味だった旅をやめて、書を認める事に熱中しております。」

時折余りに夢中になれるもので、息抜きをお奨めして散歩に出ますと、道中、私に言うのです。

『私の本は、一冊一冊が誰かのために書かれているのだ。だからその本を手に入れば、これは自分のものだと思えるのだ。』と。

旦那様は、アンお嬢様と教授を誰の事より心配しておられました。きつと著書の多くは、お嬢様と教授に宛てて、書かれた本なのではと思っておりますよ。」

なるほど。そう言われればそのようにも捉える事が可能だ。

月と太陽のように対照的なエインとアンは、ともに歩めばこのような事を何度となく繰り返すような気がする。

エインは否定をするが、やはりアンの方は気がかりであろう。ここに残り、アンに寄り添う事を拒否する事は、エインにとっては『愛していない』という事ではないのかも知れない。

昨夜、エインから聞いたベルトワーズの言葉を思い出す。

——諦める事で、決まりに従う事で、見えてくる幸せがあるのだ。

そう。運命は変わると信じている一方で、別の道を歩む事で気付く幸せがある事も解っている。

今までだって、考えなかった訳ではない。

「…そうですね。」

反芻した言葉に納得するように呟くと、クリーブスは自分の言葉

に賛同したと思い込み、にこりと笑って一礼をし、食事の支度をすると行って立ち去った。

クリーブスを見送り、再び書物に目を落とす。

ゆっくり、一枚一枚ページを捲る。

『運命は変わる』と鋭い眼差しで呟いたエインの顔を思い出す。

黄昏て窓の外を見ると、いつの間にか庭にエインがいた。庭の端に立ち、腰に手を当てながら、植木の向こうに見える海を見つめている。

白いシャツが海風に揺れ、はためいている。眼鏡を外しているのか、普段とは違う後ろ姿に、ヴィヴィアンは少し戸惑う。

エインの周りには、沢山の『運命』がある。

彼は、”どれ”を、変えたいのだろう…。

食事を終え、屋敷に戻る事になった。伯爵の遺言状の謎も解けた事だし、ここに長居をする理由はなかったから、荷造りをして出発するためだ。

屋敷には昨夜の医者が来ており、ヴィヴィアンの傷を再度診てくれた。医者は、これならすぐに傷も消えてなくなる、と頷き、ついでにアンの様子を診て帰って行った。

アンは相変わらず伏せていて、今朝はベッドから起きられないどころか、人とも会えない状態だと言うので、エインだけがアンの部屋を訪れ、少し話した後、挨拶を済ませて出て来た。

そしてエインとヴィヴィアンは手早く荷物をまとめ、クリーブスと従者たちに見送られて屋敷を出た。

ここへ来た時と同じように、トンプスンとウィンストンが操る馬車に揺られ、目と鼻の先、ボルドーへ向かう。

昼前なので、まだだいふ風は冷たく、空も白い。

窓の外には、豆粒ほどに小さくなってしまったが、ベルトワーズ

邸が見える。

見送り際のクリープスの顔を思い出す。

少し、切なそうに笑っていた。

話し込む機会はなかったが、何故か全てを知ったような、すぐ傍にいてくれるような安らぎを覚える人だった。従者とは、そうあるべきであろうか。

隣を見ると、エインが鼻歌を歌って窓の外を眺めていた。鼻歌の旋律とは違って、横顔は少し哀しそうだ。エインはヴィヴィアンの視線に気付くと、にこりと笑って尻のポケットから手紙を取り出した。

「『図書館』で見付けた手紙はトリガー。」

「トリガー？」

「あの手紙を見つける事で、本当にボクが受け取るべきこの手紙を得る事が出来る。」

エインが窓辺に頬杖を突いた。

「氏は、『図書館』であの手紙を入手出来た時、この”本物の遺書”を渡すよう、アンに預けていた。

アンは、手紙の内容を知らされてはいなかったが、手紙のある一文だけを本物が偽者かを見極めるための条件として教えられていた。氏がボクに遺した本物の遺書は、コレ。」

そう言つて、エインは手紙をヴィヴィアンに差し出した。

「読み給え。」

言われて、ヴィヴィアンは手紙を開けた。

綺麗な封蝋でシーリングされた手紙は、長い年月を経たように茶色く黄ばんで、インクも少し擦れていた。

エイン・アンダーソン。

この手紙を読んでいると言う事は、私は死んでいて、あの手紙を手に入れたという事なのだろう。

つくづく、君の想像力と勘には、溜め息が出る。

アンにこの手紙を託したのは、私の最期の抵抗だ。そして、私の最大の願いでもある。

繰り返し言つて来た我が娘との婚姻を、君はどうしても受けないだろう。

だが、君の夢のために、この屋敷は必要になるであろうと思う。

だから、君をまずアンの代理人とする事に決めた。そしてアンが亡くなった暁には、あの屋敷の後継人が君であるよう手続きをした。それまでは、財の一切をアンに委ねる。

屋敷、土地、人間、ボルドーのあの地にある全てのものが、アンが死ぬまでアンのものである事を、ここに記す。

君の手に入るのは、アンが遺した全てのものだ。

もしかすると、それら一切は債権になっている事だってあるかも知れない。私の娘に限って、そのような事はないだろうが…。

アンが死んだ時は、君はアンを弔い、私の墓の隣に埋めてくれ。

そして、時折あの海辺の屋敷を訪れ、太陽と月とで並び、居間で私たちを思い出して欲しい。

アルネスト・ベルトワーズ

手紙の最後には、ベルトワーズの名と、アンの名、そして、この遺書を正式なものとするための、ベルトワーズ家と懇意にしている法律家の名が記されていた。

「何故、こんな回りくどいやり方をするのか、結構腹立つんだけどね。」

エインが鼻で溜め息を吐いた。

「屋敷を渡す事が、目的のようですね…。」

「文面からすると、ね。」

「そのために、婚姻を奨めていたのですね。」

「それはどうなんだろう。」

エインが少し愉快そうに言った。

「あれはあれ、これはこれ、な気もするけどね。」

まあ、何はともあれ、これでアンも暫くは安心して暮らせる。」

「……？」

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインはふふと笑った。

「アンが氏から受け取った遺書は、本物じゃない。」

これを読んだ後に気になったので、さっき見せて貰ったんだが、確かにベルトワーズ伯が書いたものだが、第三者の書名がなかった。遺書としては無効だ。」

「……そうだったんですね……。」

「アンは無知ではないが、法律については知る事も少ない。況してや、父親がそんな賭け事のような事をしていても思ってたなかっただろう。」

相当驚いていたよ。」

「これを、アンの手元に置いておかなくてよろしいのですか？」

そう言った事情があるなら、これこそアンが持っていなくてはならないものなのではないのか。

「うん。」

ボクが代理人である以上、この書類はボクの手元にあつた方がいい。

クリープスにも言つてあるから、アンが何かに困っていれば、必ずボクに連絡が来る。」

その時、ボルドーとエディンバラという距離では、すぐに駆け付けられないではないか、とは思うが、エインの今までの言動を見ていれば、フランスに身を置く事は何かあっても考えられない事なのだろうと思う。

ヴィヴィアンは手紙を元に戻し、ゆっくりエインに返した。

「あとは、これと一緒にアンが預かっていた、法律家への委任状を投函すれば、ボクの仕事は終わり。」

そしてそれは、クリープスがやってくれる。

という事で……」

言いながら、エインが手紙を手にしてポケットに突っ込んだ。

「ちよっと、ボルドーで美味しいワインを入手しつつ、旧友に会いに行く。」

付き合っておくれ。」

エディンバラまではどうあっても同行なのだから、断る必要もないのだが、エインは何をするにも了解を得てくる。否、言うだけで有無を言わせずという状況を理解しての事ではあるうが。

一方で、出た当初言っていた、赴任早々に旅をせねばならなかった状況を、未だ気にかけているのかもしれない。

「はい。」

ヴィヴィアンが、短い思案の後、いつも通りの抑揚のない返事をする、エインは満足そうに窓辺に頬杖を突き直し、鼻歌を再開した。

旧友と会うのは、胸が躍るようだった。

月の港の極東人 1

ボルドーは、紀元前三〇〇年頃、ケルト人によって設立された街だ。元の名をブルティガラと言い、紀元前一世紀にローマに占領された事で主要な交易港が作られ、ワイン生産を基盤に産業地として栄えた。五世紀のローマ帝国の崩壊を受け、その後凡そ五〇〇年に渡りゲルマン民族であるゴート人に支配され、さらにはイベリア半島からやって来たアブド・アル・ラフマーンのスラム軍に占領されたり、ノルマン人によるヴァイキングの侵略を受けたりしている。七世紀にフランスの前身であるフランク王国であるメロヴィング朝の良王と言われるダゴベールによってアキテーヌ公領が創られ、ボルドーはやっと、都市として栄え始める。

一時、アキテーヌ地域圏の女公エリアノールが後にイングランド王となるヘンリー二世と結婚した一一五四年から約三〇〇年にかけてイングランド支配下に収まるが、フランスとイングランドによる百年戦争末期に、イングランド軍の敗北によりフランスに奪回された。イングランド支配下にあった当時、自治を確立していた恩義もあり、その後一〇〇年余りはフランスに反逆していたが、時間が経つにつれフランス支配を受け入れ、ここ最近では西インド諸島との貿易やワインの輸出などで急成長を遂げている。主にフランス植民地から仕入れた砂糖やコーヒーなどの嗜好品を始め、奴隷などを扱い、ドイツやオランダの諸都市に売る中継貿易によって大いに潤っている。

あまり栄えていないガロンヌ川右湾は、ベルトワーズ邸付近と同様に森と葡萄畑が広がり、川を挟んで左湾に街が広がる。

ガロンヌ川は大きな河川であるため架橋工事が難しく、未だ左湾と右湾を行き来するに船を使っている。

左湾へ渡れば一変、美しく歴史ある建造物が立ち並ぶ、まさに世を謳歌し、さらに栄えんばかりに活気溢れる街に変貌する。

三日月型に湾曲する港を持ったため月の港と呼ばれ、左湾の湾曲部ほぼ中央の川縁には、四〇年前にわずか五歳でフランス国王に即位したルイー五世の騎馬像を囲う宝石箱をイメージした王国広場と宮殿の建築が進む。この工事は六年前に落成し、ボルドーの繁栄のシンボルとされている。

ここまでは、ボルドーに入りトンプスンとウィンストンと別れ、ガロンヌ川を船で渡る間にエインから説明を受けた内容だった。

相変わらず潤滑油の成分を知りたくなるほど饒舌に語り尽くすエインを脇目に、ガロンヌ川上から見るボルドーの港は、船が所狭しと停泊する賑やかな港だった。

話に出た王国広場には、木による足場が組まれた宮殿も見える。

港に降り立ち、宮殿を左手に見ながら西へ進むと、コメディ広場と呼ばれる大きな広場が見え、その向こうにあるトウルニー広場で抜けるトウルニー通りには、偶数番地側にのみ、ロココ様式の装飾形式を持つルイ十五世様式と呼ばれる柔らかな曲線が特徴的な軽快、優美な様式の建物が並ぶ。

このトウルニー通りは、一七四三年にボルドーへやって来たトウルニー候ルイ・ユルバン・オベールの「ボルドーは、均整も便宜も無視した醜い家が、ごちゃごちゃと固まり、その間をきちんと直角に交わることはない、狭い通りが縫っている。」という嘆きにより整備された。

エインの旧友はこのトウルニー通りの一角に住居を構える、ボルドー大学の教授だそうだ。

クリーム色の石を積み上げて、統一感を持って整備された街並みは、人工的ながら実に柔らかで美しく、気品ある様子だった。

暫く歩いていると、区画の間の路地から現れた一人の男が、エインを見るなり大袈裟なほど大きな身振りで手を振った。

「おや……」

エインが溜め息を吐きながら苦笑した。そして、手を振る男を指差し、「あれがボクの旧友。」と言って、エインも手を振り返した。

すると男はすぐさま走り寄って来た。

「エイン！ 良く来た！！」

そう言う彼は、西洋人特有の彫の深い角ばった顔に、大きな瞳をキラキラを輝かせ、横に口をひきにかつと笑い、まさに陽気を絵に描いたような顔でエインの肩を叩いた。

一方でこじんまりと整った顔のエインは、彼と比べると全く西洋人のように見えない。

「済まないね、ご無沙汰をして。」

エインが言くと、男はこれまた大きく首を振り、「全く構わないさ」と笑った。そして、ヴィヴィアンを見、一転して柔らかな優しい微笑みを浮かべ、

「立ち話をして済まなかった。さあ、我が家へ案内しよう。」
と言つて、手で元いた路地を示した。

案内された家は、男が出て来た路地を少しガロンヌ川へ向かつて歩いた場所にあった。

二階建てのこじんまりとした家だが、偶数番地なのでルイ一五世様式の美しい装飾を施してある、大変優雅な様相の家だった。

中へ通され、二階の一室へ案内される。

部屋の窓は路地に面していて見晴らしも悪くなく、陽もそこそこ当たって明るかった。

調度品は気を遣って選ばれたようで、シンプルではあるがさり気無く植物をあしらったシルエットの柔らかな装飾が施されたものが並んでいる。

部屋に入るなり、エインと男は窓辺に立ち、あちこちを指さして話し始めてしまった。ヴィヴィアンは取り敢えずドアの脇に移動し、少しか体を縦に細めて立っていた。

すると、ドアが開き、銀のティー・セットを持った女性が入って

来た。女性はヴィヴィアンを見て「あらあら」と言うと、プレートを部屋の真ん中にあるテーブルに置き、腰に手を当てて男に言った。「あなた。お客様を放っておくなんて、失礼ですわよ。」

女性に言われ、エインと男が振り向きヴィヴィアンを見て、申し訳なさそうに苦笑した。

「すまん、ヴィヴィ。」

「申し訳ない。女性を独りにしてしまうなんて、紳士の風上にも置けぬ無礼をしてしまった…。」

二人に詫びられ、然して気にもしていなかったヴィヴィアンは、眉を顰めて肩を竦めた。

「…いえ…。お気になさらず…。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがヴィヴィアンに歩み寄り、二人に紹介をした。

「すまん。紹介すらまだだった。」

ヴィヴィアン・トーマス。つい先週、ボクの屋敷へ来たばかりのサポート役です。

ヴィヴィ、こちらはイトダ夫妻。

夫がボクの旧友のアルフォンス。こちらが奥さんのエリーズだよ。

「

エインが各々紹介すると、アルフォンスもエリーズもヴィヴィアンに歩み寄り、握手を求めた。

ヴィヴィアンが握手に応じると、二人は無表情のヴィヴィアンに優しく笑いかけ、席に着くよう椅子をひいてくれた。

他の三人も席に着き、エリーズが紅茶を淹れてくれ、即座に話に花が咲く。

「アルは東洋人なんだよ。ああ、東洋と言うのは、ずっと東の端にある地域だ。その、ニホンという国から、学生の頃にフランスへ来て、成績が優秀だったためにそのまま大学に残り、そろそろ五年ほどボルドー大学で教鞭を振っている。」

エリーズとはボルドー大学で知り合って、生徒だったエリーズが

アルフォンスに一目惚れをして、結婚したんだ。」

「親の猛反対を受けてね。殆ど駆け落ち同然。姉は時々手紙をくれるけど、両親はもう駄目ね。」

アルの仕事が大学教授でなかったら、とつくに父親に連れ返されているところだけど……。」

「何とか俺が大学での地位を維持しているから、この生活が成り立っているんだ。」

エインとは、ボルドー大学の学生になる前に出会ってね。

一時の出会いかと思っていたら、俺らが駆け落ちした直後に、本当に困っている時に再会したんだ。

それ以来、フランスへ来たら、我が家へ寄って貰う事にしているんだよ。」

三人の説明に、ヴィヴィアンは要所要所に頷く。

「手紙で、メイドが次々辞めて行ってしまうと聞いて、心配していたんだ。」

まだ一週間ほどかい？」

「はい。」

「でも、屋敷に来たその日にフランスへ出てしまったから、まだ家の事は何もした事がないんだ。」

「あら。落ち着かない旅になってしまったのね。体は大丈夫？」

「大丈夫です。有り難うございます。」

「ヴィヴィとエリーズは、歳が近いんじゃないかな。」

「まあ、そうなの？ ヴィヴィはおいくつ？ 私は今年で二十六になります。」

「二十五です。」

「あら、良かった。殆ど同い年ね。」

「俺らも同い年だからな。今年で三十六か。」

そう言って、アルフォンスが陽気に笑った。エリーズもふふと笑う。

「変わり者だが、悪いヤツじゃない。
長くいてやっておくれ。」

アルフォンスの言葉に、エインが苦笑した。そんなエインを、ヴィヴィアンは真っ直ぐ見つめて頷いた。

「そのつもりです。」

ヴィヴィアンが言うと、エインがふわりと笑い直した。

「そう言えば、お二人ともお食事は？」

「ああ、そう言えば、ベルトワーズ邸で朝食を摂った後は、何も。」

「なんだ。俺らもまだなんだ。」

「一緒にどう？　これから支度ですけど。」

「うん。お言葉に甘えようかな。」

エインが言うと、エリーズが席を立った。

「では、手早く準備しますわね。」

そう言っただアへ向かうエリーズに、ヴィヴィアンが声をかけた。

「お手伝い、します。」

エリーズは振り向いて、エインを見た。エインの了解を得なければと思ったのだ。

エインが頷くと、エリーズはにこりと笑って、「お願い」と言った。

「行ってまいります。」

ヴィヴィアンが席を立つと、エインはヴィヴィアンを見上げて言った。

「行っておいで。」

ヴィヴィアンとエリーズが出て言った後、暫し沈黙が訪れた。

エインはヴィヴィアンの出て行ったドアをじっと見つめ、アルフォンスはそのエインを見つめていた。

やがて、アルフォンスが椅子の背凭れに凭れ、腕組をして溜め息

を吐いた。

「彼女と出会ったのは、偶然か？」

アルフォンスの問いかけに、エインが浮かべていた微笑みをすつと消した。そして虚ろな目でアルフォンスを見ると、小さく首を振った。

そんなエインに、アルフォンスはさらに溜め息を吐いた。

「またか…」

何故だ、お前はあれだけ失敗をしたのに、何故また繰り返すんだ？」

「ベルトワーズ伯爵にも言われたよ。」

『諦める』と。」

「当たり前だ。俺だって言うよ。」

アルフォンスが少し語気を荒げて言うと、エインは哀しそうに笑って、俯いた。

「ここまで来たんだ。最後までやりたいんだ…」

でも…」

「でも？」

「それも、これで最後かも知れない。」

「…？」

「もう、”流れられない”。」

エインの言葉に、アルフォンスも俯いた。

そしてそのまま少し項垂れた後、首をかつたるそうに持ち上げて、窓の外に目をやる。

「”シュレーディングーの猫”は、否定された筈だ。」

俺たちが生まれるずっと前に…」

「オレが”観て”いるのは、猫じゃない。」

「じゃあ…ッ!？」

静かに否定するエインを、アルフォンスはキッと睨みつけ、そして即座にはっとした。

エインの横顔は、出会って初めて見る、深い悲しみに沈んでいた

からだ。

アルフォンスは息を整えるために、少し口を閉ざした後、小さくゆっくり呟いた。

「バンブー」を観測したと聞いて、それを”渡った”と聞いた時は、俺だって驚いたさ。

驚いたと同時に、施設を裏切ったお前を憎みもした。

勿論…。」

言葉を止めたアルフォンスを、エインが横目でちらりと見た。

エインの視線をアルフォンスも横目で受け止め、

「…同情もした。」

と続けた。

「でも、その哀しみを受け止めるのが、”人間”じゃないのか？

俺たちは神じゃない。

超えてはならない領域がある。その中でさらに留めておくべきルールがあるだろう？

俺たちが守るべきものは、”それ”じゃなかったのか？」

その問いかけに、エインは何も反応を示さなかった。

ただ俯いて、疲れたように椅子に凭れ、虚ろに空を見つめているだけだ。

「…お前の心の中は、ぐちゃぐちゃなんじゃないのか…。」

静かに、しかし吐き捨てるようにアルフォンスが言うと、エインは少しだけ笑って、目を閉じた。

「そうかもしれない…。」

だから。

だからこそ、最後までやってみたいんだ。

最後まで、縋り付きたいんだ…。」

いつだって冷静で、笑顔を絶やさなかった男が、と思うと、アルフォンスにはエインが惨めに見えて仕方がなかった。

尊敬もし、心を啓いた友人には違いない。勿論、この先もエインが困れば手助けを躊躇う訳もない。

だが、心中に闇の渦巻く友人は、闇へことん潜ると言う。

その先に、同じ哀しみが繰り返していつと。

覚悟とも、ある種諦めとも取れるその決意が、いつ友人の心を壊してしまうかと、気が気ではない。

「『運命は変わらない』、なんて、素朴実在論は、お前には不要ないな……。」

アルフォンスが少し嫌味を言うと、エインは俯いたまま、目を閉じたままにやりと笑った。

月の港の極東人 2

施設から与えられた任務のための出発を明日に控え、エインは友人へ挨拶に回っていた。

施設は広大で、たった十人あまりの友人の研究室を回るだけで、一日終わってしまいそうだった。

三人目の友人への挨拶を終え、四人目の友人の研究室へ続く長く長い廊下を歩いていると、向かいからまさに四人目の友人が、都合良く歩いて来た。

「バーニイ！」

エインが声をかけると、白衣のポケットにだらしなく両手をつ込んで歩いていた友人は、にこりと笑って歩みを速めた。

「明日、出発だって？」

「ああ。みんなに会って回ってる。」

エインが言うと、バーニイが「そりや大変だ」と苦笑した。

目の前のバーニイとは、三年前に知り合った。バーナード・ドゥルと言つて、歳は同じ。数年前に同職のナタリーと言う女性と結婚したが、二年後に生まれた子は原因不明の不治の病にかかり、たった数日でその生を閉じた。その後、互いの心労が祟り、妻とは離婚した。

エインと似て、冷静でいつも笑顔を絶やさない男だった。趣味も割かしとおっとりとした性格も合い、あつという間に意気投合し、今では親友の一人である。

「重要任務だな。仲間内から選ばれるとは、誇らしい。」
バーニイが言った。

「本当は、祝杯でも挙げて一晩みんなで飲み明かしたいが……。」
「お互い忙しい身だからな。」

エインが言うと、バーニイが肩を竦めて頷いた。

「これで、少しでも人間の寿命が長引けばいいけどな。」

生半可なエコがこの地球を救うなんて言ってたやつらに、外の空気を吸わせてやりたいよ。」

「医者ならぬ発言で。」

斜に構えるバーニイに、エインがはにかみ笑った。

「コウも次の試験を受けるって言ってた。」

エインが言くと、バーニイが俯いて苦笑した。

「次々、いなくなるな。ここから……。」

「仕方がないな。こうなった以上は。」

言うエインも、哀しく苦笑した。

「いつか、迎えに行けるようにするから。」

そう言っ、バーニイが手を差し出した。エインはその手を握りしめると、力強く頷いた。

「期待してるよ。」

二人は頷き合っ、別れた。

永遠の別れではない。暫しの別れだと、確認をして。

六人目、七人目と挨拶を終え、最後にもう一人の親友であるコウ・イトダの研究室を尋ねる。

コウは代々この研究施設で幹部を務める優秀な研究者を輩出しているイトダ家の次男で、自身も次期歴史研究部門の最高顧問として名を挙げていた。

コウの研究室の外で声をかけると、すぐに陽気な声が帰って来た。

『どうぞー!!』

ドアを開け、中に入ると、コウが机に座って、入って来たエインを見て笑った。

「挨拶回りか。」

「ああ。」

「俺もそのうち行くぞ?」

悪戯つぽく笑うコウは、先祖のどこかで西洋人の血でも混じったかと思う程に彫りの深い顔立ちで、大きな目が印象的な青年だ。だが、実際西洋系の血が混じった事はなく、純血アジア人種だった。「待ってるよ。」

それだけ言つと、もう話がなかった。

話し込む事は普段からしているが、こういった”いざ”と言う時にする話は持ち合わせていなかった。

付き合いが深いせいで、改めてお別れとか、過去を振り返るだとか、そんな事をする必要性もなくなってしまった。

『顔を見れば解る。』

それが総てだった。

「見送りには行けない。」

「ああ。独りで行くよ。」

「無事で。待ってるよ。」

そう言つて、コウが拳を突き出した。エインも拳を挙げ、軽くぶつける。

「お先に。」

この時、エインはまだ心と感情はバラバラなままで、微笑みも哀しみも、知識だけでその表情を作っていた。

それでも友人たちは自分の大事なものであり、何にも替え難い存在には違いなかった。

帰つて来られる。また会えると信じて疑わなかった。

だから、この先自分がこの場所に帰らないと言つ選択をするなどという事も、考えもしなかった。

エリーズの食事の支度を手伝い、キッチンを右往左往する。

不器用でもなく、料理が出来ない訳でもない。気転が利かない訳でもないが、エリーズの手際の良さに、自分の必要性を見出せなか

った。

だから、ヴィヴィアンはただ言われた事をする事にした。
予め仕込んであったスープを温め、これまた予め仕込んであった
チキンをオーブンに入れる。

食事はまだ、と言っていたが、恐らくエインやヴィヴィアンの到着
を待っていていたのだろう。

エリーズはテキパキと余念なく動き、ヴィヴィアンの手が空かぬ
よう指示をする。

三十分余り経ったところで、チキンが香ばしい香りを立て始めた
頃、やっとする事がなくなった。

「一つ、聞いてもよろしいですか？」

ヴィヴィアンが訊ねると、エリーズは一瞬きょんとして、ふと
笑った。

「何でも、何個でもどうぞ。」

「ご主人のアルフォンス様は、こちらにいらっしゃる前は東洋の故
郷にいらしたのですか？」

「ええ、そのようよ。」

私も出会う前の事は話くらいしか聞いた事がないけれど。

何故？」

問い返されて、ヴィヴィアンが一瞬口籠った。

「いえ…。」

知人に、「イトダ」という者がおりまして…。」

ヴィヴィアンが言うと、エリーズは「あら。」と言って喜んだ。

「東洋の方にも色々な名前があるのに、偶然同じ名前のお知り合い
がいるなんて。」

エリーズは楽しそうに言いながら、オーブンを開けた。重い熱い
空気が溢れ、後からふわりとチキンの香りが漂う。

「親戚かしら…？ ファーストネームは？」

「アキ」です。」アキ・イトダ」。男性です。

叔父に当たる方の名前も聞いた事があって…。

確か…、”コウ”、…だったかと…。」

「アキ…。コウ…。」

再びオープンオープンの蓋を閉じ、エリーズは唇を人差し指で叩きながら名を繰り返したが、思い当たらないようで、ヴィヴィアンを見て肩を竦めた。

「聞いた事ないわ。」

アルから家族の話も聞いているけど、お父様もお母様もお祖父様も、確か従兄弟たちも違う名前だったわね。

残念。知り合いだったら楽しかったのに。」

そう言つて、くすりと笑う。

ヴィヴィアンは、何故か少し落胆をして、俯いた。

「そうですね…。済みません、変な話を。」

「いいのよ。」

何でも話してね。うちの主人も変人だつて言われているけど、教授Aも相当変人だと言うし。

苦労も多いと思うのよ。今までのメイドさんもすぐ辞めて行ってしまったしね。」

「今まで教授のお屋敷に入ったメイドをご存知なのですか？」

「ううん。直接は知らないのよ。」

でも、噂はね、聞こえて来るから。

あなたが思っている以上に、教授はご高名だし。

意外なところに知り合いがいるのよ、あの人。

ベルトワーズ伯爵もそうだし。ロンドンのご友人も、セレクトシヨップをやっているらしいやうな女性とか、大学とは無縁の方が多いそうなのよ。

とっても奇妙よ。」

エリーズが笑った。口調には言葉ほどの悪意はないので、恐らく冗談でお互いを貶し合える関係なのだろうと思う。

ヴィヴィアンには、何年経っても気付けない関係だと思う。

思案に暮れていると、エリーズが「でも…。」と言つてヴィヴィ

アンを覗き込んだ。

「あなたはかなりのお気に入りだね。」

教授が誰かを旅に同行させるなんて、なかったもの。」

そう言われて、指先がじわりと痛んだ。

ベルトワーズ邸での一件でも感じた感覚だ。

”幸せ”という感覚…。

今まで感じた事のない感覚だ。

道が変わっている、と信じられる感覚であれば、尚いい。

痛む指先を擦っていると、チキンの香りが再び立った。エリーズがオーブンを開けたのだ。

「出来上がり。いい色付いてるわ。」

やっぱり下茹ですると焼き上がりが早くていいわね。」

エリーズはヴィヴィアンを振り返って満足げに笑うと、チキンを手早くオーブンから出し、プレートの上に置いた。

「さ、お食事にしましょ。」

お待たせして、ごめんなさいね。」

「いえ…。済みません、大したお手伝いも出来なくて…。」

言っている傍から、エリーズにスープを入れた大きな器を渡される。エリーズは焼きあがったばかりのチキンのプレートと、ミルクパンの乗った籠を器用に持ち上げてにこりと笑っている。

「うっん。」

あなたは十分お役に立ったわ。自分を余り過小評価しない事よ。

この調子で、教授のお食事もよろしくね。」

ヴィヴィアンは少し恥ずかしくなって、俯きがちにエリーズを見頷いた。

そして、男どもは話が弾んでいるだろうから、と足音を少しだけ消して二階への階段を昇る。だが、賑わっていると思われた部屋からは何の音も漏れて来ず、歩を進めることにエリーズとヴィヴィアンの足は重くなった。

不思議に思い、部屋の前に着くなり、エリーズがドアに耳を近づ

けた。

「静かだわ…。」

そう呟いて、遠慮がちにドアをノックする。

中からは、一呼吸も二呼吸も置いて、夫のアルフォンスの声がした。

「どうぞ。」

ドアを開けると、苦笑しているアルフォンスと、笑い切れていないエインがいた。

二人の間には妙な空気が漂っていて、取り繕う笑顔が余計に空気を助長していた。エリーズも当然気付いていて、逆にそれを窘め出す。

「まったく、これから食事だって言うのに、重い空気作って!」

「済まないすまない。」

怒られ、アルフォンスが笑う。

「どうせ、主人が変な事聞いたんでしょう? ごめんなさい、教授。」

「

「いや…。ボクも、ね…。」

珍しく言葉を切れ切れに吐き出して、エインが苦笑した。

そして、ヴィヴィアンが手にしているスープを見、微笑んだ。

エリーズもアルフォンスも、その視線に話題を切り替える。

「さあ、食事だ食事。」

「ヴィヴィはとってもお料理上手ですわよ。教授。」

「おお、それは素晴らしい。」

「少しは太れるな。」

「太る必要はないだろう。」

「でも、教授は少し細すぎませんか?」

「そうかなあ? これでも筋肉はまだあるんだよ?」

「ガリの怪力男って言われてたもんな。」

「そうそう。」

「まあ。」

ぺちやくちやおしゃべりの続く中、スープが注がれ、チキンが配られ、着席を促され…。

ヴィヴィアンは一言も発する事無く、ただ流れを追うだけで精一杯ではあったが、置いていかれているという感覚もなく、どちらかというとヴィヴィアンのために三人が止め処なく話しているように思えた。

そういえば、饒舌で読書好きで、その他多少の生い立ちくらいしかエインの事は知らなかったし、突っ込んだところまでエインについて教えてくれる者とも出会わなかった気がする。だから、この会話は、エイン・アンダーソンという男について知るには、とても都合のよい内容だ。

そんな思惑を知ってか知らずか、三人はお構いなく夕暮れまで話し続けた。

「あらやだ、もう外が暗くなってるわ…。」

とエリーズが外に気付いた頃には、もうすっかり空は夜の体で、街にも明かりが灯っていた。

一同…というより主にヴィヴィアンを除く三人であるが…の話は中々尽きず、結局食事が終わってからこんな時間までお喋りに勤しんでしまった。

が、その割にテーブルの上の食器は綺麗に片付けられ、お茶がきちんと用意されていた。エリーズが場の流れを切らず紅茶の準備をしていたからであるが、誰一人その行動には気付かなかったという事である。

「今日はもう遅い。泊まってくだろ？」

アルフォンスが言くと、エインが苦笑した。

「それは悪いよ…。」

「お構いなく。お客様用のお部屋の準備はもう済んでいるから。」

エリーズが笑う。どうやら夫妻は、こうなる事を見越して全ての準備を整えてくれていたようだった。

「どうせあとは、スコットランドに帰るだけなんだろう？」

アルフォンスが訊ねると、エインは「…まあ、そうだが…。」と歯切れの悪い返事をした。

「中々こちらにいらつしやれないんですもの。積もるお話もあるでしょう？ 私もヴィヴィとお話したいし。」

ね？ 教授。」

エリーズにも推され、エインはヴィヴィアンをちらりと見て、溜め息混じりに頷いた。

「悪いね。そうさせてもらうよ。」

「いいえ。お気遣いなく。」

エリーズは待つてましたとばかりに席を立ち、紅茶を淹れ直しに出て行った。

ヴィヴィアンは口を挟めないもので、ただ成り行きを見守っていた。エインと視線が合っても、どう反応してよいか判らなかった。

「ヴィヴィは…。」

戸惑う空気を察してか、アルフォンスがヴィヴィアンに声をかけた。

「はい。」

「生まれも育ちもロンドンかい？」

「生まれは…、済みません、解らないのですが、育ったのは、ロンドンです。」

少し言い難そうに答えるヴィヴィアンを、エインがフォローした。「ヴィヴィはボクと同じだよ。」

エインの説明に、アルフォンスが「ああ。」と頷いた。

「気にしなくていい。少なくとも、この家の中ではそう言った事にとにかく言う者はいないから。」

話したくなければ、別だが。」

柔らかく笑って、アルフォンスが言った。

「有難うございます。」

ロンドン郊外の孤児院にいました。たまたま学校へ通わせてくれるという方がいまして、読み書きはきちんと出来る様教育は受けさせて貰えました。

その後、サンアッチ教授をご紹介いただいて、暫くは施設の手伝いと、ロンドン内のお屋敷へ、シーズン区切りの契約でメイドのお仕事を…。

アンダーソン教授のお屋敷に勤めるお話は、二週間前に決まりました。」「

「そうかあ。」

早めに帰って落ち着きたかっただろう。申し訳ないね。」「

「いえ…。大丈夫です。」「

詫びられて慌てると、アルフォンスが何故か、何か含んだように微笑んだ。

そこには哀しみのような、愛おしさのような、計り知れない哀愁に似た感覚があるように思えた。

話はそこで突然途切れ、沈黙が訪れた。

久しぶりの静けさに、多少の居心地の悪さを覚える。

ドアが開いた。見ると、エリーズが新しい紅茶を持って来たのだった。

ポットからは湯気が立ち上る。

エリーズは、手早くエインとアルフォンスの分だけ紅茶を注ぐと、ヴィヴィアンを見て、

「夕飯の支度、手伝っていただけ？」

と言った。

「はい。」「

ヴィヴィアンはすくつと立ち上がり、エインを見て、今度は何も言わず、エリーズについて部屋を出た。

相変わらずお喋りの絶えない夕飯を終え、夜も更けた頃、ベッドルームに案内された。

エインとは隣同士で、向かいは夫婦の寝室だった。

宛がわれたベッドルームは、ベルトワーズ邸までの間に寝泊りした宿屋に似て質素ではあったが、きちんと整理されており、こじんまりとした大きさが逆に落ち着く。

「何か困った事があったら、向かいにいるから遠慮なく声かけてね。」

綺麗に糊を付けたシーツをベッドに起き、エリーズはヴィヴィアンに振り返った。

「有難うございます。」

部屋の脇にカバンを置きながらヴィヴィアンが礼を言うと、エリーズはランプと蝋燭、洗顔の水差しの説明だけして、早々に部屋から出て行った。

独りになり、やっと自分が疲れている事に気付く。エリーズが早めに引き上げたのも、疲れが顔に出ていたからかも知れない。

ヴィヴィアンはベッドに腰掛け、ブーツの紐を緩めると、それを乱雑に脱ぎ捨て、そのまま倒れ込んで耳を澄ます。

賑やかなボルドーの街も、夜になると静まり返るものなのだろうか。音は然程も聞こえず、しんとした空気が耳に入ってくる。

ヴィヴィアンはそのまま目を閉じ、今日一日に得た情報を反芻した。

エインの旧友、アルフォンス・イトダ。妻のエリーズ。東洋の国から来たという彼と同じ名を持つ知人のアキ・イトダ。エインの友人だという、ロンドンでショップを営む女性、ベルトワーズ伯爵。

サンアッチ教授とアルフォンスは知り合いらしい。

ベルトワーズ伯爵とも面識があるそうだ。

エインとアルフォンスは、アルフォンスがボルドー大学に入学する前に出会ったらしい。

食事中ふと出た話によると、アルフォンスはフランスへ来たばかりの頃にベルトワーズ邸を訪れ、学費の免除交渉の協力を求めたそうだ。当時ベルトワーズはボルドー大学へ資金提供をしており、それなりの発言権を持っていたから、だそうだ。ベルトワーズは、アルフォンスの学費を自分が工面するという話を自ら出し、その代わりに時折自分の書物集めの協力をするようアルフォンスに求めたそうだ。あの『図書館』にあった書物の一部は、アルフォンスが集めたもの、と言う事か。

アルフォンスはそれまでフランスは愚か東洋のニホンという国からは出た事がなく、当然二人については前以て知識を得る事もなかった。

そして、兄弟にも親類にも自分の知る”イトダ”と同じ名はいないという事だった。少なくとも、知人である”アキ・イトダ”とアルフォンスは似ても似つかぬ他人に見える。

そのアルフォンスが『図書館』へ出入りする中で、ベルトワーズ邸に『図書館』の書物の閲覧を所望したエインと出会い、意気投合した、と言っていた。

そう言えば、エインは何をしているのだろう。隣の部屋からは物音が聞こえない。アルフォンスに部屋を案内されていたが、話声も聞こえないから、自分と同じように早々に独りになったかもしれない。

エインに会いに行くべきか…？　そう思い、直後に否定する。一体、何をしに…。

ヴィヴィアンはむくりと起き上り、裸足のまま窓辺に立った。同じような高さの建物が並ぶので、ずっと向こうまで街を見渡せる。屋根の群衆の中に、ぽつりぽつりと大きな建物が頭を出す。大聖堂に、建設途中の宮殿、その向こうに見えるのはなんだろう…。

思えば、ずいぶん遠くまで来てしまった。

知らない土地で育てられ、知らない土地で働き始め、知らない土地で生涯忘れ得ぬ、最初で最後の出会いをした。

何に対しても無感情だった自分が、これ程までに傾倒する事がこの世にあるとは、あの任務に着くまで思いもしなかったものだ。何とかして、この想いを遂げたい。

仮令、この世界を裏切るとしても。

月の港の極東人 3

歩いている。

右手には小さなオイルランプを一つ持っている。

薄暗い道に行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く体に纏わりつくようなねっとりとした風が吹いてくる。坑道のような道。でこぼことした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く天井も高い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げるだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが。

あの人が隠した、大事なものが。

ずっと分岐点を探している。あの人を守り切るために必要な方法を探している。

——コツ。

分岐かと思っていた道は、そうではなかった。

悉く失敗し、また旅をしなければならなかった。

これで終わりにしたい。

もう心が持たないから…。

これで最期にしたい。

だから、アレを探す。今まで一度たりとも触れようと思わなかったアレを。

アレに触れる事が、残された最後の可能性だから。

——コツ…。

それなのに、いつも邪魔をされる。

正体は解らない。彼らがなんなのか、解らない。

だが、彼らはいつもあの人を傷付けるために現れ、消えて行く。彼らの正体が解れば、あの人を守れるだろうか。

——コッ……。

足音がする。自分のものではない。

誰の足音…？

暗闇の坑道に響き渡る足音が、目の前で止まった。気付けば少し広い空間に出ていて、ランプの灯りが足音の主を暗闇から少しだけ引き摺りだすように照らしていた。

…誰だ…。

無言で身構えると、足音の主が突如襲いかかった。物凄く早さであつという間に目の前に現れたそれは、いつもあの人を襲う、アレだった。

影。

黒い体に浮かぶ二つの赤い光は、目だろうか。人の形をしているのに、形を明確に捉える事の出来ない、それは正しく影と喻えるに相応しい。

影が手を突き出してきた。

寸でのところで避ける。目のすぐ横を、銀色に光るナイフがひゅつと風を斬る。そのままバランスを崩した。足が纏れ、体制を整える事が難しいと判断した瞬間、影が空いている手で首を掴んで来た。片手で大人の自分を持ち上げ、あろう事が首を押し折ろうとしている。

ぐうと喉が鳴る。肉が首の骨に擦れ、じゅくじゅくと気持ちの悪い音を立てる。恐怖と焦りに意識が飛ぶ。

「…あ…。」

やっと出した声に、遠退き掛けていた意識が一瞬戻る。首が折れ

るのを覚悟の上で、体を揺らして勢いをつける。脚を思いつきり振ると、幸運にも影の頭部に当たった。カランと軽い金属が落ちる音がした。影が衝撃の反動で再度首を掴み圧つて来る。しかも一度脚を振り上げると、影は腕を大きく振り、自分は壁に向かって投げつけられた。

「ぐっ……！」

背中を強く打ち、呼吸が止まった。咳き込もうにも、息が吸い込めない。

うつ伏せに倒れたまま動けない。

「う……く……っ。」

呻き声を出し、何とか呼吸を再開させようと試みる。

顔を上げると、落ちたランプの脇で影が同じように蹲っていた。

頭部を抑えている。痛みを感じるのか。

そう思っていると、視界の端で、何かが光った。ナイフだ。相変わらず呼吸すら満足に出来ない状態で、立ち上がる事も当然出来そうもない。だが、あれをどうにかして手の中に入れたい。手を伸ばせば届きそうだ。

あれで、あいつを殺せば……。

ぐっと腕を伸ばす。少しずつ回復してきた呼吸のお蔭で、徐々に手に力が入る。上半身を起こし、腕で少し前に進み、腕を伸ばす。指先で地面を掴み、一ミリでも一センチでも腕を伸ばす。

そして、指先にナイフが触れた。だが、次の瞬間。

目の前のナイフを、何者かの足が踏み潰した。

はっとして見上げると、見慣れた顔が自分を見下ろし睨みつけていた。

その顔にはとてつもない怒りの表情が浮かび、嫌悪や憎しみと感じられるものを自分に向けているようだった。

全身を、哀しみと絶望が駆け巡った。

この人を守るためにいる自分が、今、その人の嫌悪の対象になっている。

それは、未だかつて経験した事のない絶望だった。

目の前が暗闇になって行く。体が深く沈み、地面に飲まれているような感覚に襲われた。

痛みと絶望で意識が遠のく。

何故…。

あなたを守ろうとしたのに…。

何故…。

走っている。

右手に持つ小さなオイルランプが、激しく揺れる。

薄暗い道に行く。じめじめと空気は湿り、どこからともなく温く体に纏わりつくようなねっとりとした風が吹いてくる。坑道のような道。でこばことした岩を掘り進めたようなその道は、意外に広く天井も高い。

かつかつと自分の足音だけが響き渡る。あとは風が唸り声を上げるだけで、何も聞こえない。

この道の先には、アレがある。

この旅が、また失敗した時に必要なものが。

あの人が、そして自分が、最後の可能性と信じた、大事なものが。そして、それを求めてこの道を行くあの人の命を奪う、アレも…。

何度失敗したか。

何度間に合わなかったか。

何度、この道を走ったか…。

暗闇の向こうで、どさりという音が聞こえた。次いで呻き声が擦る。

ああ、間に合わない…。もっと早く…。

小さな灯りが浮かんた。ランプが落ちている。

まさか…。

灯りに向かって走り続ける。僅かな灯りに影が浮かんだ。
アレだ…。間に合わなかったのか…？

走る。岩肌の陰に、あの人の手が見えた。倒れている。

ああ…。

何かが込み上げて来る。

喉が締め付けられる。

涙が溢れそうになる。

間に合ってくれ…。

足音に気付き、影がこちらを見て、ずっと闇に溶けて消えた。

一步遅れてあの人の下へ駆け寄る。

倒れるあの人を抱き上げ、首筋に触れる。

ああ…。また…。

また間に合わなかった…。

ぎゅっと抱き締める。

隙間から、腕が零れ落ちた。

名を呼ぶ。詫びる。繰り返し、繰り返し…。

あと何度、この体を抱き起こせばいい…。

目が開いた。

その拍子に、涙が零れた。

夢を見て泣くなど、久しくなかった気がする。

いつの間にか眠ってしまったのか、窓に目をやると、外はまだ暗く、月明かりがほんのり部屋へ差し込んでいた。

ベッド脇のキャビネットに手を伸ばし、ごそごそと眼鏡を探す。

指先に、眼鏡が触れた。

眼鏡を掴んで、ゆっくり起き上がる。

まだ残っている涙を拭い、もう一度窓を見る。

嫌な夢だが、繰り返し見る夢だ。

そして、失敗を繰り返さないために必要な夢だ。

ベッドから足を下ろし、縁に座って窓を正面に見た。体が妙に疲れていて、思わず膝に肘を乗せ項垂れた。

——俺たちは、神様じゃない。

旧友の言葉が、脳裏を過ぎった。

確かに神様ではない。自分を神だなどと思った事もない。

だが、神ではないからこそ、限界を知りたいのだ。

もう、大切なものを失うのは嫌だ。

月の港の極東人 4

白い部屋。

この施設に従事する者はみな、この部屋をそう呼んでいた。

部屋に入ると席を指差され、座ると資料を渡された。

ぐねぐねと湾曲する柔らかい透明素材で出来たボードだ。特殊な電波を送ると文字、図形、ありとあらゆるものを表示してくれる。

一時はホログラムなどというものを活用しようと言う動きもあったが、このジェル素材が開発されてからというもの、ビジネス界に於いては擬似立体投影には誰も何の興味も示さなくなり、活躍の場は教育部門くらいのものであった。

部屋は内外で電波が行き来しないための防御壁が貼られている。通信システムが飛躍的に進歩をして尚、電波の遮断や違法傍受には原始的な方法を探っている現状に、SFマニアは指を指して笑いながら批難をし、科学者の卵たちはロマンを追う事をやめた。

防波壁は当然音も遮断する。だから極秘会議を行う際に主に使用されるのだが、入出すると少し耳がぼうつとするので居心地が悪い。その上、目の前にいるのが四つほど階級を跨いだ先にいる幹部で、室内には二人しかいないとなれば、居心地の悪さはこの上ない。

溜め息をそつと吐きながら、ボードに映る資料に目を通す。

「君に、本来のこの任務とは違う任務を並行して遂行して貰いたいと思っている。」

ターゲットは、その男だ。」

視線を上げると、幹部の男は椅子に踏ん反り返って自分を見ていた。

「ターゲットは五十年ほど前に旅立った」チャクラ c a k r a v a r t i n
「の推薦メンバーの一人。大変優秀な科学者でな。」ヴァルティン c a k r a v
a r t i n」のメンバーを決める際、真っ先に認証された。

君の任務は、そのターゲットを追跡し、排除する事だ。」

一瞬、驚く。

「排除……？」

「彼は最高国際法を犯した。

君は任務を遂行する傍ら、彼を見付け次第、排除する。」

排除。

即ち、殺せという事だ。

「遺体は、どうすればよろしいですか？」

「事故と見せかけ、自然処理させる事。

銃の暴発、強盗による殺害、転落死……。何でも良い。

彼は名も変えず、”現地”にすっかり溶け込み、活動している。

君が誘導し易い方法を採り給え。

その後、葬儀が執り行われ、遺体は埋葬される。何の変哲もない、一般市民として、な。」

惨い話だ。

自分が授かった任務は、世間からは世界の秩序を護る英雄だの、立派だのと謳われてはいるが、本質はただの暗殺者である。

人知れず他人の命を絶ち、世界に影響を与えないようにする。

表向きは、国際法を破り無断で”流れた者”の身柄を確保したり、任務を受けて”流れた者”の監視をするのが任務だ。

勿論、表立った任務中にも、監視対象が明らかなる背徳行為を犯し、その影響が大きいと判断されれば、独断で対象を排除する事も任務の内ではある。

だが、大抵はその様な事態にならぬよう人選をし、行われている事である。そう言った状況になる事は、珍しいとされている。

「ターゲットと遭遇出来そうな距離にいる人物のデータを、何人か揃えておいた。そこからターゲットの居場所を特定し、任務を遂行するように。」

流れ先には、私の叔父がいる。彫りの深い東洋人だ。会えばすぐに判るだろう。

名は、コウ・イトダ。」

そう言つて、目の前の男が紙を数枚取り出して、渡して来た。今となつては、非常に価値のある素材だ。

紙には、たった今男が言つた”ターゲットと遭遇出来そうな距離にいる人物”に関する事項が並んでいる。叔父と言う、”コウ・イトダ”の記述もある。

他に話はないかと男を見ると、男は一つ頷いて、「いきたまえ。」と言つた。

立ち上がると、手を差し出された。

「このような任務、君に与えるべきではないと、意見も出た。

ここに残り、軍人として世界に従事して欲しいと嘆く者も多かった。

申し訳ない事をした。」

少し哀しそうな顔で、男が詫びた。

なんとも思つていない自分には、何も響いて来ない言葉だ。

「お氣になさいませんように。イトダ博士。」

そう言つて、いつも通りの無表情をさらに無表情にした。

自分の知る”紙”とずいぶん異なるざらざらとした紙の書状を渡され、エディンバラ郊外にある屋敷へ向かう。

これから従事する、大学教授の屋敷だ。

本の虫、予言師、変人。

数知れず妙な謂れをされると噂を聞くが、ユーモラスで頭の回転が速く、見た目以上に運動神経の良い、三十半ばの男性だという事だ。

名を、エイン・アンダーソンと言う。

名を聞き、唇を噛み締める。

ここへ来て二年。やっと辿り着いたターゲット。

自分の任務は、このターゲットを排除する事だ。

エディンバラから歩きで行けそうだったので歩いて来たが、少し後悔した。屋敷は小高い丘の上に建ち、なだらかな登り坂が思いの外体力を奪って行く。

普段から訓練をし、トレーニングを欠かさない自分の体でさえ、息が切れかけていた。

やっと屋敷に着いた時には、思わず鞆を地面に置いてしまつほどに疲れていた。

息を整え、扉を二度叩く。

暫くして、「はいはい」と軽い返事が聞こえた。

ポケットから招待状を取り出し、ドアが開くと同時に突き出した。
「教授Aのお屋敷はこちらでしょうか？」
プロフェッサー

抑揚も付けず、素っ気無く訊ねると、出て来た男は一瞬驚き、
「新しいメイドさんかな？」

と聞いて来た。

「サンアツチ教授のご紹介で参りました。
ヴィヴィアン・トーマスと申します。」

名を名乗り、書状を下げると、男と目が合った。

「ようこそ。取り敢えず部屋へ案内しよう。」

男は自分に負けないくらい素っ気無い態度でヴィヴィアンを招き入れ、ヴィヴィアンの鞆を持ち上げた。

「あ……。」

ヴィヴィアンが慌てると、男は「いいいいいよ」と言つて、一階奥の一室へ歩いて行った。

背の高い、ほっそりとした体付きの男だ。綺麗なブロンドの髪を乱雑にオールバックにし、丸く小さな眼鏡をかけている。

「東向きの部屋だから、陽当たりは悪くないと思うよ。」

まだ部屋にも着かないうちから、部屋の事を話し始める。

「この家、ボクと君以外はいないから。」

好きに使ってくれて構わないよ。

まあ、入られては困る場所もあるんだけど。」

こちらを向きもせずに、男は言う。そして、廊下の一番奥の扉の前で止まると、ドアを開けた。

中へ入ると、男の言うとおり、陽当たりは決して悪くなさそうな部屋だった。

「基本的には、食事の支度、掃除、洗濯、無理のない程度に雑用をして貰おうと思っている。

二階は、殆ど使っていないから、気が向いたら掃除でもしてくれ。

食事の回数、時間は任せるよ。要る物があつたら、遠慮なく言うてくれ。」

空気が埃っぽいので、窓を開けながら男が言った。そして、「それから……」と言って、やっとヴィヴィアンを見た。

「噂は聞いてると思うけど、ボク、病的に本に熱中するから、声をかけても聞こえない事の方がザラなんだ。

気にしないで肩でも叩いて呼んでくれ。

呼び方は、なんでもいい。

でも、”旦那様”とか”ご主人様”はやめてくれ。」

そう言うのと、男は初めて笑った。

寝付けないまま、もうそろそろ夜明けを迎える。

ヴィヴィアンはベッドに横になったまま、ずっと窓の外を見ていた。

懐かしい事を思い出した。

任務に就く事が決まった時の事を。

これでも優秀な軍人として、将来の幹部候補と謳われていた。

だから、この任務に志願した時、顔も見た事のない知らない者から、ずいぶんと反対されたものだった。それを押し切り、ここへ来た。

後悔はない。何も棄てるものがなかったから。

何度も思う。

そんな自分に、棄てられないものが出来るなどとは、思いもしなかった事だ。

エインが初めて見せた、あの人懐こい笑顔を思い出す。

最初は何とも思わなかったあの笑顔が、いつからかとても大切なものになった。

そう言えば、いつからエインを襲うあの影は現れたのだったか…。思い出そうとすればするほど、妙な事に気が付いた。疑問は瞬時に大きく膨れ上がった。

心がざわつき、急に夜の闇が怖くなる。

最初に失敗した時、影など現れもしなかった。

あれは紛れもなく偶然に、そうだったのだった。

ではあの影は、いつから現れたのか…？

夜が明けてきて、空が白んできた頃、急に雷雨が降り出した。

向かいのイトダ夫妻の寝室のドアが開く音が聞こえたので、ヴィアンは手早く顔を洗い、一通り身なりを整えて寝室を出る。

キッチンへ向かうと、エリーズが朝食の支度を始めるところだった。

「あら、おはよう。」

早いね。ゆっくりしてくれていいのに。」

手伝いに来たと思ったエリーズは、ヴィアンににこりと笑った。

「お手伝いがあれば…。」

雨、ひどいですね。」

ヴィアンが言くと、エリーズは仕込み始めたばかりのコーンスープを手伝うよう指示しながら、窓の外を見た。

「ガロン又川が少し増水するわね。」

船もこの雨じゃ出ないんじゃないかしら…。」

「困りましたね…。」

「そうだったら、もう一晩いればいいわよ。」

大した事ないように言って、エリーズは発酵させておいたパン生地を成型し始めた。

エリーズがパンに夢中になったので、ヴィヴィアンも暫し無言でコーンスープ用の茹でたとうもろこしを漉す。

単純作業を繰り返していると、思考が広がり、普段考えない事を考え始める。ヴィヴィアンは手を止め、エリーズを見た。

エリーズは無心にパンを捏ね直したり、指先で成型したりしている。ブレッドの成型が終わり、今はバターを挟み込んで三角に切り込んだクロワッサン生地を巻いている。

「…ご主人が、亡くなった時の事、考えたりしますか…？」

突然のヴィヴィアンの問い掛けに、エリーズがふと顔を上げ、一瞬驚いた後、くすりと笑った。

「考えなくもないわよ…。」

あの人がいなくなつて、生きていけるかとか、死んでしまうんじゃないかとか…。」

「そんな時、どうするんですか？」

「泣くの。思いつきりよ。」

エリーズが肩を竦めた。言葉に似合わず、顔には満面の笑みが浮かぶ。

しかし、そんな笑みをすぐに仕舞い、エリーズは淡く笑って、パン生地を弄り始めた。

「でもね。」

その後、きちんと考えるのよ。

独りで生きていく方法を。」

「…。」

「愛してるからこそ、私も最後まで生きるわ。」

きつと気が狂いそうになっっているだろうけれど、そこから這い上

がった先に、何かがあると思うの……。」

エリーズの言葉に、ヴィヴィアンは俯いた。

思えば、普通ならそうなのだ。

絶望の余り死んでしまいか、蛻の殻のようになったとしても生き続けるしか道はない。

自分のように恵まれた者など、そういるものではない。

申し訳なくなつて、エリーズを見る事が躊躇われた。

その様子に、ヴィヴィアンが悩んでいると勘違いしたエリーズが、戸棚からチェリーの砂糖漬けの入った瓶を取り出し、一掬いスプーンで掬つてヴィヴィアンに寄越した。

ヴィヴィアンはそつとスプーンを受け取り、ゆっくりチェリーを口に含む。

甘酸っぱい香りが体中に広がり、何故か強張つて固くなつた体が解れていく。

「愛なんて陳腐な言葉を使いたくないけど、でも、そこにあるのが本当の愛なら、その強さの分だけ希望もあるものよ。

そして必ずそこに、絶望なんてものは存在しないわ。

怖がらなくて、大丈夫よ。きつと……。」

言われて、また俯いた。

今度は、込み上げて来る涙を堪えるためだ。

月の港の極東人 5

雨は中々止まず、船の出港もままならず、もう一晩イトダ家に居座る事になった。

「こんな雨は初めてだよ」と言つて、アルフォンスが笑いながら港と家を行き来してくれたが、彼が行ったところで船が出るという事でもなく、状況はただ、雨が止むのを祈るばかりとなった。

雨が降っているだけならよいのだが、嵐が近付いているという。この状態で船を出せば、転覆するのは火を見るより明らかだった。

イトダ家の扉が叩かれたのは、そんな日の午後の事だった。

エリーズがエントランスからエインを呼んだ。

一同揃つて出てみると、そこには一人の老人が立っていた。身なりをみるなり、どこかの屋敷に従事する執事のようなようだ。随分困惑した表情をしている。

「ご無沙汰しております。アンダーソン教授。」

老人が頭を下げると、エインはぱつと笑つて走り寄った。

「クレリーさん!!」

クレリーと呼ばれた老人は、嬉しそうに自分の手を握り締めるエインにふと笑つた後、すぐに顔を戻した。

「教授、お元気そうで何よりでございます。」

「クレリーさんこそ。」

言いながら、クレリーの困惑した顔に首を傾げる。

「…何か、困つた事でも…?」

「はい…。」

エインの問いに、クレリーは即答した。

「まあ、立ち話はなんだから。」

エインの後ろで、アルフォンスが居間を指差し、「お茶でもどうぞ。」と言った。

「そのような…。すぐお話も終わりますので。」

クレリーが被りを振ると、エリーズが歩み寄って、「いけませんよ」と言う。

「雨に濡れていますもの。風邪をひきますわ。温かいお茶を用意いたします。休みながらお話なさってくださいな。」

エリーズに言われ、クレリーは肩を落として了解した。疲れもあったからかも知れない。比較的すぐに折れたのだった。

「私はラ・ロシェル郊外にございますハーブ農園を営むサジUMAN家に遣えております、クレリーと申します。」

サジUMAN家にはご長男が産まれず、一昨年暮れに当主と奥様が相次いで亡くなったのを期に、当主の遺言に基き、婿養子を迎える事になりました、ご長女のリュリュお嬢様とお隣のジルベルスタイン家のご長男であるポーロ・ジルベルスライン様のご婚約も間近に控えております。

そこで、当主と生前からお付き合いの深い教授に、その婚約に関してお願いがございます。

エディンバラのお屋敷へお手紙を差し上げておりましたが、ちょうどボルドーのご友人のお宅にいらっしゃるとお聞きしましたので、失礼かとは存じましたが、このように参上した次第です。」

イトダ夫妻とヴィヴィアンのために前置きを入れつつ所用を一頻り話し、クレリーは紅茶を半分ほど一気に飲んだ。

「リュリュが駄々でも捏ねてるのかな？」

エインが笑いながら言うと、クレリーは微妙な表情を浮かべながら頷いた。

「当家では古来より、家を継ぐ者が必ず受けなければならないという試練がございます。」

その試練を、ポーロ様が拒否なさいまして……。」

「ならば婚約は中止でよろしいのでは？」

アルフォンスが当然とも言う顔で言う。が、こちらもちろん、クレリーは困惑した。

重い空気の中、エインが「…まあ」と少し気楽な声を出した。

「ボクはその試練について知っているから言えるけど、この時代にすら相應しい試練ではないよね…」

アレ、困るもの。」

「ね。」と言いながらクレリーを見ると、同意してよいものか迷ったクレリーが俯いた。

「で、リユリユはボクに何をしろと？」

全てを見通しているかのように、エインがクレリーを覗き込んだ。顔は相変わらず楽しそうである。

「はい…」

お嬢様は教授に、ポー口様の代わりにその試練を受けて貰えないか、と…。」

クレリーも内心は、そんな依頼を受けてもらえるはずなかつと思うっていたに違いない。

最後のほうは、耳を澄まさなければ聞こえないほどに小さな声で呟かれた。

そんなクレリーに、エインはにんまりと笑った。

「無茶言っねえ、リユリユは…。」

「申し訳ございません。」

「ボクがその試練を受けたら、サジユマン家はボクのものになってしまうじゃないか。」

「…仰るとおりにございます。」

「それを承知の上なんだね？」

「……左様でございます。」

つまり、リユリユはポー口との婚約に乗り気ではないという事だ。そこまで聞いて、エインは腕組をして踏ん返り返った。

「いいよ。受けよう。」

そう言いながら立ち上がったエインの返事に、クレリーのみならず、その場にいた全員がエインの顔を見た。

ヴィヴィアンですら、驚いてエインを見た。

「この雨だ。いつ出ても同じだろう。」

馬車は右湾に停めてあるんでしょう？」

「…はい…。しかし…。」

「大丈夫。ボクら大した用事もないし。」

腰に手を当てて、エインが笑った。そしてヴィヴィアンを見て、

「ヴィヴィには悪いね、まだゆっくり出来そうもない。」

と苦笑する。

「お気になさいませんように。」

仕方なく、そう言う。

肩を竦めて呆れたエリーズが、窓の外を眺めた。

「ねえ、もうそろそろ雨も弱まりそうなのよ。」

お食事してから出発にしてくださいませんか？ 大人数分作ってしまったし。」

「うん。それがいいな。」

と、アルフォンスも頷いた。

「悪いね。」

「悪いね。」

エインもすっかり悪気がなさそうに言った。

「ヴィヴィ、お手伝い、お願い。」

「はい。」

エリーズに言われ、ヴィヴィアンが席を立った。

女性二人が出て行くと、エインもまだ出発ではないので席に着き

直し、そしてみなで黙り込んだ。

雨音が部屋に響く。

空気が再び重くなり、クレリーが申し訳なさそうにエインを見た。

「申し訳ございません、教授。」

「気にする事はないよ、クレリーさん。」

元々ボクの仕事はそれだもの。

サジユマン家の試練は、邸の地下にある古い遺跡を使う。あの遺跡は、それはそれは貴重なものだが、掘り起こしてはならないものだ。

でも、その調査はしなければね。

調査序でにこなすよ。

元はサジユマン伯に再三お願いしていた事だから、目的はどうあれ、あの遺跡に入れるのは嬉しい。」

「それが目的か…。」

アルフォンスが呆れた。

「勿論。ボクが金に目が眩むと思った？」

「まさか…。」

言いながら、含み笑いをする二人に、クレリーはさらに申し訳なさそうに声をかけた。

「それと…。」

「？」

「こちらに窺う際、耳にしたお話なのですが。」

「うん。」

「…ベルトワーズ伯のアンお嬢様のご容態が、昨夜急変なさったとか…。かなりお悪いとの事でございます…。」

クレリーの言葉に、エインがずっと笑顔を棄てた。

表情を隠すように席を立ち、窓辺に立って、二人に背を向けた。

一瞬見えた表情は、相応しい感情を見出せないという、複雑な表情だった。

瞳からは光が消え、無感情に近い虚ろな顔だ。

「…エイン…？」

「うん。」

アルフォンスが呼ぶと、エインが素っ気無く返事をした。

アルフォンスはエインの本心を知っている。エインは今や頑なに否定をするが、アンは一度は、エインと心を通わせた女性であった。その相手が死の縁にいたとなれば、心も穏やかではなからう。

「…そのうちまた、持ち直すだろう…」

気楽を装い切れていない声で、エインが言った。

「いつもそうだったから。アンは…」

「…相当、悪いんだろ…？」

「だからなんだと言っんだ。」

エインが少し苛立った声で答えた。

「アンが死んだら…、それこそお前の”旅”も終わりじゃないのか…。」

お前は、アンを生かすために”旅”をしてるんじゃないのか…？
そのために、”彼女”も犠牲にしているんだろう？

ならば行くべきじゃないのか！？」

アルフォンスが責めると、エインが黙り込んだ。

「…”道”を変えたいなら、今すぐ行くべきなんじゃないのか…。」
「……………」

尚も黙るエインを見て、状況を理解し切れていないクレリーはおどとしながらエインに言った。

「も、もし、ご事情で先にベルトワーズ伯のお屋敷へ向かわなければならぬでしたら、そうお嬢様にはお伝えいたします。

勿論、それからベルトワーズ邸まで馬車を回す事も出来ますが…。」

「大丈夫、クレリーさん。」
「……………」

エインが静かに言った。

そして、アルフォンスに振り向くと、窓辺に腰掛け、笑った。

「オレ、自論は曲げない主義なの。」

アンはまだ死なない。

極力、変化の少ない道を探る。

それが、オレが出来る”世界”に対する唯一の譲歩だよ。」

従事する対象ではないとは言え、家主と執事とメイドが一同にテーブルに着き、食事をする光景は、なかなか珍しい事ではあった。その珍しい食事を終えた頃には雨も弱まり、空の雲も薄まって来た。

再び雨脚が強くないうちに、とエインは出発を決めた。

「悪かったね。居座ってしまつて。」

「いや。構わんさ。」

またいつでも来てくれ。」

「待つてるよ。」と言つて、アルフォンスがエインに向かって拳を突き出した。エインはその拳に、自分の拳を合わせる。

旧友の者たちと決めた、さよならの挨拶だ。また、会う事を誓う。クレリーは自分で馬車を出して来たようで、まだ止まぬ雨に濡れないよう、エリーズが厚手の大きな布を持って来た。

「被つていれば、少しは濡れずに済みますわ。」

「有難うございます。エリーズ様。」

にこりと笑うエリーズにクレリーは何度も頭を下げた。

ヴィヴィアンは、別れの挨拶をする四人を馬車の傍らで見つめていた。

ああして語り合うほど、語る事が見当たらなかった。

そんな、馬車に添えられた部品のように、ひっそり立っているヴィヴィアンに、エリーズが気付いて歩み寄る。

「ヴィヴィ。」

そう言つて、手を差し出す。

握る事に少し躊躇をしたものの、おずおずと握り返すと、エリーズはヴィヴィアンの手を強く握り締め、もう片方の手をヴィヴィアンの手の上に置いた。口元をきゅっと引き締め、眉を哀しそうに顰めている。

「また必ず会いに来て頂戴。」

教授と一緒によ。

もう二度と会えない気がしてならないの。」

その予感、的中するかも知れない、とヴィヴィアンは心の底で思った。

「約束して頂戴。必ずよ。」

何も言わないヴィヴィアンの手を、エリーズはさらに強く握った。ヴィヴィアンは、暫しの熟考野の後、エリーズの手を握り返し、

「……ご心配なく。」
と言って頷いた。

月の港の極東人 6

見送るイトダ夫妻に手を振りつつ、ラ・ロシエルへ馬車を走らせる。

ラ・ロシエルは、一二世紀に都市特権を得た港湾都市だ。ビスケー湾の入り江にあるので、大西洋で漁を行う際の漁港としても重要な役割を果たす。百二〇から百五〇キロ圏内に、ボルドー、ポワティエが位置する。

一二九三年にイングランド軍などの襲撃を受けた事を境に、イングランドとフランスの関係が悪化。翌年にギエンヌ戦争が勃発する。その後プロテスタントの牙城となったこの街は、海と山裾に挟まれたのどかな街から、背の高い防壁や弓、銃撃、監視に使用した高く頑丈な塔に囲まれた街へと姿を変えて行き、一六世紀後半のユグノー戦争に於いては、カトリック勢力の激しい攻撃を受けても堂々たる防御で街を守り通した。

サジユマン家はその街の郊外で広大なハーブ農園を営む、割かし古い家だ。

どういう経緯があつてか、偶然か、本邸の真下には古い地下墓地の遺跡があり、小耳に挟んだエインは、一昨年前に亡くなった家主のリシュリー・サジユマン卿に遺跡の調査を懇願していた。

「直接お許しを貰うのは、叶わなかったな……。それが残念でならない。」

馬車の窓辺に頬杖を突いて、エインはぼんやりと呟いた。

「奥様も大変聡明で、優しく美しい人だね。」

物知りの卿と奥様二人で、ボクの知らない事を何でも教えてくれた。

ボクにとっては、ベルトワーズ伯と同等に恩人と言うべきかな。

一人娘のリュリュは、優しいお二人に大切に育てられすぎて我侭娘になってしまったが、お二人の教えをきちんと守る賢い子だよ。」

「確か、ヴィヴィより年下だったんじゃないかな」と言って、エインがヴィヴィアンを見た。

「アンと同じくらいでしょうか？」

ヴィヴィアンが何気なく言っていると、エインは一瞬顔を曇らせた。クレリーの報告の時、その場にいなかったヴィヴィアンに悟られぬようにと、エインはすぐに表情を戻し、考え込むのを装って窓の外に視線を逃がした。

「うーん……。そうだね、アンと近い年くらいだった気がするな。」

アンはあんな身の上だから少し特殊だが、リユリユは至ってシンブルで明朗な子だよ。」

エインは屋敷での出来事を思い出し、あの時ほど怖い思いはしないと、遠回しに言う。

その口許に、ふと笑みが浮かんだ。

「お、雨が止んで来た。」

エインの言葉にヴィヴィアンも窓を開け、外を見る。

雲は薄くなり始め、空が白く光り始めていた。雨は霧雨のようにさらさらと舞っている。

「止みそうですね。」

「ああ。」

サジユマン邸に着くのは深夜になりそうだけど、その頃までには止むだろうね。」

そう言って、エインが無言になると、ヴィヴィアンも窓の外を眺めた。エインはそれを視界の隅で確認すると、独り、流れる風景に思考を委ねた。

一方の窓辺で、ヴィヴィアンも独り、ぼんやりと思う。

この風景も、何度目だろうか。

何度か辿った道程だった。

結局通らなかった時もあった。

だから、自分が真に目指す道の先には希望があると、可能性があると、信じられるようになった。

いつもいつもこの風景の向こうで、あの人の帰りを待っていた。

まだ雨雲の晴れぬ空を覚えている。

あの扉から、あの人が現れた時の事を思い出す。

今回もきつと、同じようにまたあの扉から現れる。

…現れてくれる…。

道が一つではないと解った時、そこには希望もあったが、絶望もあった。

次は駄目かも知れない。

その恐怖は、道が一つであれ、複数であれ、変わらない。

どこで分岐するかわからない。何に困って分岐するかわからない。

だから、行動一つ一つ、言葉一言一言が、賭けだ。

隣で、ごとりと何かが落ちた。

見ると、いつの間にか居眠りを始めたエインの手元から、一冊の本が落ちていた。

静かに拾い、題名を見る。

『シャングリ・ラ』

カレーに着いたあと、暇潰しに勧められた本だ。

ベルトワーズ邸への道すがら、エインがこの本を持っている筈がない事に気付いた。

何故持っているのか、答えはまだ出ない。

だが、エインがこの本を持っている筈がないのだ。

何故なら、この本は…。

「ヴィヴィー！」

部屋の外で、エインが叫んだ。

早足で廊下へ出ると、エインがエントランスに大きなカバンを運びながら、ヴィヴィアンを見ていた。

「お呼びでしょうか。」

訊ねると、エインはカバンを足元に置き、腰に手を当てて「暫く、留守にするよ」とさりとら言った。

「ちょっと仕事が出来てね。」

二週間くらいで戻らと思う。」

「どちらへ？」

「フランスの、ボルドー。」

ベルトワーズ伯爵と言う、知人がいてね。

その娘さんから、頼まれ事の手紙を受け取ったんだ。

その用事を済ませに行つて来るよ。」

ベルトワーズ。

紹介人のサンアッチから聞いた事はある。

サンアッチの友人でもあつて、確か昨年暮れに亡くなったと言つていたか。

娘がいたのか、と思いながら、ヴィヴィアンは無言でエインを見た。

「本当は連れて行きたいんだが……。」

ヴィヴィアンの無言を、同行を求める様子だと勘違いしたエインは俯いて、一瞬だけ哀しそうに笑つたて、何かを呟きながらヴィヴィアンに背を向けた。

その声は余りに小さく、素早く発せられたので、廊下の端にいたヴィヴィアンにはきちんと聞き取れなかった。

あの時、微かに少しだけ聞こえた言葉を、ヴィヴィアンはまだ覚えてる。

『…迷うから……。』

間違いなかった。エインはそう呟いた。

意味は解らない。恐らく聞き取れなかった部分と組み合わせなければ、この言葉の意味など理解出来ないだろう。

だから考えないようにしている。

だが、時折ふと思い出す。そして、つい考えてしまう。

あの時、エインが迷う事を恐れていた事。

エインは何を恐れていたのだろう…。

手元の本を見つめる。

ぱらぱらとページを撫で、最後のページのメモを見る。

前に見たのと同じように、何か書いたらしい上から、それを隠すようにして、ぐちゃぐちゃと線で塗り潰してあった。

微かに見える文字は『V』以外に考えられない。

今まで、この本をエインから手渡された事はなかった。

だが、この本の事は良く知っている。

アンに呼ばれて、ヴィヴィアンはアンの部屋を訪れた。

「お好きな椅子にお座りになって。

お茶をお淹れしますわ。」

扉の前で部屋を見回すヴィヴィアンに、アンはそう言って、部屋の中央にあるソファセットを指差した。そして、くると回って窓の脇に置かれたティーポットから、湯気の立つ紅茶をカップに注ぎ出した。

言われたとおりに、ヴィヴィアンがソファに腰を下ろすと、アンがその前にティーソーサーを置く。そして、自身の前にも置き、ヴィヴィアンの向かいのソファにどさりと座った。

「ご迷惑じゃありませんでした？」

「え？」

突然の問いに、ヴィヴィアンが一瞬驚く。

「ヴィヴィは表情があまり変わりませんもの。

お呼びした事、怒ってませんか？」

「いえ。全く。」

ヴィヴィアンが短く答えると、アンはぱつと笑顔を作って、深く頷いた。

「良かったですわ。」

私、このような体ですから、外出も満足に出来ません。ボルドーの街まで行ったのも、もう何年前になるか……。」

アンは身の上話を皮切りに、部屋にある色々なものを次々に取り出しては、見せたり語ったりしてくれた。呼んだ以上、退屈をさせまいという気遣いが垣間見えた。

話の合間には、ヴィヴィアンは生い立ちなどを訊ねられた。

「生まれてすぐに両親が亡くなりましたので、孤児院に引き取られて育ちました。」

そう説明すると、アンは困惑した表情を浮かべて話題を切り替えてくれた。

その後も取り留めのない話は続き、意外なほどあつという間に、時間は過ぎた。

そして話は、クリーブスが扉をノックしたのを合図に、終わった。

「お嬢様、そろそろお休みになりますね。」

「まあ、もうそんな時間ですか？」

残念ですわ、ヴィヴィ。」

アンが立ち上がって、ヴィヴィアンの隣に座り、手を握ってきた。「ゆっくりお休みにならなければ。」

明日またお話出来ます。」

ヴィヴィアンが言うと、アンはにこりと笑って「そうですわね」と言い、クリーブスを見た。

「ヴィヴィをお部屋にお送りしてね。」

「承知致しました。」

クリーブスが頭を下げ、ヴィヴィアンが立ち上がった。

すると、アンが「あ、ちょっと待って、ヴィヴィ」と言い、慌てて衣裳部屋へ向かった。何やらごそそと部屋を漁り、「ありましてわ」と言って出て来たアンの手には、一冊の本があった。

アンはそれをヴィヴィアンに差し出し、

「差し上げますわ。我俣を聞いて下さったお礼です。」
と言った。

表紙には『シャングリ・ラ』とあった。

ヴィヴィアンは驚いて、少し眉を顰めながら、

「そのような…。」
と首を振った。

「いいの。受け取って頂戴な。」

ヴィヴィにどうしても差し上げたいの。」

笑顔だが懇願する眼差しにそれ以上の抵抗は出来ず、ヴィヴィアンは素直にその本を受け取ると、「大事に致します」と言ってお金を見た。

アンはそれは満足そうに笑い、そして呟いた。

「大事にしてね…。」

そう。

あの”日”から、この本は自分の手元にある。

この旅が始まったとき、この本はエインの屋敷の自室に置いて来た事も覚えてる。

では何故、この本が今、ここにあるのか。

自分の手元にある以上、この本は”ここ”には存在しない筈なのだ。

なのに…。

ごそそとエインが起きたので、ヴィヴィアンははっとして本を閉じた。閉じた時、ぽんと軽く音が立ってしまい、耳聡いエインが

ちらりとヴィヴィアンの手元を見た。

「ああ、すまない。」

落としてしまったのか。」

「いえ…。」

差し出されたエインの手に、ヴィヴィアンは本を置いた。

エインは本を切ない眼差しで見つめ、愛でながら、語り始めた。

「この本はね…。」

「はい。」

「ボクの大切な人の物でね…。」

「…贈られた物ですか？」

言いながら、ヴィヴィアンは即座に、アンを思い浮かべる。だってこの本は、自身がアンから貰ったものの筈だからだし、仮に”何か間違いが起きて”、”ここ”にもう一つのその本があったとしても、やはり元の持ち主はアンであると思ったのだ。

「いや。」

何と言うか…。」

珍しく、エインが口籠った。

「受け継いだもの…？」

違うな。

言うなれば、その人の存在そのもの、かな…。」

「…？」

はつきりと語る事に躊躇いがあるのだろう、エインはわざと本来の意味とは遠い言葉を探している様だった。

「…大切な人。以前聞かせて下さった方の事ですね。」

「うん。」

ボクが人生でただ一人、愛した人だ…。」

「生かす方法を探している…。」

「…うん。」

「そうだね」と言って、エインは何故か哀しそうに笑った。ヴィヴィアンはその笑みに、ただならぬ感情が溢れた。確かめね

ばならぬと思った。

そこには一つの下心もない、純粹に従事する者としての忠誠的なものしかない。

「教授。一つ、窺ってもよろしいですか？」

「うん？」

改まってエインを見据えるヴィヴィアンに、エインはまるでこれから問われる事を見透かしているような静かな目を向けた。

「教授の大切な方。」

”アン”でよろしいですね？」

そうであれば、ヴィヴィアンにとってアンも”護るべきもの”になる。

エインを護るためには、その周りのものも護らねばならないかも知れない。

ヴィヴィアンの率直な問いに、エインは少しの動揺も見せなかった。やはり、問いは予想の範疇だったようだ。

エインは暫くヴィヴィアンを見つめた後、妙に大人びた微笑みを浮かべて小さな溜め息を吐くと、そのまま何も言わず窓の外に目をやってしまった。

ヴィヴィアンは答えを強要する事無く、それを”正解”と捕らえて独り納得した。

月の港の極東人 7

うとうとと居眠りを繰り返し、深夜過ぎにはラ・ロシエルの街灯りがはつきり見て取れる距離まで来た。

その頃には、やや疲れつつも、繰り返した居眠りの所為で眠り込む事も出来ず、エインもヴィヴィアンもぼうつと夜の闇を見つめていた。雨はすっかり止み、薄雲の向こうにぼんやりと月が浮かんでいる。

馬車を操るクレリーは、トンプスンやウィンストンと違って道中一言も声をかけて来なかった。

気になったエインが前方の覗き窓を開けると、そこでやっとクレリーが声を発した。

「もうそろそろでございます。」

「うん。体は大丈夫ですか？ 随分雨に濡れたでしょう。」

「ええ、大丈夫です。ご心配有難うございます。」

イトダ博士の奥様のお心遣いのお蔭で、雨も苦ではございませんでしたよ。」

そう言って笑うクレリーを、窓の隙間からヴィヴィアンが驚いた表情で見つめた。

「イトダ博士」…？

今、クレリーは確かにそう言った。

だが、エインとクレリーは何を気にする様子もなく、会話を続けていた。

やはりアルフォンスは、自分の知るあの「イトダ博士」の叔父という人物だろうか…。そうであれば、「博士」と呼ばれるのも納得が行く。自分の追う…、否、「追っていた」エインを始めとする“cackravartin”のメンバーは、全員がああ施設に所属する博士号の資格を持つ研究員から選出されているからだ。

ただ…。

クレリーは自分の知る限り、”ここ”の人間である。
事情でも話さない限りは、エインたちの素性など知る由もないだ
ろつ。

エインたちが自らの素性を明かすとは、考え難い。
単に言い間違えか。さもなくば、エインたちがふと仲間内で”博
士”と言っていたのを、クレリーが鵜呑みにしたただけかも知れない。
訳を尋ねるのは危険すぎる。

気にはなるが、ヴィヴィアンは、これはこのまま流すべきだろう
と結論付けた。

「やっぱり夜中になってしまったね。」

窓を閉めながら、エインが席に戻った。

「雨が止んで、良かったですね。」

「うん。ボルドーからこの辺りは、少し土が軟らかいんだ。

雨がずっと続いてたら、馬車も速度を少し落とさなきゃいけなか
っただろう。」

運が良かった。」

「教授もお疲れでは…？」

「ん？ うん。」

まあ、オジサンだしね。」

そう言つて、エインはケラケラと笑った後、ヴィヴィアンを見て
「済まなかったね」と言つた。

ヴィヴィアンが首を傾げると、エインは淡く微笑んで、
「ずっと引き摺り回してしまっているからね。」

ロンドンを出てから、休む暇なんてあまりなかったし。」

「怪我もしてしまったしね…」と言つて、ヴィヴィアンの脇腹を
見る。

「まだ痛むかい？」

「いえ、痛みはもうありません。それほど深い傷でもありませんで
したし。」

怪我は私の不注意です。申し訳ありませんでした。

それに、ベルトワーズのお屋敷で、十分ゆつくりさせて頂きました。

私の事は、ご心配なさいませんように。」

そう淡々と答えるヴィヴィアンを、エインは面白そうに見つめた。
「疲れたら、言いなさい。」

「はい。」

ヴィヴィアンが素直に頷くと、エインは満足したのか、背凭れに凭れて目を閉じた。

雨はすぐに止み、雨上がりのぬかるんだ道を、馬車は三時間ほど走ったのち、最後にガタガタと大きく揺れて、停まった。

軽く眠っていたエインとヴィヴィアンは目を醒まし、次いでエインの側のドアが開いた。

「到着いたしました。」

「お疲れ様でした。」

エインは肩を揉みながら馬車を降りると、ドアの前で大きく伸びをした。

そして、ふうと溜め息を吐き、後ろでエインがどくのを待っていたヴィヴィアンを振り向き、手を差し出す。

ヴィヴィアンが躊躇いながらも自分の手を乗せると、足を地面に下ろす。その時、片手にも拘らずエインが体付きに似合わぬ力でヴィヴィアンを支えたので、ヴィヴィアンはまるで羽根でも生えたかのようにふわりと着地した。

「：ありがとうございます。」

「はいはい。」

礼を言うヴィヴィアンに、エインは軽ろやかに言いながら背を向けた。

すっかり闇に溶けて見難いが、馬車の前には蔓の絡まった大きな

鉄の門が建ち、その向こうには大きな屋敷が見えた。

ベルトワーズ邸と違い、大ききこそ比べ物にならないがボルドー市内の建物に良く似たクリーム色の壁をしていて、緑の草木が良く似合う屋敷だった。

エインは屋敷へクレリーとヴィヴィアンを置いて、さっさと歩いていってしまう。

如何にも、来慣れている、という躊躇いのなさだった。

クレリーも構わないと言う感じで、ヴィヴィアンを誘導する。

「ささ、夜風で冷えます。」

「お屋敷へご案内いたします。」

「ありがとうございます。」

ヴィヴィアンはクレリーに続いて屋敷へと向かった。一足先に、エインは門を開けて敷地へ入っている。

後ろで馬車が動く音がした。振り返ると、いつの間にか来ていた従者らしき者たちが、屋敷の横にある納屋へ馬を戻しにかかっていた。

「夜遅くになってしまい、申し訳ございません。」

謝りながら、これまたいつの間にかエインを追い抜いたクレリーが、屋敷の扉を開けた。

物音を極力抑えるように、そっと開けた扉の向こうに、申し訳程度に炎の灯ったオイルランプが見えた。

促されて屋敷へ入ると、エントランスは吹き抜け天井の広々とした造りになっていて、大きな階段と、目の前に置かれた巨大な陶の花瓶が、闇の中で異様な存在感を醸し出している。花瓶には溢れんばかりに花が生けられており、日中ならばその豪華さに圧倒されたであろう事が、影からも窺えた。

ヴィヴィアンが感心したように花を眺めていると、気付いたクレリーが、

「それは、リユリユお嬢様が手入れをされている花瓶でございます。」

「

と説明してくれた。

「毎日花を入れ替えているのですか？」

「いえいえ。」

花も生けて三日ほどは美しく生き生きと咲きますので、リユリユ様も花の様子を見ながら、一つ一つ入れ替えているのですよ。」

ヴィヴィアンの問いに、クレリーは案内のためにオイルランプに火を入れながら説明した。

「奥様が生きておいでの頃は、リユリユと奥様と二人でやっていたんだよ。」

花瓶を裏側から眺めていたエインが付け加えた。

「素敵なご趣味ですね。」

素直にそう思ってたヴィヴィアンに、クレリーは我が事のように満面の笑みで礼を言った。

「さあ、暫くお使いいただくお部屋へご案内いたします。」

お客様には大変失礼になりますが、リユリユ様は就寝中でございますので、物音にはご注意くださいと……。」

「リユリユは寝起き最悪だからね。」

エインが言うと、クレリーが苦笑しながら歩き出した。

クレリーに付いて行くと、三階へ通された。

東角部屋はリユリユの自室で、その隣は亡きサジユマン夫妻の寝室だという説明を受けながら、エインはその隣、ヴィヴィアンはその隣の部屋を宛がわれた。

各々部屋に入ると、馬車から荷物を運んで来た従者がやって来て、部屋の説明をしてくれた。

一通り案内され、終わるとクレリーがまずヴィヴィアンの部屋を覗き込み、

「今夜は遅うございます。ごゆっくりお休み下さい。」

と言ってドアを閉めた。

言葉は柔らかいが、問答無用で「もう寝ろ」という事のようにだ。ヴィヴィアンは、髪を解きながら廊下の外の様子を伺ってみた。

エインにも同じ事を言っているのが聞こえる。

「それでは…。」

そう言つて、引き上げようとしたらしいクレリーを、エインが止めた。クレリーの声と異なり、エインは声の大きさを絞っているように、少々聞き取り辛い。

「ああ、クレリーさん。」

「何でございましょう？」

「アンについて、何か情報が来ていたら、教えていただけますか。」

「承知致しました。」

ただいま、ベルトワーズ邸へ遣いを出しております。

何かありましたら、直ちに戻るよう、言いつけておりますので…。

「ありがとうございます。」

ボクの都合なのに、申し訳ない事です。」

「とんでもございません。」

教授には、亡き主も、お嬢様も、私たちも、お世話になつておりますから、お困りの事があれば、何なりとお申し付け下さい。」

「ありがとうございます。とりあえず、暫くはお世話になります。」

「はい。」

お休みなさいませ。」

「おやすみ。」

その後、ドアが閉まる音がした。

ヴィヴィアンは足音を殺し、ドレスを脱いでベッドに倒れ込んだ。アンに何かあったのだろうか…。

ふと、馬車の中でのエインを思い出す。

そういえば一瞬だったが、アンを話題に挙げた時、エインが表情を暗くした時があった。無関係ではなさそうだ。

だが、それならばその時に教えてくれそうなものだ。と言う事は、少なくとも自分には伝えるべき事ではないと判断したのだろう。ならば、訊ねる事はやめた方が良からう。

ヴィヴィアンはそうと結論をつけて、目を閉じた。

馬車では居眠りこそすれど、あまり深く眠り込む事が出来なかった。で眠くないと勘違いしていたが、ベッドに横になると途端に眠気が襲って来た。

疲れているのか…。

明日、朝疲れた顔をしては、エインに心配をさせる。アンの事もあるから、せめてそれ以外で無用な心配をさせるのは憚られた。

きちんと休もう。

ヴィヴィアンはそのまま、眠りに着いた。

月の港の極東人 8

まだか、と、扉が開くのを待っている。
何もなければいい。

ここは大丈夫だと、あの人は言っていた。
だから、この扉が開くのを待っている。

握り締めた祈る手が痺れ始めた時、扉が開いた。

あの人は、扉が開く瞬間、とても険しい顔をして俯いていた。まるで、何かに怒っているようだった。

だが、あの人はこちらを見るなり優しく微笑み、言った。

「……………」

瞼が重い。

何とかこじ開けると、目の周りに塵が溜まっているのが解った。
擦り取りながら起き上がる。

体も重い。

ヴィヴィアンは、久しぶりに疲れの取れない睡眠をしたと思った。
今、何時だろうか。

窓から差し込む光は柔らかく、カーテンを開けると薄雲がかかっていた。
雨は降りそうにないが、晴れそうにもない。

そういえば、いつも、こんな天気だった気がする。

部屋を見回し、洗面道具を見つけたので顔を洗うと、幾らかすつきりはしたが、まだどこことなく、何となく、何かが拭い去れずに頭に残っていた。

ヴィヴィアンは溜め息を吐き、序でに深呼吸をした。

ここでの用事は、早く終わる筈だ。

その時、道はどちらへ別れるか…。

否、すでに別れているかも知れない。

如何なる道に別れていても、これで最後にしたい。

でも、最後ならば、望みどおりであって欲しい。今までの悲しみが、無駄にならぬように。

ヴィヴィアンが窓辺に立つと、同時にドアがノックされた。

振り向き、「はい」と返事をする、「お目覚めですか」とクレリーの声がした。

ヴィヴィアンがドアを開けると、クレリーが疲れた様子など何も感じさせない穏やかな笑みを浮かべて立っていた。

「おはようございます。」

朝食のお支度が整いました。」

「あ、ありがとうございます……。」

この家でも、結局客人扱いであった。ふと自分が”ここ”ではメイドである事を忘れそうになる。

「教授は既に食堂でお待ちです。どうしてもヴィヴィアン様がお出でになるまで食事は始めないとおっしゃっております。」

おかしそくに、クレリーが笑った。

「すみません。そのような時間なのですね。」

「いえ。まだお休みになられていても構わないようなお時間ですよ。ちなみに、まだ八時を迎えておりません。」

あの方は、早く遺跡調査に向かいたくてそわそわとしていらっしゃるのでしょうかね。」

そう言われて、合点した。

「支度は済んでおります。」

ヴィヴィアンが言うと、クレリーが頷いた。

「それでは、参りましょう。」

クレリーの後に続き、一階へと降りる。

エントランスに差し掛かると、昨夜闇の中でも圧倒的な影姿を披露していた大花瓶が目飛び込んできた。やはり、日の光を浴びた中でも、その姿は圧巻だった。そして、調和の取れた飾られた花々

の美しさに思わず目を奪われる。

階段途中で足を止め、暫し見惚れていると、気付いたクレリーが振り返ってふと笑った。

「如何でしょうか？」

夜の闇の中とは、当然ながら赴きも違いましょう。」

「ええ…。」

素晴らしいですね…。

こんなに素晴らしく活けたお花を見るのは、初めてです…。」

そう言つて、ヴィヴィアンはどきりとした。

”初めて”…？

そうだ、この光景は初めて見る。

あの扉の記憶がある以上、この屋敷へも”来ている”筈だし、思い返せば見覚えもある。

だが、この花は…。

この花を見るのは、初めてだ…。

やはり道は変わっていたか。

あとは、どちらに変わったかだけだ…。

ヴィヴィアンが無意識にきゅつと唇を噛むと、クレリーが「冷えますか？」と心配した。

「い、いえ。」

済みません。教授もお待ちですね。」

慌ててヴィヴィアンが階段を下り、クレリーに駆け寄ると、クレリーはにこりと笑つて食堂へと歩き出した。

通された食堂では、既に席に着いていたエインが詰まらなさそうに頬杖を突いてだらけていた。

が、ヴィヴィアンを見るなり、ぱつと起き上がり、満面の笑みを浮かべる。

「おはよう。」

「おはようございます。」

「お待たせしてしまって、申し訳ありません。」

「一応謝罪をすると、エインは手をひらひらさせて「ごめんごめん」と謝り返してきた。」

「クレリーにはああ言ったけど、まさか呼びに行ってくれるとは思ってなくてね。」

「クレリーが気を利かせすぎたらしい。」

「食堂に待機していたメイドが、エインの真正面にある椅子を引いたので、ヴィヴィアンは素直に座り、姿勢を正した。」

「リユリユはもうそろそろ来るよ。」

「あの子は朝早くてね、起きてすぐに馬を走らせに行くんだ。」

「乗馬をされるのですか。」

「幼少の頃から、馬好きの奥様の施しを受けてね。」

「かなりの腕前だよ。」

「教授も、乗馬はお上手なのですよ。」

「エインとヴィヴィアンの会話に、食事を運んで来たクレリーが加わった。」

「ヴィヴィアンがエインを見ると、エインは「その話はナイショだと言ったのに」と苦笑した。」

「リユリユに比べたら大した事ないからね。」

「それに、ホラ、ボクは体動かすの似合わないでしょ。」

「くすすと笑うエインの前にポタージュの皿を置きながら、クレリーは一言「ご謙遜を」と言って話を切った。」

「次いで、メイドたちがチキンソテーとパンを傍らに並べる。」

「コーンポタージュと、チキンのハーブ焼きをご用意しました。バターとメティユはリユリユ様がご用意したものです。」

「リユリユの手作りパンか。当たり前だが、久しぶりだ。」

「並べられたバターとメティユは焼き立てらしく、湯気を立てている。ほんのりとバターと、小麦粉の香りが鼻を掠める。メティユ

からはさらに、ライ麦の香りもしてくる。

そこへ、食堂の扉が開いた。

「あら、おはようございます。」

はきはきと切れの良い声がした。

振り向くと、パンツルツクの少女が一人、鞭を持って立っていた。ふわふわとしたたわわなブロンドの髪を勝気に結び上げている。

「お嬢様、お着替えなさってからいらっしゃれば宜しいものを……。」

クレリーが少女の姿を見て、慌てて言う。

なるほど、彼女がリュリユのようだ。

ヴィヴィアンが見つめていると、リュリユは大きな目をさらに大きくして、ヴィヴィアンとエインを交互に見た。

「珍しいです事。エイン様が女性をお連れになるなんて。」

てつきり、女性にご縁のない方だと思ってましたのに。」

「お嬢様！」

遠慮なしに言葉を並べるリュリユを、クレリーが嗜めた。

「ああ、大丈夫、クレリーさん。お気になさらず。」

「そうよ。」

エインのフォローも、リュリユの同意で形無しになる。だが、言葉のキレとは裏腹に、リュリユからはその行いを赦させる何かが感じられる。

「もう少しゆっくり休んでいらしてもよろしかったのに。」

「歳だから早いんだよ。」

リュリユが一応気を遣うと、エインは肩を竦めて冗談を言う。

「エイン様はそうでしょうけど。」

エイン様、お気付きになりませんか？

そちらの女性は少し疲れていらっしゃるようですのよ。」

そう言ってリュリユがヴィヴィアンを見たので、エインは少し驚き、ヴィヴィアンは慌てた。

確かに寝起きは疲れてはいたが、言う程のことではなかったし、エインに余計な気を遣わせたくなかった。

「い、いえ。済みません。疲れている訳では。」

「そうですね？ 随分口数が少ないので、お疲れなのかと。」
そこで判断されたのではたまらない。

ヴィヴィアンが微かに困惑すると、エインが笑いながら、

「リユリュに圧倒されているだけだよ。」

とフォローした。

「あら、私お喋りすぎました？」

「ごめんなさい、気を遣わせてしまったかしら？」

先にお食事なさって。着替えてまいります。

今日は馬のご機嫌が良くなって。」

ぱっぱと手早く話題を切り替え、リユリュは腰を少し捻ってエインとヴィヴィアンに背中を見せた。

馬のご機嫌が悪かった所為で、どうやら落馬しかけたようだ。背中が少し汚れていた。

その汚れを見せて、ふうと溜め息を吐くと、リユリュは会釈をして食堂を出て行った。

嵐の過ぎ去ったかのように一変してしんと鎮まり返った食堂に、クレリーの申し訳なさそうな声が響く。

「お騒がせを…。」

どうぞ、お食事をお召し上がり下さい。」

クレリーに言われ、食事を始める。

ハーブ農園であるからこそ多様なハーブを使つての味付けと、肉類の多さがベルトワーズ邸で食した料理とは大分違ったが、見た目ほどに脂こくなくないチキンソテーとリユリュのパンはとても素晴らしかった。

加減をしてくれたのか手頃な量であつたので、リユリュが着替えを終えて戻って来た頃には、二人の皿は空になっていた。

「如何でした？」

「相変わらず、リユリュのパンは美味しい。」

エインが率直に言くと、当然と言った様子でリユリュがふふんと

笑った。

「でしよう？」

「そちらの…。」

ヴィヴィアンにも同意を求めようとしたリュリュが、一呼吸止まって「…お名前なんて仰るの？」と言った。

「ああ、すまないね、リュリュ。」

「こちらはヴィヴィアン。ボクの助手をお願いしている。」

「助手の方ですの。」

そう言って、リュリュが手を差し伸べたので、ヴィヴィアンは立ち上がってその手を握り返す。

「ヴィヴィアン・トーマスです。」

「リュリュ・サジUMANと申します。リュリュと呼んで下さいな。」

まったく、エイン様の助手なんて、この世で一番大変なお仕事でしてよ。」

リュリュがエインをからかうと、食後の紅茶を運んで来たクレリィが、また「お嬢様！」と嗜めた。

「お客様に何という事を。」

「いいじゃないの。本当の事ですもの。」

「ねえ？ ヴィヴィアンもそう思いませんか？」

同意を求められ、思わずエインを見る。エインは面白そうに笑いながら、こちらを見ていた。「どうとでも言えばいい」。そんな表情だ。

きつと、リュリュの性格を理解しているからだろう。

「まだ…、助手になったばかりですので…。」

ヴィヴィアンが差し障りのない答えをすると、リュリュは気の毒そうに眉間に皺を寄せた。

「これからご苦労なさるのよ。」

困った事があつたら、何でも相談してくださいな。」

そう言って、リュリュはぎゅっとヴィヴィアンの手を握り直し、しかしすぐに手を離し、自分の席に着いた。

次々ページを捲るように展開するリュリユを、ヴィヴィアンは暫く呆然と見つめ、理解した。

- 優しいお二人に大切に育てられすぎて我侭娘になってしまったが…

有無を言わせぬ言動に、止まらない展開。自分のペースを維持するために必要不可欠な要素である。

だが、これが嫌味にならないのは、偏に両親の教えが大きかろうと思われる。

踏み込んで赦される境界線を理解している雰囲気なのである。

そのリュリユは、エインと話しながら目の前に運ばれた食事に手を伸ばしていた。

「…婚約者のポーロがどうしても遺跡に入る事を拒みますの。」

どうやら、早速クレリーが持つて来た話を始めているようだ。

ヴィヴィアンも、席に着き、話に耳を傾ける。

そういえば、ポーロが拒んでいるのは、”家を継ぐための試練”ではなかったか。

「あそこに入らないと、”試練”は受けられないのは知っているのかな？」

「知ってますわ。お話してありますし。」

元々、それを承知した上での婚約でしたもの。」

「…気が変わったかな…？」

ふむと溜め息を吐いて、エインが腕組をした。

「そうならそれで構いませんの。でも結婚はする気なんです。」

ポーロは”試練”の内容が嫌なのですわ。」

「まあ、解らないでもないけど。」

そう言つて、エインが笑うと、また食堂の扉が開いた。

「おや…。」

入って来たのは若い男性で、エインを見るなり不審者を見るような視線を向けた。

その表情を見たリュリユは、間髪入れずに

「失礼ですわよ。」

と言った。

「こちらは？」

「以前にお話しましたでしょ？」

エディンバラのアンダーソン教授です。」

リユリユが簡素な説明をすると、男性はふうんと言ってエインを見た。

「ようこそ。」

ポーロ・ジルベルスタインと言います。」

「お邪魔していますよ。」

キミのお話も窺っています。

遺跡には入りたくないとか。」

相手をポーロだと知って、エインは早速本題を投げつけた。

「当たり前でしょう。」

あんな”試練”、誰も受けたくないですよ。あれは拷問ですよ。」

「言いたい事は解りますけど。」

リユリユにしたのと同じように、エインはそう言って笑った。

同意に気を良くしたのか、ポーロは大袈裟に腕を広げて「でしょう！？」と声を上げた。

「でも…。」

キミはそれに同意してたのでしょ？」

エインが笑みを消さずに静かに言つと、ポーロは少し身を引いて、口を尖らせた。

「確かにそうですけど。」

後々どうにでもなると思ったんですよ…。」

こちらの夫妻もなくなつたし、この辺りでそのような慣わし自体をやめさせようと思つたのです。」

「ま、言い分は解りますけど。」

サジユマン卿は、ここを継ぐ者には絶対に遺跡に入って貰わなければならぬと思つていたようだし、亡くなつたとは言え、そのこ

意思を簡単に棄てる訳にも行きませんね。」

エインが俯いた。

「エイン様はここへいらしたと言う事は、お受けして下さるという事でしょう？」

然も当然と言うように、リュリュがエインをちろりと見た。

エインはにやりと笑って、

「まあ、そうだけど。」

と言い、足を組んだ。

「ボクが”試練”を受ける以上、それを果たした時は、サジユマン家はボクのものだと了承する事が条件かな。」

その言葉に、ポーロは「な、何を言うんです！？」と驚き、リュリュは「当然ですわね」と言った。

ポーロがリュリュに詰め寄る。

「何を言ってるんだ、キミは！」

僕と結婚しないという事か！？」

「違いますわ。」

”試練”を受けた以上、この家がエイン様の物なのだと了承するだけです。

不都合がありました？」

「不都合って……。僕たちは家を手放す事になるんだぞ？」

だから僕は、下らない”試練”などもう棄ててしまえば言いと言っているんだ。」

「ああ……。」

ポーロの声に、エインが自分の声を被せて遮った。

「誤解しているようなので説明をしようか。」

ボクは別に、この家が欲しいと言っている訳ではないよ。

ボクが”試練”を受けた。だからボクはこの家を継ぐ資格を持っている、と理解しろという事。」

幾許か遠慮をしているような遠回しなエインの説明に、ポーロの眉間の皺が深くなる。

「解りませんか？」

”試練”はエイン様が受けたのだから、本来この家を継ぐ資格を持つのはポーロではなく、エイン様だと自覚するべき、という意味ですわ。」

リユリユの補足にやつと理解をしたポーロは、逆立ちしていた眉を今度は八の字に下げ、動揺した。

「あなたには本来、家を継ぐ資格がない、という自覚をして欲しいのですわ。

その上で、私はあなたと結婚するのですわ、ポーロ。

ポーロは知らないでしょうけど、この家は、とても大切なものを護るためにあるのです。

”試練”はその、大切なものを見、それを自覚するために行われるものだと、お父様は言っていました。」

「それを断る以上は、無資格者だと自覚するのが、先代への敬意だと思うよ。」

「……。」

押し黙ってしまったポーロに、エインはふと笑った。

「そんなに深刻な話でもない。

さつきも言っただけど、ボクはキミの言い分にも理解を持つてはい

る。
でもね、人の意思というものは、そう容易く無下にしてはいけないものだよ。」

諭すようにエインは言い、さらに口の端を上げた。

「さて。

この”試練”は日を選ぶようなものじゃないから、リユリユの食事が終わったら、早く済ませてしまおう。リユリユは、ボクに同行しなければならぬよ。」

「存じてますわ。お待ちくださいね。」

リユリユはそう言つと、それまで止めていた食事を再開した。

三人のやり取りを聞きながら、端で蚊帳の外だったヴィヴィアン

は、思い出していた。

あの扉から出て来たあの人が、それから暫く、利き手である右手を使わなかった事を。

異変に気付いていたのに、歩み寄る事をしなかった事を。

素知らぬ振りがその後の道をさらに別けるのだとしたら。あの結末を招くのだとしたら……。

今度は、あの人の手に触れてみよう。

そう思った。

急かされ慣れているのか、元々早食いなのか、リュリユはあつという間に食事を終え、十分ほど一休みをしたあと、クレリーを呼びつけた。

今日何が行われるかは当然承知しているクレリーは、二つのオイルランプと予備の蝋燭、フード付きのケープを持って食堂に現れた。クレリーがケープをリュリユに手渡すと、リュリユはケープをはらりと羽織いながら、

「参りますわよ。」

と言つて、すたすたと歩いて行ってしまった。

ペースに慣れているクレリーとエインも構わず後に続き、まだ慣れていないヴィヴィアンと、何故か挙動不審のポーロはその後に着いた。

先頭のリュリユは真つ直ぐエントランスへ向かうと、階段の脇にある小さな扉を指差した。

「クレリー。」

呼ばれたクレリーが、扉に鍵を挿し込み捻ると、その見た目にそぐわぬ重い音が響いて錠が開いた。

「物置じゃなかったのか。」

ポーロが言つた。屋敷に出入りしているポーロにすら物置と思わ

れていたその扉は、一見すると壁と同化して、エインとヴィヴィアンも気付かなかった。

少し得意げにリュリュが扉を開ける。

「遺跡への扉です。」

ここからはずっと階段を下ります。クレリー、暗いのでランプをお願いね。

しっかりした階段ですけど、足元にお気をつけあそばせ。」

そう言っ、て、クレリーが灯りを点ける前に、リュリュは階段を下り始めた。足取りを見る限り、慣れている様子だった。

「どうぞ。」

クレリーも、灯りの点いたランプをエインに手渡すと、もう一つを持って駆け足でリュリュを追う。彼もまた、慣れている様だ。

「行こう。」

エインを先頭に、ヴィヴィアンとポーロも続く。

中は円柱の内側のように円形に掘られた空洞が下へと続き、遺跡への道の割りに真新しくしっかりとした階段が、螺旋状に伸びていた。

下を見ると、リュリュは既に三つほど螺旋を下った先にいて、漸くクレリーが追いついたところだった。

ひんやりとした風が吹き上がり、時折ドレスを揺らす。

風があると言う事は、この階段以外にも出入り口があると言う事だろうか。

楽しそうに階段を下るエインの後姿を眺めながら、ヴィヴィアンとポーロは無口で着いて行った。

やがて、「到着しましたわ」というリュリュの声が聞こえた。

見下ろすと、階段終わりにリュリュが立って、こちらを見上げている。

徐々に下る階段の隙間から、リュリュの目の前を見ると、重い鉄製の扉がどんと立っていた。

エインたちが到着すると、リュリュは説明を始める。

「入り口はここですの。」

出口が、別の場所にあります。

場所はクレリーが存じておりますので、教授と私が入ったら、ポートとヴィヴィアンはそちらで私たちをお待ちくださいね。

教授、準備はよろしくて？」

リユリユがエインを見上げて訊ねた。

「どうぞ。」

エインがランプをリユリユに向けて翳しながら答えた。

「では、行って参ります。」

「お氣をつけて。」

クレリーがリユリユに鍵を一つ渡し、頭を下げて一步退くと、リユリユは慣れた手付きで鍵を開けた。扉の向こうには深い闇が広がり、寸分先も見えぬほどだった。

が、リユリユは躊躇いもなく暗闇の中へと歩き出す。エインはエインで、にこにこ笑いながら歩き出し、ヴィヴィアンに振り返って「行って来るよ」と言うと、扉を閉めた。

クレリーは暫く扉の向こうから聞こえる足音に耳を澄ませたあと、合鍵らしいもう一つの鍵で扉を施錠した。

「さあ、私もは出口でお待ちしましょう。」

「鍵、閉めちゃっていい訳？」

まだ何故かおどしているポーロが、クレリーの袖を引っ張った。

「はい。ここへ入ったら何があっても、出口から出なければなりません。」

それが、ここへ入るための条件でございますから。」

「でも、もし入ってすぐに何かあったら……。」

「致し方ございませんでしょう。」

そういうルールでございます。」

「ルールって……！」

下らん。だからこんなもの埋めてしまえばいいと……。」

「ポー口様。」

若干取り乱したポー口の声を、クレリーがぴしゃりと遮った。

「ここへ入る者は、本来”見てはいけないもの”を見る。

そのために、掟を護れぬ者は生きてここを出てはいけない。

これが、このサジユマン家の慣わしでございます。

アンダーソン教授も、それをよくよく承知の上で、此度の我俣をお聞き入れ下さったのです。」

「”見てはいけないもの”って…、なんだよ…。」

ポー口はそう言うと、ヴィヴィアンを見た。

ヴィヴィアンは表情一つ変えない。元々だが、今回に関しては理由がある。

「何で、あんたもそんな何ともない顔してるんだ…？」

「……………」

理由はあるが、それを口に出して良いかは解らない。

どうしようか思案した拳句、ヴィヴィアンは一言、

「お戻りになると信じておりますので。」

と言い切った。

月の港の極東人 9

クレリーの案内で屋敷を出、三人は屋敷の北側にある石造りの古い建物へ向かった。

出たちは小さな教会だが、十字架が立っている訳でもなければ、神々の像もない。

サジUMAN家の敷地の端にあるようで、屋敷から三十分は歩いた。苔生した石のレンガを積み上げて作った背の高い壁に囲まれ、建物はひっそりと建っていた。

クレリーはジャケットのポケットに入れた鍵束を出し、一番小さな鍵を掴むと、それを扉の前に張り巡らされた太いチェーンを解くための鍵に差し込んだ。チェーンは建物の側面の壁に端が埋め込まれ、外開きの扉が不用意に開けられないよう、扉の前を両手で塞ぐように回されている。

開錠されると、チェーンはどさりと地面へ落ちた。

「ポーロ様、大変申し訳ない事です……」

と言つて、クレリーがポーロに振り返った。

先程クレリーに窘められ、ヴィヴィアンの一言を受けてすっかり意気消沈してしまったポーロは、意図を察して石の扉を手前に引いた。かなり重みがあるようで、ポーロは足を踏ん張り、両手を添えて扉を引っ張る。

ず、ずず……と石と石の擦れる音を立てながら、扉は少しずつ開いた。

人一人通れる隙間を開けて、ポーロがクレリーを見る。

「有難うございます。」

そう言つて、クレリーは中へ入った。

ポーロが譲ってくれたので、ヴィヴィアンが次に入る。

中は見た目通りに狭く、何の装飾も施されていない、ただの石の箱のようだった。

明り取りのために少しだけ開けられた天井付近の窓から、申し訳程度の日光が入るだけで、ランプを点けないと暗くて何も見えなかった。

クレリーがランプに火を灯すと、漸く物が判別出来る程度に、ぼんやりと明るくなった。

「こちらの祭壇の下から入った通路の奥に、内側からしか開かない扉がございます。」

あの遺跡は真っ直ぐここへ道が続いております。突き当たりにある階段を昇ると、ここに出るのでございます。」

ゆつくりとクレリーが説明した。

「内側からしか開かない？」

ポーロが問うと、クレリーは「はい」とにこやかに頷いた。

「内側から施錠されております。鍵は入り口の扉と同じ鍵でございますので、今お嬢様がお持ちの鍵で開くようになっております。」

説明を受けて、ポーロは祭壇をぐるりと周った。

その表情は何か言いたげではあったが、敢えて口には出さなかった。

「さあ、参りましょう。」

クレリーはそう言々と、祭壇の裏へと周る。

祭壇の裏の床には、小さな木の扉があつて、それを開けると地下へと下る階段があつた。

その階段を、クレリーに続いて下ると、屋敷の地下と同じような地下空間が広がっていた。

屋敷の地下より若干きちんと壁などが施されていて、ところどころが崩れている。

階段の向かいの壁には、屋敷の地下にあつたのと同じ、鉄の大きな扉があつた。

「あそこから出て来るのか。」

「左様でございます。」

鍵は内側から施錠してございます。」

ポーロはそれを聞いて、疲れたように、崩れた少し大きめの瓦礫に腰を下ろした。

ヴィヴィアンはそんなポーロを横目に見つつ、扉を注視した。そうだ。間違いなく、この扉だ。

記憶では、あの人…、エインはこの扉を開けて出て来る。

その時、真っ先にすべき事を考える。

エインは傷を負って出て来るはずだ。

その手を握る勇気があるか。

それだけが、問題だ。

今まで、触れる事など赦されなかった。

誰に咎められた訳ではない。ただ自分の中で、そういうルールを作ってしまっただけだ。

何故ならエインは、エインが心を赦した、たった一人の彼の愛する人のものであり、自分が触れてはいけないものだからだ。

だがその拘りが、その後の結末を決めるなら、そのルールは打ち破らねばならない。

中は冷える。

クレリーが用意したケープのお蔭で、リュリユは冷えずに済みそうだったが、自分はどうしようもない。

せめても、と、捲り上げていたシャツの袖を下ろした。ジャケットも持つて来れば良かった。

「いつ来ても、ここは寒いですわ。」

カツンと甲高いヒールの音を響かせて、リュリユは堂々と歩いている。

「そんなに頻繁に来ているのか。」

エインが呆れて言うと、リュリユは少し口を尖らせ、俯いた。「見て置きたかったんですの。」

「ポーロのために、かい？」

エインが続けると、リユリュがばつと顔を上げた。ランプ一つの明かりでは十分な光量はないが、それでもリユリュの頬が赤くなつたのは見て取れた。

「ちつ…。」

「違うとは言わせないよ。」

尚からかうエインを、リユリュが睨み付ける。が、すぐに俯いて無言になった。そのまま一歩、エインの前を歩く。

なるほど、とエインは思う。

両親への敬意として、この”試練”は受けなければならない。だが、ポーロの気持ちも汲みたい。

彼を何とも思っていないのなら、自分呼び付けてまで両親の言い付けを守る事はしないだろう。どうか”試練”の本質を回避して尚、”試練”をクリアする方法があるなら、それを見出したかったのだろう。

だが、結局大した方法も見付からなかった。

自分と呼んだのは、最後の抵抗、という訳だ。

「私だつて…。」

この”試練”が少し『おかしい』事は承知してますわ。」
リユリュが呟いた。

「あんな方法で”烙印”を身に宿す事で家を継ぐ事の証明にするなんて、まともな事ではないですもの。」

でも、お父様もお母様も、それを守ったのでしょう？

小さな頃、父の手のひらに傷を見た事、思い出しましたの。

父が守った事なら、”試練”の理由を知らなくても、それは必要な事だと信じられますわ。」

「そうでしょう？」と、リユリュが問いかけた。

「信じると言う事は、無防備になると考えるからね。」

勇気の要る事さ…。」

エインの言葉に、リユリュが頷いた。

「そうですね。」

でも、本当は違ふんです。」

前を歩くリュリュが立ち止まった。

「違ふんですわ。」

信じると言う事は、決して無防備になる事では、ないのですわ…。

「

そう言つて、リュリュがエインからランプを取り、一步踏み出した。

ランプの明かりで照らされた先は行き止まりになつていて、入り口と似ても似付かぬ黒い色の不思議な素材で出来た大きな扉があった。取っ手はなく、その位置には奇妙な形が彫られた円柱状の金属が出っ張っている。

「お父様は、この扉を守るために、あの”烙印”を背負つたのですわね。」

扉を見上げて言うリュリュに、エインが静かに頷いた。

リュリュはそれを振り向きもせず、感じていた。

「教授は何もかもご存知ですのね？」

この扉の先に何があるかも。

父が…、何者かも。」

背を向けたままのリュリュに、エインは再度頷いた。

知っているとも。

何もかも。

エインの無言が意味する答えを察したリュリュが、ランプの蓋を開けた。風で揺れる炎を、扉の金属の出っ張りに翳した。

金属は見る見る赤くなり、熱を帯びた。

それを確認して、リュリュがエインを振り返る。

「父は、申しておりました。」

この先にあるものは、あなたのためにあるものだ。

あなたの手に渡すために、祖父から受け継いだ秘密なのだ。

祖父からの手ではなく申し訳がないけれど、あなたにお返し致し

ます。」

リュリユはそう言って、顔を歪めた。

「父はこの先にあるものがあなたの手に渡る事を拒んだ。何故かは解らないけれど、それがあなたのためだと言っていました。」

諦める事が、運命を受け入れる事が、人にとっては幸福なのだとでも、エイン様。

私は何も事情を知らないけれど、この先にあるものがあなたのものなら、それはお返ししなければならぬと思うのです。

本当は、父のお詫びをポーロにさせたかった。

でも、ポーロには何の関係もない事ですものね。ならば私がとも思いましたが、ここを見て、その勇気も湧かなかった。

こんな方法しか思いつかなかった事、許して下さい。」

そんなリュリユに、エインは苦悶の表情を見せて俯いた。

「済まない……。」

たった一つ、我俣を叶えるために、それを繰り返すたびに、犠牲が増える。

解っていた事だが、どうしても諦める訳に行かなかった。

この屋敷に通ったのも、真の目的は遺跡の調査やこの先にあるものではない。

必要のない傷を負った、サジUMAN卿へ頭を下げるためだ。

屋敷を訪れるたび、サジUMAN卿は小言こそ言ったが、それ以上の事は言わなかった。

恨みの一つも言ってくれば、と思つては、それが甘えだと自覚を繰り返した。

なれど、この先にあるものも必要なものに変わりはない。

この恩は、リュリユに返すべきだ。彼女が、知りたい事を語るという事で。

エインは赤く熱した鉄の円柱を、右手でぐいと押し込んだ。触れる瞬間、じゅ、と厭な音がして、厭な臭いが発った。リュリユが後ろで息を飲んだのが解った。だが、リュリユは何も言わず、エイン

を見つめていた。

円柱が十分窪んだ事を確認し、エインは今度は左手を扉に添え、両手で扉を押した。両開きの扉は、カツンという姿に似合わぬ軽い音をどこからか響かせて、開いた。

扉の隙間から、リユリユにとつては嗅ぎ慣れない、エインにとつては懐かしい臭いが漂う。

すんと鼻を掠める油の臭い。

扉を十分に開け、中へ入るエインに続いて、リユリユも辺りを警戒しながら入った。

狭い部屋の暗闇の中に見えるのは、見た事のない物体。

丸みを帯びたそれは、それが何か理解をしなくても、美しいと感じる形をしていた。

「キミのお父様はね…。」

エインは懐かしそうに部屋を周った。壁沿いに置かれた棚は、扉と同じ材質で、つるりとして、明かりを灯すと汚れ一つない真っ白な色をしていた。その棚すら、エインは愛おしそうに撫でている。

「ボクの親友の息子なのさ。」

「…え？」

父が親友の息子と言う事は、親友は祖父になる。有り得ない事ではないだろうが、リユリユは不思議な印象を持った。

「ボクらは遠いところから旅をして、”ここ”へ辿り着いた。

ボクらは一つのチームを成していて、名は”c a k r a v a r t i n”。意を”輪を動かすもの”、即ち”世界を照らす太陽”と言う。

とある事情で様々な”場所”へ旅立つ事を命じられた、”元の場所”では親友同士だったボクたちは、その使命を果たすために”ここ”に辿り着き、使命を全うするために生きて来た。

だが…、その中で一人、使命から外れ、私欲を追い求める裏切り者が現れた。

その私欲は、”世界を乱す”禁忌だった。

だから、キミのお祖父様を始め、チームの面々はそれを止めようとした。諭そうと思ったんだ。

でも、裏切り者は誰の言葉も聞き入れなかった。彼らは反対もしたが、同情もしてくれた。

だから、最期の理解として、その私欲を叶えるために必要なものを、隠しておいてくれた…。」

「それが、ここにあるものですね、エイン様？」

「うん。」

短く頷いて、エインが棚の上にあった小さな何かを摘み上げた。エインはそれを、丁寧にハンカチに包むと、ポケットに入れた。

「エイン様。」

リュリユの呼びかけに、エインが振り向いた。

「エイン様の”夢”は叶いますの？」

その表現に、エインが少し驚いた。

リュリユはふと笑って、エインに歩み寄った。

「祖父から聞いてますの。」

『自分には、その生を全て擲ってでも叶えたい”夢”を持っている親友がいるんだよ』って。

その方は、たった一人の女性のためにこの世界を敵に回したそうですよ。

でも、それにはそれだけの価値があるって…。

詳しくは教えて下さらないのに、祖父はいつもその話をして、大威張りでしたのよ。」

「…コウが…？」

エインが思わず呟くと、リュリユはぱつと笑って、
「ええ。やっと祖父の本当の名前がわかりましたわ。

やっぱり”コウ”というんですね。」

「あ…。」

してやったりという顔で笑うリュリユに、エインが焦った。

「誰にも言いませんわ。」

今、”ここ”にいる”コウ”様にも。」

「…な…。」

益々焦るエインに、リユリユは人差し指を唇に当てて見せた。

「祖父からこれも聞いてますの。」

『この世界には、もう一人の私がいるんだよ。歳は違うけどね』
つて。」

「……。」

「何の話かは相変わらず解りませんわ。だって、祖父が話していた”親友”が、エイン様だなんて、今知りましたもの。」

でも”コウ”という名の祖父と歳の違う方がいらして、その方もエイン様の親友のなんですよのね。

そしてその方は”もう一人の祖父”なんですよのね。
合ってます？」

楽しそうに訊ねるリユリユに、エインは暫し呆然としたあと、苦笑した。

コウ。

コウ・イトダ。

リユリユの、何事も楽しもうとする性格は、コウそっくりだ。
懐かしい。

”ラ・ロシエルのコウ”は、自分の面影を残しておいてくれたに
違いないと思った。

後にやって来る、自分のために。^{エイン}

少し、息が詰まった。リユリユの前では恥ずかしいので、棚を見る振りをして背を向ける。

息を整え、そこまで知っているなら、と、エインは話し始めた。

「ボクは、キミのお祖父様を”ラ・ロシエルのコウ”と呼んでいる。
理由は、ボルドーにも”コウ”がいるから。」

ボクが直接知っている”コウ”は”ボルドーのコウ”だが、”ボ
ルドーのコウ”と”ラ・ロシエルのコウ”は”同一人物”なんだ。

”ラ・ロシエルのコウ”は、ちょっとだけ早く”ここ”へ来たた

めに、”ボルドーのコウ”と歳が異なってしまった。」

「難しい話ですね…。」

同一人物なのに、二人いるんですの？」

「正確に言うと、完全に同一な訳ではないんだけどね。」

「益々ややこしいですわ。」

「理解は出来ないだろうと思うよ。そこまで詳しい事を、ボクも話す事は出来ないしね。」

ただ、”ラ・ロシエルのコウ”であるお祖父様から総ての事情を聞かされていたキミのお父様は、”烙印”を背負うせいで、結果としてボクを恨んだだろうし、ボクがしている事の本質を理解していただろう。

ここへボクを踏み込ませまいとしたのは、お父様がした正しい選択だ。

キミが気にする事でもないし、背負う事でもない。

ボクが、キミたちに膝を付いて謝らなければならない事なんだ。」

未だ背を向けたままのエインの内心を、そこで漸く悟ったリユリユは、エインに一步だけ近付き、言った。

「もう、祖父も父もおりませんわ。」

だから、謝罪の必要ありませんの。

でも、エイン様はそれでは気が済みませんのね。

ならば、教えてください。エイン様の”夢”を。

父や祖父が反対をしながらも同情したという”夢”を。」

リユリユが言うと、エインが振り返った。視線を交わらせると、

リユリユが興味本位ではなく訊ねている事に気付く。

「私も、この家の者ですわ。」

祖父もクレリーも、そして父も、何度もエイン様に助けられたと言っていました。

何をして頂いたか解りませんが、でも父が、エイン様がここを訪れる事を拒んだ事で、そのご恩を仇で返す行為をしたと思っています。

そしてエイン様は、父が手のひらの傷を負って、エイン様のため
のものを守らなければならなかったという事実を後ろめたく感じて
いらっしやる。

この時点でお相子じゃありません？

少なくとも、私にはお相子が、エイン様から頂いたご恩のほうが
大きいくらいですわ。

でも、エイン様はそれでは納得されないのでしょうか？

だから、教えてください。

エイン様の”夢”を。

それでお相子にしません事？」

悪戯っぽく笑って、リユリユが言った。

やや強引な思想ながらも、精神的並行を取り戻すには結構よい案
ではないかと、エインは感心していた。

ただ、言い出すには、少し躊躇いがある。

照れ臭さと言う名の…。

暫し考えたが、リユリユもコウも言い出したら聞かなかった事を
思い出した。リユリユがこの提案をした時点で、話さねばならない
事は決まったも同然に思えた。

エインは俯いて苦笑し、静かに言った。

「ボクの”夢”。

それは、”この世界でたった一人、心の底から愛した人を生かす
方法を見付ける事”だよ。」

「誰ですの、その方？」

その先が最も話し難い。だがリユリユの視線は逸らせぬほど真っ
直ぐにエインに注がれている。

エインは鼻から思い切り息を吸い込むと、ぼそりと蚊の鳴くよう
な声で囁いた。

その名は、美しく、可憐な…。

「……………アン…。」

一度目は、何事もなく出て来たように見えた。

二度目に、様子がおかしい事に気が付いた。

三度目と四度目は、扉を訪れる事無く。

五度目に、初めて傷の事を知った。

六度目もまた、扉を訪れる事はなく。

七度目、触れようとして、諦めて…。

八度目…。

何度も通った道だ。可能性を一つずつ潰していけば、いつか希望に結び付くかも知れない。

長く、永く夢見た希望に。

今か、未だかと帰りを待つ。

ここは大丈夫だと、あの人は言って…、否、今回は言わなかった。だが、大丈夫だろうと思う。

何事もなく、この扉は開くはずだ。

エインが、手のひらに傷を負う事を除いて…。

扉から少し離れた場所で瓦礫に腰を下ろして、ヴィヴィアンは扉をじっと見つめていた。

二人が入ってそろそろ一時間になる。

地上でも屋敷からここまで三〇分であれば、地下も同じか、それよりは距離もあるう。あと三〇分は、出て来ないと思っていた方が気が楽か。

そう思うと、返って気が急いた。

何もない。大丈夫だと信じれば信じるほど、不安も大きくなる。

まさか、この扉から出て来ないなどという事は…。

有り得なくはない。自分はあるの扉の向こうに何かがあるのか、知らないからだ。

早く…。早く帰って来て欲しい。

そう思った時、がちやりと大きな音を立てて、鍵が開いた。

呆けていたポーロは驚き、クレリーは微動だにせず静かに扉を見、ヴィヴィアンは待ち焦がれていた想いから咄嗟に立ち上がった。

徐々に開く扉の向こうに、扉を押し開けるエインの姿が見えた。

俯きがちに、ただ一心に扉を押すエインの表情は、ヴィヴィアンの記憶どおり、何かに対する怒りを押し殺しているようだった。

だが、ヴィヴィアンにとっては、そんな事などどうでもよかった。扉が完全に開き、リュリュを先に地下部屋へと出したエインに、ヴィヴィアンは走り出し…。一歩進めたところで、足を止めた。

止めたのではなかった。止まってしまったのだ。

体が言う事を聞かなかった。

傷の手当に必要な薬品を前以て準備するわけに行かなかったから、手にハンカチだけを握り締めていた。

エインは右手を握り辛そうにしている。

傷を負っている…。

手当てを…。せめてこのハンカチだけでも。

そう思うが、足が動かなかった。

蟠りは残る。自分のものではない人。その人に触れる事。

本当に、触れてしまつていいのだろうか。

どうしても、躊躇いがあった。

触れることで、道が逸れはしないか…。

両手を胸の前で組み握り締め、無表情ながらも困惑した表情を浮かべるヴィヴィアンがふと目を移したポーロとリュリュは、不自然な距離を置いて立っていた。

何故だ。

そう疑問に思うと、途端に足が動いた。

二歩。三歩。

先程の硬直が嘘のように、足が軽い。まるで当たり前の事のように、真っ直ぐエインに向かって動いていく。

近寄るヴィヴィアンに、エインが気付き、微笑んだ。

そして、記憶にある言葉を言う。

「ただいま。」

一度目は、言わなかった。

二度目は、照れくさそうに、言った。

五度目と七度目は、大袈裟に両手を広げて、言った。

そして、八度目は……。微笑んだ。

ヴィヴィアンは歩みを止める事無くエインに歩み寄り、空いている左手でエインの右手を取ると、ゆっくりと手のひらを見る。

火傷。それも、かなりの重度のものだ。

炎症を通り越し、皮が焼け爛れ、肉が見えてしまっている。血が滲み、一足早く水脹れを起こしている箇所もある。

そしてその傷は、何かの模様にも見える。

無言のまま、唇をきゅつと噛み締めて傷を見つめるヴィヴィアンを、エインは何も表情を変えず見下ろし、微笑んでいた。

ヴィヴィアンはそつとハンカチをエインの手のひらに乗せ、ズレ落ちないように指の間に通しながら巻き付けた。

「ありがとう。」

「……いえ……」

礼を言うエインに、ヴィヴィアンは素っ気無く言う。

素っ気無いつもりはないのだが、どの感情を声に乗せるか、躊躇うのだった。

エインはそれを理解している。

だから、何も言わずに微笑んだままだ。

その二人を、リユリュが振り返って見ていた。リユリュの視線にヴィヴィアンが気付き、エインから手を離すと、一歩下がる。

「屋敷へ戻りましょう……」

傷の手当てをしなければ。」

「そうだね。」

後ろで、ガタンという音が響いた。エインとリユリュが出て来た扉を、クレリーが締めたのだった。その直後、扉の内側から、カチ

ヤリと音が続いた。

どうやら、扉を閉めると自動で鍵がかかる仕組みになっているらしい。

「こちらへ。」

施錠を確認し、クレリーが一同を誘導する。

祭壇裏への階段を上がり、廃れた小さな建物を出ると、クレリーがチェーンを元に戻した。

空を見上げると、まだ空の色は青々としていた。随分地下にいた気がするのに、然程地上の時間は変わっていない様子だった。

疲れているのか、屋敷までは誰も、リュリュですら口を利かなかった。

屋敷に戻り、各々部屋へと散ると、クレリーが一部屋ずつ周り、様子を伺いに来た。

「お食事はどうなさいますか？ お疲れのようでしたら、お部屋へお運びいたしますが。」

ヴィヴィアンのところへもやって来て、そう言つと、クレリーはジャケットのポケットから火傷用の軟膏の容器と何枚かのガーゼを取り出し、ヴィヴィアンに差し出した。

「教授のご様子が気になるようでしたら、傷の手当てをして差し上げてはいかがでしょうか？」

クレリーも扉から出て来た時のエインの様子を気にしたようだった。

ヴィヴィアンが容器を受け取るのに戸惑っていると、クレリーはふふと笑つて、

「教授は私どもにはあまりご自分の心のお話をされません。

でも、ヴィヴィアン様は別のようにでございますよ。」

と言つた。

他人と自分との対応の違いに気付いていないヴィヴィアンが首を傾げると、クレリーはさらに面白そうに笑つた。

そして、容器をベッドのサイドテーブルに置き、

「教授はご昼食を食堂でお召し上がりになるようです。ヴィヴィアン様のお食事も、一緒にご用意いたしましょう。」

と言って出て行った。

ヴィヴィアンは容器を暫く眺め、クレリーの言葉を反芻した。

自分にだけ…？

そんな事はなからう。自分より遥かにエインの事を知っている人間は幾らでもいる。

ヴィヴィアンは容器を手にとると、指先で弄った。

あの火傷を思い出す。

あれでは、早めに手当てをしないと、あつという間に皮膚が壊死してしまつて、痕も消え辛くなつてしまうはずだ。

そう思いながら、ベルトワーズ邸で見た、エインの絵を思い出す。素朴で、可愛い絵だと思つた。

傷の様子を知つた今、あの絵を描く手が、エインの手が傷付くのは、耐え難い。そして、エインが痛みを堪え続けるのも。

ヴィヴィアンは大事を覚悟でもした様に意を決して立ち上がると、隣のエインの部屋のドアをノックした。

だが、中からは返事は愚か、物音一つ聞こえて来ない。

眠ってしまったのだろうか。それとも、クレリーが去つてヴィヴィアンが廊下に出る間に、部屋を出てしまったのだろうか。

ヴィヴィアンは思案し、もう一度ノックをした。

が、やはり何の返答もなく、ヴィヴィアンは仕方なく溜め息を吐き、踵を返した。

すると、慌てたように、「はい！」と大声で返事をするエインの聲が聞こえた。

エインはバタバタとドアを駆け寄ると、勢いよく開けた。ヴィヴィアンはドアにぶつかりそうになり、慌てて後ろへ飛び退いた。

「ああ、ごめん、ヴィヴィ。当たってしまったかい？」

「…いえ、大丈夫です。」

やはり眠っていたのだろうか。心なしか、声が籠っている。

「傷の当てをと思ひまして……」

ヴィヴィアンが言うと、エインはぱつと笑つてヴィヴィアンを部屋の中へ招いた。

エインの部屋はヴィヴィアンの部屋より少しだけ広く、ベッドと窓の間にソファと小さなテーブルがあつた。

エインはヴィヴィアンにソファに座るよう言い、自分は向かいのベッドに座ると、ハンカチを片手で解き始めた。早足で駆け寄つたヴィヴィアンが手を添えると、エインは自分の手を引いて、ヴィヴィアンを見上げる。

「クレリーさんが、ご様子がおかしいと気になさつておりました。」ハンカチを解き、傷を見る。傷はかなり化膿して、ずるずるになつていた。もう、模様に見えた火傷の痕も明確ではない。

ヴィヴィアンは洗面台でガーゼを一枚濡らすと、エインの足元に膝を付いて傷を丹念に拭いた。

「ボク？　おかしかつた？」

「はい。」

「……傷が、痛んだんじゃないかな。」

あからさまにとぼけるエインを、ヴィヴィアンが無言で見上げた。その反応に、エインは暫し苦笑し、少しだけ姿勢を崩した。

「……リユリユが、ポーロと結婚しないと云ひ出したんだ……」

「……“試練”を受けなかつたからですか？」

「いいや。元々、リユリユもポーロに“試練”を受けさせるつもりはなかつたんだよ。だからボクを呼んだんだ。」

でも、あの扉を出る前、少し話し込んでいたら、気が変わつたらしい。」

「……」

「困つたもんだね。」

「……それだけですか？」

簡素に話し終えたエインを見もせず、ヴィヴィアンが訊ねた。それだけが原因ではあるまいと思つたのだった。

手元ではずっと、淡々と手当てが続けられている。

当然、きちんと話さだろう。そんな風に考えている様子に見えた。

エインはまた苦笑して、窓の外を見た。

初夏らしい、青々とした空が見える。

「ボクに、この家を継いで欲しいんだそうだ。」

エインがぼそりと言うと、ヴィヴィアンの手が一瞬びくついた。

「理由は話せない。」

勿論ボクはそんなつもりはない。

リユリユも当初はリユリユはポーロと結婚するつもりでいたからね。

でも、話をしていて、気が変わったんだそうだ。」

「…。」

ヴィヴィアンが無言でいると、その意味を汲み取ったエインが続けた。

「理由はね、ボクが”試練”を代行した理由に因む。」

だから、詳しくは話せないけどね…。」

そう言って、エインが目を細めた。

「みな、ボクをここへ引き止めようとする。」

”決まり”を護る事、運命に逆らわない事を諭すんだ。

当たり前だし、解ってる。

気持ちも解るが、でも何で、みんなして結論が同じなんだろうね？」

エインが言うと、ヴィヴィアンが手を止めた。一通り、手当てが終わったのだ。

だが、ヴィヴィアンはエインの足元にしゃがんだまま、動かなかった。

昔、エインが同じ事を吐き棄てるように呟いた事を、思い出していた。

一度目。

その日、エインもヴィヴィアンも、ただ穏やかにエディンバラのアンダーソン邸で過ごしていた。

とても良く晴れていて、仄かにそよ風が心地好い日だった。

エインは自室に籠り、いつも通り本の山に埋もれ、ヴィヴィアンは屋敷中を掃除して周っていた。

アン危篤の報せが届いたのは、そんな時だった。

屋敷内の掃除も終わり、庭の手入れをとヴィヴィアンがエントランスを出た時、一人の中年男性がやって来た。

「アンダーソン教授は、ご在宅でしょうか。」

「……ありますが。」

ヴィヴィアンが不信な顔で答えると、男性は帽子を取り、「ベルトワーズの使いの者です」と言った。

ベルトワーズ。確か、先日エインが所用で呼ばれた家ではなかったか。

そう思い、男性を中に入れると、エインの自室をノックした。

「教授。」

「んー？」

部屋の中から、エインのお気楽な声が聞こえる。

「ベルトワーズ家のお使いの方がいらしてます。」

「……なんだって？」

それだけの言葉で事態を把握したのか、一変して神妙な声に変わったエインが、強張った表情でドアを開けた。ヴィヴィアンがエントランスの男性を見ると、ドアの影からエインもエントランスを覗き、眉間の皺を深くした。

エインはゆっくりと男性に近付くと、「ウィンストンさん」と男性に声をかけた。男性の名は、ウィンストンというらしい。

ウィンストンはエインを見、「ああ、教授……」と泣きそうな声を出した。

「お便りよりも、こちらへ窺った方が早いとクリーブスさんに言われて参りました。

お嬢様が、アンお嬢様が…。」

わたたとエインの腕を掴んで言う男性を、エインは体を硬直させて見つめていた。

「アンが…、どうしたって…？」

「ご様態が急変しまして…。」

今、医者留めて経過を見守っております。

医者は、そう長くはないだろうと…。」

それを聞いて、エインがウィンストンの腕を掴み返した。

「それは…、本当なんだな？」

「はい。」

熱が引きませんで。うわ言の様に教授のお名前を呼んでいるそうです。

教授、お嬢様の近くに…。」

ウィンストンが言うと、エインはヴィヴィアンに振り返って、「ちよつと家を空けるよ」と言った。

言葉とはまるで整合性の取れぬ、焦りに満ちた声だった。

「はい。」

エインは必要最小限の荷物をカバンに詰め、早々にウィンストンとフランスへ向かった。

ヴィヴィアンはその後二週間ほど、エインを屋敷で待続けた。

この頃のヴィヴィアンは、エインにほんのりとした愛情を持っていた。

エインは大変頭が良く、物知りで、物静かで、一見すると落ち着いたきはなさそうだが、ふと見せる表情や仕草に品の良さが垣間見えた。読書に没頭すると数日かけてのめり込む勢いであつたが、それ以外ではヴィヴィアンの事を丁寧に気遣い、色々な話を聞かせてくれた。

元来話し始めると止まらないエインであつたが、自身の事は余り

語らなかつた。自身が考えている事も、無暗に口にはしなかつたため、周りから変人だとか、変わり者だとか言われるのも、それが所以であると思われた。

だが、ヴィヴィアンには、ぼそりと小さい頃の思い出を話してくれたり、今どいう気持ちかを述べてくれた。

そうしているうち、心が解れた。

開け広げに見せて来るエインの心に、自分も応えねばと思い始めていたのだった。

それは、愛情に他ならない。

恋だとか、そういったものではなく、もっと根本的な、人間愛に近かつた。

エインが笑っていれば幸せだった。

だから、悪い知らせが入ったり、悪い発見をしたりして機嫌が悪かつたりすると、途端に不安になった。

他人にここまで感情を揺さぶられるのは、生まれて初めての経験だった。

エインとの接触は、ヴィヴィアンにとって特別な意味を持ち始めていた。

だが、任務を棄てる訳にいかなかった。どこかで、その任を果たさねばと思っていた。

彼にどんな感情を抱こうと、自分は彼を”排除”、即ち殺すために”ここ”へ来た。彼は、重大な罪を犯した”犯罪者”であった。

しかし実際のところ、ヴィヴィアンは彼がどのような罪を犯したのか、知らなかつた。

知る必要のない事だから、イトダからも聞かなかつた。

ただ、国際法と定められ、対象を排除するレベルの犯罪と言えば、凡そ二つほどしか思い当たる事がなかつた。

それは、”時間を無断で遡る”か、”歴史に影響を及ぼした”場合だ。

ヴィヴィアンは、“時間の約束”と呼ばれる”時に関する定義”が定められた年から約一〇〇年後の二九八五年に生まれた。

生まれて間もなく軍部によって試行された実験設備の事故に両親が巻き込まれて死に、親類がいなかった事から孤児になった。両親が軍関係者故、ヴィヴィアンはすぐに軍の孤児院に引き取られた。そこで軍人に必要な知識と知恵を始めとしたあらゆる事を身に付けさせられ、国家が定める一五歳という成人年齢を向かえた年、何の選択肢も与えられないまま軍に所属した。

ヴィヴィアンは優秀な軍人だった。

判断力に優れ、ずば抜けて高い記憶力と応用力、そして研究者にも引けを取らない知識量を駆使した部隊統率術は、現役軍幹部に大変気に入られた。

即、幹部候補へ名を連ねたが、快く思わないベテランや男尊女卑思想に漬かったライバルたちの妨害を受け、元より乗り気でなかった事もあり、幹部候補を辞退し、“時間管理部”という部隊への配属を希望した。ここなら何の厭なものもなさそうだったから、という単純な理由による選択だったが、結果として目論みは当たり、この部隊で軍人としてではあれど、割かし気楽な人生を歩む事となったのであった。

“時間管理部”は、歴史の監視を行う。

二七九九年。時間に於いて、画期的な発明がついに完成を遂げた。時間を遡る事に成功したのだった。

それから約一〇〇年間の長期に渡り、その理論と発明を使用した実験を元にあらゆる観察をした結果、どうやら時間はある一定の法則に従ってループしているらしいという事が解った。

この発見により、歴史を見直し、今の時点で都合の生じている事項について、“歴史を大幅に変えない過去の事項”を修正する事

で解消しようと言う国際的な計画が発足した。

二五〇〇年付近から本格的に上昇し始めた地球の気温により、ヒトは”ハウス”と呼ばれる特殊素材で作られたドーム内に街や国を作る事で、生物の生態を維持して来た。二〇世紀以降、人が目指した宇宙では、”ヒトらしい生活”が望めなかったためだ。ヒトには、地球の重力が必要だったのだ。だが、一方では着々と資源も枯渇し始め、生命滅亡への懸念がより身近に生じるようになり、せめてもの抗いとして、ヒトは過去に遡り、歴史の修正を試みたのだった。

結果が出るものとそうでないものこそあれ、総合的に見ると予想を八割ほど満たした結果を認めたヒトは、本格的に歴史の調整に入った。

その任を背負った者たちが過去へと”流れた”のが、ヴィヴィアンが生まれる凡そ三〇年前。

”c a k r a v a r t i n”と銘打たれたその一行は、エイン・アンダーソンを筆頭に合計十名の科学者と研究者を集め作られた集団で、”輪を動かすもの”、”世界を照らす太陽”と言う意の通り、滅亡間近の全生命の希望であった。

しかし、全の希望は総ての一の希望とはならない。

この試みを実施するに当たり、一番の懸念事項とされた『私欲に走り、歴史を混乱させるべきではない』という”時間の約束”の基本第三条がある。この条項は一般的に”国際法”と言われる条項の一つで、最も守るべき条項とされていた。

後に関係者の隠語で、リグ・ヴェーダに登場する大蛇の名で、”障害”を意味する”ヴリトラ”と呼ばれる事となるエインは、この”国際法”を犯した事により、ヴィヴィアンが”時間管理部”に所属した年に、指名手配された。

手配がここまで遅れたのには理由がある。

過去へ”流れた”者の行動は、歴史を追う事でしか把握する術がなかった事が原因だった。これは未来である”現在”に戻る事が出来ないのではなく、過去に戻ると未来が存在しないためであったの

だが、この危険を冒してでも歴史の調整は急務であり、そして、これは『国際的』と言う割りに、一般人には知らされる事のない計画でもあった。

事故を装い、エイン・アンダーソンをこの世から消すという任務。それはエイン・アンダーソンという少しだけ名の知れた研究者が、ただ事故に遭って死んだだけの歴史が刻まれるだけの事だ。

だが、果たして何を犯したのか知れないエインではあったが、エインとの交流を重ねたヴィヴィアンにとって、エインは最早犯罪者ではなかった。

ただ書類上そうなっているだけで、エインはただの、エイン・アンダーソンだった。

そうになると、任務遂行に躊躇いが生まれた。

エインを生かしたい。だが、いずれ任務を怠った事が知れば、未来から自分の代わりにエインを殺すための人間が”流れて”来るだけだ。

どうしたら良いか、結論など出なかった。

ウィンストンが屋敷を訪れ、エインが手早く荷造りをしてフランスへ旅立って、一週間が過ぎた。

エインの帰りを待つ日々。

思えば、旅に出る事が多かったエインを、いつも待っていた。

最初は、任務のためだけに。

それがいつしか、本来言葉通りの”帰りを待つ”という意味を含むようになった。

無事に帰って来ると、心の底が安定した。

『アン』。

”ここ”へ来てベルトワーズの名を聞いた後、エインの帰りを待つ間に、アンについては調べた。

アン・ベルトワーズ。ベルトワーズ伯の一人娘で、生まれつき心臓の病を患っているという。

ベルトワーズとエインは深い交流があるそうだから、娘とも何度

も顔を合わせている事だろう。

そのアンが危篤だという報せ。それに対するエインの様子で、どのような関係かは想像に難くない。

ヴィヴィアンは自室の窓辺に座り、想いに耽る。

アンに何かあったら、エインは哀しむだろうか。

そうなのだとしたら、アンには持ち直して欲しい。

エインが、笑って帰って来るといい…。

だが、そんなささやかな願いは虚しくも叶わず、エインは憔悴しきった様子で屋敷へ戻って来た。

フランスへ出てから、二週間後の事だった。

エインの憔悴振りは筆舌し難い程で、ヴィヴィアンはエインが帰ってから数日、声をかけられずにいた。食事だとか、買い物だとか、必要最小限の会話こそあれ、それ以外はエインが口を開かぬ限り、言葉を交わす事もなかった。

しかし、ある夜、寝付かれず水でも飲もうと深夜に起きて廊下に出たとき、エインの部屋のドアが半開きになっていた。光が漏れて廊下をほんのり照らしている。

ヴィヴィアンは足音を殺して部屋の中を眺めた。

部屋の中では、エインがオイルランプを点けたまま、床に座り込んでいた。周りを本の山に囲まれ、エインは何かを探す様にページを捲っていた。

足元には何かをメモしたのか、雑多に丸められた紙が散乱している。

どうにも気になってもつとと一歩踏み出したとき、勢い余ってドアを少し蹴ってしまった。その音に、エインが驚いてドアを見上げた。

「ヴィヴィ…？」

誤魔化しても仕方がないので素直にドアを開くと、エインが苦笑していた。

「ごめん。」

何の謝罪か、エインが詫びた。

「眠れないのですか？」

ヴィヴィアンが訊ねる。眠っていないのは今夜だけではなさそうだった。ここ数日、まじまじと顔を見ることがなかったので気が付かなかったが、エインの目元には深々とくまが出来ていた。

「…少し、お休みになられた方が…。」

「そうだね…。」

そう言いつつも、エインはページを捲る手を止めなかった。

平静を装ってはいるが、その横顔には明らかな焦りが窺えた。

何を探しているのか…。

「探しものでしたら、お手伝いいたしましょうか…？」

ヴィヴィアンが声をかけると、そこでエインはページを捲る手を止め、ヴィヴィアンに座るよう促した。ヴィヴィアンがエインの斜向かいの本の山の隙間に腰を下ろすと、エインはやっと、本を床に置いた。

「ヴィヴィ…。」

俯いて呼ぶエインの声は弱弱しく、ヴィヴィアンに縋っているように聞こえた。

「はい。」

「命なんて要らないと思う程の物を失ってしまったら、どう生きていったらいいんだろう。」

「……。」

「掬い上げて零れ落ちた水みたいに、もう二度と戻って来ないものを失ったら、どう生きて行ったらいいんだろう。」

「…いつも通り、生きていくしかないのではないのでしょうか…。」

「いつも通り…？」

「…はい。」

手に入るものは、いつか失うものだと思います。

執着すれば、するだけ虚しい思いをするだけかと…。」

淡々と答えるヴィヴィアンに、エインが笑った。

「キミは無機質だな。」

「…希望がないだけかと…」

「そうかな…」

…逃げているのでは、ないかな…」

エインがぼそりと呟いた一言に、ヴィヴィアンは胸がきゅっと縮まったのを感じた。

”逃げている”…？

「失うという恐怖から、逃げているだけなんじゃないのかな…。
どうしても手に入ってしまう。手に入ってしまうえば、愛おしくなる。」

ならば、いつか独りになるのなら、始めから独りの方がいい。
いつか死んでしまうなら、始めから生まれない方がいい…。

でも、そんなのは、哀しくないか…。」

「…。」

「理論だという事は理解出来る。」

愛する者が死ぬからと言って、自分自身も死んでしまっっては どうしようもないし、何も生み出さない。

だが、それを願って何がいけないのだろう。

あの時こうすればよかった、こうなった時こうすればよかったと溢れる悔しさに抗って何がいけないのだろう。

アンは、”生きる”事は”決まり”だと言った。

ボクは生き続けなければならぬのだと。それがボクが生まれて来た”決まり”なのだから、”従わなければならない”のだと…。」

握り締めて話したくなくなるようなものを手に入れた時の至福感と、それに付随する、対極に位置する失ったときの喪失感。

対象への想いが強ければ強いほど、その差は開き、埋める事も出来なくなってしまう。

それでも、空いた穴などないかのように生きるのが、結論だと思う。

さもなくば、残された道は自死しかなくなってしまふ。

しかし、ヴィヴィアンには解らない。

何故なら…。

「私は…。

そこまで何かを愛したり、求めたりした事ありません…。」

その言葉に、エインがはっと顔を上げた。

「人を愛する事がどういう事か、どのような感情を抱く事で、どのような損失感を伴うものなのかも解りません。

だから…、教授のお気持ちは、解らないのです。

でも…。」

でも…。

「でも…？」

「それでも…、いつも通り、生きていく事が結論だと思います。」

ヴィヴィアンは、エインを真っ直ぐ見た。

人を真っ直ぐに見つめる事は、自然といつでも出来る事だった。

それが、アンがこのようなようになってから、エインをこんな風に見る事は出来なかった。

今まで出来なかった分を注ぎ込むように、エインを見据える。

生きて欲しい。

酷な願いでも。あのエインに戻って欲しかった。

エインは暫し、ヴィヴィアンに甘んじて見射抜かれ、やがて、俯いて自嘲気味に口の端を上げた。

「何故、みんなして結論が同じなんだろうね…。」

懐かしい記憶。心が揺れる記憶…。

あの時のエインを、ヴィヴィアンは忘れた事はない。

あの姿を見、生まれて初めて他人に『生きて欲しい』と言う感情を抱いた。

他人が生きようが死のうが、総てを自然の摂理と諦めていた自分

が、と思うと、自身の変わり様に激しい動揺もした。

あの感情が、総てを決めたのだ。

時を流れ、エインが生きる事だけを追い求めて来た。

何度やつても、それは叶わなかった。

でも、諦めるという選択肢はなかった。

だが、これが最後だ。どう結論が出ても、もう流れる事は出来ない。

だからこそ、あらゆる可能性に賭けたい。

エインが生きるためなら。

見上げると、エインがヴィヴィアンを不思議そうに見下ろしていた。

随分長い事、物思いに耽ってしまっていたようだ。治療は終わっているのに、手も添えたままで、エインからすれば、ヴィヴィアンはずっと放心しているように見えたに違いない。

「申し訳ありません。」

ヴィヴィアンはそう言うのと、すっと手を離し、足元に散らばった古いガーゼや汚れた布を拾い、立ち上がった。

一方で、つまらぬ愚痴でヴィヴィアンに不要な気遣いをさせてしまったのかと心配したエインは、腰を上げてヴィヴィアンと真正面で向き合った。

「すまないね。変な話をして。」

申し訳なさそうに俯くエインに、ヴィヴィアンの心がさらに揺れた。

違う。何でもいいのだ。何でも話して欲しいのだ。

あなたが笑うなら、何でも言っただけいいのだ…。

なのに、その一言を言う事が出来ない。

「お気になさいますように…。」

そんな言葉しか言う事が出来ない自分が、悔しい。

思い返して、感情が溢れてしまったように胸が締め付けられた。平静を装ってエインの部屋から出たヴィヴィアンは、逃げるように自室に戻り、駆け込んだ勢いのままベッドにうつ伏せに倒れこんだ。

走馬灯のように脳裏を過ぎる過去の記憶に、今までにない動揺をしている。

護れなかったあの時。後悔に苛まれたあの時。

間に合わなかった『あの時』も、気付けなかった『あの時』も、護り切れなかった『あの時』も…。

どの時も、ヴィヴィアンにとって、哀しく棄ててしまいたい記憶でしかない。

特に一番最初の記憶は、消してしまえるなら命も惜しくないほどに、悔しい記憶でしかない。

思い出すたび、体が栗立つ。

それは、この手でエインを殺してしまった記憶だ…。

アンが亡くなってから、何度も何度も夜中にエインの部屋の様子を伺っては、起きているエインと言葉を交わした。

神様とか、運命とか、そう言った、人の介在し得ない叡智や意思の存在などは、お互い信じてはいない。

ただ、とにかく何でもいいからこの悲しみから解放されたいエインの言葉を聞き、同情するではなく前に進める切欠を作れたかった。何を調べているのか、エインはずっと本を読んでいた。

日中も声をかけるが、やはり起きていて、本を読んでいる。

食事も始めの内は気が進まないと言わずに過ごしていたが、数日

すると少量は口に入れてくれるようになった。それでも、時間が惜しいのか、すぐに手を止め、本に目を移してしまう。

見る見る痩せ細って行くエインをどう扱っていいのか解らず、ヴィヴィアンも手探りで毎日を過ごした。

やがて季節が変わり秋を迎えた頃、屋敷に来客があった。

男性で、名は聞かなかったが、エインの旧友と言うので取り次ぐと、エインは男を部屋に入れ、何をしているのか数時間後、帰って行った。

一度切りなら何も思わなかっただろうが、その来客は毎週、決まった日、決まった時間に訪れた。

エインも特に警戒する様子も見せないで、ヴィヴィアンも疑問に思いこそすれ、深く追求する事はしなかった。

男性はいつも、帽子を目深に被っていて、少し肌寒いエディンバラの秋の装いとしては至って自然な黒いコートを、襟を立てて着ていた。だから、顔を見た事は一度もなかった。唯一見えるのは、口許だけだ。輪郭すら、巧く隠している。

辛うじて声だけは発するが、エインと同年か、それ以下のようなだった。

そんな事が続いた冬直前のある日、数度目の訪問で、男性がヴィヴィアンを見た。

暫く無言でヴィヴィアンを見るので、居た堪れずに何かと訊ねると、男は少し間を開けて言った。

「何故、役割を果たさないのです？」

「……！」

「あなたがやらないのなら、私がやりますよ。」

男は静かに、ゆっくりそう言った。

ヴィヴィアンの体が細かく震えた。自分の事を知っている。エインの事も知っている。

ただの知人などではない。

「……あなたは……施設の……？」

「そうです。」

と言つても、私は『教授の時間の方』ですけど。」

エインがいた時代……。五〇年前の施設の……。

「……”cakravartin”……？」

エインの時代もヴィヴィアンの時代も、時を流れる事を許された者は限られる。エインの時代なら特にだ。”cakravartin”以外に、有り得ない。

だが、そんなヴィヴィアンの思惑は、すんなりと否定される。

「いいえ。」

いい線を行っていますが、私はそれに含まれません。」

男はそう言つて、口許だけで笑つた。

「……どちらかと言うと、あなたの立場に近いんですね。」

ヴィヴィアンは身構えた。

自分の立場に近い。その言葉が意味するのは、少なくとも自分の認識の中では一つしかない。

『エインを罰するために流れた者』だ。

だが、自分が知る限り、エインがいた時代にそのような役割を担う者はいなかった筈だ。

記録にないだけなのだろうか。だとしたら、何故ないのだ……？

さらに、エインの時代の者ならば、そもそも自分の存在を知る筈がない。

「身構える必要はありません。」

私はあなたを監視している訳ではないし、エインを殺しに来ている訳でもありません。

私の事はじきに解るでしょうから今は言いませんが、ちょっと気になるましてね。」

男性はそう言つと、口許の笑みを消した。

「気を付けなさい。」

あなたが思っているほど、時間の流れは穏やかではない。」

男性の言葉に、ヴィヴィアンは眉を顰めた。そんなヴィヴィアン

に、男性はふと笑いかける。

「一粒の雫が水面に与える影響は大きい。

あなたが望めば、道はそちらへ通うかも知れません。

エインを護るのも、殺すのも、あなたの心次第……。」

男性はそう言つと、帽子を軽く摘み上げ、それを挨拶代わりに屋敷を去つて行つた。

ヴィヴィアンは、男性が去つた後もその場に立ち尽くした。

『エインを護るのも、殺すのも、心次第……』。

自分が望めば、必ず殺さずに済む道が拓けると言つのだろつか。だとしたら、縋り付きたい。

エインが、生きる道があるのなら……。

翌週、変わらず訪れた男性は、先週の事などなかったかのようにいつも通り屋敷を訪れ、ヴィヴィアンには目もくれずに誘導されたエインの部屋で数時間過ごした後、帰って行つた。

ヴィヴィアンは声をかけようと思つたが、男性の素っ気無さに先週の会話の現実味が薄れ切つてしまい、声がかけれなかった。

翌週も、その翌週も……。男性は規則正しく屋敷を訪れ、ヴィヴィアンも男性を見るなり無言でエインの部屋へと通す。繰り返し、繰り返し、こんな日を毎週過ごすうち、ヴィヴィアンもそのうち男性に声をかける事を諦めた。

月日はだらだらと、そして淡々と流れ、エインの様子も変わらぬまま、そして男性の訪問目的は明かされぬまま……。気付けば半年が過ぎようとしていた。

その間、特に変わった事もなく、ただ時間だけが過ぎて行つたように思う。

否、違う。

その時は、そう思いたかつただけなのだ。

”気付かなかつただけだと……”。

さらに幾月か過ぎ、そろそろ冬の気配を感じるようになった頃、屋敷を訪れた男性が、エントランスである日と同じようにヴィヴィアンに声をかけた。

「心は決まりましたか？」

「…。」

不意に声をかけられたので驚き半分、そして質問の意味を捉えきれず戸惑い半分、ヴィヴィアンが目を見開いたまま無言でいると、男性は口許でふと笑った。

「宜しいでしょう…。」

あなたの心はわかりました。

エインの心もわかりました。

従って、私は今日、役目を果たさねばなりません。」

「役目…？」

「ええ。」

男性は一つ頷いて見せると、ヴィヴィアンに外に出るよう促した。男性に続いて、屋敷の裏手へと回る。屋敷のある丘の周辺は、整備されたとは言えまだ森が広がっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5701q/>

教授とシャンバラの時計

2011年9月30日03時28分発行